

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第11集

南河内郡美原町所在

余 部 遺 跡

府営美原住宅の団地建設工事他に伴う発掘調査報告書

1997

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

南河内郡美原町所在

余 部 遺 跡

府営美原住宅の団地建設工事他に伴う発掘調査報告書

1 9 9 7

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



余部B(その1)東トレンチ 古代の溝



余部B(その1)西トレンチ 中世の堀立柱建物



余部B(その2) 磐鉄型他



復元した羽釜鉄型



余部B(その2) 鋸造関連遺物出土状況



中世木棺墓

序 文

余部遺跡は南河内郡美原町内の西よりにある遺跡です。この一帯は主に古墳時代以降各時代の遺跡が集中する地域ですが、とくに中世には河内鋳物師の里として鋳造の栄えた地域として知られています。町内を東西に縦断する形で行われた近畿自動車道路松原すさみ線の建設とともに発掘調査でも、近接地区の日置荘遺跡や太井遺跡、真福寺遺跡で古墳時代の埴輪窯、中世の城櫓跡のほか鋳造施設、堀、タイゴの羽口、鋳型など鋳造関連遺物が多数見つかっています。

本書に関わる発掘調査は、大阪府建築部住宅建設課が進めている府営美原住宅の立て替え事業にともなって平成6年度から7年度にわたって実施されたものです。今回の発掘調査でも、中世の掘立柱建物跡や鋳造施設、鋳造作業に関わる廃棄土坑などが点々と発見されました。中でも真福寺遺跡で見つかって話題になった仏具の一種の馨の鋳型が余部遺跡でも見つかり、さらに大型の羽釜の鋳型片も興味深いものがあります。本書の成果がこの地域の歴史の解明の一助になれば幸いです。

本調査に当たり大阪府建築部住宅建設課をはじめ、大阪府教育委員会、美原町教育委員会、地元関係各位から多大なご助力とご指導を賜り深く感謝しております。今後とも当センターの事業につきましてご理解とご協力をいただきますようお願い申しあげます。

平成8年3月

(財) 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井 清足

例　　言

1. 本書は、大阪府営美原住宅の団地建設工事他に伴う余部遺跡の2ヵ年にわたる埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 94年度調査は、大阪府建築部より財団法人大阪府埋蔵文化財協会が委託を受け、調査課長石神 怡・調査第2係長大谷治孝の指導のもと、調査第2係技師林日佐子を担当者として実施し、調査第1係長大野 薫の協力を得た。

3. 95年度調査は、大阪府建設部より財団法人大阪府文化財調査研究センターが委託を受け、調査部長井藤 徹・南部事務所長藤田憲司・調査第2係長寺川史郎の指導のもと、調査第2係主査平井貞子（写真）・同技師亀井 聰・奈加智美（現地調査・遺物整理）を担当者として実施し、中部調査事務所長赤木克視、同整理係主任技師山口誠治、南部調査事務所調査第1係長大野薰、整理係長石神幸子、同技師立花正治（写真）の協力を得た。

4. 現地調査は、94年度調査が平成6年11月14日から平成7年3月24日まで、95年度調査が平成7年4月28日から平成7年10月31日まで実施し、ひき続き泉北分室にて整理作業を行ない、平成8年3月31日を以て報告書の作成を終了した。

5. 調査に要した費用は、すべて大阪府建設部が負担した。

6. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関の御指導、ならびに下記の諸氏・諸嬢の援助を賜わった。記して感謝の意を表したい。

〔調査指導〕 広瀬和雄・大槻康弘・橋本高明・小林義孝・西川寿勝・井西貴子・小浜 成（大阪府教育委員会）、北野俊明・續伸一郎・樋口吉文・白神典之（堺市立埋蔵文化財センター）、野島 稔（四條畷市教育委員会）、吉田晶子（財枚方市文化財研究調査会）、梅井利弘・庖丁道明・泉谷博幸・坂口浩司（美原町教育委員会）、神崎 勝・仲道 裕（妙見山麓遺跡調査会）、内田俊彦（京都芸術短期大学）、五十川伸矢（京都大学埋蔵文化財センター）、寺西啓容（別子銅山記念館）、服部昌之（専修大学）

〔調査参加者〕 石井 薫、石井 光、市原香奈、内山信子、江藤豊子、長 育代、刈茅重明、田口雅敏、龍田かほる、陳 映芳、中平三紀子、中村慎子、西田久美、西口桂子、藤田徹也、樋口順子、増田 尚、松本昭子、矢野智子、山崎美奈、山本順治

7. 調査の実施にあたっては、以下の自然科学分野からの分析を実施し、各氏にご教示・玉稿を賜わった。

脂肪酸分析 帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男

株式会社ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子・長田正宏

寄生虫分析 株式会社古環境研究所 金原正子

金属分析 株式会社西日本環境技術センター 今井貞美

凡 例

(基本)

- ・94年度調査は余部B（その1）を、95年度調査は余部B（その2）と余部A（その2）を対象とする。本書では、図版についてそれぞれを区別するため、後者による記載を行っている。
- ・遺構実測図の基準高は東京湾平均海水位（T.P.）を用い、平面的位置は国土座標軸第VI座標系に基づいた。本文中における座標の記載はすべてm単位とする。
- ・方位の矢印の示す方向は座標北とする。
- ・土色に関しては、小山正忠・竹原秀夫編1988『新版標準土色帖』8版 農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色研研究所 色票監修に準拠した。
- ・付図の遺構全体図の縮尺率は1/150、1/200、1/400である。本文内の遺構挿図の縮尺率は1/20、1/40、1/100、1/200、1/400、1/500を基本とし、場合によっては任意とする。
- ・遺物実測図の縮尺率は、石器が1/2、1/3、2/3、土器が1/4、1/6、木器が1/2、1/3、金属その他が2/3、1/2、1/3である。
- ・本文中の数値については、基本的にm単位で表記する。なお、ピット等の小規模な遺構や小数点以下2桁の場合は、cm単位を用いる。
- ・遺物番号は、実測図版の最初から通し番号を設定した。
- ・遺物写真の縮尺率は任意である。写真図版中の遺物番号は実測図版と同一の番号に揃えている。
- ・本書の執筆分担は目次に示した。編集は調査担当者が行なった。また、木製品の樹種鑑定は山口によるものである。

(1994年度調査)

- ・遺構番号は、東トレンチは001、西トレンチは900から検出順に通し番号を付している。なお、掘立柱建物など複数の遺構の集合によって構成される遺構については、その中の最小の数字を掘立柱建物の遺構番号としている。
- ・遺構の種類は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会の「発掘調査規定」に従って、略号を用いる。

遺構の種類の主な略号は以下の通りである。

O B：建物 O O：土坑 O P：柱穴 O S：溝 O W：井戸 O X：その他

- ・遺構名称は、番号と種類の組み合わせで表わす。本書では、001-O S（溝）のように（）内に漢字で併記する。ただし、紙面の都合上、略号のみの場合もある。

(1995年度調査)

- ・遺構番号は調査区全体において、遺物出土遺構のみを調査順に通し番号を設定している。遺物出土のみられない遺構は、整理段階にてトレンチ順に通し番号を設定している。
- ・遺構名称は遺構番号の後に遺構種類を併記して表わしている。
- ・遺構名称の全ては、付図にあるトレンチ毎の遺構平面図に記入している。これ以外の本文中の挿図については必要のある場合のみ、適宜記入している。
- ・遺構平面図における断面位置は鉤形によって表現している。鉤形は見通しの先を表わす。
- ・土器に関する記述は主に中世土器研究会1996『中世の土器・陶磁器』を、木器に関する記述は奈良国立文化財研究所1991『木器集成図録 近畿古代編』を参考にした。

目 次

- 卷頭図版 卷頭図版 1 余部B（その1）東トレンチ 古代の溝
卷頭図版 2 余部B（その1）西トレンチ 中世の掘立柱建物
卷頭図版 3 余部B（その2）磬鑄型他
復元した羽釜鑄型
卷頭図版 4 余部B（その2）鋳造関連遺物出土状況
中世木棺墓

序 文
例 言
凡 例

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過.....	寺川史郎.....	1
第Ⅱ章 調査の方法		
第1節 94年度調査.....	林日佐子.....	2
第2節 95年度調査.....	亀井 聰.....	2
第Ⅲ章 位置と環境.....	亀井.....	6
第Ⅳ章 発掘調査の成果		
第1節 基本層序と遺構面.....	亀井・奈加智美.....	9
第2節 検出された遺構と遺物		
1. 94年度調査.....	林.....	15
2. 95年度調査（B地区）		
1 トレンチ.....	亀井.....	39
2・3 トレンチ.....	奈加.....	41
4 トレンチ.....	亀井.....	43
5 トレンチ.....	奈加.....	51
6 トレンチ.....	亀井・奈加.....	54
7 トレンチ.....	奈加.....	69
8 トレンチ.....	亀井.....	71
3. 95年度調査（A地区）	亀井.....	112
第Ⅴ章 自然科学分野からの成果		
第1節 余部遺跡における寄生虫卵分析.....	金原正子.....	115
第2節 余部遺跡発掘品の金属分析と調査.....	今井貞美.....	118
第3節 余部遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析		
.....	中野益男・中野寛子・長田正宏.....	127
第Ⅵ章 まとめ.....	林・亀井.....	137

挿 図 目 次

図1	国土座標系とそれによる地区割	2
図2	余部B（その1）調査区のトレンチと地区割設定	3
図3	余部B（その2）調査区のトレンチと地区割設定	4
図4	余部A（その2）調査区の設定	5
図5	周辺の遺跡分布図	7
図6	余部B（その1・2）調査区断面	10
図7	余部A（その2）柱状断面	13
図8	余部B（その1）調査区全体図	15
図9	余部B（その1）東トレンチ 遺構配置図	16
図10	余部B（その1）東トレンチ 001・002・698-OS（溝）平面・断面	17
図11	余部B（その1）東トレンチ 002・698-OS（溝）出土遺物	18
図12	余部B（その1）東トレンチ 318-OB（掘立柱建物）平面・断面	19
図13	余部B（その1）東トレンチ 318-OB（掘立柱建物）出土遺物	20
図14	余部B（その1）東トレンチ 580-OB（掘立柱建物）平面・断面	20
図15	余部B（その1）東トレンチ 580-OB（掘立柱建物）出土遺物	21
図16	余部B（その1）東トレンチ 652-OB（掘立柱建物）平面・断面	21
図17	余部B（その1）東トレンチ 652-OB（掘立柱建物）出土遺物	22
図18	余部B（その1）東トレンチ 549-OB（掘立柱建物）平面・断面	22
図19	余部B（その1）東トレンチ 530-OW（井戸）平面・断面	23
図20	余部B（その1）東トレンチ 530-OW（井戸）出土遺物	23
図21	余部B（その1）東トレンチ 600-OW（井戸）平面・断面	23
図22	余部B（その1）東トレンチ 600-OW（井戸）出土遺物	24
図23	余部B（その1）東トレンチ 004-OO（土坑）平面・断面	24
図24	余部B（その1）東トレンチ 004-OO（土坑）出土遺物	25
図25	余部B（その1）東トレンチ 542-OO（土坑）平面・断面	25
図26	余部B（その1）東トレンチ 542-OO（土坑）遺物出土状況	26
図27	余部B（その1）東トレンチ 542-OO（土坑）出土遺物	26
図28	余部B（その1）東トレンチ 200-OO（土坑）平面・断面・出土遺物	26
図29	余部B（その1）東トレンチ 306-OO（土坑）出土遺物	27
図30	余部B（その1）東トレンチ 306-OO（土坑）平面・断面	27
図31	余部B（その1）西トレンチ 遺構配置図	28
図32	余部B（その1）西トレンチ 901-OS（溝）平面・断面	29
図33	余部B（その1）西トレンチ 901-OS（溝）出土遺物	29
図34	余部B（その1）西トレンチ 1138-OB（掘立柱建物）出土遺物	30
図35	余部B（その1）西トレンチ 1138-OB（掘立柱建物）平面・断面	31
図36	余部B（その1）西トレンチ 1211-OB（掘立柱建物）出土遺物	32
図37	余部B（その1）西トレンチ 1211-OB（掘立柱建物）平面・断面	32
図38	余部B（その1）西トレンチ 1268-OW（井戸）出土遺物	32
図39	余部B（その1）西トレンチ 1268-OW（井戸）平面・断面	33
図40	余部B（その1）西トレンチ 1310-OW（井戸）平面・断面	33
図41	余部B（その1）西トレンチ 1310-OW（井戸）出土遺物	33
図42	余部B（その1）西トレンチ 鋳造関連遺構配置図	34
図43	余部B（その1）西トレンチ 985-OO（土坑）平面・断面	34
図44	余部B（その1）西トレンチ 970-OS（溝）平面・断面	34
図45	余部B（その1）西トレンチ 956-OO（土坑）平面・断面	34
図46	余部B（その1）西トレンチ 974-OO（土坑）平面・断面	34
図47	余部B（その1）西トレンチ 971-OO（土坑）平面・断面	34

図48	余部B（その1）西トレンチ 977-OO（土坑）平面・断面	34
図49	余部B（その1）西トレンチ 956-OO（土坑）遺物出土状況	35
図50	余部B（その1）西トレンチ 956-OO（土坑）出土遺物	35
図51	余部B（その1）西トレンチ 974-OO（土坑）遺物出土状況	35
図52	余部B（その1）西トレンチ 974-OO（土坑）出土遺物	35
図53	余部B（その1）西トレンチ 971-OO（土坑）遺物出土状況	36
図54	余部B（その1）西トレンチ 971-OO（土坑）出土遺物	36
図55	余部B（その1）西トレンチ 977-OO（土坑）遺物出土状況	36
図56	余部B（その1）西トレンチ 972-OW（井戸）出土遺物	37
図57	余部B（その1）西トレンチ 972-OW（井戸）平面・断面	37
図58	余部B（その1）西トレンチ 960-OW（井戸）出土遺物	37
図59	余部B（その1）西トレンチ 960-OW（井戸）平面・断面	37
図60	余部B（その1）西トレンチ 958-OW（井戸）出土遺物	37
図61	余部B（その1）西トレンチ 958-OW（井戸）平面・断面	37
図62	余部B（その1）西トレンチ 1006-OW（井戸）平面・断面	38
図63	余部B（その1）西トレンチ 1007-OW（井戸）平面・断面	38
図64	余部B（その1）西トレンチ 1000-OO（土坑）平面・断面	38
図65	余部B（その1）西トレンチ 1006-OW（井戸）出土遺物	38
図66	余部B（その1）西トレンチ 1000-OO（土坑）遺物出土状況	38
図67	余部B（その1）西トレンチ 1000-OO（土坑）出土遺物	38
図68	余部B（その2）1トレンチ 平面	39
図69	余部B（その2）1トレンチ 006土坑平面、断面	40
図70	余部B（その2）1トレンチ 包含層、006・108土坑出土遺物	40
図71	余部B（その2）2・3トレンチ 平面	41
図72	余部B（その2）2トレンチ 008・009土坑平面、断面	41
図73	余部B（その2）2・3トレンチ 包含層出土遺物	42
図74	余部B（その2）4トレンチ 平面	43
図75	余部B（その2）4トレンチ 031・038・045・067溝断面	44
図76	余部B（その2）4トレンチ 031・038溝合流地点埴輪出土状況	45
図77	余部B（その2）4トレンチ 045溝遺物出土状況	46
図78	余部B（その2）4トレンチ 包含層、031・038・045溝、049・088土坑出土遺物	46
図79	余部B（その2）4トレンチ 028井戸平面、断面	47
図80	余部B（その2）4トレンチ 088土坑平面	47
図81	余部B（その2）4トレンチ 072・073・080・081・084・092・095ピット平面、断面	48
図82	余部B（その2）4トレンチ 083・093・094・096・098ピット平面、断面	49
図83	余部B（その2）4トレンチ 072・073・080・081・082・083・084・092・093・094・095・096ピット出土遺物	50
図84	余部B（その2）5トレンチ 平面	51
図85	余部B（その2）5トレンチ 112井戸平面、断面	52
図86	余部B（その2）5トレンチ 包含層、121・1393ピット出土遺物	52
図87	余部B（その2）5トレンチ 110・111ピット平面、断面	53
図88	余部B（その2）6トレンチ 平面	54
図89	余部B（その2）6トレンチ 包含層出土遺物	56
図90	余部B（その2）6トレンチ 132・137・140・141井戸平面、断面	58
図91	余部B（その2）6トレンチ 132・137・140井戸出土遺物	61
図92	余部B（その2）6トレンチ 133・188・197・520土坑平面、断面	63
図93	余部B（その2）6トレンチ 133・152・169・173・188・192・329・385・457・468・473・475土坑出土遺物	64
図94	余部B（その2）6トレンチ 484・485・490・491・492・520・587・596土坑出土遺物	65
図95	余部B（その2）6トレンチ 131・560ピット平面、断面	66
図96	余部B（その2）6トレンチ 建物B平面、断面、295ピット断面	67

図97	余部B（その2）6トレンチ	147・149・273・344・597ピット出土遺物	68
図98	余部B（その2）7トレンチ	平面	69
図99	余部B（その2）7トレンチ	1328・1332溝、1293ピット、1298土坑出土遺物	70
図100	余部B（その2）8トレンチ	平面	71
図101	余部B（その2）8トレンチ	包含層、826・898落ち込み出土遺物	72
図102	余部B（その2）8トレンチ	北西地区平面、607土坑平面、1174ピット平面、断面	73
図103	余部B（その2）8トレンチ	611・668・699溝出土遺物	75
図104	余部B（その2）8トレンチ	607・667・685・727土坑出土遺物	76
図105	余部B（その2）8トレンチ	669・719・785・1044・1056・1082井戸出土遺物	77
図106	余部B（その2）8トレンチ	北東地区平面、702・810・837・1349溝、814・1365土坑、826落ち込み断面	79
図107	余部B（その2）8トレンチ	810・1349溝出土遺物	80
図108	余部B（その2）8トレンチ	769土坑、785・868井戸断面、610・854土坑平面、断面	81
図109	余部B（その2）8トレンチ	609土坑断面、出土遺物	82
図110	余部B（その2）8トレンチ	868井戸出土遺物	84
図111	余部B（その2）8トレンチ	610土坑出土遺物	85
図112	余部B（その2）8トレンチ	854土坑出土遺物	87
図113	余部B（その2）8トレンチ	782・817・824・834土坑出土遺物	88
図114	余部B（その2）8トレンチ	1365土坑平面、断面、出土遺物	89
図115	余部B（その2）8トレンチ	南東地区平面、837・1098溝断面	91
図116	余部B（その2）8トレンチ	837溝出土遺物	93
図117	余部B（その2）8トレンチ	802・837溝出土遺物	94
図118	余部B（その2）8トレンチ	1098溝、側溝出土遺物	95
図119	余部B（その2）8トレンチ	1082井戸、1147土坑断面	96
図120	余部B（その2）8トレンチ	1069・1099・1147・1385土坑出土遺物	97
図121	余部B（その2）8トレンチ	南西地区平面、608・872溝断面	99
図122	余部B（その2）8トレンチ	872溝出土遺物	100
図123	余部B（その2）8トレンチ	608・1046・1051溝出土遺物	101
図124	余部B（その2）8トレンチ	959・1027・1176土坑、1044井戸平面、断面	103
図125	余部B（その2）8トレンチ	874・886・891・897・914・947・959土坑出土遺物	104
図126	余部B（その2）8トレンチ	1011・1026・1027・1040・1045・1052土坑出土遺物	107
図127	余部B（その2）8トレンチ	960・987・991・998土坑出土遺物	109
図128	余部B（その2）8トレンチ	1168・1177・1178・1179ピット平面、断面	110
図129	余部B（その2）8トレンチ	798・870・929・1168・1174・1177・1178・1179・1180・1207ピット出土遺物	110
図130	余部A（その2）	No.5～6トレンチ 平面	113
図131	余部A（その2）	No.8トレンチ 平面、No.10～11トレンチ 004溝平面、断面、出土遺物	114
図132	1365土坑の土壤試料採取地点		127
図133	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成		129
図134	試料中に残存する脂肪のステロール組成		131
図135	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造		133
図136	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関		135
図137	遺物分布の変遷（1）		140
図138	遺構分布の変遷（2）		141
図139	井戸の分布		142
図140	墓、礎石、土器埋納ピットの分布		143
図141	鋳造、鍛造関連遺物の分布		144
図142	調査区における鋳造関連遺物の分布と出土量		145
図143	調査区周辺の地籍		146
図144	調査区の地形復元		147

表 目 次

表1 A地区 基本層序観察表.....	14
表2 寄生虫卵分析結果表（付花粉分析結果）.....	116
表3 分析試料名と分析項目.....	120
表4 金属顕微鏡による金属組織観察結果.....	121
表5 定量分析結果.....	122
表6 定性（半定量）分析結果.....	123
表7 面分析結果.....	123
表8 土壌試料の残存脂肪抽出量.....	128
表9 試料中に分布するコレステロールとシスステロールの割合.....	132
表10 遺構一覧（1）.....	149
表11 遺構一覧（2）.....	150
表12 遺構一覧（3）.....	151
表13 遺構一覧（4）.....	152
表14 遺構一覧（5）.....	153
表15 遺構一覧（6）.....	154
表16 掲載遺物一覧（1）.....	155
表17 掲載遺物一覧（2）.....	156
表18 掲載遺物一覧（3）.....	157
表19 掲載遺物一覧（4）.....	158
表20 掲載遺物一覧（5）.....	159

写 真 目 次

写真1 顕微鏡観察.....	117
写真2 金属顕微鏡による組織観察.....	124
写真3 面分析による全元素の結果（1）.....	125
写真4 面分析による全元素の結果（2）.....	126

写 真 図 版 目 次

図版1 余部遺跡周辺航空写真（昭和17年）	
図版2 余部B（その1）東トレンチ 全景（航空写真）	
図版3 余部B（その1）西トレンチ 全景（航空写真）	
図版4 余部B（その1）東トレンチ 001・002・698-OS（溝）平面、東部掘立柱建物群	
図版5 余部B（その1）東トレンチ 不定形土坑群、004・005-OO（土坑）平面	
図版6 余部B（その1）東トレンチ 200・542-OO（土坑）遺物出土状況	
図版7 余部B（その1）東トレンチ 004-OO（土坑）遺物出土状況、600-OW（井戸）平面	
図版8 余部B（その1）東トレンチ 001・002・698-OS（溝）断面、604・631・638・680-OP（柱穴）平面	
図版9 余部B（その1）西トレンチ 1138-OB（掘立柱建物）、901-OS（溝）平面	
図版10 余部B（その1）西トレンチ 鋳造関連遺構	
図版11 余部B（その1）西トレンチ 956・977-OO（土坑）平面	
図版12 余部B（その1）西トレンチ 971・974-OO（土坑）平面	
図版13 余部B（その1）西トレンチ 1000-OO（土坑）、960・972・1268・1310-OW（井戸）平面	
図版14 余部B（その1）西トレンチ 1138・1161・1171・1197・1205・1277・1278・1281・1323・1335-OP（柱穴）平面	
図版15 余部B（その1）東トレンチ 002・698-OS（溝）、004-OO（土坑）出土遺物	
図版16 余部B（その1）東トレンチ 004-OO（土坑）出土遺物	
図版17 余部B（その1）東トレンチ 200・306-OO（土坑）、 318（680-OP）・580（631・638-OP）・652（705-OP）-OB（掘立柱建物）出土遺物	

- 図版18 余部B（その1）東トレンチ 530・600-OW（井戸）出土遺物
- 図版19 余部B（その1）東トレンチ 542-OO（土坑）、901-OS（溝）出土遺物
- 図版20 余部B（その1）西トレンチ 1000-OO（土坑）、1211（1258-OP）-OB（掘立柱建物）、
1006・1268・1310-OW（井戸）出土遺物
- 図版21 余部B（その1）西トレンチ 1281-OP（柱穴）、1138（1205・1278-OP）-OB（掘立柱建物）出土遺物
- 図版22 余部B（その1）西トレンチ 956・971・974-OO（土坑）、960・972-OW（井戸）出土遺物
- 図版23 余部B遺跡航空写真（95年度調査遠景）
- 図版24 余部B（その2）2トレンチ北壁・6トレンチ南壁・8トレンチ北壁断面
- 図版25 余部B（その2）1トレンチ 東側・中央・西側全景
- 図版26 余部B（その2）1トレンチ 006土坑平面、断面、2トレンチ スラグ堆積状況、北壁断面
- 図版27 余部B（その2）2・3トレンチ全景、2トレンチ 008・009土坑断面
- 図版28 余部B（その2）4トレンチ 全景、038溝断面
- 図版29 余部B（その2）4トレンチ 031・038溝断面、埴輪出土状況、045・067溝断面
- 図版30 余部B（その2）4トレンチ 029井戸断面、088土坑遺物出土状況、断面
- 図版31 余部B（その2）4トレンチ 080・084・092・096ピット遺物出土状況、081・094ピット断面
- 図版32 余部B（その2）5トレンチ 全景、建物A平面、111ピット礎石検出状況
- 図版33 余部B（その2）6トレンチ 鋤溝検出状況、全景
- 図版34 余部B（その2）6トレンチ 西側全景、133土坑断面、遺物出土状況
- 図版35 余部B（その2）6トレンチ 134・135・520土坑断面、152土坑遺物出土状況
- 図版36 余部B（その2）6トレンチ 169・188・197土坑遺物出土状況、136井戸断面
- 図版37 余部B（その2）6トレンチ 137井戸平面、断面、遺物出土状況
- 図版38 余部B（その2）6トレンチ 257・344・357ピット遺物出土状況、295ピット断面
- 図版39 余部B（その2）6トレンチ 560・597ピット遺物出土状況、131ピット断面
- 図版40 余部B（その2）7トレンチ 中央全景、1328溝、1333土坑断面
- 図版41 余部B（その2）7トレンチ 全景、1293ピット、1295・1298土坑遺物出土状況、北壁銅錢出土状況
- 図版42 余部B（その2）8トレンチ 全景、837溝平面
- 図版43 余部B（その2）8トレンチ 837溝断面、遺物出土状況
- 図版44 余部B（その2）8トレンチ 699溝、700落ち込み平面、702溝平面、断面
- 図版45 余部B（その2）8トレンチ 中央全景、996・1046・1051溝平面
- 図版46 余部B（その2）8トレンチ 608溝断面、872溝平面
- 図版47 余部B（その2）8トレンチ 872溝遺物出土状況
- 図版48 余部B（その2）8トレンチ 607土坑、1044井戸、1045土坑平面、1385土坑遺物出土状況
- 図版49 余部B（その2）8トレンチ 987土坑平面、1056井戸平面、断面
- 図版50 余部B（その2）8トレンチ 1099土坑平面、667・913・1011土坑遺物出土状況、1011土坑断面
- 図版51 余部B（その2）8トレンチ 1026・959土坑断面、897土坑遺物出土状況
- 図版52 余部B（その2）8トレンチ 1147土坑平面、1068土坑羽口出土状況、1209土坑遺物出土状況
- 図版53 余部B（その2）8トレンチ 886土坑平面、1176土坑平面、断面
- 図版54 余部B（その2）8トレンチ 701・769・961土坑断面
- 図版55 余部B（その2）8トレンチ 697・782土坑断面、1027・1040土坑遺物出土状況
- 図版56 余部B（その2）8トレンチ 854土坑平面、断面、鋳型出土状況
- 図版57 余部B（その2）8トレンチ 610土坑平面、断面
- 図版58 余部B（その2）8トレンチ 1365土坑天井板検出状況、天井板除去後
- 図版59 余部B（その2）8トレンチ 1365土坑遺物出土状況、南側小口
- 図版60 余部B（その2）8トレンチ 994・1168・1169・1175・1177ピット遺物出土状況
- 図版61 余部B（その2）8トレンチ 871・1174・1178ピット遺物出土状況、1028ピット断面
- 図版62 余部B（その2）8トレンチ 674・910・954・989・1131・1181・1187ピット礎石検出状況
- 図版63 余部B（その2）1トレンチ 包含層、006・108土坑出土遺物
- 図版64 余部B（その2）2・3・4トレンチ包含層、4トレンチ 045溝出土遺物
- 図版65 余部B（その2）4トレンチ 031・038溝、049・088土坑、072・073・080ピット出土遺物

- 図版66 余部B（その2）4トレンチ 081・082・083・084・092・093・094・095・096ピット出土遺物
- 図版67 余部B（その2）5トレンチ 包含層、121・1393ピット出土遺物
- 図版68 余部B（その2）6トレンチ 包含層、132・140井戸出土遺物
- 図版69 余部B（その2）6トレンチ 137井戸出土遺物
- 図版70 余部B（その2）6トレンチ 133・152・169・173・192・329土坑出土遺物
- 図版71 余部B（その2）6トレンチ 188・385・457・473・475土坑出土遺物
- 図版72 余部B（その2）6トレンチ 468・484・485・490土坑出土遺物
- 図版73 余部B（その2）6トレンチ 491・492・520・587・596土坑、147・149・273・344・597ピット出土遺物
- 図版74 余部B（その2）7トレンチ 1328・1332溝、1298土坑、1293ピット、8トレンチ 包含層、826・898落ち込み出土遺物
- 図版75 余部B（その2）8トレンチ 611・668・699・810・1349溝出土遺物
- 図版76 余部B（その2）8トレンチ 669・785・1082井戸、607・667・685・727土坑出土遺物
- 図版77 余部B（その2）8トレンチ 810溝、719・1044・1056井戸出土遺物
- 図版78 余部B（その2）8トレンチ 609土坑、868井戸出土遺物
- 図版79 余部B（その2）8トレンチ 868井戸出土遺物
- 図版80 余部B（その2）8トレンチ 854土坑出土遺物
- 図版81 余部B（その2）8トレンチ 610・782・1365土坑出土遺物
- 図版82 余部B（その2）8トレンチ 782・817・824土坑出土遺物
- 図版83 余部B（その2）8トレンチ 834土坑、837溝出土遺物
- 図版84 余部B（その2）8トレンチ 837溝出土遺物
- 図版85 余部B（その2）8トレンチ 802溝、1069・1099・1147・1385土坑出土遺物
- 図版86 余部B（その2）8トレンチ 872溝出土遺物
- 図版87 余部B（その2）8トレンチ 608・1046・1051・1098溝、側溝出土遺物
- 図版88 余部B（その2）8トレンチ 874・886・891・897・914・959土坑出土遺物
- 図版89 余部B（その2）8トレンチ 947・1011・1026土坑出土遺物
- 図版90 余部B（その2）8トレンチ 1027・1040・1045・1052土坑出土遺物
- 図版91 余部B（その2）8トレンチ 960・987・991・998土坑、870・1168ピット出土遺物
- 図版92 余部B（その2）8トレンチ 798・929・1174・1177・1178・1179・1180・1207ピット出土遺物
- 図版93 余部A（その2）NO.1～2・NO.4～5トレンチ 西壁断面、NO.10～11トレンチ 南壁断面
- 図版94 余部A（その2）NO.5～6トレンチ 南半部全景、西壁断面、NO.10～11トレンチ 遺物出土状況
- 図版95 余部A（その2）NO.10～11トレンチ 包含層、004溝出土遺物

付 図 目 次

- 付図1 94・95年度調査区全体図
- 付図2 1・2・3トレンチ 遺構配置図
- 付図3 4・5トレンチ 遺構配置図
- 付図4 6トレンチ 遺構配置図
- 付図5 7トレンチ 遺構配置図
- 付図6 8トレンチ 遺構配置図
- 付図7 美原の字図

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

余部遺跡は、南河内郡美原町に所在し、西に接する堺市側では日置荘遺跡と呼称され、行政境を挟んで遺跡名が異なっている。

余部遺跡・日置荘遺跡は近畿自動車道松原すさみ線、府道松原泉大津線建設に先立ち1986年に財団法人大阪文化財センターが試掘調査を実施した。その結果、大阪府教育委員会により調査の必要ありとの判断が下され、1987年から1991年にかけて同センターが本格的な発掘調査を行った。その成果について⁽¹⁾は余部遺跡を含めて「日置荘遺跡」報告書として刊行されている。

今回の調査は府営美原北住宅の建て替え（B地区）および汚水管埋設工事（A地区）に伴うものである。財団法人大阪府埋蔵文化財協会は1994年11月に大阪府と委託契約を交わし、同11月から1995年3月まで現地にて調査を行った。財団法人大阪文化財センターと統合した後、新しく発足した財団法人大阪府文化財調査研究センターは1995年4月に大阪府と委託契約を交わした。委託契約期間は1995年4月から1996年3月であり、現地調査は同4月に着手し10月に終了した。

調査区は美原町の西端にあたり、B地区は阪和自動車道松原すさみ線、府道松原泉大津線と府道堺富田林線が交差する北に、A地区は南にそれぞれ位置する。

1994年度の調査を余部（その1）、1995年度の調査を余部（その2）と呼称し、それぞれの成果については当報告書に併せて記載している。

(1)日置荘遺跡－近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書
1995年3月 財団法人 大阪文化財センター

第II章 調査の方法

第1節 94年度調査

余部遺跡は大阪府南河内郡美原町北余部地内に所在する。この地点は、新平面直角座標の第VI座標系に基づき作成された、昭和60年度大阪府発行の2,500分の1地形図の大E-5-16に位置する。

地区割は以下の方法による。まず、大E-5-16を500m区画に12等分し、A～Lまでの記号を付す。さらにこれを25等分した100m区画に01～25までの数字を付ける。以上の作業によって、余部B（その1）の調査区は大E-5-16 A18とA19に位置することとなる（図1）。

発掘調査では、100mの区画をさらに625等分して4 m区画にする。この区画を南北方向（縦軸）を先に、東西方向（横軸）を後にA～Yの各25のアルファベットの組み合わせにより区別する。たとえば、図2に示した調査区東トレーニング中央の斜線部は、大E-5-16 A19 KHと呼称することができる。

発掘調査は、表土・盛土・耕土・床土を重機を用いて掘削した後、包含層を人力により地山まで掘削した。包含層より出土した遺物の取り上げは上記の4 m区画を基本としている。

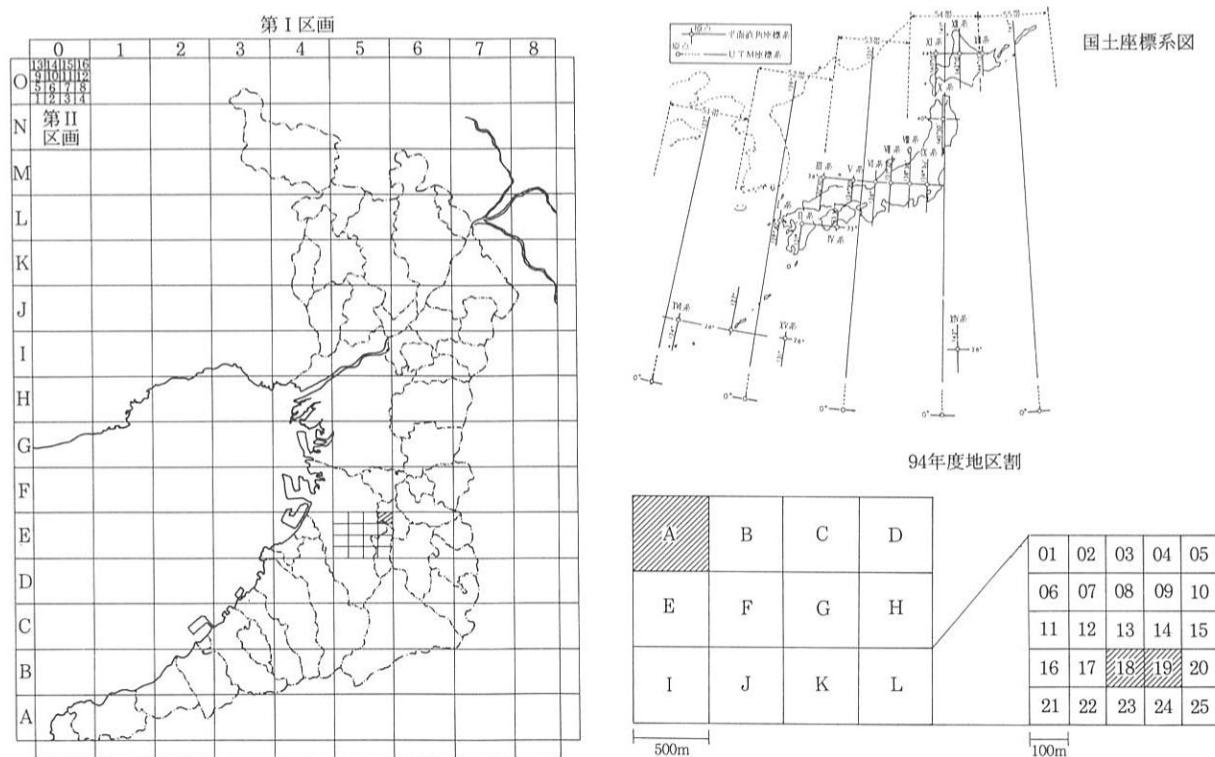


図1 國土座標系とそれによる地区割

検出遺構等の図化は、ヘリコプターによる航空測量を実施し、1/20と1/100の平面図および遺構図を作成した。また調査時の必要に応じ、1/10や1/20の遺物出土状況図、埋土断面図等を作成した。

第2節 95年度調査

本遺跡では遺跡中央を東西に横断する阪和自動車道を挟み、北側をB地区、南側をA地区と呼称する。1994年度の発掘調査は北側のB地区を実施し、1995年度は前年度に引き続きB地区と、汚水管敷設工事に

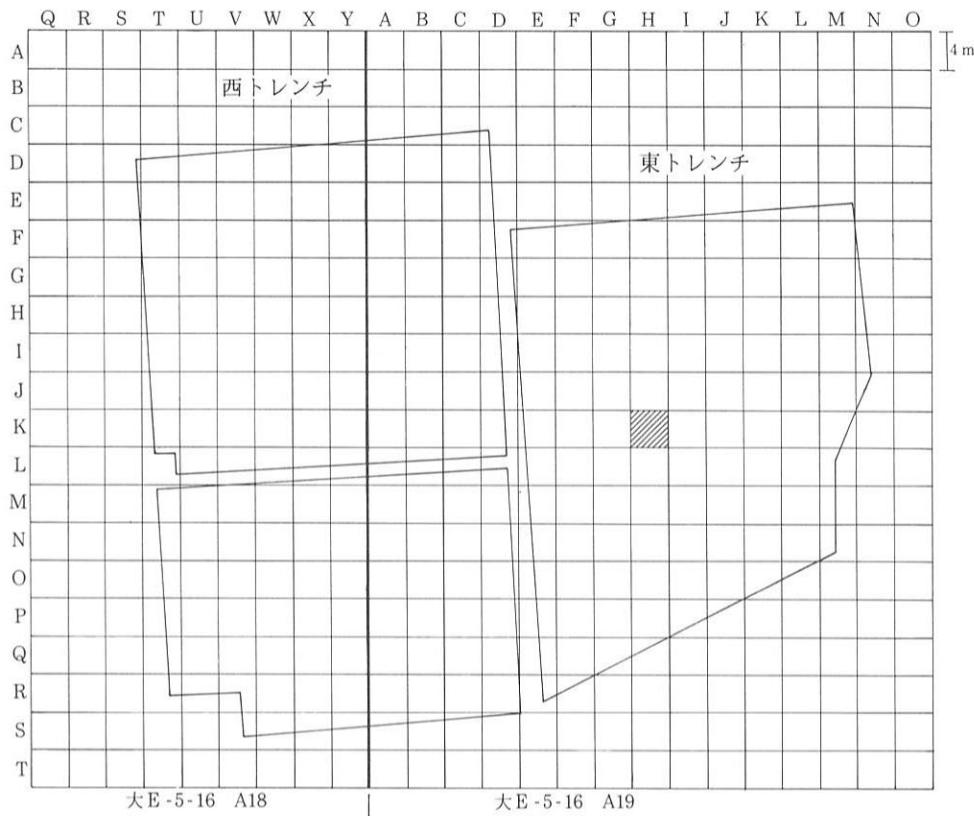


図2 余部B（その1）調査区のトレンチと地区割り設定

伴う調査をA地区において実施した。

B地区における95年度調査区は、前年度の調査区の南側と北側に隣接する（図3）。排土置き場の確保のため、全体を道路あるいは側溝等を基準に分割し、調査はそれぞれの地区を順次移動しながら実施した。トレンチは、南から順に1～8トレンチの名称を設定した。

調査面積は約8,297.3m²を測り、地山までを調査の対象深度とした。調査は、まず盛土・旧耕作土・床土をバックホーにより機械掘削し、地山まで層位毎に人力掘削を実施した。

遺構面の平面実測は、ヘリコプターによる航空測量と平板による測量を実施し、調査区全体の1/20・1/50・1/100の平面図および遺構図を作成した。また調査途中には、必要に応じ遺物出土状況図や遺構断面図の作成も行なった。

土層断面は、各トレンチの周囲に観察用の畦を残し、それぞれ1/20の図化を実施した。なお、隣接するトレンチと重複するものは除き、調査区全体では東西方向に6ヶ所、南北方向に6ヶ所の断面図を作成した。

地区割りについては、財団法人大阪文化財センターが設定した『遺跡調査基本マニュアル』(1988)による方法を踏襲する。これは国土座標系（第VI座標系）を基準として6段階の区画に分割し、大阪府下全域に対応できるよう設定したものである。第I・II区画は前年度の地区割り方法と同様である（図1）。第III区画は第II区画を100m毎に分割し、縦軸A～O、横軸1～20の組み合わせにより表示する。第IV区画はこれを10m毎に分割し、縦軸a～j、横軸1～10の組み合わせにより表示する。第V区画はさらに5m毎に4分割し、北東より南東にI～IVの名称を設定する。

なお、包含層より出土した遺物の取り上げは、上記の第V区画を基本的に使用した。

A地区の調査区は、前述のとおり汚水管埋設工事に伴う調査であるため、幅0.8m、総延長432mの細長いトレンチ状となった（図4）。埋設工事は既設道路部分を開拓、住宅部分を押管工法により実施し、

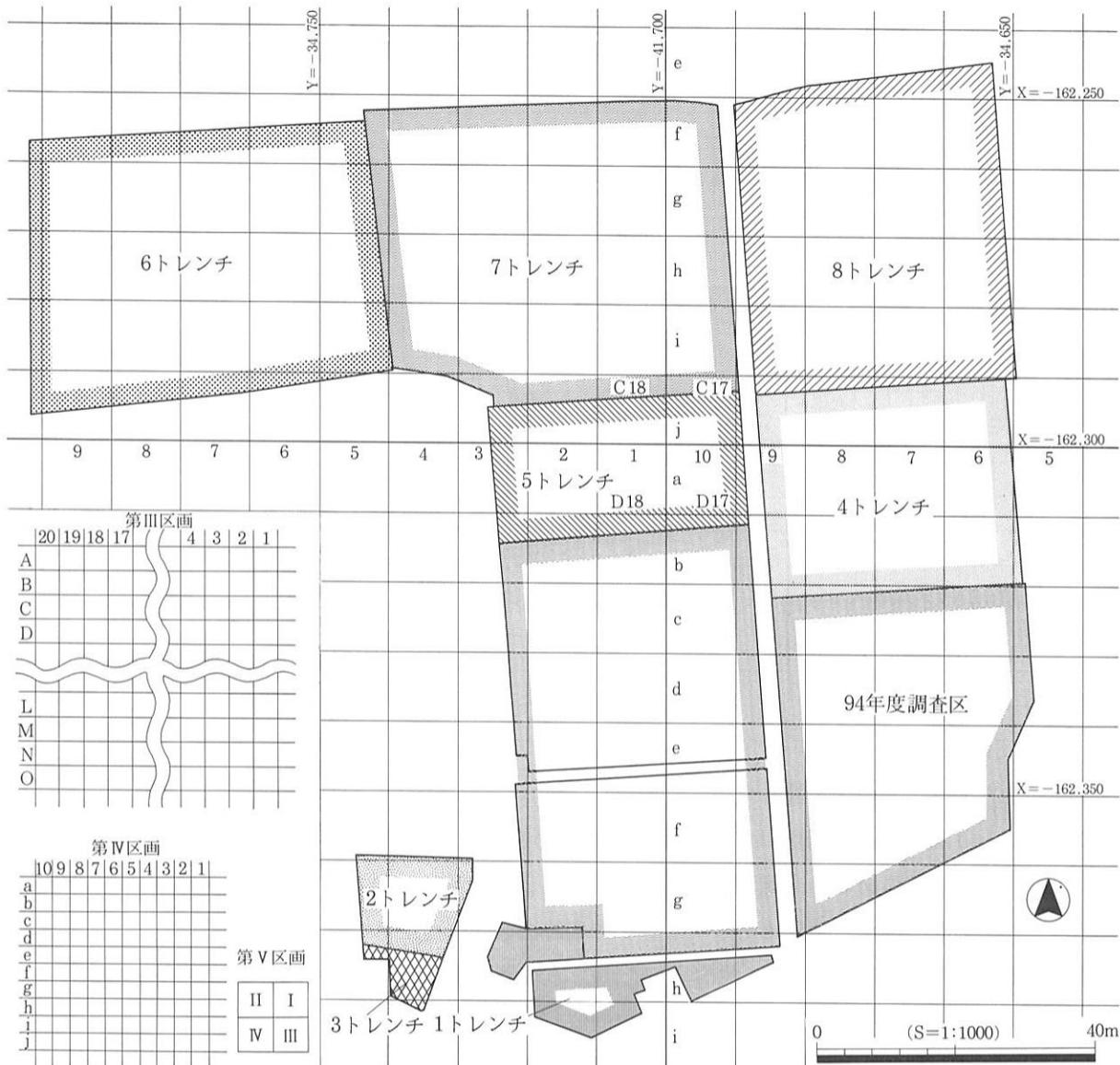


図3 余部B（その2）調査区のトレンチと地区割設定

このうち、発掘調査は開放工事の行なわれる道路部分のみを対象とした。調査深度は地山検出面までであり、調査面積は合計約353.6m²、平均深度は約1.1mを測る。

調査の方法は、日毎の調査実施範囲をバリケードで囲み、アスファルト、盛土、耕作土をバックホーにより機械掘削した。これより下の包含層は必要に応じ人力掘削を実施し、地山を確認した後、土層断面の写真と実測を行なった。これらの作業完了後、開放部分を覆鋼板により保護し、後日、本体工事が実施された。

1回の調査範囲が極めて狭量であるため、遺構の平面実測は必要が生じた時のみ平板による測量を実施した。

トレンチは、本体工事が人工間を1単位として実施されるため、これを踏襲した形で設定しており、トレンチ名称も人工に付けられた番号を利用している。また、調査の位置によっては、No. 1～2 トレンチ以外に北半、南半、中央部といった呼称を付いている。

地区割りについては前述のB地区と同様、財団法人大阪文化財センターの地区割法を使用し、遺物の取り上げや遺構図の作成に用いた。

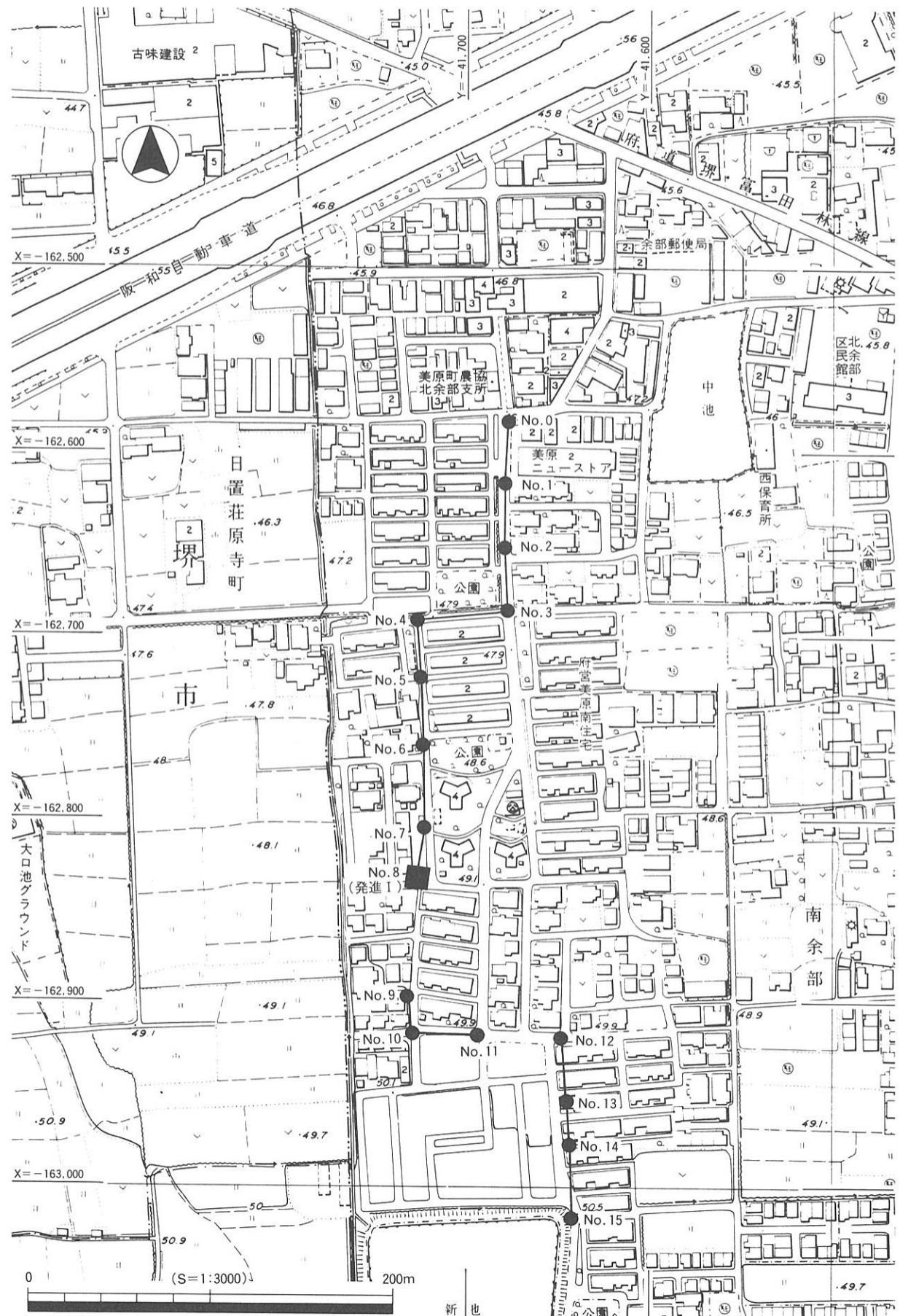


図4 余部A（その2） 調査区の設定〔出典：大阪府 平成6年地域計画図〕

第III章 位置と環境

今回、発掘調査を行なった余部遺跡は、大阪府南河内郡美原町北余部・南余部に所在する。遺跡は阪和自動車道を挟む形で、南北約1.2km、東西約0.65kmの範囲に広がっている。本遺跡の西側には、堺市の日置荘遺跡が隣接しており、両遺跡を合わせた規模は南北約1.4km、東西約2.2kmを測り、約300万m²の連続した遺跡が存在することになる(図5)。

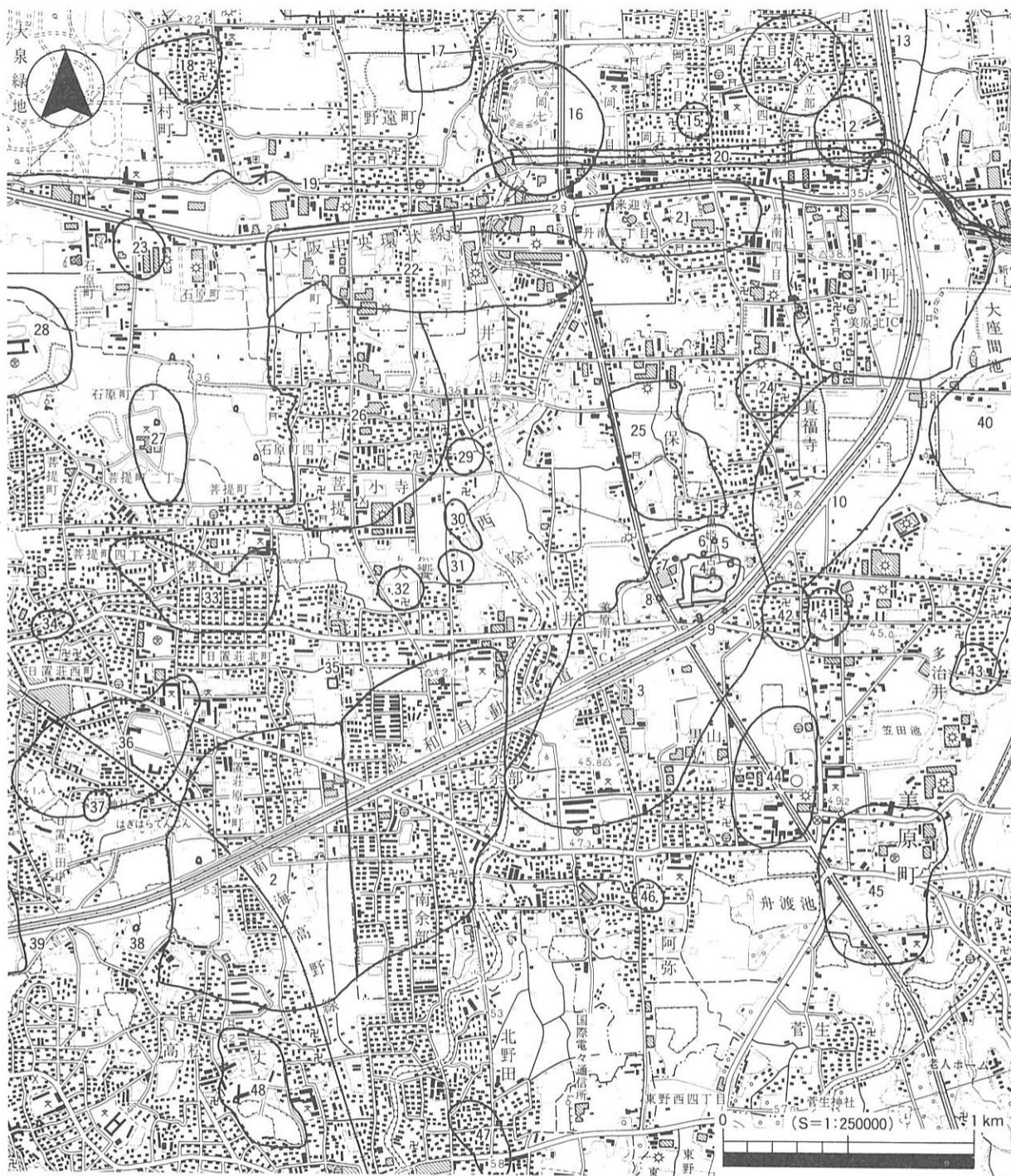
周辺の自然地形は、西南日本を分かつ中央構造線に沿って存在する和泉山脈から北に広がる河泉丘陵、河泉台地を特徴とする。これらの地形の大部分は、いわゆる大阪層群から構成されている。本遺跡の所在する美原町は西に陶器山丘陵、東に羽曳野丘陵を配し、中央に段丘面を構成する複雑な様相を呈している。この段丘面には後期更新世の上位段丘から下位段丘、完新世以降の低位段丘が形成されており、狭量な地域の中に起伏のある地形を顯している。

周辺の主要河川としては、西除川、東除川という二本の河川が台地を浸食しつつ北流している。東除川の東側は、羽曳野丘陵が西に向かって緩やかな傾斜を呈しており、無数の小川が発達し、丘陵縁辺部に入り組んだ谷地形を形成する。東除川は、これらの小川が流れ込むことにより、激しい段丘崖を形成しつつ、狭く深い谷底平野を発達させた。一方、西除川は、過去には上流に存在する天野川と同一河川であったが、狭山池築造により二分されたものである。こちらは段丘崖が発達せず、浅く平坦な谷底平野を形成した。周知の遺跡のほとんどが、これら二つの谷底平野と段丘上に位置しており、調査を行なった余部遺跡も、陶器山丘陵より広がる下位段丘上から西除川左岸の谷底平野にかけての比較的平坦な地形に位置している。

昭和55年、近畿自動車道和歌山線（現阪和自動車道）の路線予定地が遺跡内を横断するため、余部・日置荘の両遺跡を日置荘遺跡とし、大規模な発掘調査が開始された。この調査では古墳時代から近世に至る遺構や遺物が多数検出され、本道路沿いに連綿と遺跡のつながる状況が明らかとなった。特に、余部遺跡の範囲に相当するその1・その2調査区では13世紀代に存続したと思われる城櫓や大小の建物跡が検出され、また磬の鋳型や鉄瓶等の鋳造関連の遺物が多く出土し、文献等にみられる「河内鋳造師」の本拠地として広く認識されることになった。

当地周辺は隣接する松原市とともに、『古事記』『日本書紀』に「多治比」「丹比」として登場したり、「丹比連」「丹比真人」などの有力氏族が存在していたとされ、かなり古くより拓けていたことは知られていたものの、それを検討する考古学的資料が不足していた。前述のような近年の大規模な調査において、美原町北東部に位置する太井遺跡や真福寺遺跡等から旧石器時代のナイフ形石器や尖頭器、長原式とよばれる縄紋時代晩期の土器、弥生土器などが発見され、有史以前より人々の生活空間として利用されていたことが明らかとなった。しかし、これらも通史的にはわずかなものであり、現時点ではムラ等を形成する定住地としてではなく、狩猟や採集などの生業の場であったと考えられている。

このような状況も古墳時代に入ると一変し、人々の積極的な活動の痕跡がみられるようになる。古墳時代中期以降、国内最大の須恵器生産を誇った陶邑が陶器山丘陵一帯に分布し、同時に人々の定住化が進んだとされる。時代が下るにつれ窯場は北の低地へと移動し、最終段階には日置荘遺跡の南西部に達しており、後期の須恵器や日置荘型埴輪などの生産を行なった窯や集落がみつかっている。また、余部遺跡の北東には全長114mの前方後円墳である黒姫山古墳が知られる。この古墳は埋葬施設を2基もち、



1. 余部（日置莊）遺跡
2. 日置莊遺跡
3. 太井遺跡
4. 黒姫山古墳
5. 鎮守山古墳
6. 黒姫山北古墳
7. けんけん山古墳
8. さる山古墳
9. さば山古墳
10. 真福寺遺跡
11. 丹上遺跡
12. 觀音寺跡
13. 観音寺遺跡
14. 立部遺跡
15. 薬仙寺遺跡
16. 清堂遺跡
17. 河合遺跡
18. 中村町遺跡
19. 竹内街道（丹比道）
20. 丹比道周辺遺跡
21. 丹南遺跡
22. 八下遺跡
23. 石原町北遺跡
24. 真福寺跡
25. 大保遺跡
26. 小寺遺跡
27. 石原町遺跡
28. 金岡遺跡
29. 長和寺跡
30. 大饗城土塁跡
31. 八坂神社遺跡
32. 城岸寺城跡
33. 日置莊北町遺跡
34. 初芝遺跡
35. 日置莊東池遺跡
36. 日置莊西町遺跡
37. 新池古墳群
38. 劍池西窯跡
39. 日置莊西町窯跡群
40. 郡戸遺跡
41. 丹比神社
42. 黒山廃寺
43. 丹比廃寺跡
44. 黒山遺跡
45. 平尾遺跡
46. 阿弥陀寺経塚
47. 北野田遺跡
48. 丈六天池遺跡

図5 周辺の遺跡分布図〔出典：大阪府教育委員会 1991 大阪府文化財地図〕

うち1基には遺体ではなく24個体分の甲冑や刀・剣・鉢・鎌などの武具が大量に副葬されていたことで有名である。古墳の築造時期は5世紀中葉から後半と考えられ、これを含む太井遺跡には他にも陪塚と考えられる古墳が約6基みつかっており、ここに一つの墓域が形成されていたと推測されている。

このように古墳時代には、余部遺跡は須恵器の一大生産地と、巨大前方後円墳を中心とする墓域の間に位置していたことがわかっている。余部遺跡からも当該期の遺物が出土しているものの、これに伴う遺構等はほとんど確認されておらず、この時期の中心部は丘陵や中位段丘上といったやや高所に集中していたと考えられる。

また、前述のように当地周辺は台地上にあり、ここに住む人々は水資源に乏しいという条件を受け入れなければならなかった。これを克服するため、灌漑用貯水池を築造したものが巨大な水甕として周辺一帯を潤す人造の狭山池である。狭山池は、前述のように旧天野川を堰き止めて造ったダム池の一つである。1994年の狭山市の調査では、この狭山池が西暦600年前後に築造され、幾度も改修を重ねてきたことが明らかとなった。この狭山池築造以後、周辺地域の灌漑設備が増加し、これに伴う開発も著しく進んだとするならば、古代より当地が重要な地として歴史の表舞台に現われることと一致する。

「日置荘」という地名は当地を居住とした古代「日置部」を由来とし、中世にかけて栄えた奈良興福寺の荘園である「日置荘」として発達した。また「余部」という地名は、天平15(743)年の『河内国西淋寺僧宝帳』にある「余戸郷」が初見とされている。いずれも古代以降、史上に頻繁に現われるようになり、この頃より周辺一帯が大きく発展してきたことを物語っている。またそれを裏付けるものとして、周辺には当時の有力氏族が競って建立した氏寺の一つである、黒山廃寺と丹比廃寺という寺院址が2カ所知られている。

古代末期以降では、当地の歴史を考える上で最も重要なものとして鋳造工業があり、数々の史実、あるいは現存する鋳造品資料から、古くより河内鋳物師として注目されてきた。この河内鋳物師は平安時代終わり頃にはすでに当地を本拠とし、蔵人所の供御人として全国各地で梵鐘等の製造や鍋・釜などを売る商業活動を行なっていたとされたが、本拠における活動の詳細についてはあまり知られていないかった。前述のように、阪和自動車道の調査において、真福寺遺跡から鎌倉時代の鋳造遺構と大量の梵鐘や鍋などの鋳型、太井遺跡から奈良時代の鋳造遺構とともに使用したトリベが多量に出土し、初めてその実像が明らかとなった。さらに、松原市の觀音寺遺跡において溶解炉片が出土し、堺市に位置する日置荘遺跡からも鋳造遺構や鉄瓶が出土するなど、かなり広範囲にわたって生産活動が行なわれていたことも知られるようになった。

また、これらの交易とも関わる交通網も整備され、西除川沿いに南北に下高野街道、遺跡のすぐ南側を東西に通る富田林街道など、交通の要所としても重要な地域であった。

このように全国規模に発展した鋳造工業も近世へと変化する世の中の情勢に従い、次第に衰退していく。各地には灌漑用溜池が大量に造られ、周辺一帯は水稻耕作地として変貌したのである。現存する小規模な灌漑用溜池はおおむね近世以降に築造されたものと思われ、戦前にはかなりの数が存在したようである。これら溜池には谷部を堰止めた谷池と四周に堤をもつ皿池の2種類があり、本遺跡周辺でみられるものは、地形的な制約による皿池がほとんどである。明治18年の地形測量図によると、調査区周辺には余部・原寺・大饗などの集落が散在する以外に、広大な水田と点在する溜池がみられるのみである。このような水田を中心としたかつての景観も、近年の宅地開発や道路建設により急速に失われつつある。

第Ⅳ章 発掘調査の成果

第1節 基本層序と遺構面

余部遺跡における今回の調査は、前述のとおり、阪和自動車道を境界とする南北のA地区、B地区に分けられる。そこで、本遺跡における基本層序の説明も、この両地区に分けて説明することにする。ただし、いずれの調査区とも基本的には同一段丘上に位置しており、層序の様相に大きな差異はみられない。

B地区における調査は、1994年度と1995年度に実施された。両調査区は異なる担当者により実施されたものの、隣接した関係にあり、基本層序はほぼ同様であると判断された。そこで、敢えて混乱を避けるため、また空間的により広い視点から検討を行なうため、本節では両調査区の層序についてまとめて記述することにする。

ここでは、両年度を合わせた全調査区において、東西方向1カ所、南北方向2カ所の計3カ所について合成した断面図を用いて説明することにする。

B地区における基本層序は地表面から順に盛土、耕作土、床土、遺物包含層、地山となる。
掲載した図面は、a-a' が1994年度西トレンチ西壁・1995年度5トレンチ西壁・6トレンチ東壁（反転）、b-b' が1994年度東トレンチ西壁・1995年度4・8トレンチ西壁、c-c' が6・7・8トレンチ北壁の断面を示している。なお図面は、紙面の都合により、また連続した土層断面を検討するため、縦1/40・横1/500の変率縮小を行なっている。

現代（1層）

1層は、府営美原北住宅建設時の盛土および搅乱の層である。粘土と礫の混じるブロック土であり、層内には土管・ガス管や建築廃材、現代の陶磁器片を含む。調査においては、同層はすべて重機による掘削を実施し、遺物の收拾のみを行なった。層厚は20から80cmを測る。

近世から近代（2・3層）

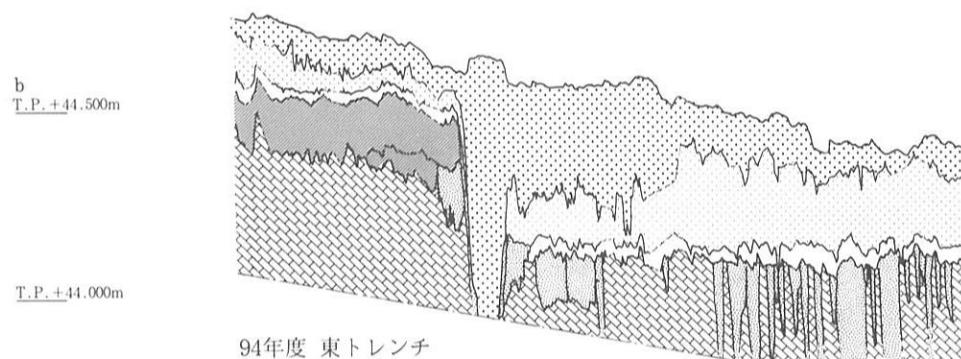
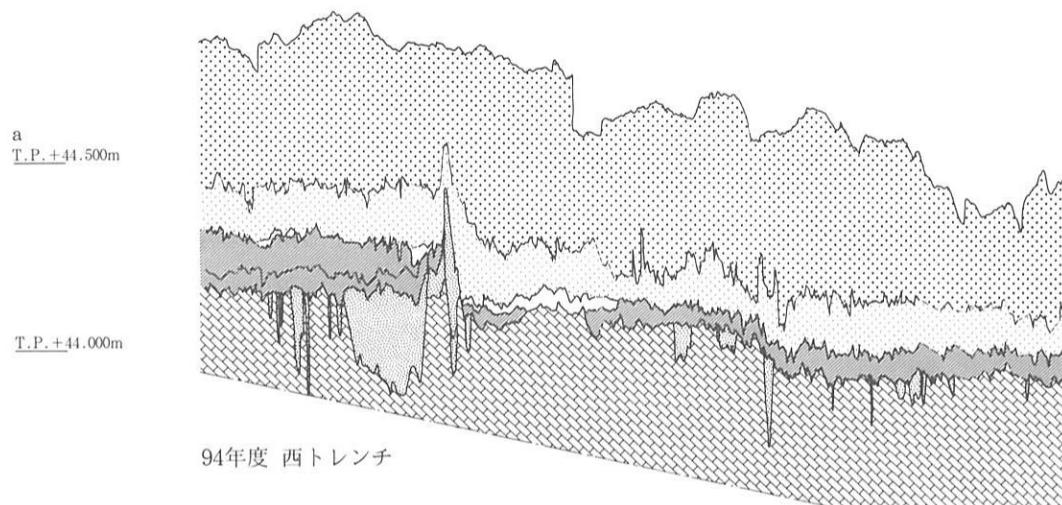
2層は府営美原北住宅建設直前までの耕作土である。黄灰色の細砂を含むシルト層であり、粗砂・小礫がわずかに混じる。調査区全域に安定して存在しており、層厚は20から50cmを測る。

3層は耕作土に伴う床土である。黄褐色の細砂を含むシルト層であり、粗砂が混じる。耕作土と同様に、調査区のほぼ全域で確認された。層厚は約5cmである。

これら2・3層は、最終時期が前述の1層とほぼ同じと考えられることから、調査では上層と同様に機械による掘削を行なった。收拾した遺物から、耕作の開始された時期は近世まで遡ると考えられ、府営住宅建設直前まで続いたと考えられる。また、耕作に伴う作業は下層にまで及んでおり、同層を除去すると、規則的な鋤溝等が検出される。

古代から中世（4層）

4層は本遺跡における遺物包含層である。微砂とシルトの層であり、調査区の部分によっては複数に分層が可能である。前述のとおり、層上面には鋤溝等の耕作痕が多数みられ、遺構等が確認されないことから、かなりの削平を受けたものと思われる。



トーン	層No.	層名	土色	時期
●	1	盛土	黄褐色、橙褐色 砂・粘土ブロック	昭和前期
○	2	耕作土	黄灰色 細砂・シルト(粗砂・礫混)	近世～近現代
△	3	床土	黄褐色 細砂・シルト(粗砂含)	"
■	4a	包含層(上層)	褐色・灰オリーブ色 微砂・シルト(中粒砂混)	中世後半
▲	4b	包含層(下層)	暗灰黄色 微砂・シルト(中粒砂・礫・マンガン粒混)	古代～中世前半
◆		遺構埋土	黄褐色 微砂・粘土 暗灰黄色、黒褐色、黄灰色 微砂・シルト	
◆	5	地山	褐色 微砂・粘土	

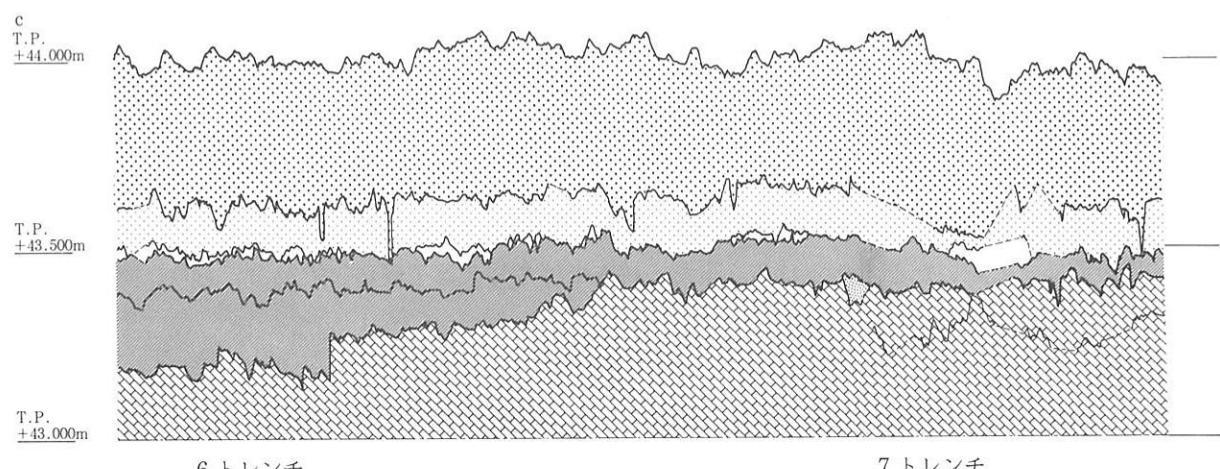
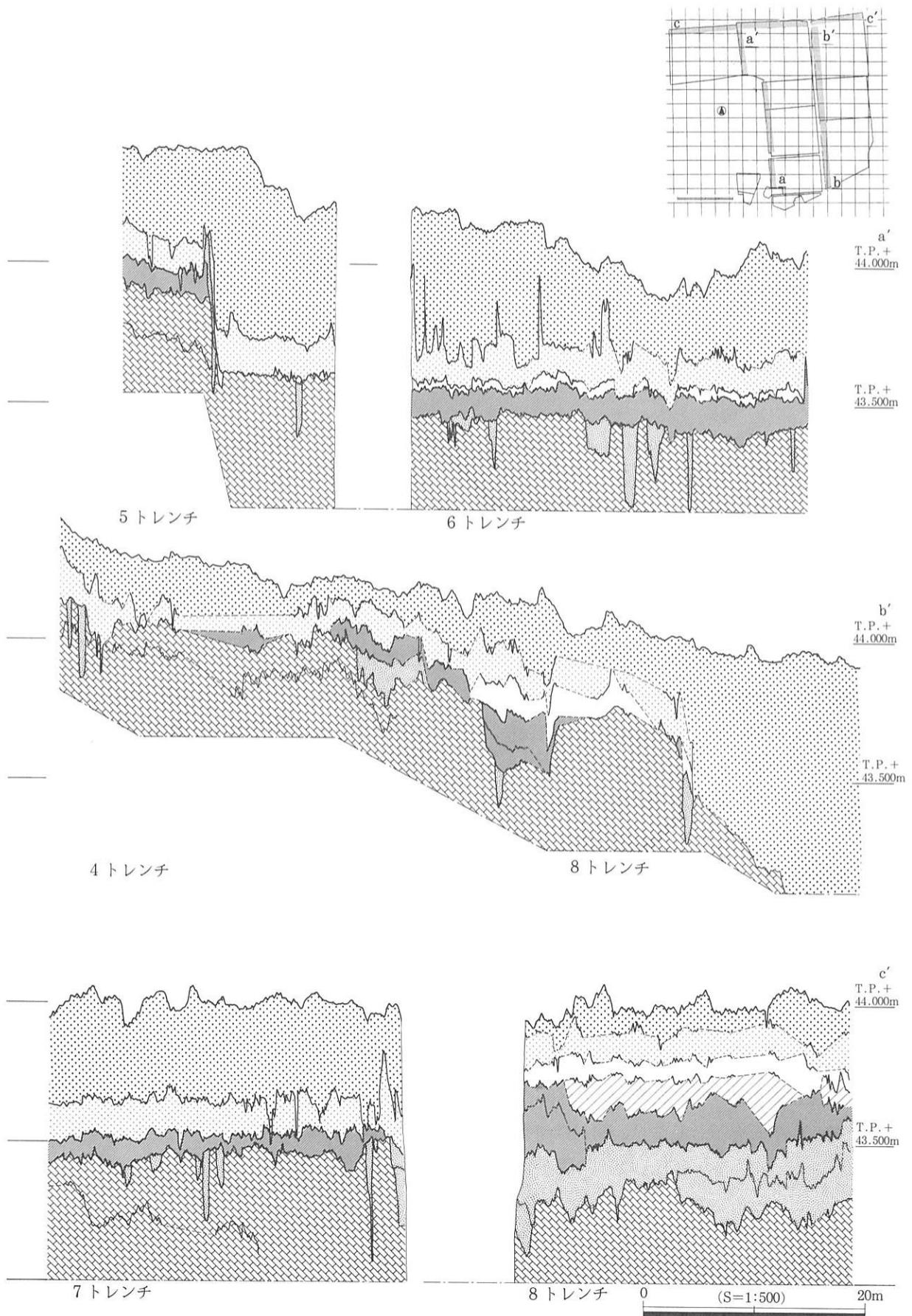


図6 余部B(その1・2)



調査区断面

4 a層は、1995年度調査区の8トレンチ北東隅にのみ存在する。土質は褐色・灰オリーブ色の微砂・シルト層であり、中粒砂が混じる。遺物を大量に含んでいるものの、平面形が不定であり、溝などの遺構となる可能性は少ないとと思われる。地山直上の遺構が廃棄された後、落ち込み状になったところを、整地したような層ではないかと推測される。しかし、この包含層上面における遺構は確認されなかった。層厚は20から30cmを測る。出土遺物から、時期は中世後半を中心と考えられる。

4 b層は当地における典型的な包含層であり、調査区のほぼ全域において検出された。ただし、1994年度東トレンチ、1995年度5・7トレンチの一部では、後世の耕作により削平された地点も存在する。また、調査区の部分によっては、粘質の違いにより二層程度に分化可能であることが認められた。しかし、層界では遺構等が検出されず、遺構面として確認することは不可能であった。土質は暗灰黄色の微砂・シルト層であり、中粒砂・小礫・マンガン粒が混じる。層厚は10から60cmを測る。層内にはほぼ均一に遺物が包含されており、時期は古代から中世前半を中心とする。

地山（5層）

5層は褐色の粘土層を基本としており、微砂・マンガン粒を含む。調査地点によっては、下部のクサリ礫を多く含む段丘礫層が露頭している部分もある。上部粘土層は厚さ約50cm前後を測り、下部の礫層は地下数mに達すると思われる。

本遺跡において検出した遺構の大部分は、この地山上面にて確認したものである。それらの遺構の時期はほとんどが中世に属するものの、一部に古代に遡ると思われるものも存在しており、ごく浅い堆積の中に、長期にわたる遺構面の形成が行なわれたと考えられる。しかし、一方で包含層の分層が可能な地点もあることから、複数の遺構面が存在した可能性も否定し得ない。

本調査区における地山の地形的な特徴について検討を加える。南北方向の断面では、地山上面が50cm前後の段差をもって北に落ち込む状況を数箇所に確認できる。そこは必ず包含層が遺存していないか薄くなっている、耕作土が地山に連動する形で段を形成している。一方、東西方向の断面では、地山上面は東西のそれぞれに向かって緩やかな傾斜をもっており、連続してみられる包含層は、ほぼ水平な堆積を認められる。これらのことから、地山にみられる段構造は耕作により形成されたものであり、同時に平坦に堆積しつつあった包含層の一部を削平したものと思われる。

A地区における層序は、基本的にはB地区のものと同一である。道路部分に存在するアスファルトを除き、地表面から順に盛土、耕作土、床土、遺物包含層、地山となる。調査地点によっては、各層序において複数の土層が観察されるものの、基本的な層序の関係に差異はみられない。

図7はA地区における全調査区の層序を、北からほぼ20m毎に柱状化したものである。一連の並びのものは、調査区においてトレンチが直線的に連続する部分である。また、図における縦方向が南北、横方向が東西の断面を示しており、縮尺は縦横とも1/40である。表1に基本的な層序とその観察を記している。以下、図と表を参照しながら説明する。

現代（1層）

1層は府営美原住宅建設とともに盛土および攪乱の層である。ゴルフボール大から人頭大までの礫を多く含み、シルトや粘土塊によりブロック状を呈する。層内には整地に際して混入したと思われる煉瓦や土管などの廃材片が混入している。層厚は20から70cmである。

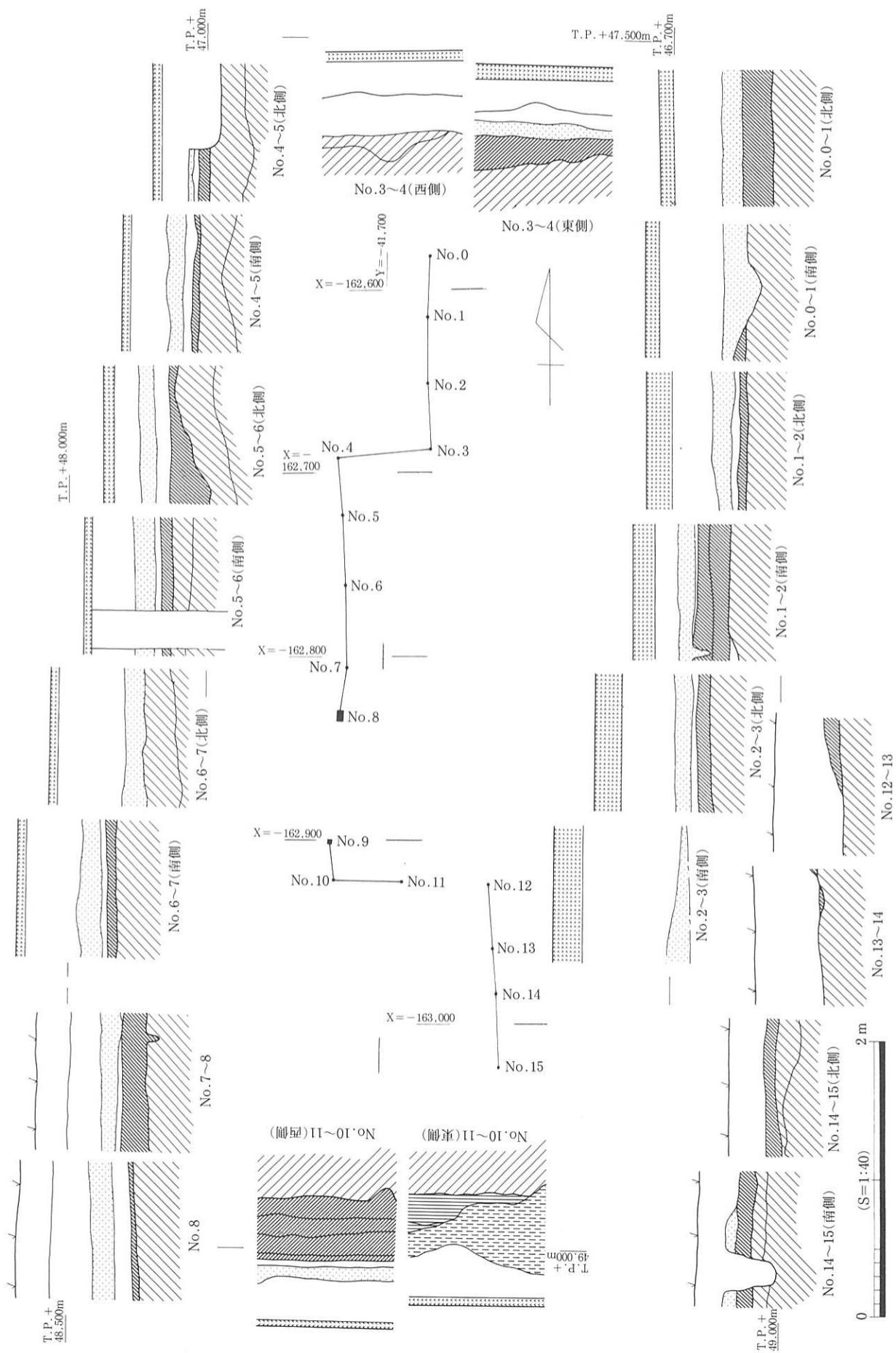


図7 余部A(その2) 柱状断面

表1 4地区 基本層序観察表

トーン	層No.	層名	土色
	0	アスファルト	
	1	盛土	明黄褐色 磯・シルト・粘土ブロック
	2	耕土	灰色 細砂・シルト(中粒砂・炭化物混)
	3	床土	黄褐色 細砂・シルト(鉄分沈着)
	4	包含層	黄褐色・灰オリーブ色 細砂・シルト(磯・マンガン粒・炭化物混)
		池埋土	黄褐色 シルト(細砂・粘土ブロック混)
		池堤盛土	灰黄色 シルト(微砂・粘土・鉄分混)
	5	地山	明黄褐色 粘土(磯・細砂)

近代(2・3層)

2層は耕作土であり、暗茶褐色の微砂を含むシルト層である。3層は耕作土に伴う床土であり、黄褐色の細砂を含む粘質のシルト層である。調査区の南側を除き、ほぼ全域において確認することができる。耕作の際に混入物を除去したためか、層内にはほとんど遺物がみられない。稀に近世に属すると思われる遺物が出土することから、耕作は近世から府営住宅建設直前まで行なわれていたと考えられる。層厚は約20cmである。

桝ヶ池

調査区の南側、X=-162,950、Y=-41,670付近に位置した長方形の皿池であり、府営住宅建設の際に埋め立てられた。池の埋土は黄褐色のシルト層であり、粘土ブロックなどが混じる。また、西岸に相当する地点より池の堤と思われる盛土が検出された。池の内部にあたる南側は既に調査されており、今回の調査では範囲確認にのみ限定した。

古代から中世(4層)

4層はいわゆる遺物包含層であり、灰オリーブ色あるいは黄褐色の細砂を含むシルト層である。後世に削平された一部を除き、調査区のほぼ全域において確認された。調査地点によっては2から4層に分層が可能であるものの、複数の遺構面の確認には至らなかった。阪和自動車道より北側のB地区と異なり、包含される遺物の密度はかなり低い。わずかに出土した遺物より、この層が古代から中世にかけて形成されたと考えられる。層厚は10から40cmである。

地山(5層)

当地周辺が中位段丘上ということもあり、検出される地山は明黄褐色の砂混じりの粘土層である。遺構面が確認されるのはこの地山直上のみであり、これより下層は洪積世のものと思われるクサリ磯や粘土層の堆積がみられる。

第2節 検出された遺構と遺物

1. 94年度調査

全調査区3660m²のうち、東トレンチ、西トレンチの2地区に分けて調査を実施した。基本層序は表土、盛土、耕土、床土、遺物包含層（約5～30cm）、地山からなる。地山面は東トレンチ南部が最も高く標高44.4m、北に向かって低くなり平均44.1mで、西トレンチの北部では43.9mを測る。

遺構面は地山直上の一面で検出され、古墳時代から江戸時代までの遺構が認められた（図8）。遺構総数は1228基で、遺構の種類は掘立柱建物、柱穴、井戸、溝、土坑、杭列等で、主に飛鳥時代と鎌倉時代の2時期に分かれる。遺物は中世の瓦器椀・小皿、土師質羽釜・小皿等が中心で、その内の大多数は遺構内から出土したものである。



図8 余部B（その1）調査区全体図

(1) 東トレンチ (図9, 図版2)

調査区の東半部分1497m²に東トレンチを設定した。主要な遺構としては、7世紀の中央部を南北に走る溝 (001・002・698-O S) がある。一方、13世紀を中心として、東部には掘立柱建物群 (318・580・652・549-O B) と井戸 (530・600-O W)、西部一帯には密集する不定形土坑群、東南部には大形土坑 (004・005-O O) がみられる。また、江戸時代以降では東西方向に坪境とみられる溝 (003-O S) と杭列 (074-O X) を検出した。遺構総数は684基で、土坑と柱穴が大多数を占める。

001・002・698-O S (図10, 図版4・8, 卷頭図版1) はトレンチ中央部を北北西の方向へ縦断する溝である。南側は1987年度に(財)大阪文化財センターが調査した、近畿自動車道和歌山線、都市計画道



図9 東トレンチ 遺構配置図

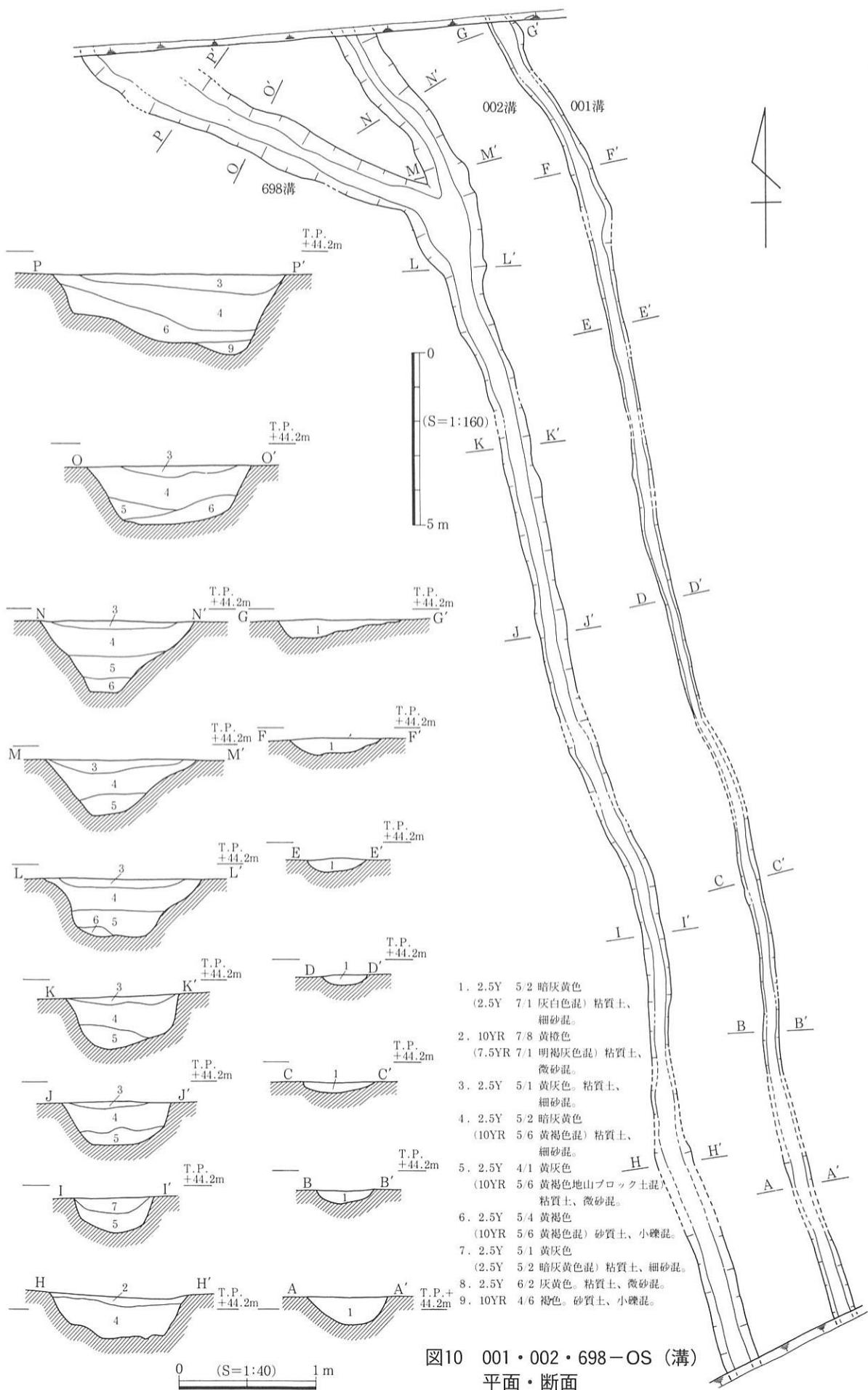


図10 001・002・698-OS (溝)
平面・断面

路松原泉大津線建設に伴う、日置莊遺跡（その1）の5～7Cトレント検出の溝4に、北側は95年度調査区の045・067溝とつながる。

001・002-O Sはおよそ2.5mの間隔で平行し、698-O S（図10、図版4・8、巻頭図版1）は、北部で002-O Sから枝分かれして北西方向に延びている。これらの溝は削平されているが、検出面で001-O Sが幅50～90cm、深さ8～20cm、浅いU字形断面、002-O Sが幅60～120cm、深さ25～50cmを測り、断面U字形、北部では逆台形を呈する。698-O Sは幅1.0～1.5m、深さ40～60cmの大規模な溝で、ともに北に向かって流れていたとみられる。

図11-1・2・4は698-O S、3は002-O S出土の円筒埴輪である（図版15）。1は口縁部で、復元口径32.2cm、残存高8.8cmを測る。外面にタテハケ（7本/cm）、内面にヨコナデを施す。2は外面にタテハケ（7本/cm）内面にヨコハケを施す。3は外面にタテハケ、内面は粗雑なヨコナデを施す。4は直径約43.4cmで、外面にタテハケ（9本/cm）、内面にナナメ・ヨコ方向のハケを施す。ともに厚い器壁に特徴があり、日置莊型埴輪に含まれる。5は002-O S出土の須恵器短頸壺の蓋、6は698-O S出土の須恵器杯身で、陶邑III型式第2段

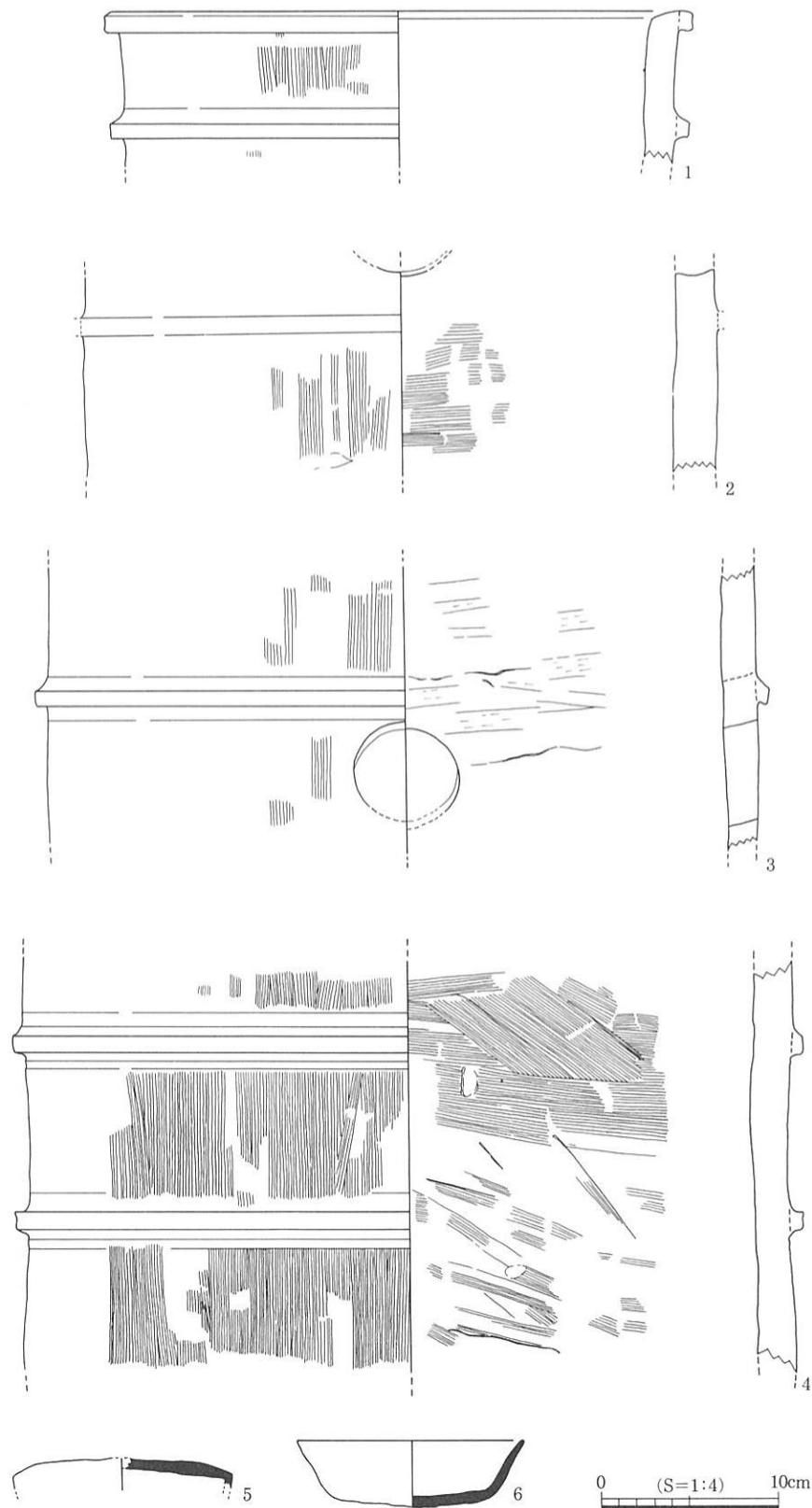


図11 002・698-O S（溝）出土遺物

階に属する。埴輪は6世紀代にさかのぼる時期のものとみられるが、埴輪より新しい須恵器の年代から、これらの溝の廃絶時期は7世紀中葉と考えられる。

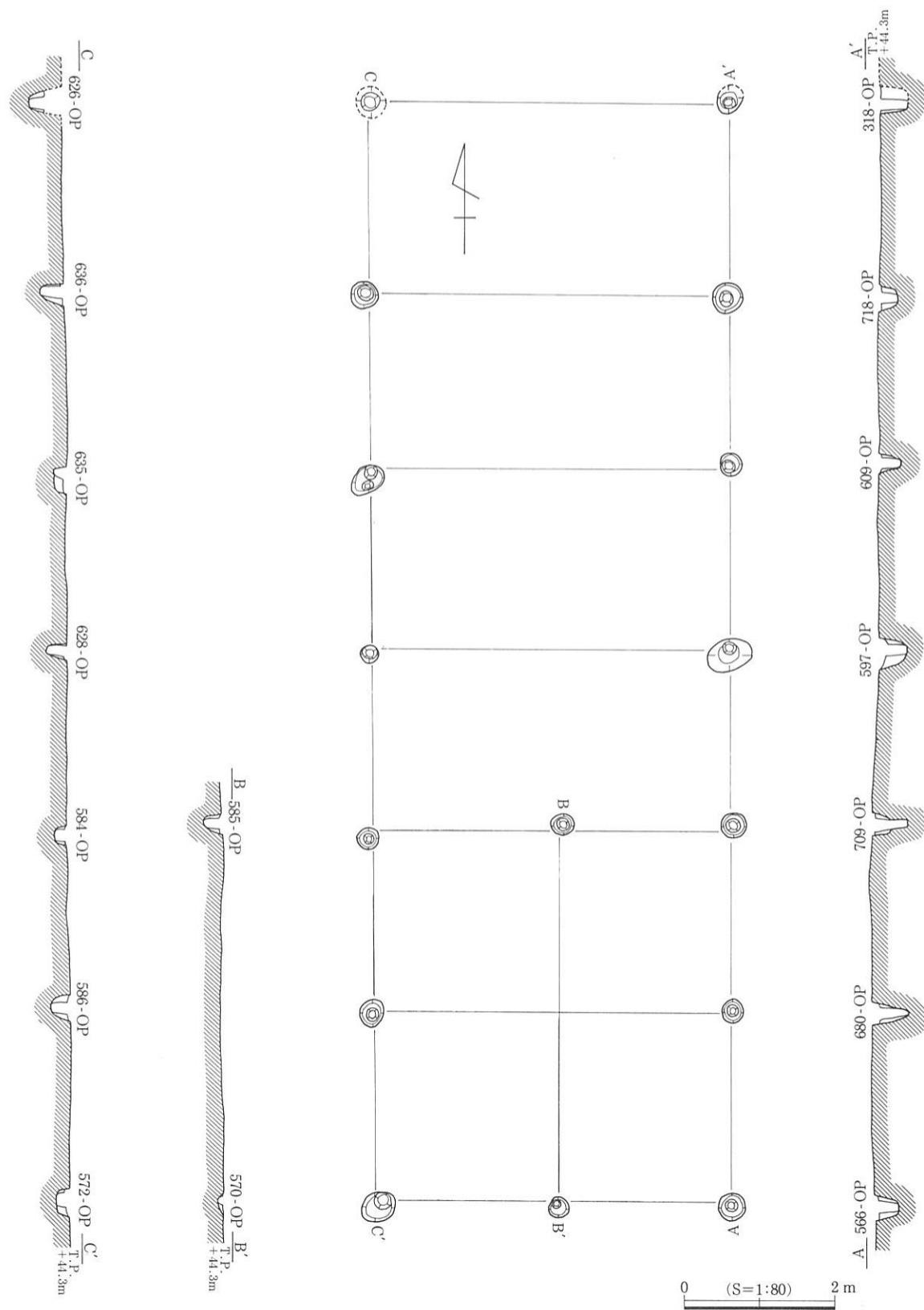


図12 318-OB (掘立柱建物) 平面・断面

318-O B (図12, 図版4・8) は東トレンチ北東部で検出した2間×6間の掘立柱建物である。主軸は正確に座標南北に一致する。実数値は桁行間2.3~2.5m、梁間2.3~2.4mで、桁行間6間(14.5m)×梁間2間(4.7m)、面積68.15m²を測る。柱穴掘方は径0.3~0.6mの円形または楕円形を呈し、柱痕跡は比較的よく残っている。628・584・709・585-O Pは柱下に根石を置いている。また、566-O P内では立ったままの状態の柱を検出した。

図13-7は680-O P、8は572-O P、9は636-O Pの各柱芯内から出土した(図版17)。7はほぼ完形の瓦器碗で、口径15.4cm、器高5.0cmを測る。高台は低く丸みを帯び、外面にはヘラミガキではなく、内面見込み部に平行線状ミガキを施す。和泉型瓦器碗のIII-2期に属するとみられる。8は口径21.2cmの土師質羽釜で、口縁は短く外反してとまる。9はほぼ完形の瓦器小皿で、口径13.4cm、器高1.6cmを測る。内外面にヘラミガキはない。この掘立柱建物は瓦器碗の年代観から13世紀初頭を下らない時期と考えられる。

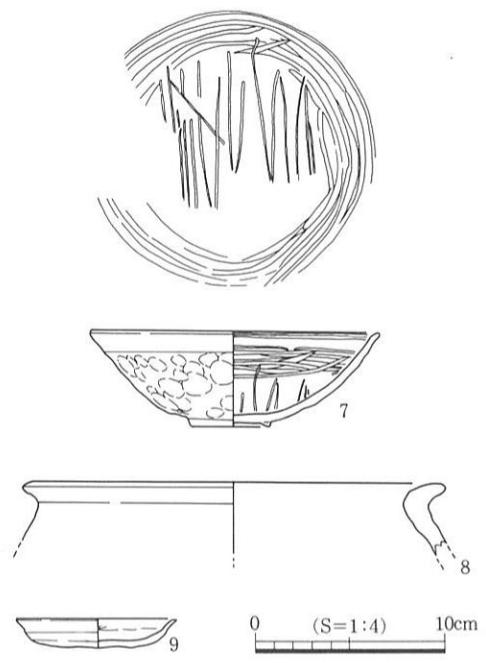


図13 318-O B (掘立柱建物) 出土
遺物

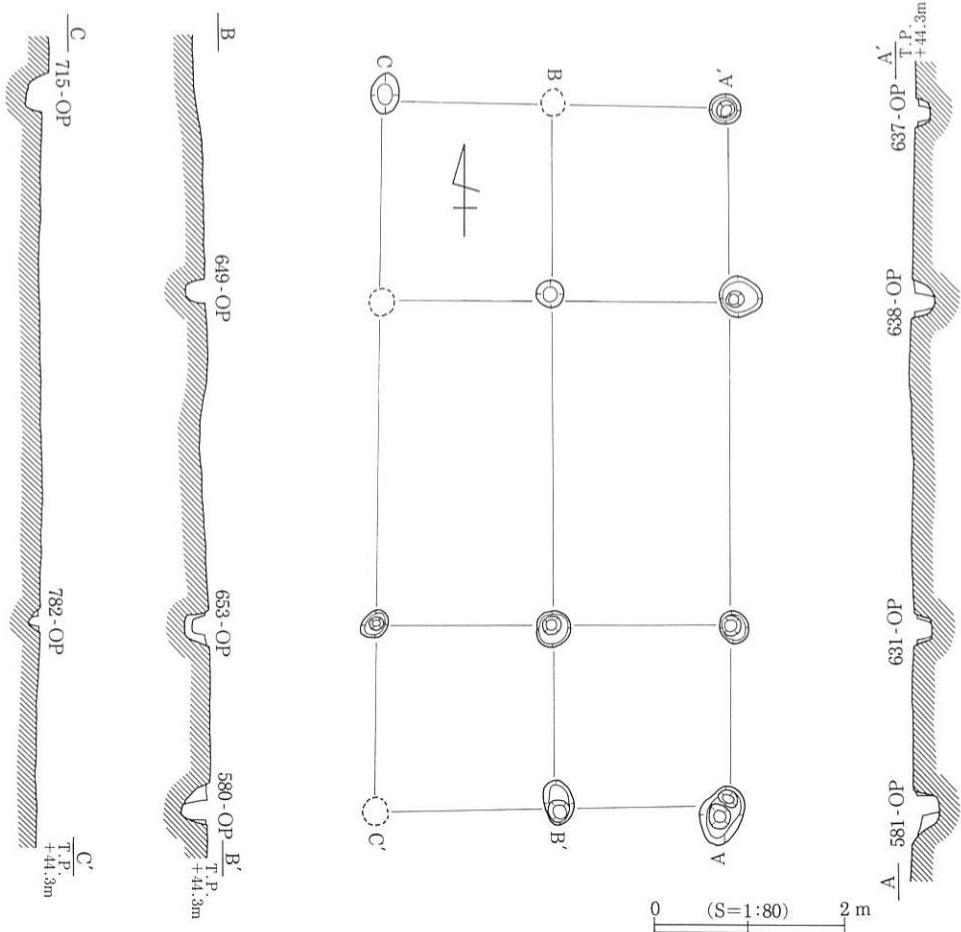


図14 580-O B (掘立柱建物) 平面・断面

580-O B (図14, 図版4・8) は、東トレンチ北東部で318-O Bの西に隣接して検出した2間×3間の掘立柱建物である。主軸は同じく座標南北に一致する。実数値は桁行間約2mで、中央部は3.4mと広い。梁間1.9mで、桁行間4間(7.4m)×梁間2間(3.8m)、面積は28.12m²を測る。柱穴掘方は径0.3~0.6mの円形または楕円形を呈し、柱痕跡は比較的よく残っている。653・581-O Pは柱下に根石を置いている。

図15-10・11は631-O P、12・13は638-O Pの各柱芯内から出土した (図版17)。10は瓦器椀で、口径15.2cm、器高は4.4cmと低く、外面に指頭圧痕を残す。和泉型瓦器椀のIII-2期に属するといえる。11は完形の瓦器小皿で口径9.4cm、器高2.3cm、内外面にヘラミガキはみられない。12は完形の土師質小皿で口径9.2cm、器高1.4cmでにぶい黄橙色を呈する。13は口径23.4cmの土師質羽釜で肩部に水平の鍔を

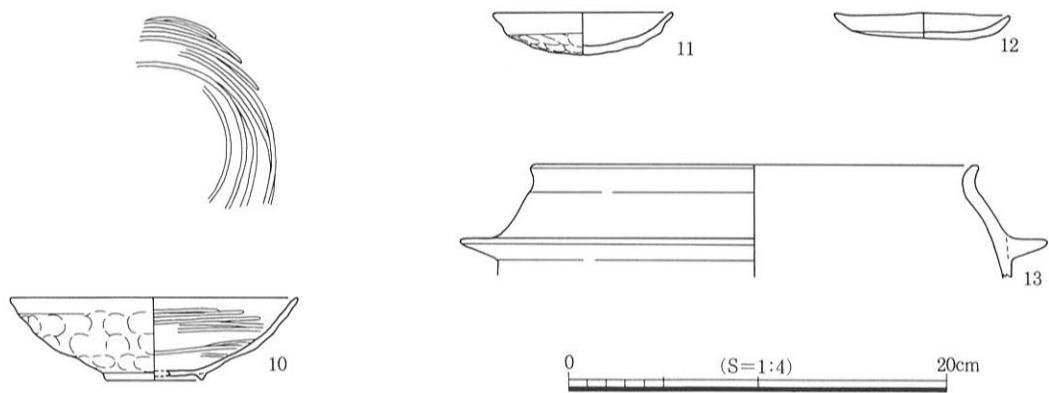


図15 580-O B (掘立柱建物) 出土遺物

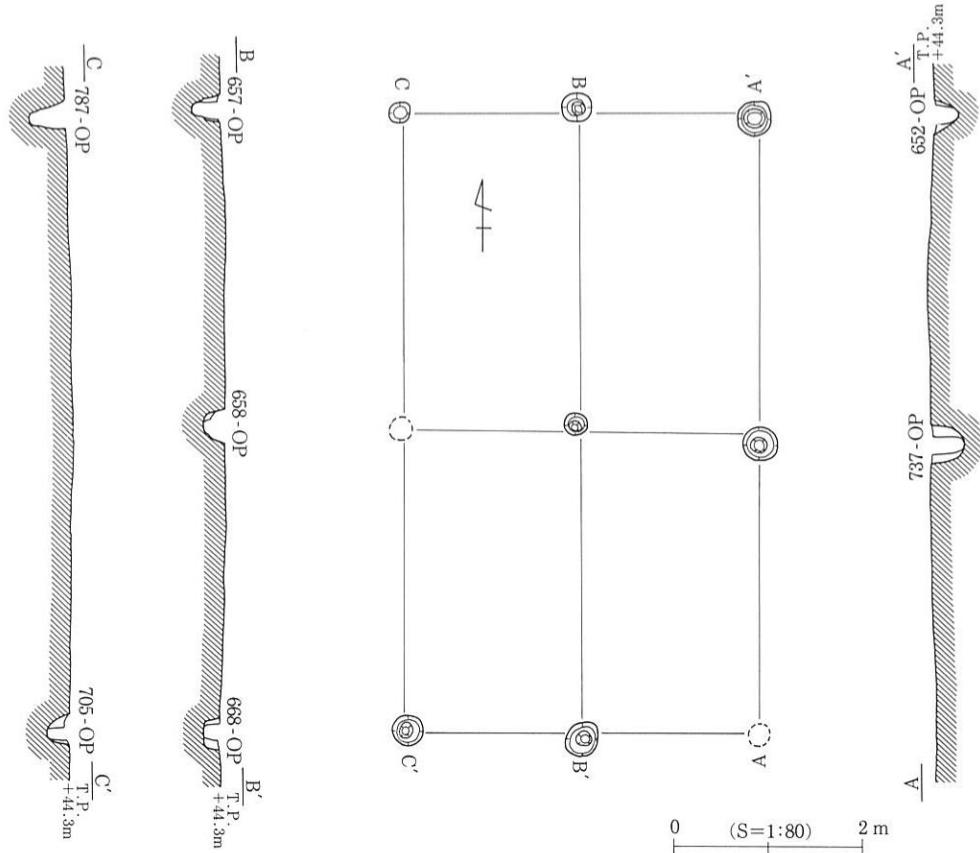


図16 652-O B (掘立柱建物) 平面・断面

めぐらす。瓦器椀の年代観から13世紀初頭とみられるが、318-O Bよりは後に廃絶した可能性がある。

652-O B（図16、図版4）は東トレンチ北東部で、580-O Bの西に隣接して検出した2間×2間の掘立柱建物である。主軸は同じく座標南北に一致する。実数値は桁行間約3.2~3.4cm、梁間1.9mで、桁行間2間（6.6m）×梁間2間（3.8m）面積は25.08m²を測る。柱穴掘方は径0.2~0.4mの円形を呈し、柱痕跡は比較的よく残っている。787・657・658・652-O Pは柱下に大型の根石を置いている。

図17-14は705-O Pから出土した瓦器椀で、口径15.0cm、器高4.5cmを測る（図版17）。高台断面は低平な三角形を呈し、内面見込み部に平行線状ミガキを施す。和泉型瓦器椀のIII-2期に属しており、13世紀の時期が考えられる。

549-O B（図18、図版4・8）は東トレンチ北東部で、318-O Bと重複して検出した2間×4間の掘立柱建物である。主軸はN 9° Wを示す。

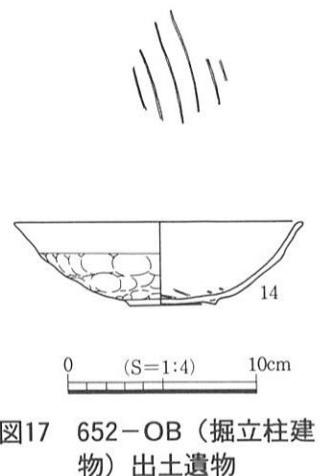


図17 652-O B（掘立柱建物）出土遺物

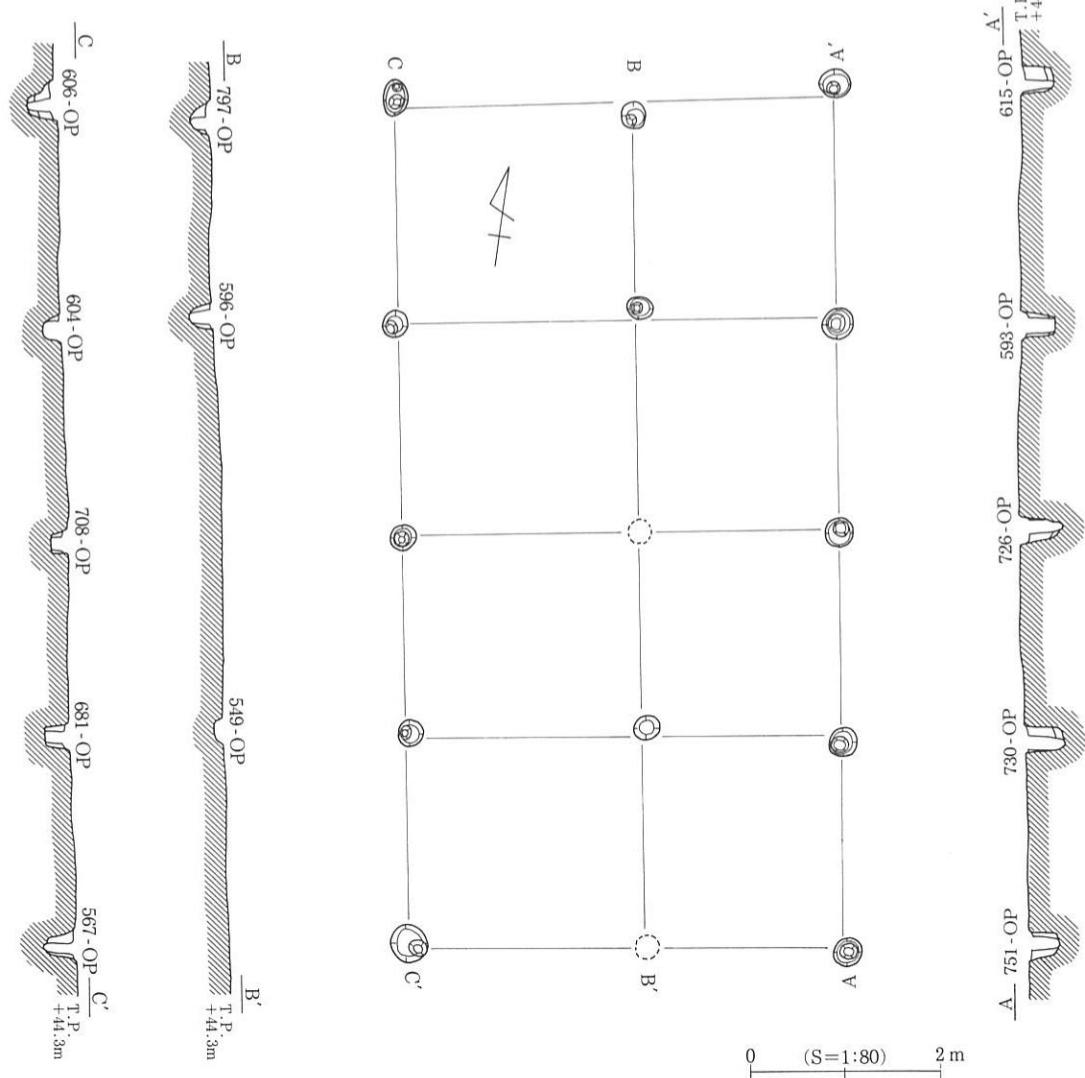


図18 549-O B（掘立柱建物）平面・断面

実数値は桁行間約2.2~2.3cm、東梁間2.1m、西梁間2.5mで、桁行間4間(9.0m)×梁間2間(4.6m)、面積は41.4m²を測る。柱穴掘方は径0.3~0.4mの円形を呈し、柱痕跡は比較的よく残っている。604-O Pは柱下に根石を置く。掘方や柱芯内から瓦器や土師器等の細片が出土したが、明確な時期を示すものはなく、318-O Bとの前後関係は不明である。

530-O W(図19)はトレンチ北部中央で検出した径1.1m、深さ1.5mの円筒形の井戸である。埋土は4層あり、各層に焼けた礫、炭、炉壁片、鋳型片を多量に含み、井戸廃絶後は、铸造関連の廃棄土坑となったと考えられる。埋土からは大量

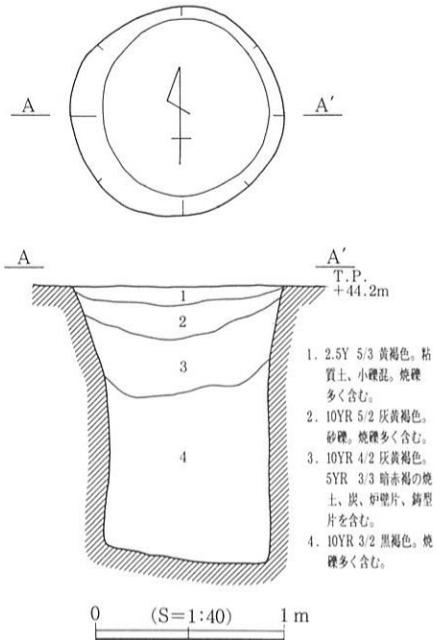


図19
530-O W
(井戸)
平面・断面



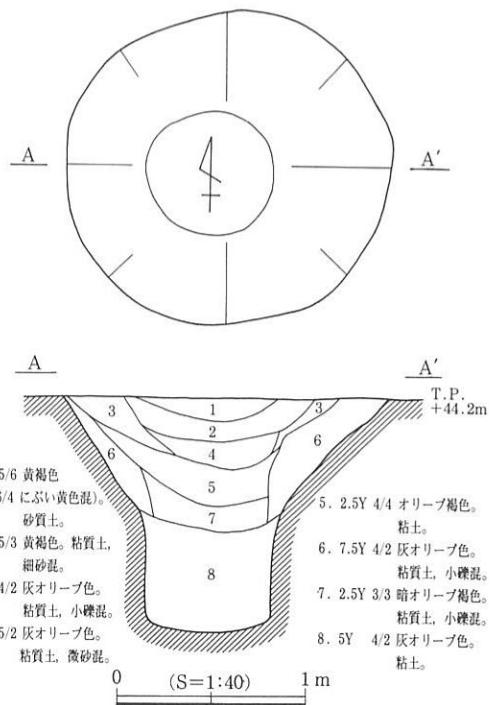
図20
530-O W
(井戸)
出土遺物

の遺物が出土した。

図20は530-O Wの出土遺物である(図版18)。15は口径15.4cm、器高5.5cmのほぼ完形の瓦器碗で、内外面は摩耗しているが、外面にヘラミガキを残す。和泉型瓦器碗のIII-1期に属し、12世紀後葉の時期が考えられる。16は球形に近い体部と「く」字形に外反する口縁部からなる土師質羽釜で、口径26.6cmを測る。17は平底の底部から、内湾して外上方にのびる体部をもつ土師質杯で、外面に指頭圧痕を残す。口径16.0cmを測る。

600-O W(図21、図版7)はトレンチ北部中央で530-O Wの東側で検出した径1.7m、深さ1.25mの漏斗形の井戸である。

図21
600-O W
(井戸)
平面・断面



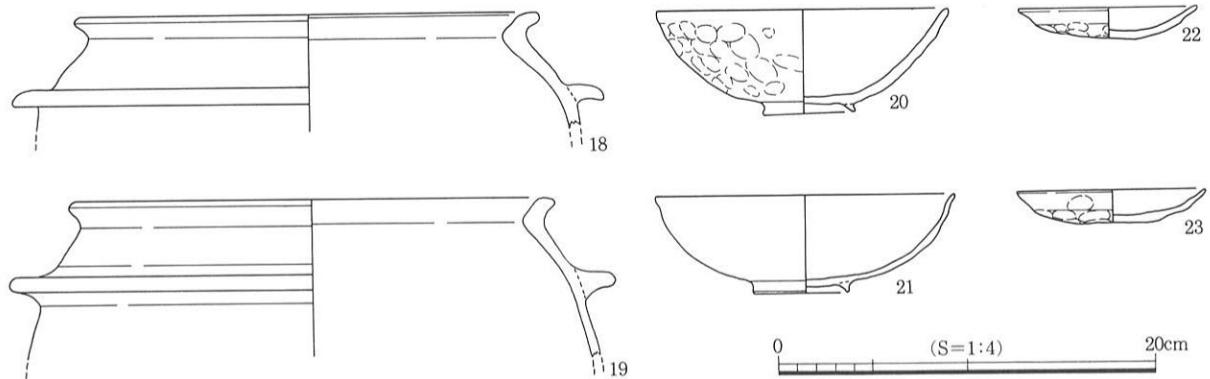


図22 600-OW(井戸)出土遺物

8層に分かれる埋土には、530-OWより割合は少ないものの焼けた礫、炭、炉壁片、鋳型片が含まれる他、多量の土器類が出土した。

図22は600-OWより出土した遺物である(図版18)。18は口径24.0cmの短く外反する口縁部をもつ土師質羽釜で、丸みのある肩部には下方に内湾する鍔がめぐる。19は同じく口径25cmの土師質羽釜で、肩部の鍔は水平にめぐる。20・21はほぼ完形の瓦器碗で、口縁断面は小形の三角形を呈する。20は口径15.4cm、器高5.5cm、21は口径16.9cm、器高5.1cmを測る。内外面の摩耗は著しい。和泉型瓦器碗のIII-1期に属し、12世紀後葉の時期が考えられる。22・23は完形の土師質小皿でにぶい橙色を呈し、口縁部はやや外反して丸くとまる。22は口径9.5cm、器高1.8cm、23は口径10.0cm、器高1.8cmを測る。

004-OO(図23、図版5・7)は東トレンチ南東部で検出した南北長約6.5m、東西長4.8m、深さ0.5mを測る最大の土坑である。埋土の最下層は灰色味を帯びた粘土層で、水のたまっていた状態を示している。土器が捨てられる以前、長く水溜めとして活用されていたと考えられる。土坑内からは完形に近い瓦器類・小皿をはじめとする大量の土器類と、炉壁・鋳型片などの鋳造関連遺物が出土した。

図24は004-OOの出土遺物である(図版15・16)。24~27はほぼ完形の瓦器碗で、口径は24が15.0、25が16.0、26が15.5、27が14.8cmを測り、器高は4.0~5.0cmの範囲におさまる。高台は低く丸みを帯び、外面にはヘラミガキではなく指頭圧痕を残し、内面見込み部に平行線状ミガキを施す。和泉型瓦器碗のIII-2期に属し、13世紀初頭の

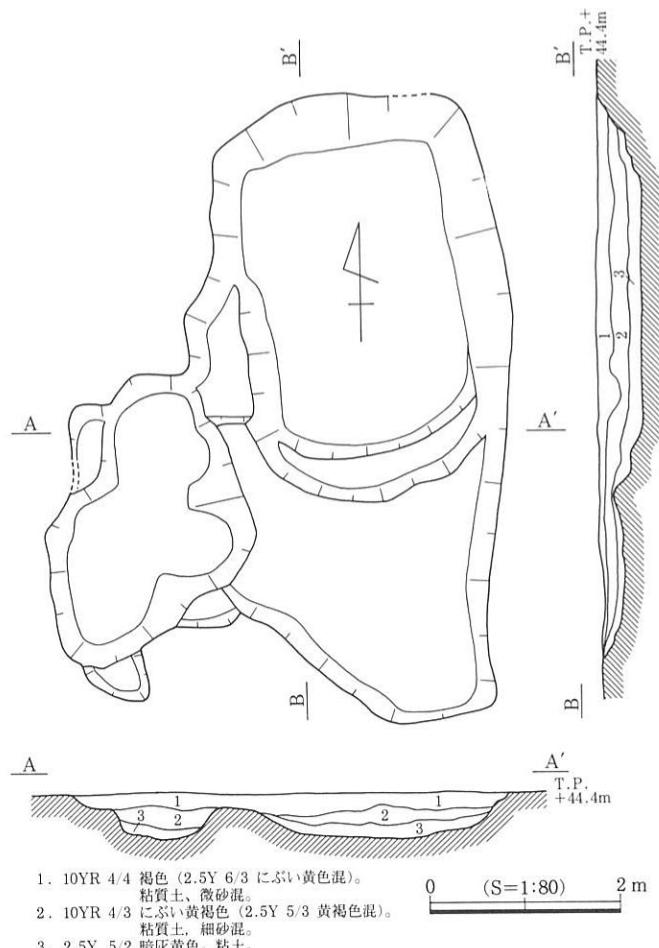


図23 004-OO(土坑)平面・断面

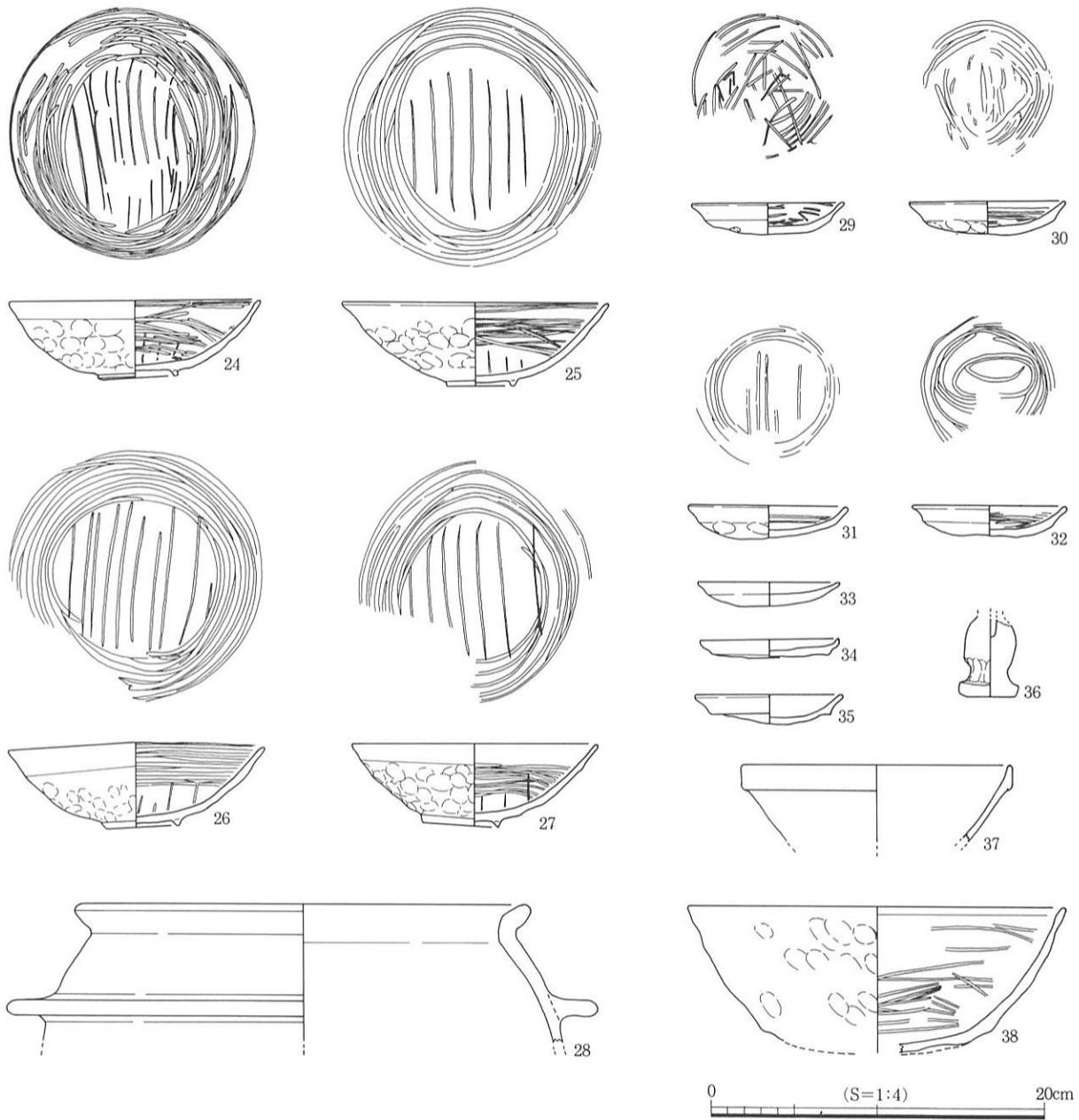


図24 004-OO (土坑) 出土遺物

時期が考えられる。29~32・35は口径8.8~9.5cm、器高1.8~2.1cmを測るほぼ完形の瓦器小皿である。口縁部外面には強いヨコナデを施す。外面のヘラミガキなく、内面には格子状(29)、平行線状(30・31)、圈線状(32)の粗雑なヘラミガキが施される。33・34は底平な土師質小皿で、口径は33が8.6cm、34が8.2cm、器高はともに1.6cmを測る。28は口径25.4cmの土師質羽釜で、「く」字形に外反する口縁と水平に貼付けた鰐部をもつ。36は橙色を呈し、径3.4cmの台部と、残存高4.9cmの胴部からなるミニチュア品で、中心部を刺突している。37は灰オリーブ色の釉薬をかけた青磁碗で、復元口径16.2cm、残存高4.6cmを測る。38は平底に近い底部から外上方

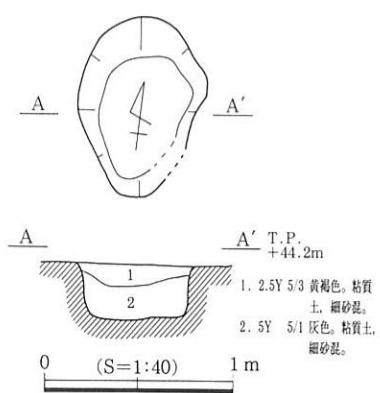


図25 542-OO (土坑)
平面・断面

にひらく体部をもつ瓦質の鉢で、口径22.2cm、残存高8.7cmを測る。内面にはヘラミガキを残す。

542-OO（図25・26、図版6）は調査区中央部で検出した南北約1m、東西約0.6mの楕円形の土坑で、ほぼ垂直に掘り込み、深さは0.3mを測る。床面から瓦器碗、土師質杯・小皿等の土器がまとまって出土した。

図27は542-OOの出土遺物である（図版19）。39は低く丸みのある高台をもつ瓦器碗で、口径15.2cm、器高4.7cmを測る。外面は炭素の吸着がなく灰黄色を呈し、指頭圧痕が残る。内面見込み部に平行線状ミガキを施す。また、見込み部には径約9cmのオリーブ灰色の墨または油状の付着がある。40・41も同じくほぼ完形の瓦器碗で、表面の摩耗は著しい。40は口径14.7cm、器高4.6cm、41は口径15.4cm、器高5.0cmを測る。3点とも和泉型瓦器碗のIII-2期に含まれるが、III-3期の様相が強い。42は土師質杯で底部はやや上げ底となっている。

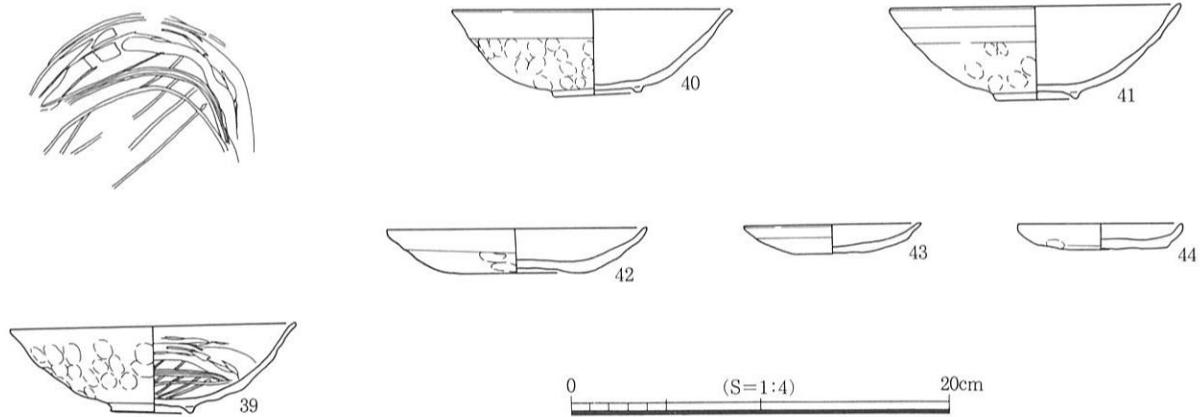


図27 542-OO（土坑）出土遺物

口径13.8cm、器高2.6cmを測る。43・44はほぼ完形の土師質小皿である。43は口径9.4cm、器高1.5cmで内湾する体部をもち、44は口径8.5cm、器高1.4cmで底部は平底をなす。

200-OO（図28、図版6）は東トレント西端で検出した南北1m、東西2m余りの不定形な平面形と、深さ0.5mのU字形の断面形をもつ。床

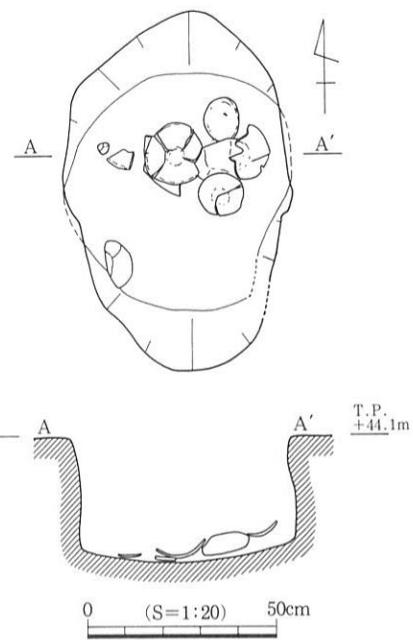
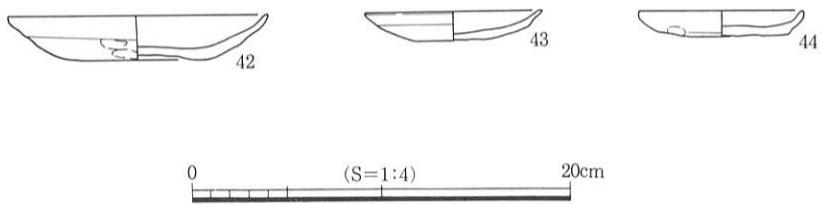


図26 542-OO（土坑）遺物出土状況



0 (S=1:4) 20cm

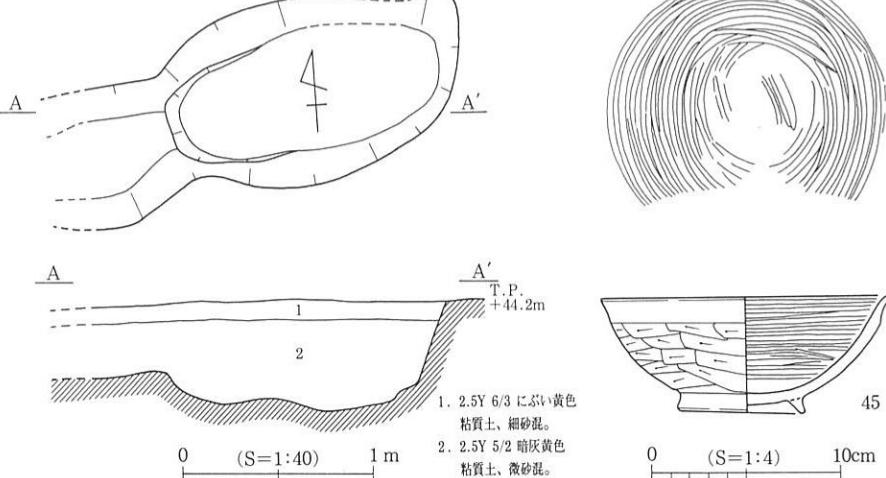


図28 200-OO（土坑）平面・断面・出土遺物

面から完形に近い瓦器碗が出土した。

図28-45は口径15.0cm、器高6.1cm、高台径6.6cmを測る瓦器碗である（図版17）。内面の見込み部は摩耗し、体部は横方向の細かいヘラミガキで調整する。外面はヘラケズリが残るもの、表面は摩耗してヘラミガキの状態は不明瞭である。和泉型瓦器碗のII-1期に属するとみられ、12世紀前葉の時期が考えられる。

306-OO（図30）は200-OOの東側で検出した径約1.1mの土坑で、断面形は深さ約0.6cmのU字形を呈する。

図29-46は復元口径15.2cm、器高6.7cm、高台径6.0cmを測る瓦器碗である（図版17）。内面体部は横方向のヘラミガキが施されるが、摩耗して不明瞭である。外面にはやや粗略なヘラミガキが施される。和泉型瓦器碗のII-2期に含まれ、12世紀中葉の時期が推定される。

不定形土坑群（図9・31、図版5）は東トレンチ西部から西トレンチにかけての一帯に、密集して検出された。検出面では西トレンチの密集度が低いが、これは西トレンチが後世に大きく削平を受けたためとみられる。土坑は長さ0.5m～2.5m程度の大きさで、径1m未満のものが多く、橢円形もしくは不定形な平面形をもつ。断面形は深さ約0.2～0.5mのU字形を呈する。埋土は一般的に、2.5Y5/2暗灰黄色の細砂混じり粘質土で、地山粘土ブロック土を含む場合が多く、人為的に埋め戻されたことが窺える。遺物は瓦器・土師器を中心とする。おおむね和泉型瓦器碗のIII-2期～3期に属し、IV期まで下がるものはない。13世紀前半の時期が考えられる。

なお、200・306-OOは不定形土坑群地帯に存在するが、その他の土坑より1世紀近く古い遺構であり、深く掘り込まれた遺構であったため削平されず遺存したもので、その性質は異なるとみられる。

(2)西トレンチ（図31、図版3）

調査区の西半部分2163m²に西トレンチを設定した。主要な遺構は13世紀に構築されている。まず、中央部から北西部にかけては掘立柱建物（1138・1211-O B）と井戸（1268・1310-O W）、東部一帯には東トレンチから広がる不定形土坑群を検出した。水路より南部地区には鋳造関連遺構とみられる土坑（956・974・971・977・978・985-OO他）、井戸（958・960・972・1006・1007-O W他）、溝（970-O S）、およびほぼ完形の土師質羽釜が出土した土坑（1000-OO）、これらの南には直角に屈曲する区画溝（901-O S）が存在する。また、江戸時代以降では、東トレンチの003-O Sが西に延び（902-O S）、900-O Sは西トレンチの東端部で北に向かって調査区を縦断する。遺構総数は541基で、東トレンチ同様、土坑と柱穴が大多数を占める。

なお、遺物に関しては、遺構埋土の他に、特に南部の包含層から大量の鋳造関連遺物が出土した。

901-O S（図32、図版9）は調査区南端部にて検出した溝で、座標北に向かって伸びた後、ほぼ直

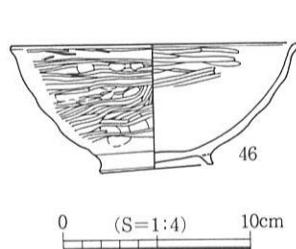


図29 306-OO (土坑)
出土遺物

- 1. 2.5Y 5/3 黄褐色。粘質土、細砂混。
- 2. 2.5Y 5/2 暗灰黄色。粘質土、細砂混。
- 3. 2.5Y 5/3 黄褐色。粘質土、微砂混。
- 4. 2.5Y 5/1 黄灰色。粘質土、微砂混。
- 5. 2.5Y 5/1 黄灰色。粘土。

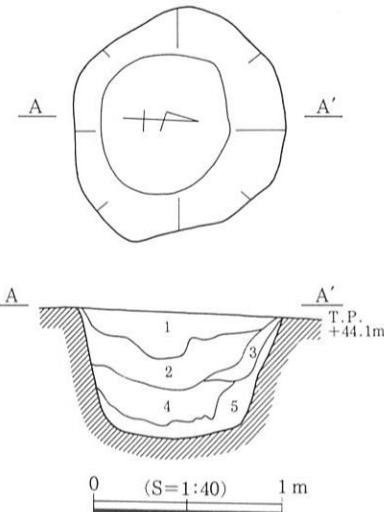


図30 306-OO (土坑)
平面・断面

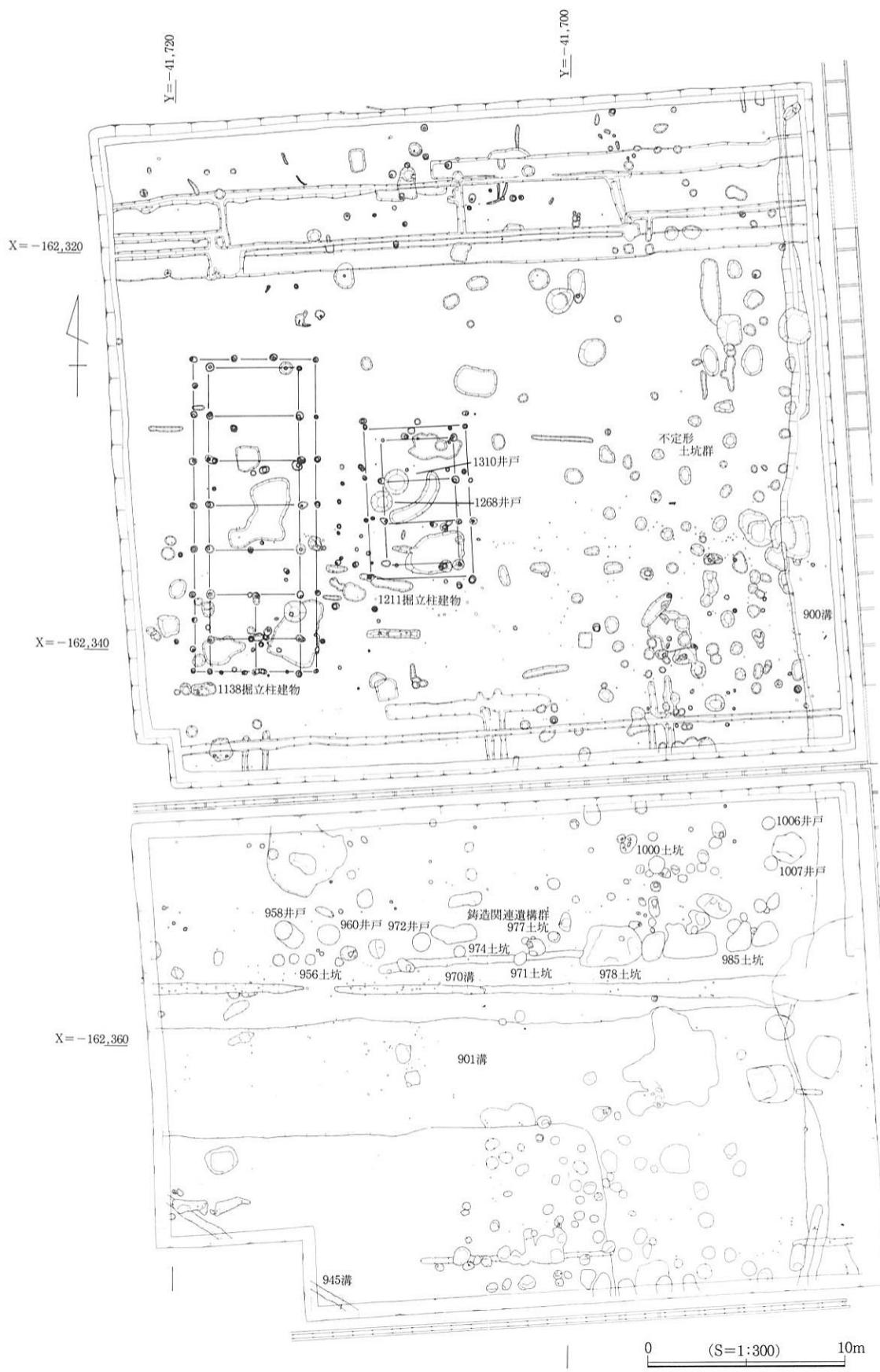


図31 西トレンチ遺構配置図

角に西方向に曲がる。東西幅約21m、南北幅約11mを測り、断面は深さ0.2mの浅いU字形を呈する。上面はかなり削平されているとみられる。埋土には炭、焼土、炉壁片、鋳型片、スラッグなどを大量に含んでいる。

図33は901-OSの出土遺物である(図版19)。47は完形の瓦器小皿で、口径9.4cm、器高2.0cmを測る。内面見込み部に平行線状ミガキを、外面口縁部には強いヨコナデを施す。48・50は瓦器碗底部で、48は

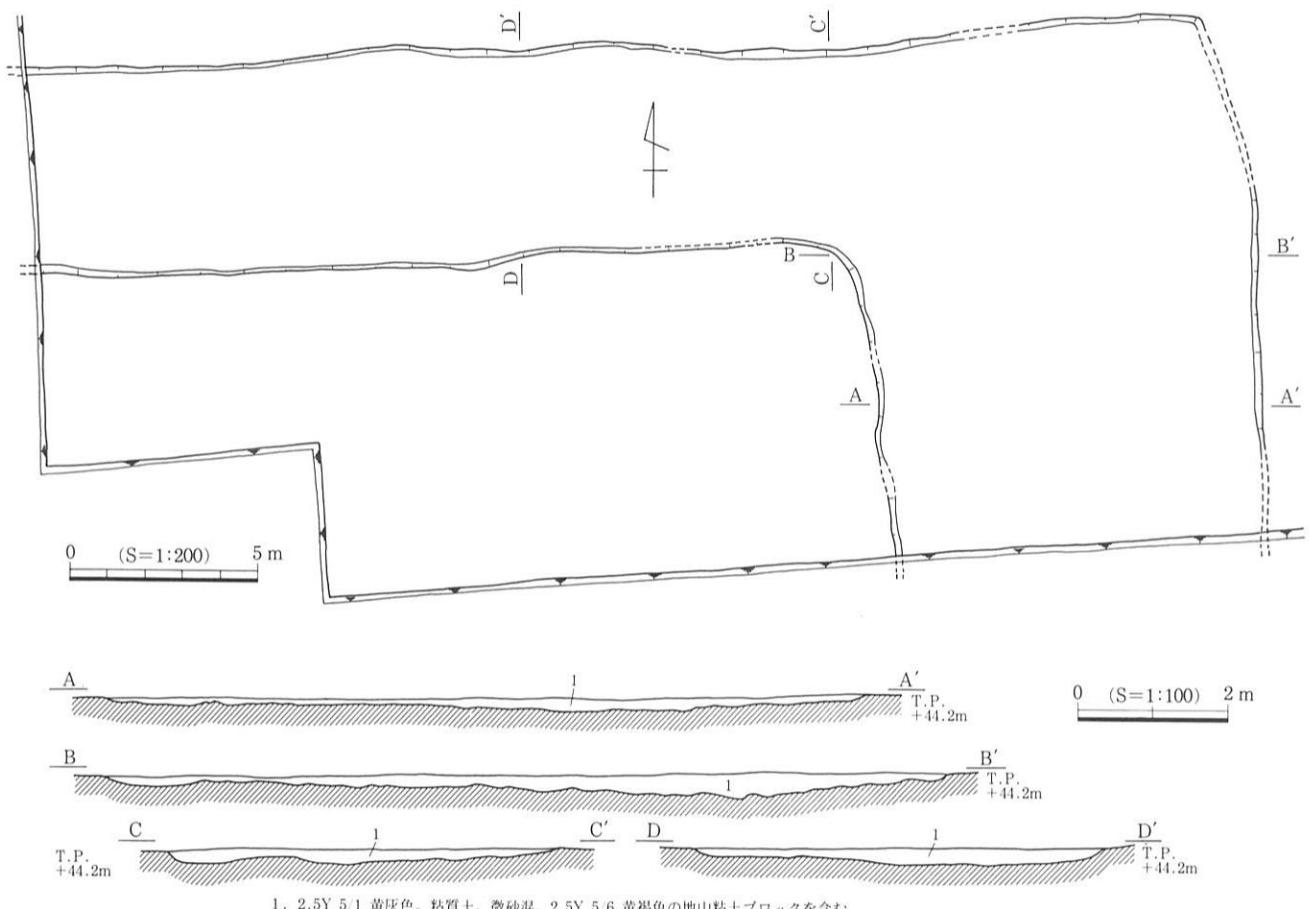


図32 901-OS(溝)平面・断面

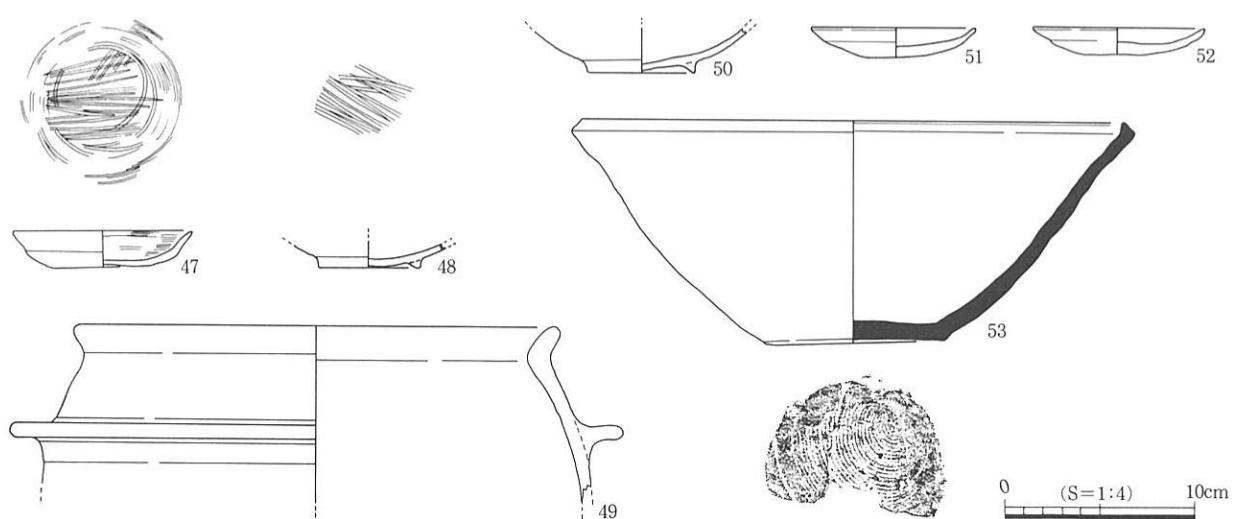


図33 901-OS(溝)出土遺物

高台径5.3cm、50は5.6cmを測る。高台の断面形からは和泉型瓦器碗のIII-1期に含まれる可能性が高く、12世紀後葉とみられる。51・52は完形の土師質小皿で、51が口径8.7cm、器高1.7cm、52が口径9.0cm、器高1.4cmを測る。外形はゆるやかな船底形を呈する。49は土師質羽釜で、口径25.0cmを測り、口縁部は「く」字形に短く屈曲し、薄い鍔部を水平に貼付ける。53は須恵質鉢で、口縁端部は内上方に三角形に肥厚し、底部には糸切り痕が残る。口径28.8cm、器高11.8cmを測る。

1138-O B（図35、図版9・14、巻頭図版2）は西トレント北西部で検出した2間×7間の掘立柱建物で、北・東・西側の三面に庇をもつ。主軸は東トレントの掘立柱建物と同様、正確に座標南北に一致する。実数値は桁行間最南部が1.7m、最北部が2.5mである以外は2.2~2.3mにおさまり、梁間2.2~2.3mで、桁行間7間（15.5m）×梁間2間（4.5m）、面積は69.75m²を測る。柱穴掘方は径0.3~0.6mの円形または楕円形を呈し、柱痕跡は非常によく残っている。庇の柱穴は概して掘方が小さく、深さ0.2~0.3m程度と浅くなっている。1159・1171・1197・1292・1328・1335・1346-O Pは柱下に根石を置いている。庇の柱部分まで含めた面積は南北16.0m×東西6.3mで、100.8m²を測る。

図34-54・59・60は1278-O Pの堀方から、56・57・58は1205-O Pの柱芯から出土した（図版21）。1205-O Pからは図示した以外にまとまった量の遺物が出土し、柱芯部からは轍の羽口も検出した。また、55は1159-O Pの北側に位置する1281-O P出土の完形の瓦器碗である。1138-O Bに伴うものか否かは不明確であるが、建物の中心部であることや、出土状況から考えて、地鎮的な意味をもつ可能性がある。54は口径13.9cm、器高4.0cm、56は口径14.2cm、器高3.6cmを測る瓦器碗で、形骸化した低い高台を貼付ける。内面は粗雑なヘラミガキ、外面は指頭圧痕を残す。和泉型瓦器碗のIV-1期に属する。57から60は土師質小皿で、60が灰白色である以外は橙色を呈する。60が口径8.4cmで外形は浅い船底形、その他は口径7cm台で、口縁部外面に強いヨコナデを施す。瓦器碗の年代観から、この掘立柱建物は13世紀中葉の時期を考えることができる。

1211-O B（図37）は1138-O Bの東に隣接して建てられた四面庇をもつ1間×3間の掘立柱建物である。主軸は1138-O Bと同様に正確に座標南北に一致する。実数値は桁行間2.1m、梁間3.7mで、桁行間3間（6.3m）×梁間1間（3.7m）、面積は23.31m²を測る。柱穴掘方は径0.3~0.6mの円形または楕円形を呈し、柱痕跡は比較的良く残っている。1252-O Pの柱下には大形の根石を置いている。庇の柱部分まで含めた面積は南北7.7m×東西5.2mで、40.04m²を測る。

図36-61は1258-O Pから出土した口径14.2cm、器高2.6cmのほぼ完形の土師質皿である（図版20）。にぶい黄橙色を呈し、体部内外面にはヨコナデを施す。

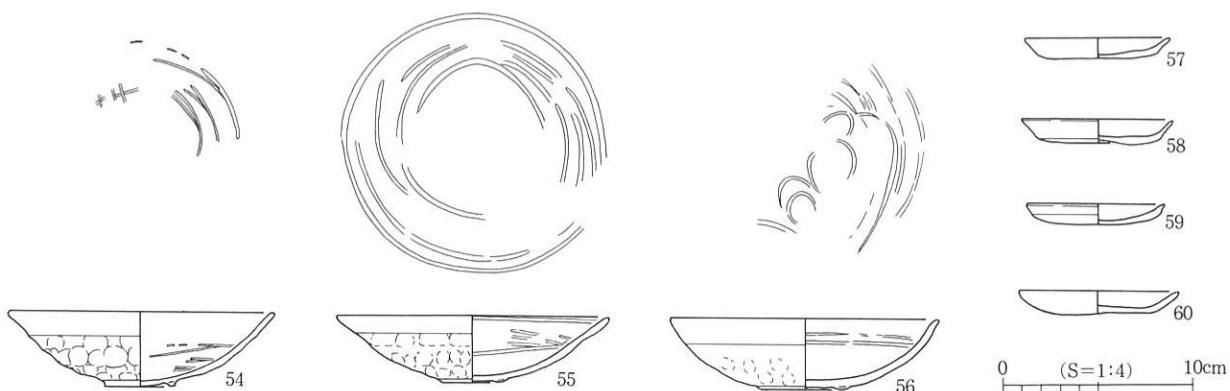


図34 1138-O B（掘立柱建物）出土遺物

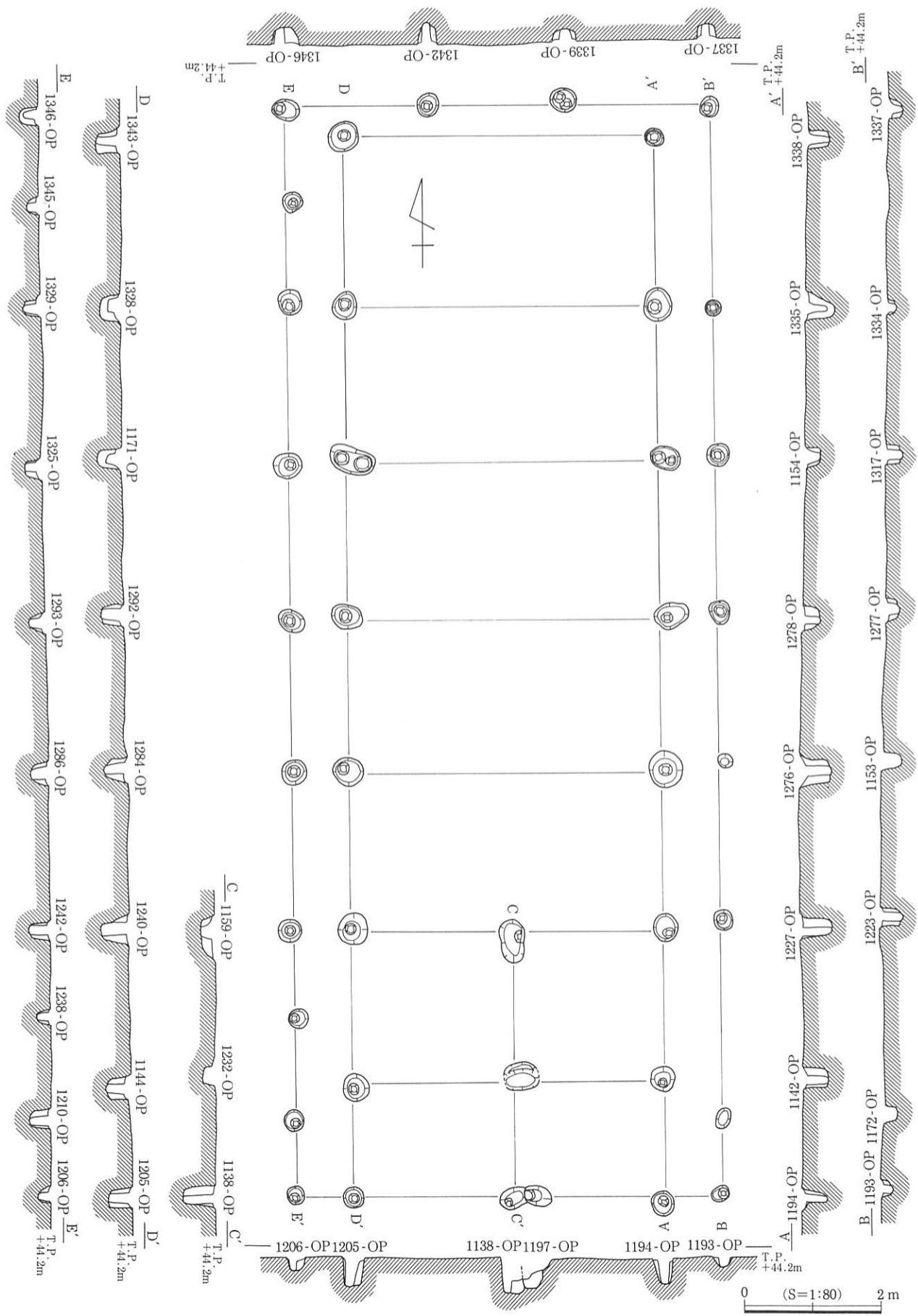


図35 1138-O B (掘立柱建物) 平面・断面

1268-OW (図39、図版13) は1211-OBと重複して検出した径1.1m、深さ約0.8mの円筒形の比較的浅い井戸である。埋土からは炭、炉壁片、鋳型片などが出た。

図38は1268-OWの出土遺物である (図版20)。62は口径8.2cm、器高1.7cmの完形の瓦器小皿で内面に粗雑なヘラミガキ、外面口縁部には強いヨコナデを施す。63は口径15.7cm、器高3.9cmの瓦器碗で低く丸みのある高台を貼付けている。和泉型瓦器碗のIV-1期に属する。

1310-OW (図40、図版13) は1268-OWの北東に隣接して存在する。

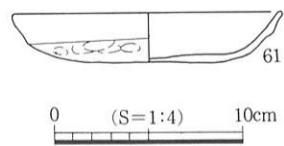


図36 1211-OB (掘立柱建物) 出土遺物

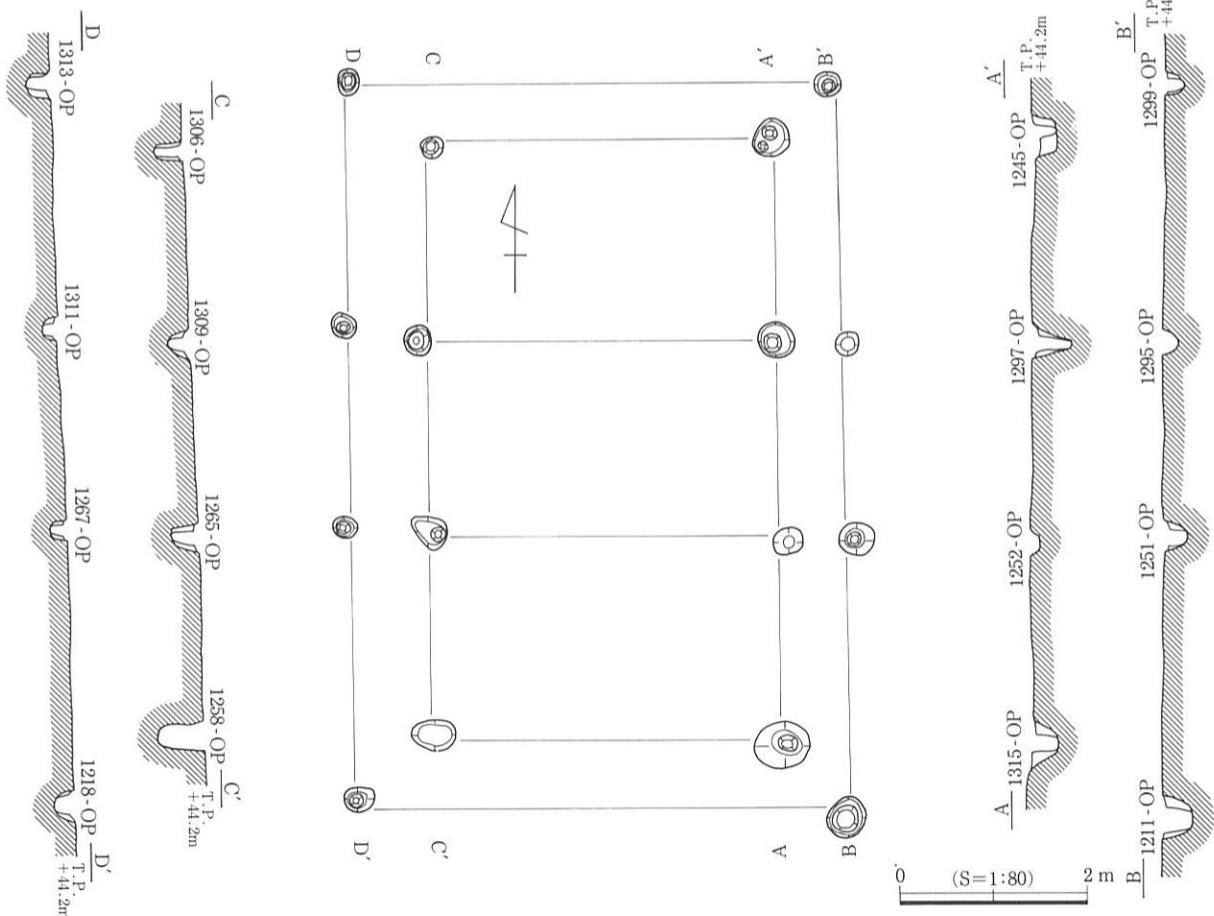


図37 1211-OB (掘立柱建物) 平面・断面

径1.3m、深さ1.2mの円筒形の井戸で、埋土から炭、炉壁片、鋳型片などが出た。

図41は1310-OWから出土した遺物である (図版20)。64は復元口径5.2cm、器高4.0cmの瓦器碗で薄い高台は機能を果たしていない。内面に粗雑なヘラミガキを施す。和泉型瓦器碗のIV-1期に含まれる。81は復元口縁28.4cmの土師質羽釜で、内傾する口縁と極く短く屈

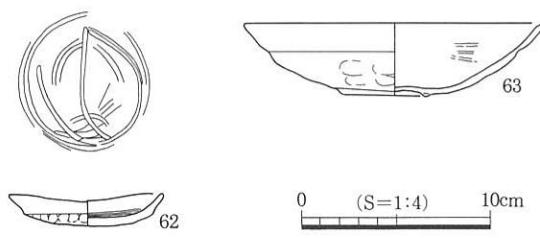


図38 1268-OW (井戸) 出土遺物

曲する端部からなる。時期を示す遺物が少ないため、明確な時期を決定することができないが、1268と1310の両井戸は瓦器椀の年代観から13世紀中葉とみられ、1138掘立柱建物と同時期で、この建物に伴う井戸とみられる。1211掘立柱建物は土師質大皿の存在から、ほぼ同時期か、やや遅る13世紀前半と考えられる。

985-OO（図43、図版10）は調査区南東部で検出した土坑で、平面形は東西1.2m、南北1.5mの不安定な三角形状を呈し、断面形は深さ0.4mのU字形で、底面は平らに近い。

985-OOと並ぶ978・979・980・987-OOの一連の土坑群（図42、図版10）は、南辺を一列にそろえ、東西辺を互いに接した状態で検出

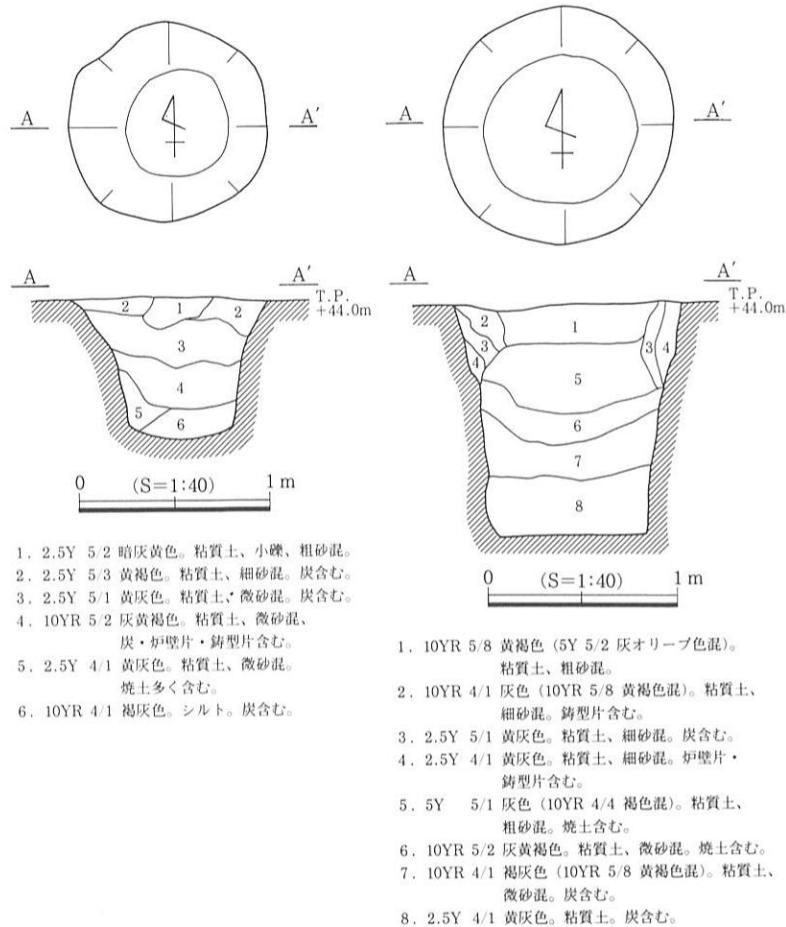


図39 1268-OW(井戸)平面・断面

図40 1310-OW(井戸)平面・断面

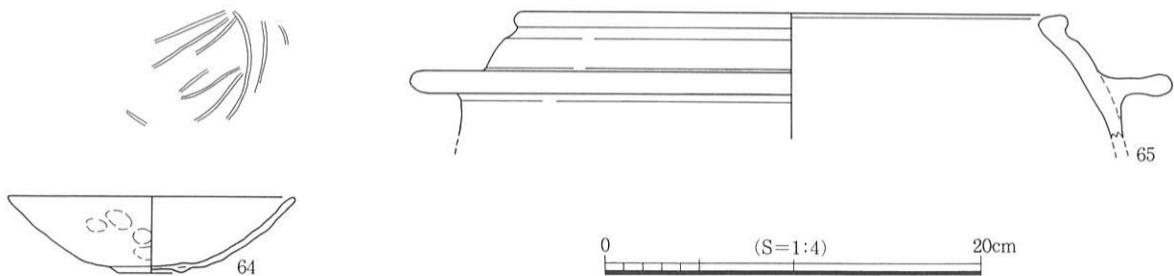
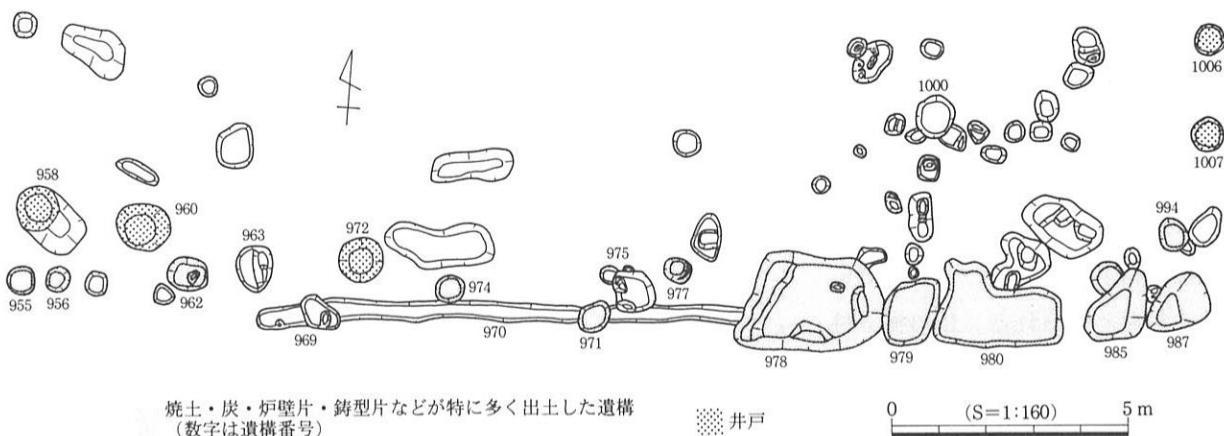


図41 1310-OW(井戸)出土遺物

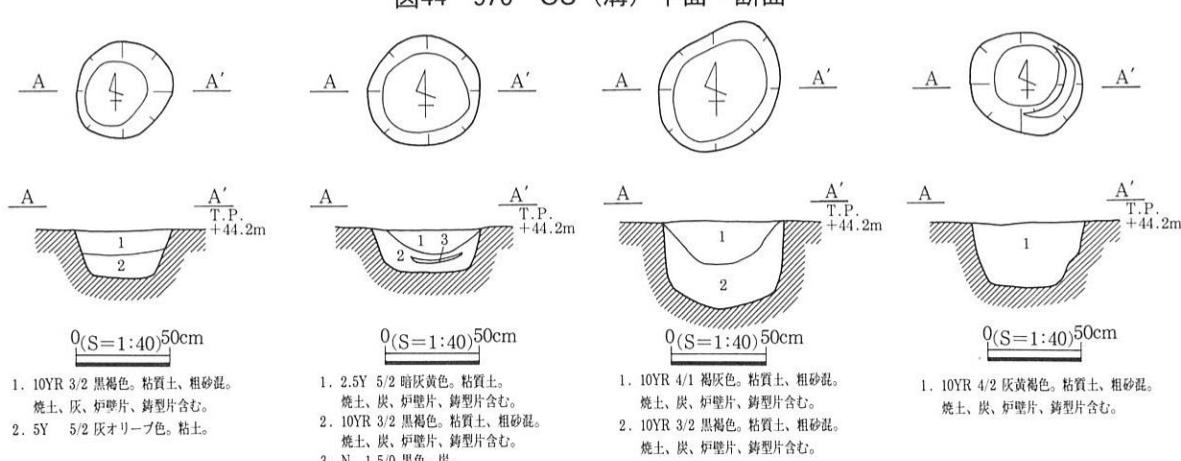
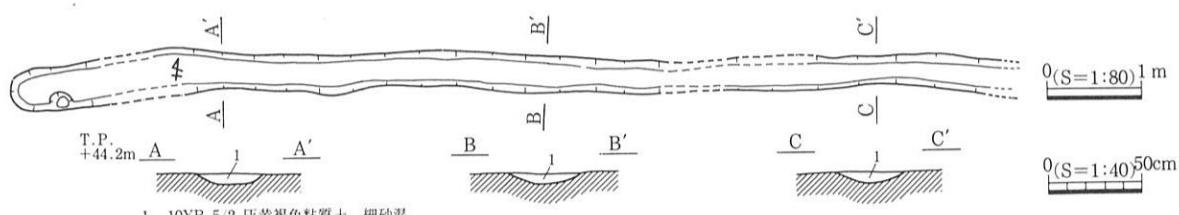
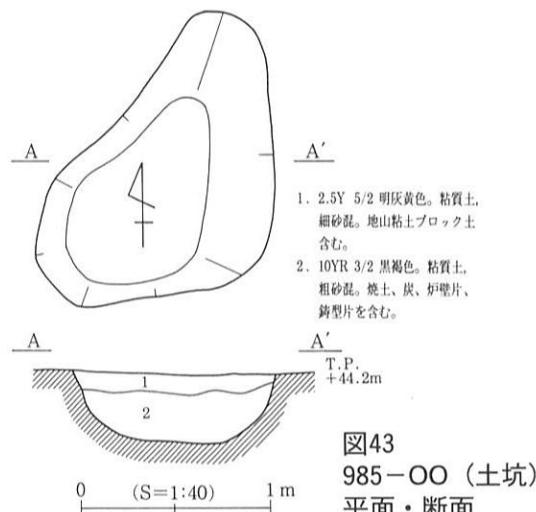
された。規模はおよそ東西1~3m、南北1~2m、深さ0.2~0.4mを測り、断面形はU字形で、床面は平らに近い。985-OOと同様に埋土には焼土・炭・炉壁片・鋳型片を大量に含み、鋳造関連の土坑群とみられる。内部から瓦器、土師器等の細片が出土した。その内、980・985-OOで検出した瓦器椀の高台部片が、和泉型瓦器椀のIII-3期に属するとみられ、13世紀前葉の時期を推定することができる。

970-OS（図42・44、図版10）は978-OOからまっすぐ西に延びる溝で、長さ10.5m、幅0.4~0.5mを測り、断面形は深さ5cmの浅いU字形を呈する。出土した土師質破片等は細片のため、時期は確定できず、一帯の鋳造関連遺構との関係は不明確である。

956・974・971・977-OO（図42・45・46・47・48、図版10・11・12）は東西15m、南北1.5mの範



周にはほぼ東西に並ぶ小形の円形土坑群で、埋土は炉壁片・鋳型片を大量に含み、焼土・炭の混じった黒色に近い色調を呈する。これらの土坑はほぼ円形で、逆台形の断面をもつ。規模は956-OOが径0.5m、深さ0.3m、974-OOが径0.6m、深さ0.2m、971-OOが径0.7m、深さ約0.4m、977-OOは径0.6m、深さ0.3mを測る。956・974-OOは床面から中・小形の石の他、ほぼ完形の瓦器碗を検出した。971-OOも同じく中・小形の石を詰め込んでいる。977-OOの床面



からは強く火を受けた中型の石が出土している。これらの土坑は铸造土坑と考えられる。

図50は956-OOの出土遺物である（図版22）。66は口径13.9cm、器高4.2cmを測る完形の瓦器椀で、形骸化した低い高台を中心からはずれた位置に貼付けている。内面は圈線状のヘラミガキを施し、外面は指頭圧痕を残す。炭素の吸着が弱く灰白色に近い色を呈する。和泉型瓦器椀のIV-1期に属する。67は瓦器小皿で、口径8.2cm、器高1.5cmを測る。内外面の摩耗は著しい。

図52は974-OOの出土遺物である（図版22）。68は口径13.3cm、器高3.5cmを測る瓦器椀で、内面は66同様さらに粗略な圈線状のヘラミガキを施す。和泉型瓦器椀のIV-1期に属する。69は口径24.6cmを測る土師質羽釜で、口縁部は「く」字型に短く屈曲し、鍔部は水平に貼付ける。

図54は971-OOから出土した遺物である（図版22）。70・71は土師質羽釜で、口径は70が27.5cm、71が34.4cmを測る。70は口縁部が短く「く」字形に屈曲するのに対し、71は口縁部が内上向に向かって傾斜して延び、口縁端部は面をなす。口縁部の器壁は「く」字形に屈曲する形態の羽釜より厚い。72は口径7.8cm、器高1.4cmの瓦器小皿で、口縁部外面に強いヨコナデを施す。977-OOは瓦器片・土師質片等が出土しているが、細片のため、図示できない。これらの铸造土坑は出土瓦器椀の年代観から13世紀中葉の時期と推定することができる。

972-OW（図57、図版13）は、前述の974-OOの西に隣接する位置で検出した。平面形は径0.9m

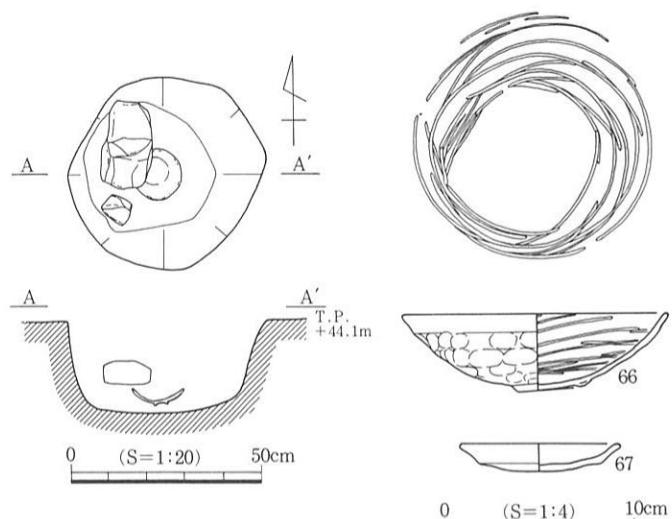


図49 956-OO（土坑）
遺物出土状況

図50 956-OO（土坑）
出土遺物

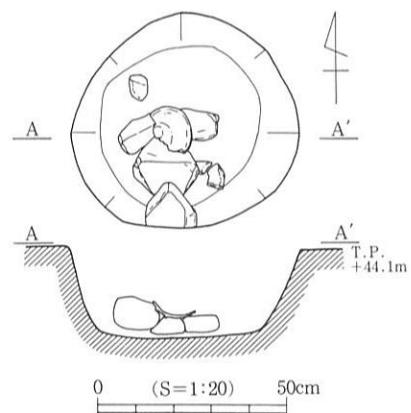


図51 974-OO（土坑）
遺物出土状況

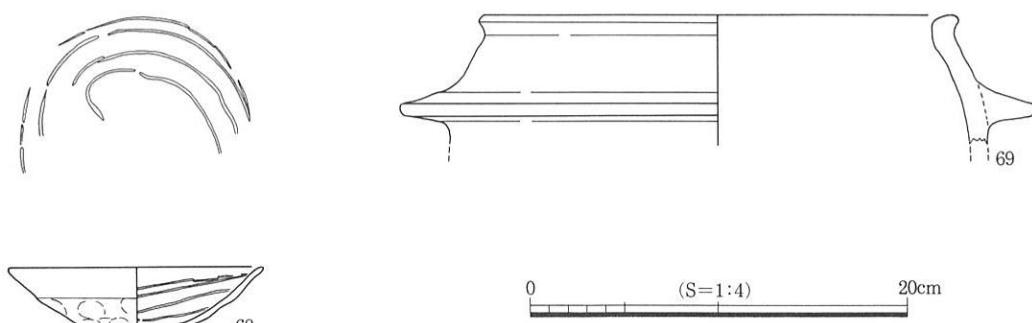


図52 974-OO（土坑）出土遺物

の円形で、立面形は深さ1.1mの円筒形を呈する。埋土は7層に分かれ、最下層には多量の炭を含む。

図56は972-OWの出土遺物である（図版22）。73は口径9.4cm、器高2.5cmの高台付小皿である。内面には粗略な格子状ヘラミガキを施し、外面には指頭圧痕が残る。74は上部を欠損しているが、高台径4.4cmを測る瓦器碗である。内面見込み部には平行線状ヘラミガキを施し、和泉型瓦器碗のIII-3期に属すとみられ、13世紀前葉の時期が考えられる。

960-OW（図59、図版13）は972-OWのさらに西側にて検出した。平面形は径1.1mの楕円形で、立面形は深さ0.8cmのやや大

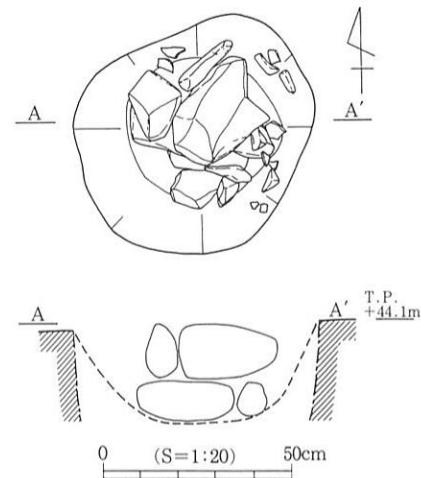


図53 971-OO（土坑）
遺物出土状況

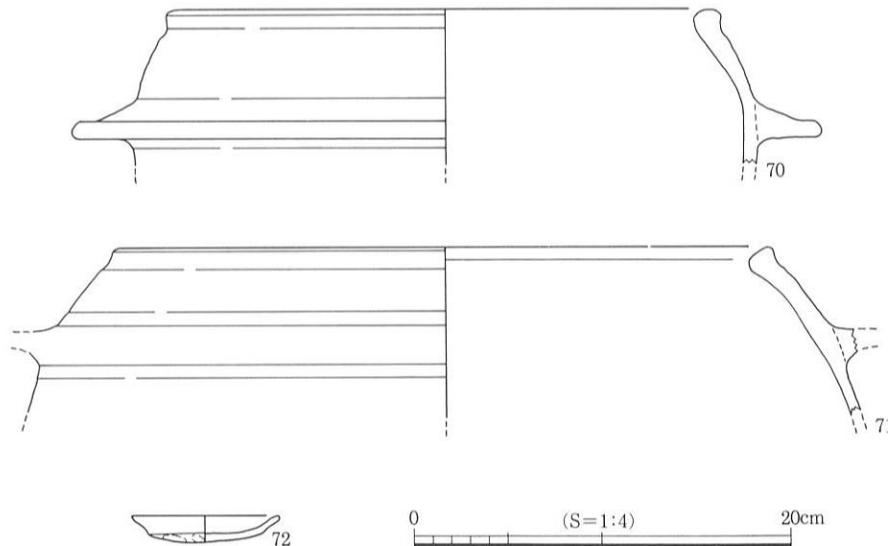


図54 971-OO（土坑）
出土遺物

形の円筒形を呈する。埋土は6層に分かれ、特に2～5層の多量の炭、炉壁片、鋳型片を含んでいる。瓦器・土師器などまとまった量の遺物が出土したが、図示できたのは1点である。

図58-75は復元口径26.0cmの土師質羽釜で、口縁端部は短く「く」字形に屈曲する（図版22）。

958-OW（図61、図版10）は960-OWの西側に並んで検出した。平面形は径1.0mのやや楕円形で、立面形は深さ0.9cmの円筒形を呈する。埋土には大量の炭、炉壁片、鋳型片が含まれている。他の井戸と同様、瓦器・土師器等まとまった量の遺物は出土したが、図示できたのは1点である。

図60-76は高台径4.4cmを測る瓦器碗で、上半部を欠損している。高台は低くすでに形骸化している。和泉型瓦器碗のIV-1期に含まれ、13世紀中葉の年代が考えられる。

1006・1007-OW（図62・63、図版10）は鋳造関連土坑群東端の

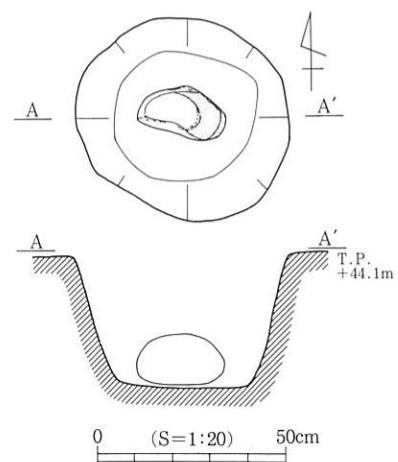


図55 977-OO（土坑）
遺物出土状況

987-OOから直角に北に振った地点に南北に並んで存在する。

1006-OWは径約0.7m、深さ1.0m、1007-OWは0.7m、深さ0.6mの幾分えぐりをもつ円筒形の井戸である。埋土には多量の炭や炉壁片、鋳型片を含む。

図65は1006-OWから出土した遺物である(図版20)。77は口径27.8cmを測る土師質羽釜で、口縁端部は短く「く」字形に屈曲する。器壁は全体に薄い。78は底径6.6cmを測る白磁碗で、内面見込み部から体部への屈曲部に沈線を施す。内面の釉は乳白色を呈する。

1007-OW出土の遺物は細片で図示できないが、和泉型瓦器碗IV-1期の底部が出土しており、13世紀中葉とみられる。1006-OWもほぼ同様の時期に廃絶されたと考えられる。

1000-OO(図64・66、図版13)は1006・1007-OWの西5mの位置で検出した土坑である。短径0.8m、長径0.9mの平面形をもち、断面形は浅いU字

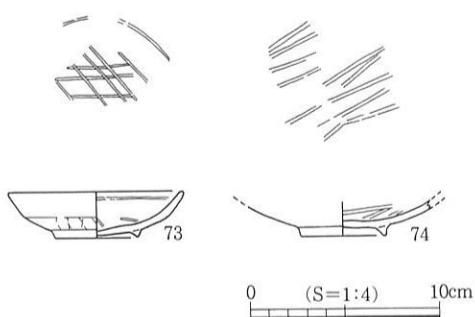


図56 972-OW(井戸)出土遺物

1. 2.5Y 5/1 黄灰色、2.5Y 5/4 黄褐色。粘質土、細砂混。炭含む。
2. 2.5Y 6/2 灰黄色、2.5Y 6/4 にぶい黄色。粘質土、細砂混。
3. 2.5Y 6/1 黄灰色。粘質土、細砂混。
4. 2.5Y 5/4 黄褐色。粘質土。
5. 2.5Y 4/1 黄灰色。シルト。炭含む。
6. 2.5Y 5/1 黄灰色。粘質土、疊、細礫混。
7. 10YR 4/1 褐灰色。粘土。炭含む。

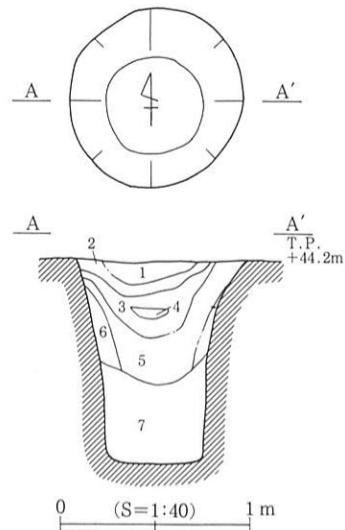


図57 972-OW(井戸)平面・断面

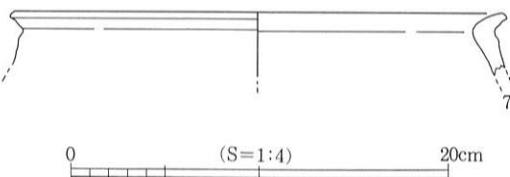


図58 960-OW(井戸)出土遺物

1. 2.5Y 5/3 黄褐色。粘質土、小疊・粗砂混。
2. 2.5Y 5/2 暗灰黄色。粘質土、小疊混。炭含む。
3. 2.5Y 5/1 黄灰色。粘質土、細砂混。炭含む。
4. 2.5Y 4/1 黄灰色。粘質土、小疊、疊、混。炭含む。
5. 2.5Y 4/2 暗灰黄色。粘土。炭含む。
6. 2.5Y 5/1 黄灰色、2.5Y 5/4 黄褐色。砂疊。

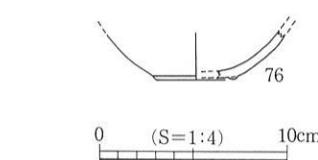


図60 958-OW(井戸)出土遺物

1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色、2.5Y 5/4 黄褐色。粘質土、細砂混。炭含む。
2. 2.5Y 5/1 黄灰色。粘質土、小疊・細砂混。炭含む。
3. 5Y 5/1 灰色、2.5Y 3/2 黒褐色。粘質土、粗砂混。炭含む。
4. 2.5Y 4/1 黄灰色。粘質土。2.5Y 3/1 黒褐色、10YR 5/8 黄褐色。粗砂混。炭含む。
5. 2.5Y 5/1 黄灰色。砂疊。炭含む。

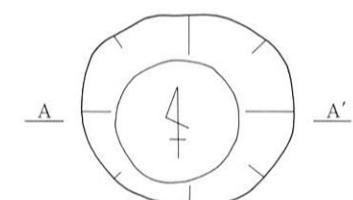


図59 960-OW(井戸)平面・断面

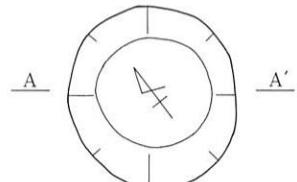


図61 958-OW(井戸)
平面・断面

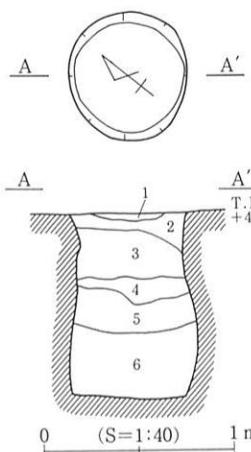


図62 1006-OW (井戸)
平面・断面

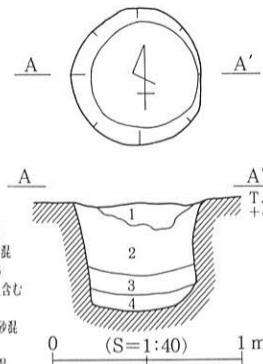


図63 1007-OW (井戸)
平面・断面

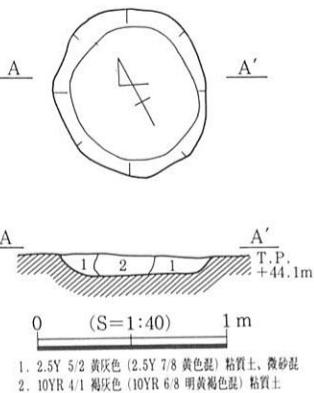


図64 1000-OO (土坑)
平面・断面

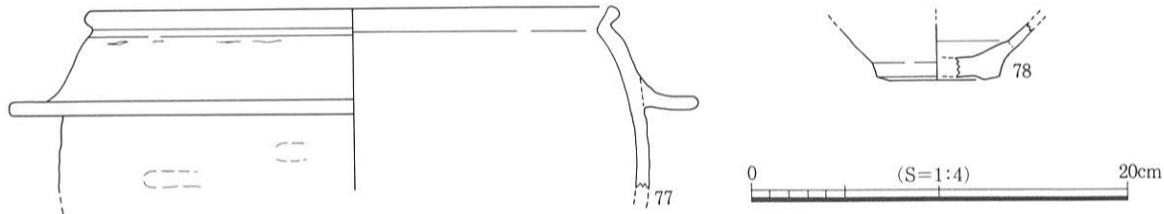


図65 1006-OW (井戸) 出土遺物

形で検出面での深さは15cmを測る。土坑中央部に土師質羽釜が俯せた状態で出土しており、底部上面は削平されたとみられる。埋土からは、炉壁片、鋳型片等の鋳造遺物が出土している。

図67は1000-OOから出土した遺物である(図版20)。79は口径26.2cm、残存高15.9cmを測る土師質羽釜で、口縁部は内上方に内湾しつつ延び、端部は垂直気味に短く屈曲する。鍔部は斜め上方に貼付ける。外面口縁部はヨコナデを施すが、指頭圧痕を明瞭に残す。体部は横もしくは右下がりのヘラケズリをおこなう。色調は明橙色を呈する。80は瓦器碗の小片で、歪みをもち、復元口径は不正確である。高台の高さは2mmと低く、断面形は丸い。和泉型瓦器碗のIII-3期に含まれ、13世紀前葉と考えられる。

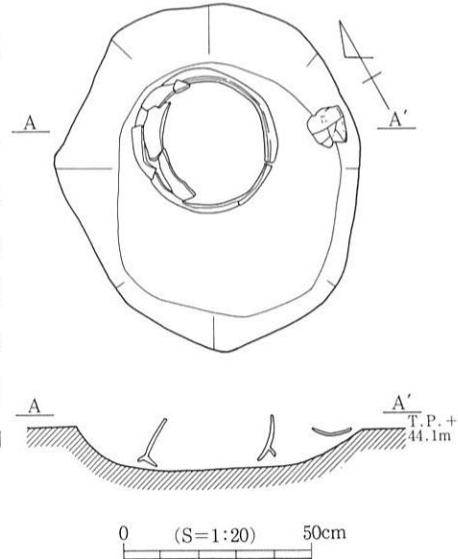


図66 1000-OO (土坑) 遺物出土状況

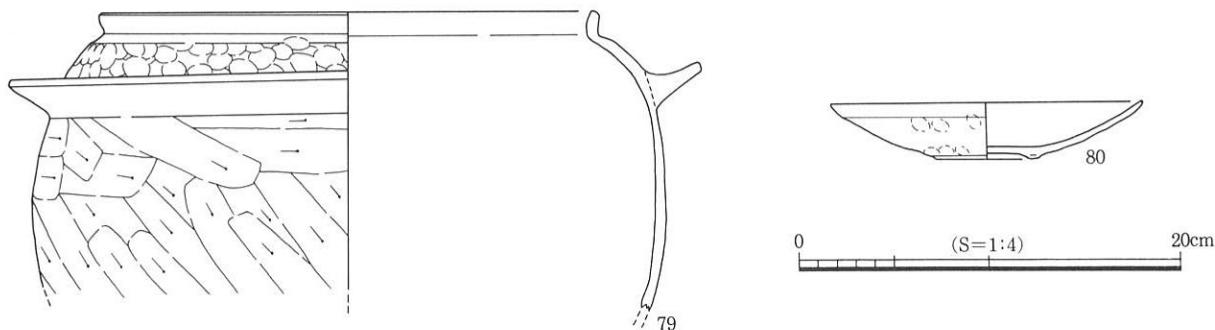


図67 1000-OO (土坑) 出土遺物

2. 95年度調査（B地区）

1 トレンチ（付図2）

1～3層を機械により掘削中、耕作の際に下層より巻き上げたと思われる中世の遺物や、近世の磁器等が出土した。これを除去後、4層である包含層がトレンチの全面より検出された。層厚は平均約0.3mを測る。包含層上面では攪乱以外に遺構は検出されず、これを掘削し、地山上面において遺構の確認を行なった。包含層掘削中に出土した遺物は、古代の土師器、須恵器から中世の土師器、瓦器、須恵器、陶器、磁器、鋳型、スラグ等と多岐にわたっているものの、量としてはかなり少ない。

包含層掘削後、トレンチのほぼ全面において溝・土坑・ピット等の遺構が検出された。トレンチ北側では、道路や埋設管の攪乱の下から北西から南東に延びる溝といくつかの土坑がみつかった。

108土坑は東西約1.7m、南北約1.3m、深さ約28cmを測る。同様な土坑が東西に3基並んで検出されており、遺物はほとんど出土していないものの、形状から土坑墓ではないかと思われる。これらの土坑の南西から、並行する2本の溝が検出された。溝の幅は約5cm、深さ約3cm、2本の溝の間は約1.6mを測り、形状から2輪車の轍ではないかと思われる。隣接する調査区からこの続きがみられないことから、轍であるとすれば、当地点が往復の終点もしくは起点であった可能性が高い。いずれも確認することは困難であるものの、隣接する土坑との関連性を考える上で興味深い遺構である。

トレンチの南側からは、溝・土坑・ピットが検出された。いずれの遺構とも遺物の出土は極めて少なく、ほとんどの遺構は時期等が不明である。西半はピットが多数検出されたものの、建物等の確認はされていない。東半のY=-41,690付近では南北にのびる005溝が、長さ約3.0mにわたり検出された。この溝は西トレンチの901-O Sとして西に屈曲し、2トレンチの1395・1394落ち込みにつながることが確認された。また、日置荘(その1)の溝とも連続し、1つの区画溝を形成すると考えられる。検出した溝は幅約0.5m、深さ約0.2mを測り、埋土より瓦器等が出土している。

005溝の西側からは土坑・ピットが検出された。006土坑は、長さ約1.3m、幅約2.2m、深さ約0.5mの長方形を呈する(図69、図版26)。遺構底面より瓦器碗の完形品が1点俯せた状態で出土しており、遺構の形態と遺物の出土状況から、土坑墓と考えられる。

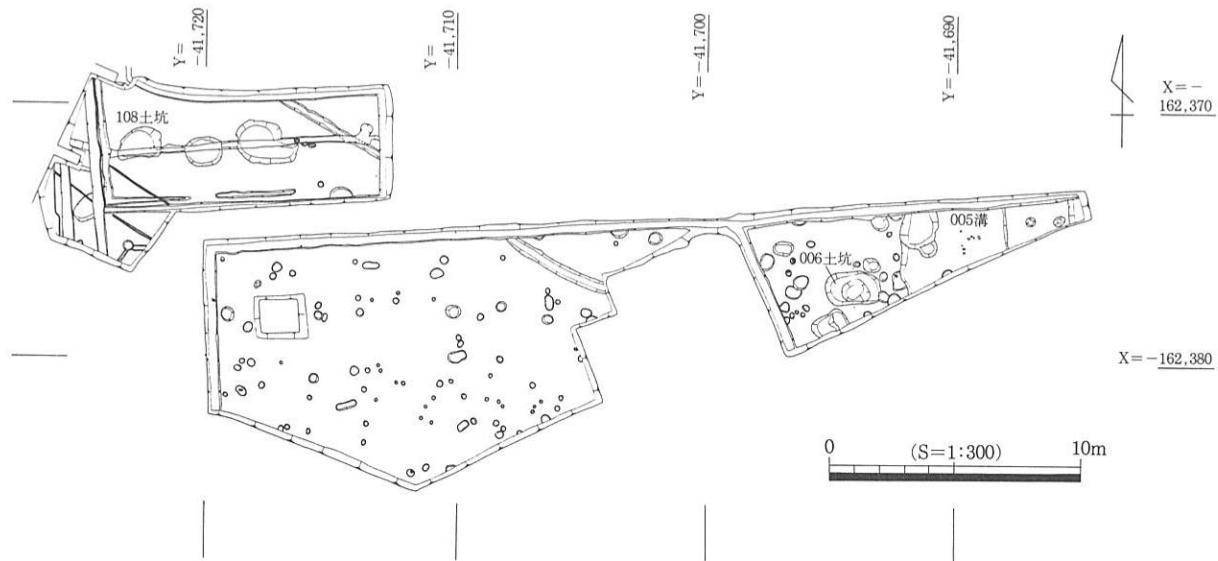


図68 1 トレンチ 平面

図70-81から83は1トレンチの出土遺物である。81は006土坑より出土した瓦器碗である（図版63）。内外面ともかなり摩滅しており、詳細は不明である。内面に横方向のミガキがわずかに観察される。口縁部が横ナデにより凹んでいることや体部の立ち上がりから、13世紀前半代のものと思われる。82は包含層より出土した鋳型の破片である（図版63）。全体的には良く酸化し、緩く盛り上がった部分のみが強く還元しており、ここに流し込まれた金属が接触したと考えられ、片面が緩いU字状を呈することが想像される。しかし、向かって右側が欠損していることや、対となる雌型がみられないため、製品の全體像については不明である。また、鋳型の外面には縄紐の痕跡が長軸に対して垂直方向に数条みられ、まだ鋳型が軟らかい段階に雄型と雌型を縛って止めていたものと思われる。当時の鋳造の製作技術を知る上で貴重な資料と考えられる。83は108土坑の埋土より出土した遺物である（図版63）。サヌカイト製の凹基無茎式石鎌であり、表裏の両面に二次加工がみられる。平面がやや五角形を呈していることや、逆刺が外側に張り出していることから、弥生時代前期以前に遡るものと思われる。おそらく、遺構が埋没する際に包含層内の遺物が混入したものと思われる。

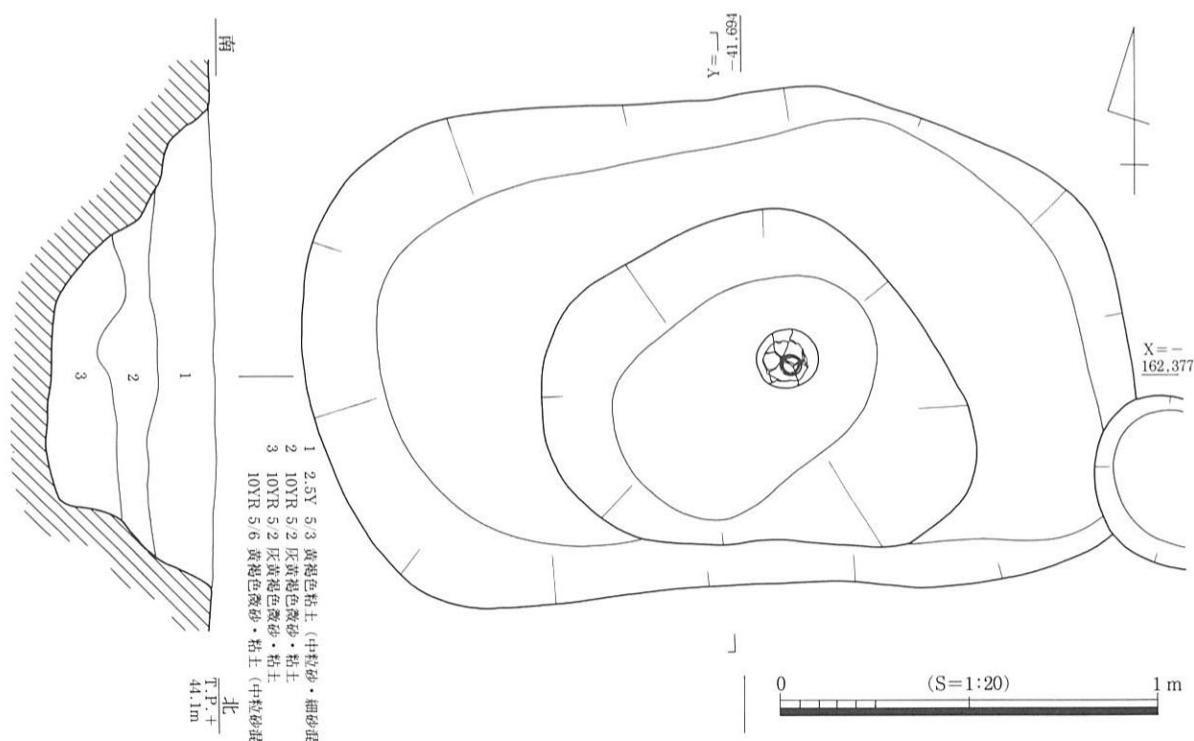


図69 1トレンチ 066土坑平面・断面

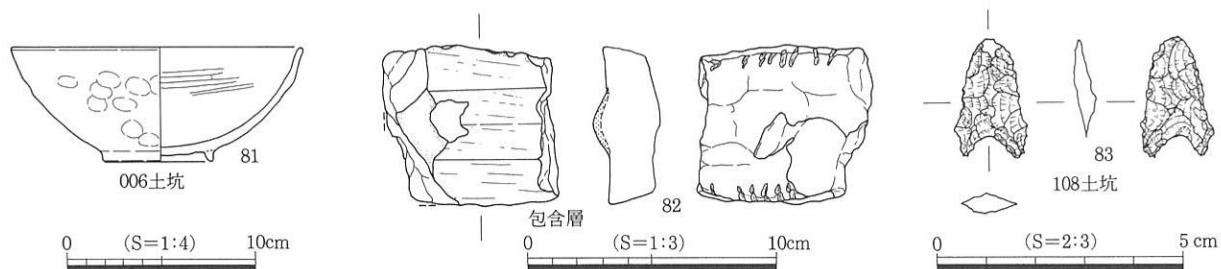


図70 1トレンチ 包含層 006・108土坑出土遺物

2・3トレンチ（付図2）

2・3トレンチはトレンチと道路を挟んで西に位置する飛び地である。調査の都合上、南北2つのトレンチに分割して調査を行なった。1から3層掘削後、2トレンチ北端では包含層の上面に鋳造関連遺物を多量に含む堆積層を確認した（図版26）。検出した範囲は、トレンチ北壁より約2.5m、東西約17mを測る。断面は浅い溝状を呈する。確認したのは南肩のみであり、大部分は北側の調査区外に存在するものと思われる。スラグ・炉壁・鋳型片等の鋳造関連の遺物を多く含んでいることから、周辺で鋳造作業が行なわれた際に、廃棄物を集積したものと推測される。また、このような廃棄物を利用し、悪路の補強を行なう民俗例もあることから、本例もそのような道状遺構である可能性も考えられる。また、3トレンチでは落ち込みと土坑数基、また鋤溝の痕跡と考えられる東西方向の溝数条を検出した。遺物はほとんど出土していない。

包含層の残存状態は良好であり、トレンチの全面において確認した。包含層を除去した地山遺構面では落ち込み・溝・土坑・ピットを検出し、標高はT.P.+44.0m前後を測る（図71、図版27）。

2トレンチの北端、X=-162,367以北にて、東西方向の1394・1395落ち込みを検出した。両落ち込みの間にはわずかな陸橋状の高まりがあり、東西に分割されている。94年度西トレンチの901-O Sにつながり、日置荘（その1）の溝に至ると推測される。幅約6m、深さ28cmの浅い溝状を呈しており、遺物は瓦器・土師器・須恵器・スラグが出土した。

024溝は1394落ち込みの南東隅より南にのびる溝である。幅は平均80cm、深さ約22cmを測る。溝は3トレンチのほぼ中央にて南東に屈曲し、トレンチ外へとのびている。埋土は中粒砂であり、周辺にはみられない土質である。トレンチの南側、阪和自動車道を隔てた地点に、宅地造成のために埋め立てられた更ヶ池が存在したことから、これより続く用水路の可能性が考えられる。

008土坑はX=-162,372、Y=-41,737付近にあり、長径約70cm、短径約60cm、深さ約40cmを測る（図72、図版27）。埋土は上下2層に分けられ、下層には炭化物が多く含まれている。

009土坑はX=-162,372、Y=-41,734付近にある（図72、図版27）。東半部を側溝

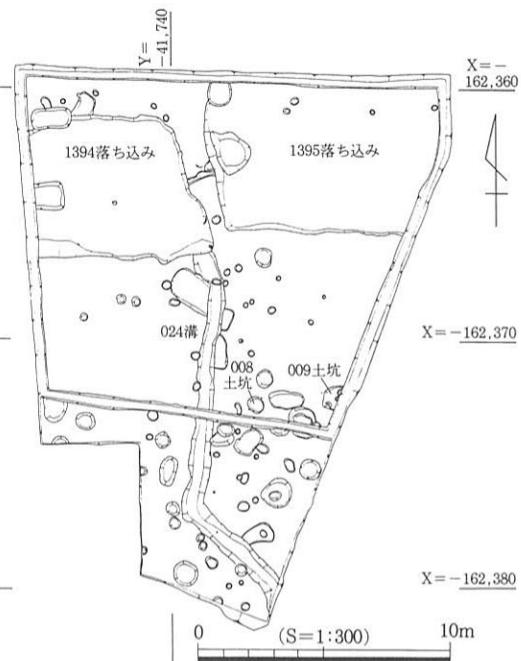


図71 1トレンチ 平面

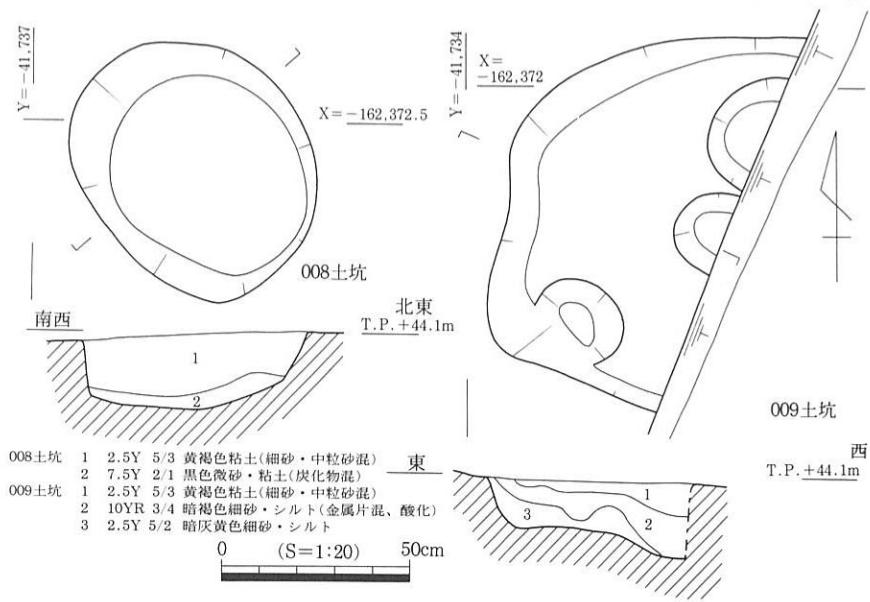


図72 2トレンチ 008・009土坑平面、断面

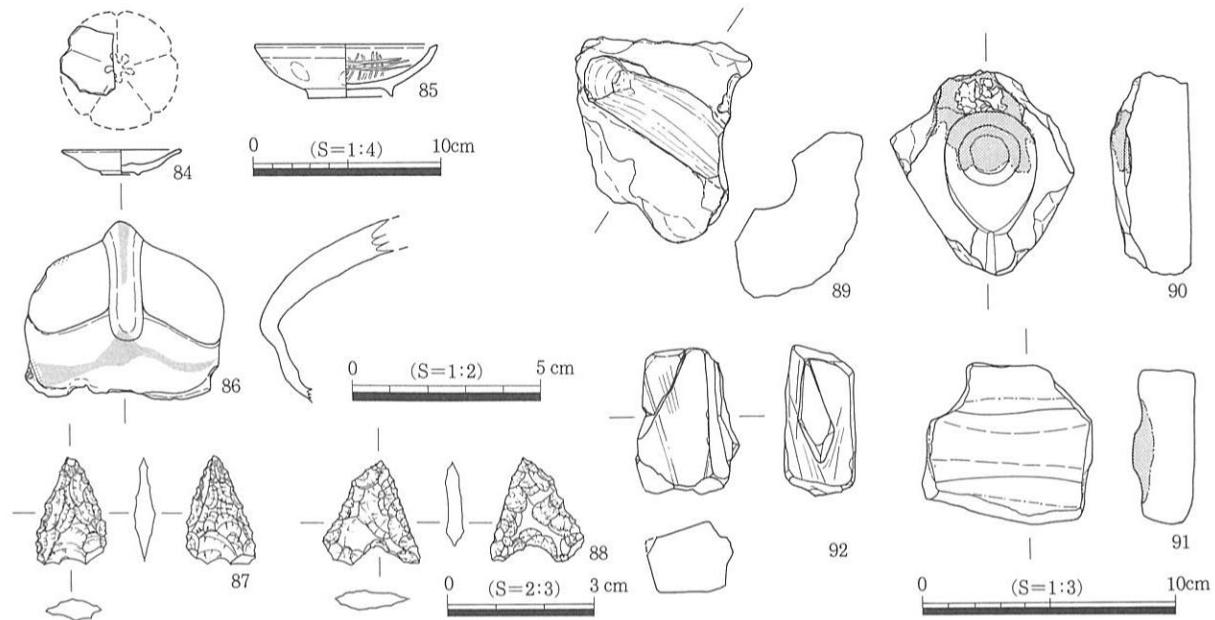


図73 2・3トレンチ 包含層出土遺物

により消失し、現存で径約1.1m、深さ約26cmの規模を測る。埋土は3層に分けられ、このうち中間層が酸化して褐色を呈し、微細な金属片を含む。遺構底面に二次焼成を受けた痕跡などは確認されなかった。

008・009土坑は近接しており、周辺の遺構からは類似するものがみられなかったことから、2つは同様の性格をもつ遺構と推測される。ただし、他の遺構との違いが遺構の性格、あるいは時期差によるものかは不明である。009土坑の埋土に金属片が含まれることから、鋳造に関連する可能性も考えられる。

図73-84から85・87から92は包含層、86は機械掘削層より出土した遺物である（図版64）。

84は青白磁の輪花皿である。復元した口径は6.4cm、器高は1.35cmである。内面に5つの花弁、見込みに花形の浮き彫りが施される。削り出しの高台部分を残して全体に青白色の釉を施している。平城京で12世紀半ば頃に位置付けられる出土例に類似している。85は瓦質の台付き皿である。口径9.6cm、器高2.8cmを測り、内外面を丁寧に磨いている。皿に高台がつくことから12世紀頃に相当すると考えられる。86は土製品であり、土人形の一部と考えられる。胎土は精緻であり、内面全体に型づくりによる細かい布目痕が残る。また、表面の一部には赤色や黒色の着彩を観察することができる。江戸時代頃のものと思われる。87と88はサヌカイト製の石鏸である。87は縦2.1cm、横1.4cm、厚さ0.4cm、88は縦2.1cm、横1.9cm、厚さ0.3cmを測る。共に凹基式無茎鏸であり、時期は縄紋時代と考えられる。89から91は鋳型片である。89は龍頭、もしくは足釜脚部の鋳型と考えられる。残存部は長さ7.9cm、幅7.0cm、厚さ3.8cmを測る。胎土は精緻で、破断面に粒殻痕が残る。90・91は不明鋳型片である。90の残存部は長さ8.0cm、幅6.7cm、厚さ2.5cmを測る。凹部は卵形を呈しており、さらに内側に円形の凹みがみられる。このような形状から飾り金具、あるいは仏具の一種ではないかと推測される。湯口に溶解金属とガラス質が付着し、その周辺のみが灰白色に還元していることから、鋳込みに失敗したため廃棄したものと考えられる。91の残存部は長さ13.3cm、幅12.6cm、厚さ5.0cmを測る。中央の突起部分が還元のために灰白色に変化している。胎土は粗く、砂粒を多く含む。表面の磨耗が著しい。鋳型の形状から、製品は片面に浅い凹みを持つ棒あるいは板状になると推測され、羽釜や鍋の鋳型の一部とも考えられる。92は砥石であり、石材は凝灰岩である。残存部分は長さ6.7cm、幅4.1cm、厚さ2.8cmを測る。折損しているため、本来の大きさは不明である。微細な使用痕が観察できるものの、表面の磨耗が著しい。

4 トレンチ (付図 3)

1～3層掘削後、4層である包含層はトレンチ北西部でのみ検出された。その他の部分では、近世以降の耕作により包含層が削平されており、機械掘削と同時に地山遺構面が表わされた。検出した地山はかなり平坦になっており、おそらく包含層だけではなく、遺構面としての地山表面も削平されたと考えられる。また、トレンチの南側には現代の道路が東西に通っており、これに伴う埋設管によりかなり激しく攪乱されている。

包含層より出土した遺物は中世の土師器・瓦器・須恵器・陶磁器・瓦・鉄製品・鋳造関連遺物以外に、古代土師器・須恵器等がみられる。トレンチに包含層そのものがほとんど残っていないことから、出土した遺物の量もわずかである。図78-93は包含層より出土した須恵器の杯身であり、口径16.6cm、器高4.8cmを測る(図版64)。平な底部にやや外に広がる輪高台が付き、杯部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は丸い。飛鳥IV並行、7世紀後半のものと思われる。



図74 4 トレンチ 平面

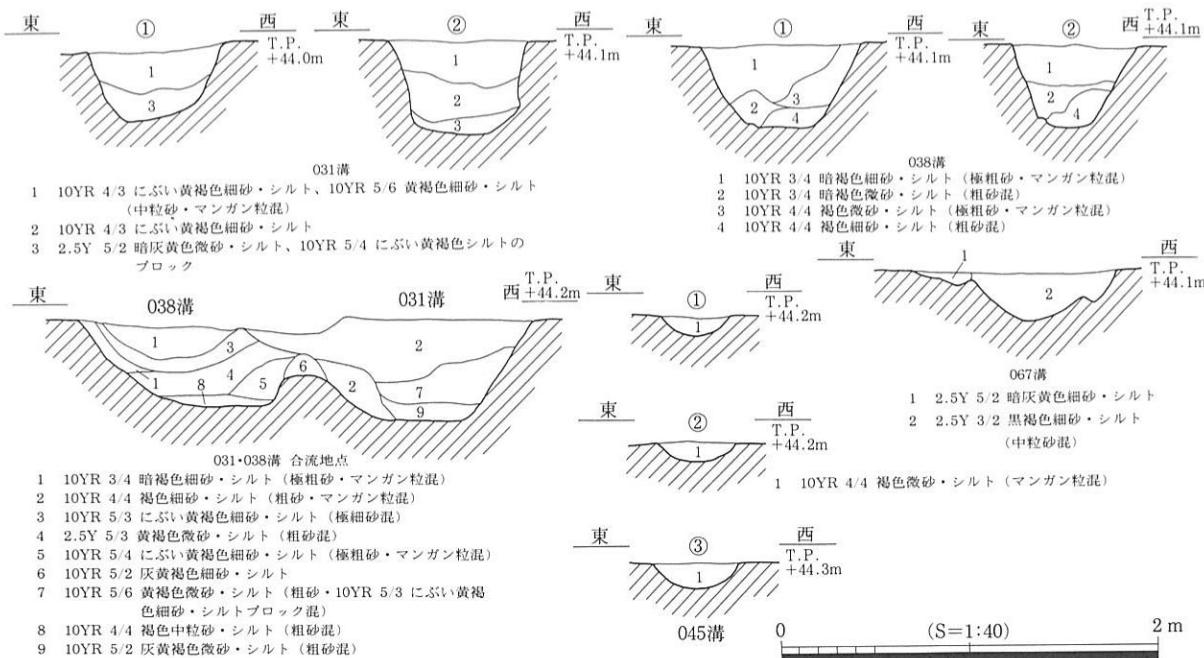
地山遺構面において検出した遺構は、溝・土坑・井戸・ピットなどがある。

溝は大きく2種類に分かれ、東西方向と南北方向のものがある。南北方向の溝がすべて東西方向の溝に切らしていることや、東西方向の溝の埋土がシルト質の耕作土であることから、南北方向の溝は中世以前のもの、東西方向は近世以降の鋤溝痕と考えられる。

067溝は東トレンチよりつづく溝であり、ほぼ真北にのび、8トレンチ南端の2876溝に至る（図75、図版29）。幅約1.0m、深さ約42cmを測り、検出した長さは約40mである。農業用の水路であった可能性は高いものの、遺構埋土に2・3層の耕作土が入っていることから、府営住宅建設直前まで継続していたとは考えにくい。遺物としては近世の磁器以外に、中世の土師器・陶磁器等が出土している。

031溝は東トレンチにある698-O Sの延長であり、トレンチ南端にて北々東にのびる038溝と交差している（図75、図版29）。幅約0.8m、深さ約55cmの断面U字形を呈し、長さ約31mにわたり検出した。遺構検出の段階では031溝と038溝の切り合い関係は確認されなかったものの、遺構断面から031溝が038溝より若干後出することが明らかとなった。また途中農業用水路に分断されているものの、031溝の延長が8トレンチ南西隅にある2884溝から7トレンチの北東辺にある1229溝へとつながることが確認され、総延長は約75mを測る。出土遺物は中世の土師器・瓦器・須恵器、古代の土師器・須恵器等がみられる。

038溝は幅約0.8m、深さ約54cmの断面U字形を呈し、長さ約31mにわたり検出した（図75、図版28・29）。東トレンチにある699-O Sよりほぼ一直線に北々東にのび、8トレンチの802溝につながる。これらの溝の総延長は約100mにもおよんでいる。前述のようにトレンチ南端において031溝と交差しており、平面からは前後関係等は不明であるものの、遺構断面から031溝より若干先行することが確認された。出土遺物は中世の土師器・瓦器・須恵器、古代の土師器・埴輪などがみられる。これら2つの溝からは古代から中世の遺物が混入しており、一見すると中世の遺構と思われる。しかし、埋土には包含層が含まれているため、遺構上面には中世の遺物が入りやすいことや、古代の遺物の多くが遺構底面から出土していること、あるいは調査区全体の遺物の分布状況から、6世紀後半から7世紀にかけての溝である可能性も考えられる。わずかにトレンチ南端における交差点、肩口の傾斜部分となる地山直上から



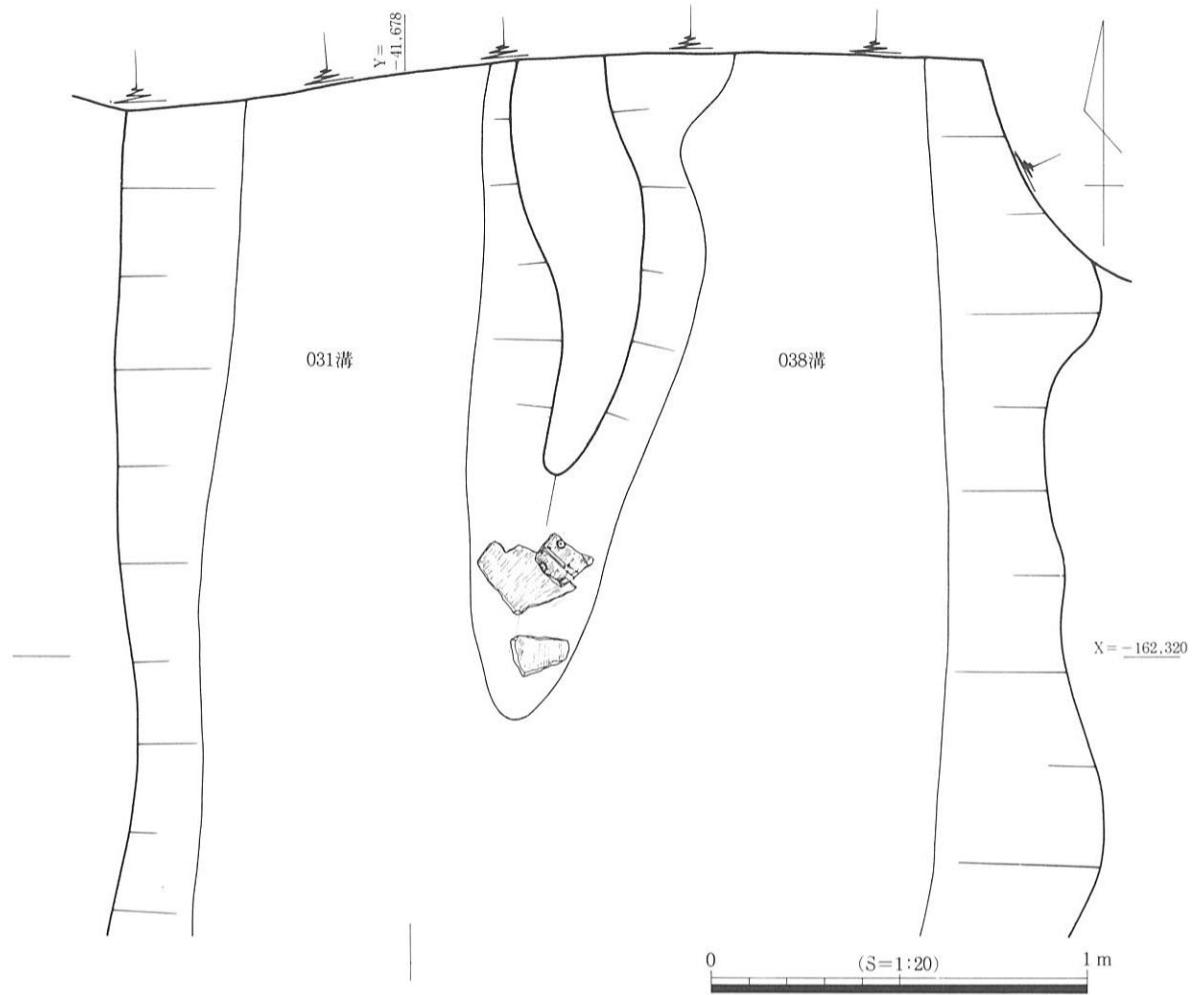


図76 4トレンチ 031・038溝合流地点埴輪出土状況

円筒埴輪の破片が出土している(図76、図版29)。

図78-96が、トレンチ南端の031溝と038溝の交差地点における、2つの溝の切り合う肩口である地山直上から出土した円筒埴輪の破片である(図版65)。円筒埴輪胴部の破片であり、復元した直径は約38cm、器壁厚約1.9cmを測る。外面はタテ方向の細かなハケ調整を施し、内面はナデ調整がみられる。タガは扁平な台形状を呈し、その上下にコンパス状工具による円形の沈線がみられる。円孔透かしを施すための印と考えられる。いわゆる日置莊型埴輪であり、6世紀後半に作られたものである。

045溝はトレンチ南辺のほぼ中央付近から北々西にのびる溝であり、X=-162,310を境に北北東に屈曲し、038溝に平行する(図75、図版29)。幅約0.5m、深さ約12cmを測り、長さ約30mにわたり検出した。東トレンチにある001-O Sからのびる溝であり、総延長は約90mにおよぶ。溝の北端は攪乱によって切断されており、検出した状態すでに遺構の深度がないことから、8トレンチではつづきとなるような溝は検出されなかった。遺物としては中世の土師器・瓦器、古代の須恵器が出土しているものの、量は少ない。溝の南側、Y=-162,316付近の西肩から瓦器碗が正置された状態で出土している(図77)。

090溝は東トレンチにある002-O Sの延長であり、東トレンチにおける001と002-O Sと同様、045溝に平行して北北西にのび、屈曲付近にて038溝にあたる。幅約0.7m、深さ約46cmを測り、長さ約11mにわたり検出した。038溝との接点付近は現代の道路による攪乱があり、詳細は不明であるものの、さらに北へとのびる状況は確認されなかった。遺物は中世の土師器・瓦器、古代の須恵器が出土している

ものの、やはり量はかなり少ない。

図78-94・95は045溝より出土した瓦器碗である（図版64）。いずれも摩滅が著しい。94は内面にヘラミガキ、外面に指頭圧痕が残り、体部は円弧を描きながら立ち上がり、口縁部がやや外反する。95は外面に指頭圧痕が残るもの、内面は不明である。体部がやや外開きに立ち上がり、口縁部も外傾する。高台はいずれも断面三角形を呈し、貼付け高台である。13世紀前半代のものと考えられる。

井戸はトレーンチのほぼ中央部において2基確認されたのみである。028井戸はX=-162,306、Y=-41,665付近に位置し、直径約1.1mの円形を呈する（図79）。井戸の西側の遺構面上から別の068落ち込みが、井戸に切られた状態で検出された。この落ち込みは深さ約5cmを測り、埋土はやや均質な中粒砂である。

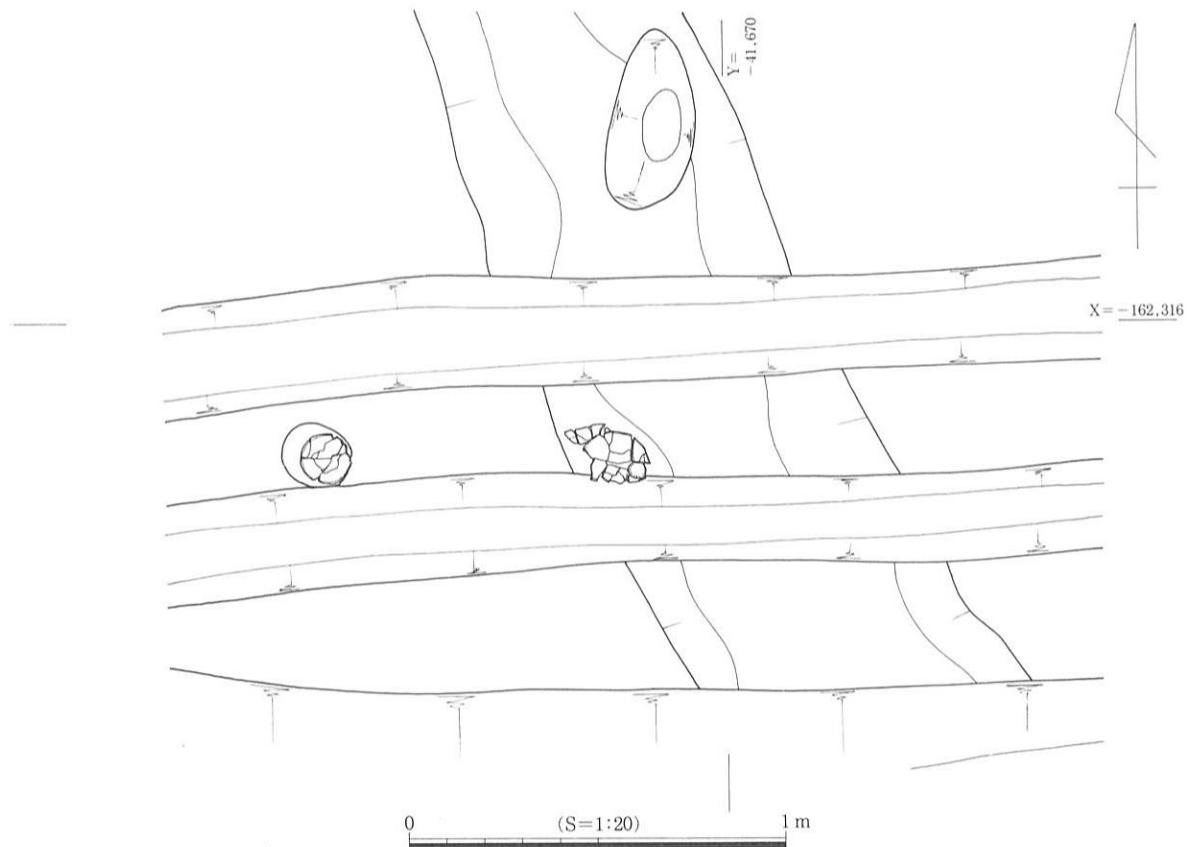


図77 4トレーンチ 045溝遺物出土状況

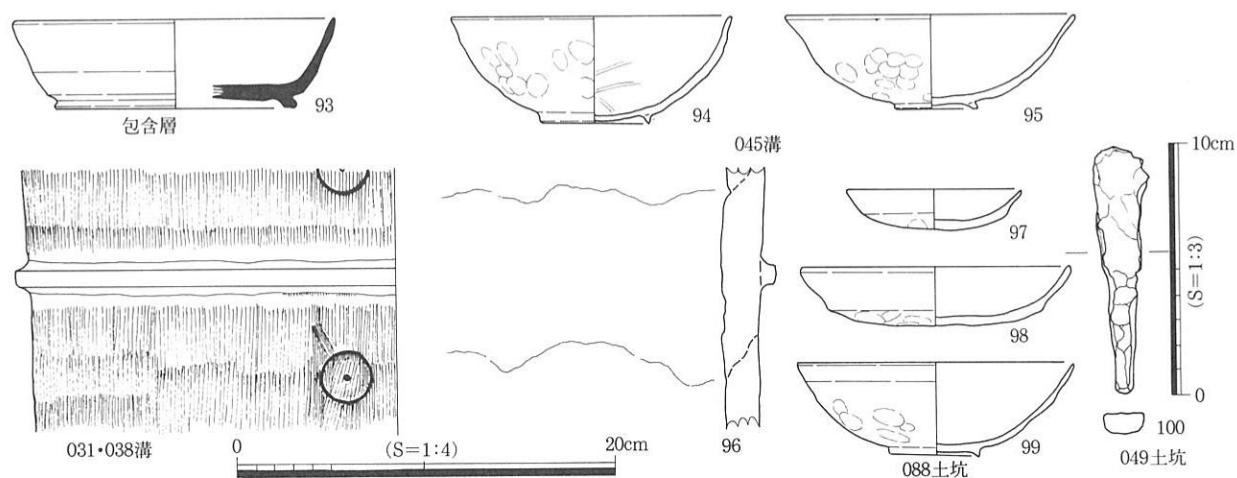


図78 4トレーンチ 包含層、031・038・045溝、049・088土坑出土遺物

周辺の遺構埋土とは異なる点から、028井戸に付随する施設であった可能性も考えられる。井戸内部より拳大の自然石が多数出土していることから、この井戸が石組井戸であった可能性も考えられるものの、調査時には井戸枠と推測できるものは確認されなかった。深さ約0.9mまで人力による調査を行ない、作業上危険であるため完掘に至ってはいない。遺物は13世紀代と思われる瓦器が少量出土しているのみである。

029井戸は028井戸のほぼ真西、X=-162,307、Y=-41,667付近に位置し、直径約1.3m、深さ約0.8mの円形を呈する（図版30）。遺物は出土していない。本トレンチにおいて検出された井戸はこれら2基のみであり、形状からは農作業用の井戸とは考えにくく、いずれも日常生活用のものと思われる。周辺にピットが集中していることから、この地点に屋地の存在していた可能性が高いと思われる。

土坑はトレンチ中央より北側に多くみられ、平面形は不定形なものが多い。また上部が削平されたためか、遺構深度が非常に浅くなっている。ほとんどの土坑から遺物は出土しているものの、量としてはかなり少なく、また小片が多いため時期等の特定も困難である。

049土坑は029井戸のほぼ真南、X=-162,308、Y=-41,667に位置し、長径約1.2m、短径約1.0mの東西に長い橢円形を呈する。遺物は土師器・瓦器・鉄製品が出土しており、土器から13世紀前半代の遺構と考えられる。

図78-100が049土坑より出土した遺物である（図版65）。鉄製であり、全体は細長い三角形を呈する。板状の鉄を長軸にて折曲げて製作しており、構造から小柄などの柄部分と思われる。鋸彫れが激しく、文様等の有無は確認されていない。

088土坑はX=-162,310、Y=-41,669付近に位置し、直径0.7mの円形を呈する（図80、図版30）。深さ約20cmを測り、遺構内部にはゴルフボールから小児頭大の自然石が不規則に充填されている。これら自然石の間から土師器や瓦器などの遺物がほぼ完形で出土しており、それらのほとんどは身を上に向かた正置の状態である。被熱の痕跡等は認められないものの、遺構の深度が浅いため、地鎮等の祭祀跡である可能性が高い。

図78-97から99が088土坑より出土した遺物である（図版65）。97は瓦器皿である。やや平な丸底に緩く内湾する口縁をもつ。口縁部外面に一段ナデを施し、底部には指頭圧痕が残る。98は土師質杯であり、口径約14cmの大型品である。底部はやや平底気味で指頭圧痕が残り、口縁部との境に一段の強い横ナデがみられる。口縁はやや内湾しながら立ち上がり、端部をナデにより仕上げる。99は瓦器碗であり、内外面とも摩滅のため調整は不明である。口縁はほぼ直線的に開き、端部を丸く仕上げる。13世紀後半代のものと思われる。

ピットはトレンチ中央付近に最も集中してみつかっており、トレンチ

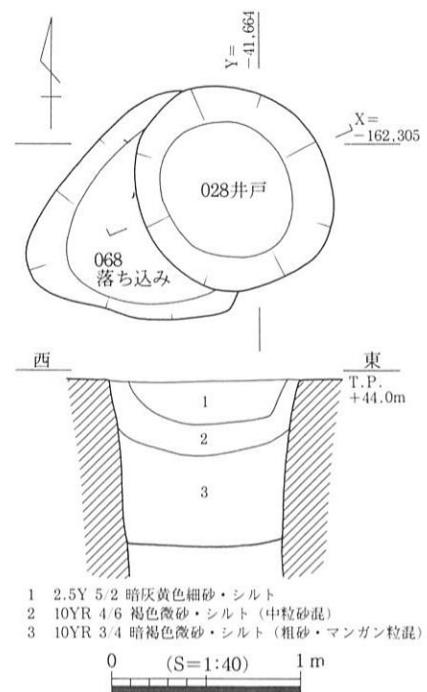


図79 4トレンチ 028井戸平面、断面

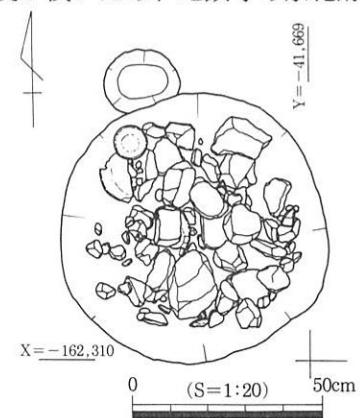


図80 4トレンチ 088土坑平面

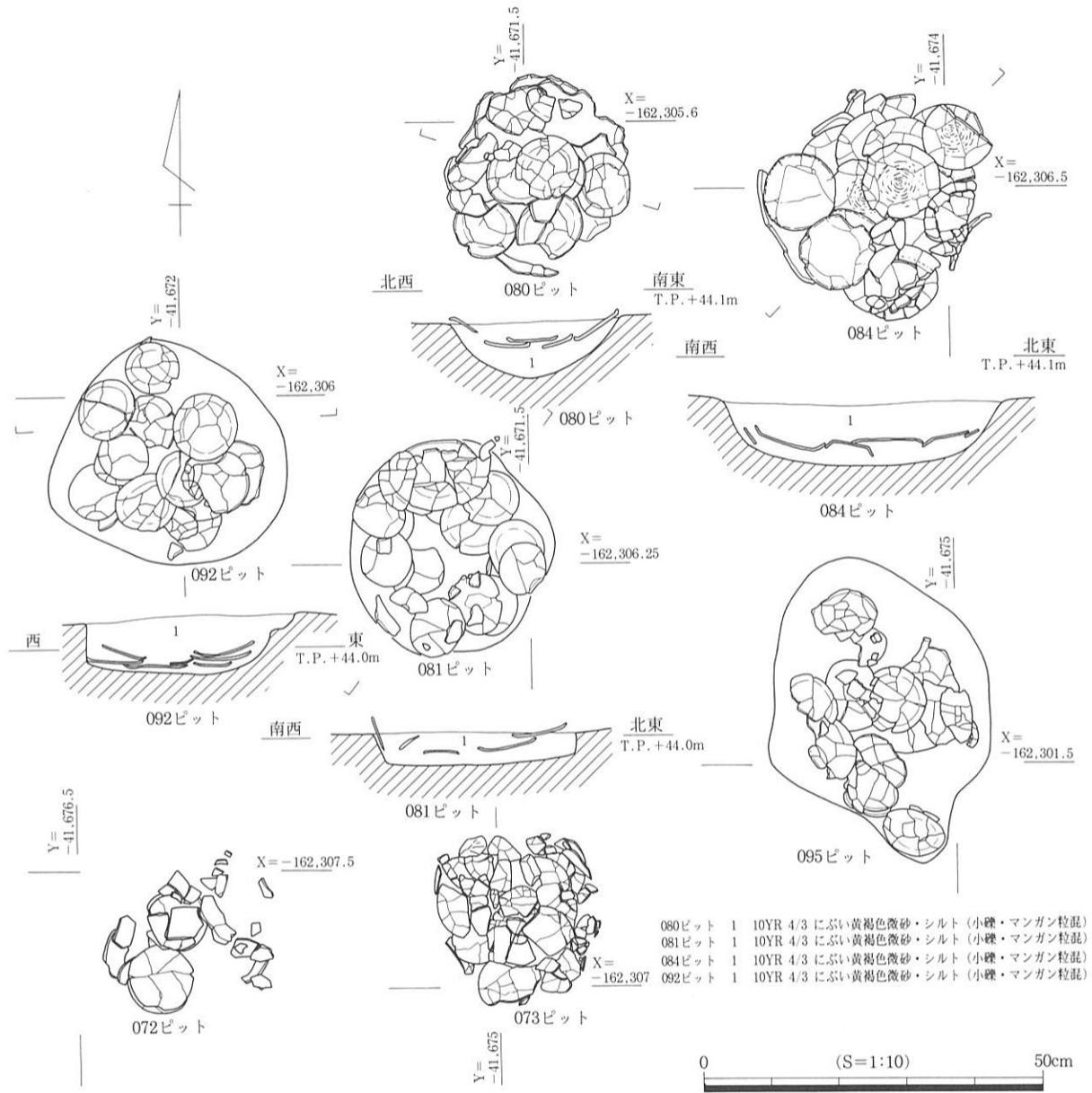


図81 4トレンチ 072・073・080・081・084・092・095ピット平面、断面

全体ではいくつかのまとまりがみられる。しかし、後世の削平が激しく、失われたピットも多いと思われ、建物等の設定には至らなかった。一方、これより南側の調査区では確認されていない土器を一括埋納したピットが、トレンチ中央部を中心に多数みつかっている。これら土器埋納ピットの分布が、前述のピット集中部にほぼ一致していることから、建物建築に伴う地鎮などの祭祀が行なわれた可能性が考えられる。

072・073・080・081・083・084・092ピットはトレンチのほぼ中央に位置する土器埋納ピットであり、X=-162,307、Y=-41,673を中心に東西約5.5m、南北約2.0mの範囲に集中してみられる（図81・82、図版31）。

072・073ピットは038溝の西側から検出された。遺構内より出土した土師皿は、072ピットでは12個体分、073ピットでは26個体分を数える。084ピットは038溝の埋土上面において検出された。検出された土器埋納ピットの中で、唯一回転糸切痕をもつ土師皿が出土しており、他の土器埋納ピットより若干先行するものと考えられる。遺構を切り取り保存しているため、遺構内部の詳細は不明である。おそらく

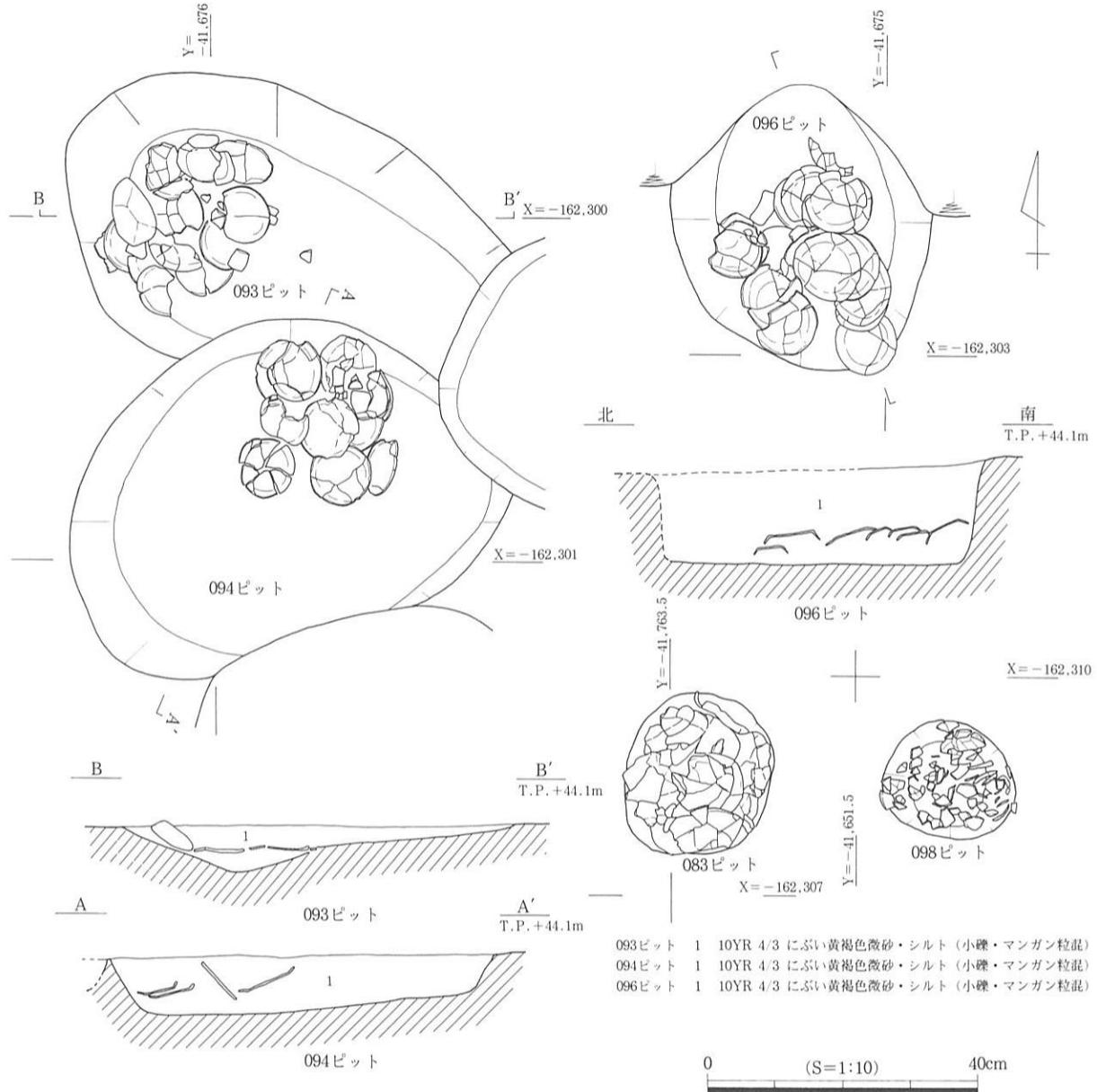


図82 4トレーニチ 083・093・094・096・098ピット平面、断面

20数個体分の土師皿が埋納されたと思われる。080～083・092ピットは038溝と045溝に挟まれた地点において検出した。080ピットは深さ約9cmの擂鉢状であり、約28個体分の土師皿が出土した。081ピットは深さ約5cmの平底状を呈し、約22個体分の土師皿が出土した。092ピットは直径約35cmの平底状を呈し、深さ約9cmを測る。遺構内より約25個体分の土師皿が出土した。

これらの土器埋納ピットの南東部、X = -162,310、Y = -41,667付近において、ピットの集中部がみられる。いずれのピットも直径は平均約30cmを測り、そのうちのいくつかは列を成すものもみられる。ほとんどのピットの深さが10cm以下であり、既に削平された可能性が高く、建物位置の設定には至っていない。しかし、井戸・柱穴・土器埋納ピットは、建物の存在を考えるには十分な要素であり、ほぼ間違いない建物が存在していたと考えられる。

093・094・095・096ピットはトレーニチ北西寄り、X = -162,301、Y = -41,676付近を中心とする東西約2.0m、南北約3.0mの範囲に集中している（図81・82、図版31）。

093と094ピットは切り合い関係にあり、093ピットが先行する。093ピットは残存する長径約65cm、短

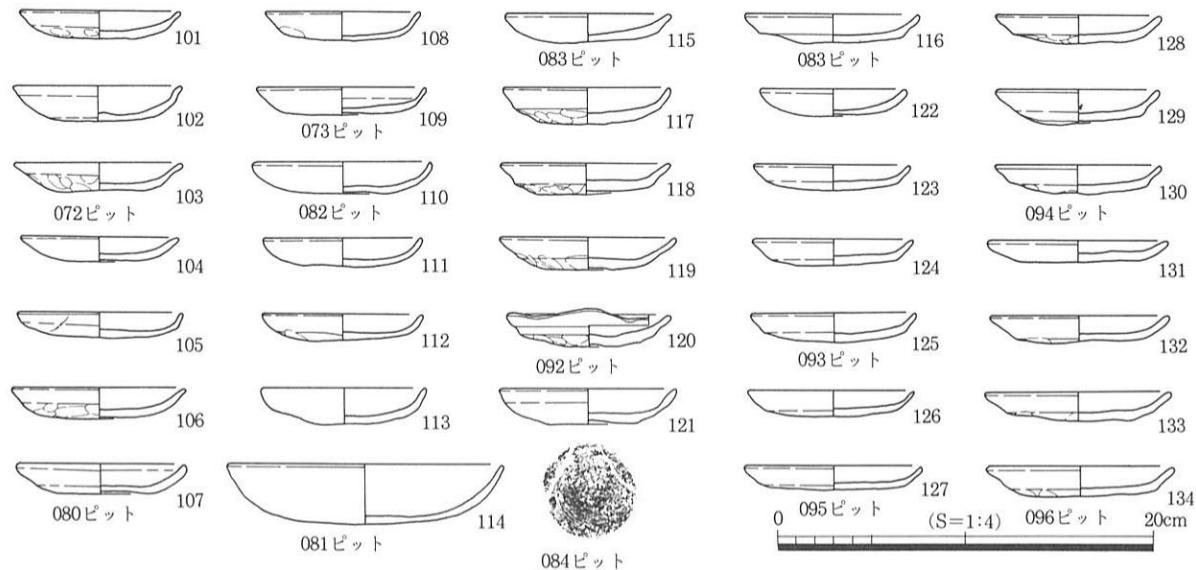


図83 4トレンチ 072・073・080・081・083・084・092・095・096ピット出土遺物

径約45cm、深さ約7cmを測り、約26個体分の土師皿が出土した。094ピットは残存する長径約65cm、短径約50cm、深さ約8cmを測り、約14個体分の土師皿が出土した。095ピットは長径約45cm、短径約35cmの不定形なピットであり、約24個体分の土師皿が出土した。096ピットは北半が攪乱されており、残存する直径は約40cm、深さ約14cmを測る。約21個体分の土師皿が全て遺構内に俯せた状態でみつかった。

これらの土器埋納ピットの西側において、南北に長方形の落ち込みを検出した。落ち込みの規模は南北約11.0m、東西約8.0m、深さ約5cmを測る。落ち込みの内部よりピットや土坑が検出されており、軸方向がほぼ方位と一致することから、建物などの存在した可能性がある。

098ピットはトレンチの南東部、X=-162,310、Y=-41,652に位置し、この1基のみが単体で検出された（図82）。直径約20cmの円形を呈し、遺構内に多量の土師皿が埋納されていた。いずれの土師皿も細片になっており、検出段階では個体の識別が困難であったことから、土師皿は埋納当初よりすでに細片であった可能性が考えられる。点数としては約11個体分の土師皿が埋納されていたと思われる。この土器埋納ピットの西側にピットの集中がみられ、周辺には土坑も検出されていることから、建物の存在が考えられる。ちょうど真南の東トレンチでは掘立柱建物が検出されており、一連の建物群となる可能性もある。しかし、削平や攪乱が著しいため、建物の位置までは確認されていない。

図83-101から134が土器埋納ピットより出土した遺物である（図版65・66）。101から103が072ピットより出土した土師皿である。ナデによる成形の後、口縁部は強い横ナデによりやや外反し、端部は丸く整えられている。外底面には指頭圧痕がみられる。108・109は073ピットより出土したものであり、口縁部下の横ナデによる稜線が明瞭ではなく、口縁が直線的に外傾する。104から107が080ピットより出土した土師皿である。14世紀代に下るものと思われ、107はへそ皿に類似する。111から114は081ピットより出土したものであり、114は口径14.3cmの杯である。110は082ピット、115・116は083ピットより出土した土師皿である。121は084ピットより出土した遺物であり、外底面に回転糸切痕がみられる。117から120は092ピットより出土した土師皿である。

112から125は093ピット、128から130は094ピット、126と127は095ピット、131から134は096ピットより出土した土師皿である。いずれも13世紀後半から末にかけてのものである。

5 トレンチ（付図3）

1層を除去すると、トレンチ全域において2層を検出し、 $X=-162,306$ 付近に東西方向の段があり、耕作土が北に向かって段落ちする状況を確認した（図84、図版32）。北側と南側の比高差は約0.3mである。南側の段上にあたる部分は耕作土が畦状に高まり、北側の段裾部には溝状の凹みがみられる。トレンチ東側を流れる現行の農業用水路が坪界に相当しており、その水路にほぼ直行するこの段も境界線を示すものであることが考えられる。しかし、東隣の4トレンチではこのような段差はみられないことから、東西の区割り差が存在したと推測される。

2・3層を除去すると、段下であるトレンチ北半部は地山まで削平を受けており、包含層がほとんど検出されなかった。そのため遺構の残存状況も悪く、地山遺構面でみられる凹みはほとんどが搅乱である。包含層が削平されていることや、耕作土が段形成後に堆積していることから、この段差は遅くとも近世初期までに作られたものと推測できる。また、耕作土の直上に整地層が堆積していることから、段のある地形は、昭和30年代の府営住宅建設による整地が行われるまで存続していたことは明らかである。一方、段上であるトレンチ南側は包含層が良好に残っており、地山遺構面の遺構の残存状況も良好であった。遺構としては井戸・溝・ピット等を検出した。

$X=-162,310$ 、 $Y=-41,707$ 付近はピットの集中する地点であり、一边約5mの建物Aを推測した（図84、図版32）。柱配列は不整形であり、北西部に半間の張り出し部がみられる。114・115・117・118・123ピットは建物の中心を東西に並んでおり、一部には柱根の痕跡が残るものもある。ピット間の距離にはばらつきがあり、両端のピットの間隔がやや狭く、東西端それぞれに南北方向の小溝がみられることから、庇付きの建物であった可能性も考えられる。しかし、120・1789ピット間や、121・130ピット間ではピットが確認されないなど、納戸等の小室を間取りに取り入れた別構造の建物である可能性も残る。

112井戸は建物Aの南東に位置し、径約1m、深さ約0.9mを測る（図85）。遺構内に井戸枠等の構造

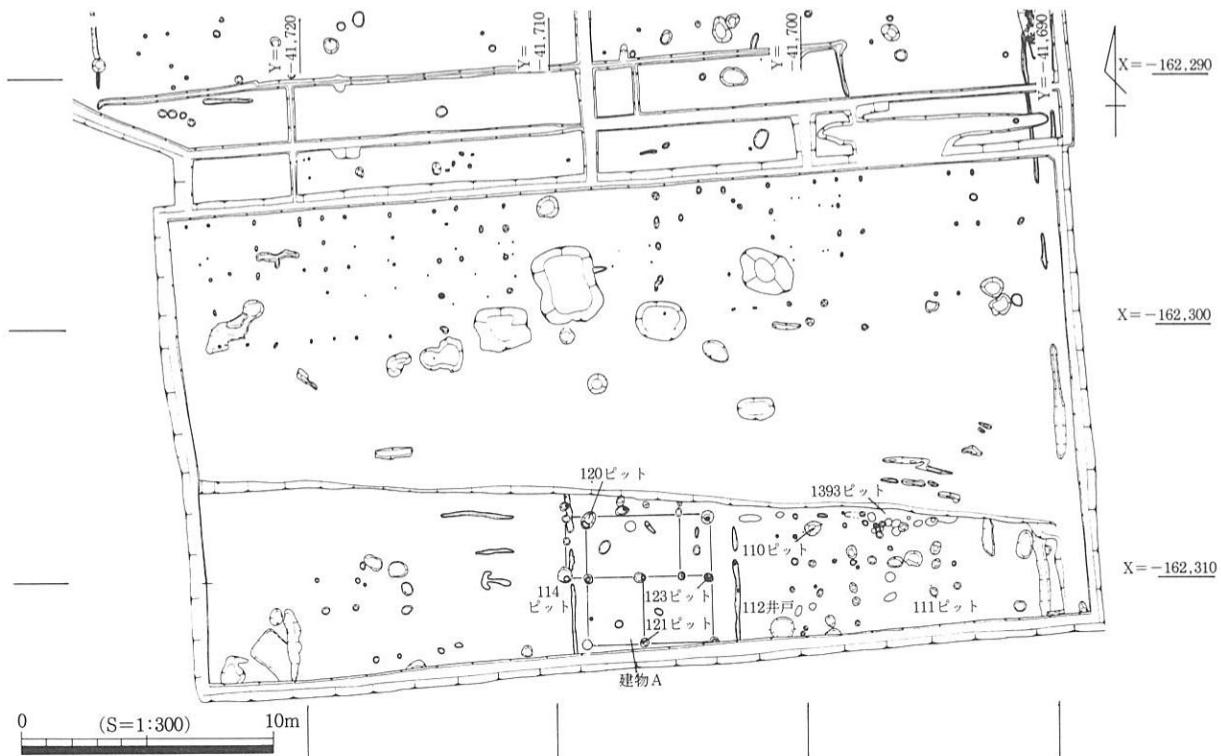


図84 5トレンチ 平面

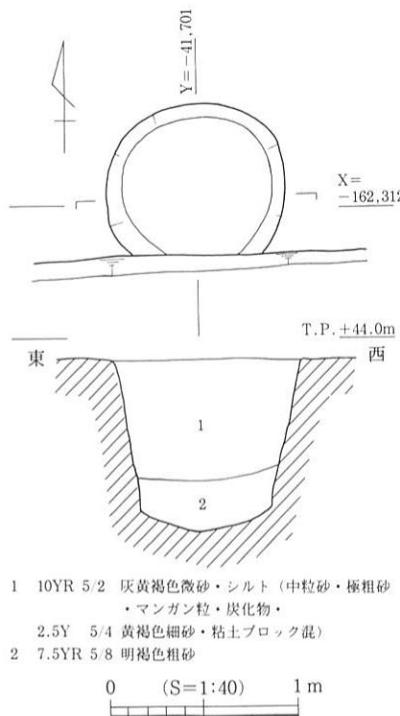


図85 5トレンチ 112井戸平面、断面

物はみられず、素掘りによる構造と思われる。埋土は上下2層に分けられ、遺物は瓦器碗の破片等が出土している。いずれも小片で図化できなかった。建物に近接しているため、その付随施設と考えられる。

また、建物Aの東にもピットが多数検出されており、東西あるいは南北に整列するものもあることから、上記以外にも別の建物が存在した可能性が考えられる。1393ピットは、このようなピット集中部の北端に位置し、径約40cm、深さ約12cmの規模を測る。柱根等の痕跡はみられないものの、遺構内より瓦器碗を中心とする多くの遺物が出土している(図86、図版67)。

また、110・111ピットでは遺構内に礎石を検出した。110ピットは長径約65cm、短径55cm、深さ約45cmを測り、底部に平石を置く(図87)。柱根は確認されなかった。土師器の羽釜片を共伴しているが、小片のため図化できなかった。111ピットは長径約40cm、短径約30cm、深さ約35cmを測り、底部に平石を置く(図87、図版32)。柱根は遺存せず、遺物も出土していない。

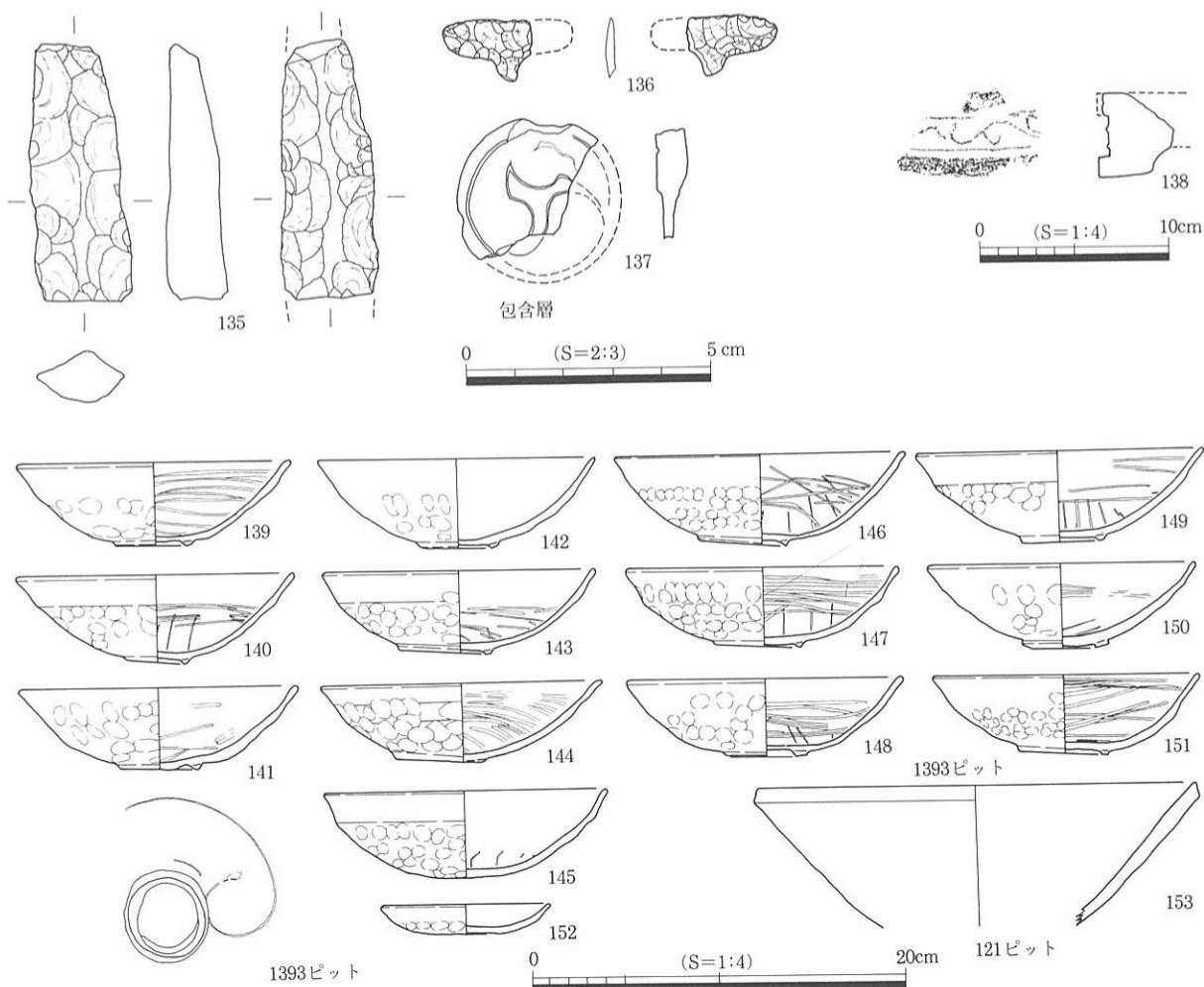


図86 5トレンチ 包含層、121・1393ピット出土遺物

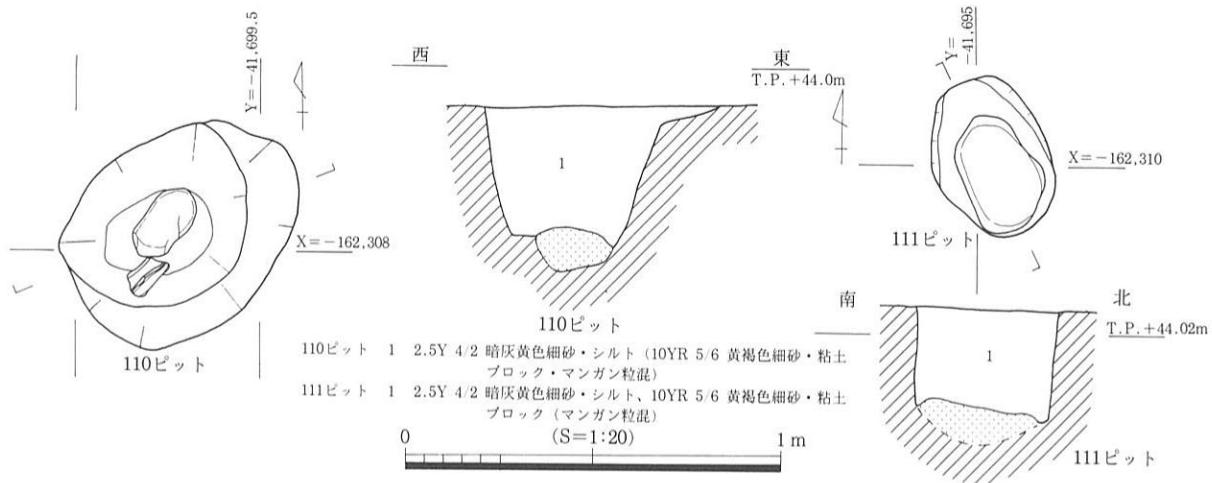


図87 5トレンチ 110・111ピット平面、断面

図86-135から137は包含層より出土した遺物である（図版67）。135と136は石器である。135は両端を欠損しているものの、石槍であると考えられる。ただし、表裏とも自然面を多く残しており、二次調整もほとんどみられないため、製作途中で廃棄されたものと思われる。136も欠損しており、不明品である。石錐の可能性が考えられるものの、錐部も厚さ0.2cmと薄いため、石匙など他の用途の石器とも考えられる。どちらも表面の風化が進む。137は泥面子である。直径は約3.3cmで、表面に三つ巴文が刻まれている。裏面は一部を残して欠損しているものの、型づくりであると考えられる。

図86-138は攪乱より出土した唐草文の軒平瓦である（図版67）。平瓦部は失われ、瓦当部のみ残存する。外区に珠文がなく、唐草文も簡素化されていることから、平安時代末期に相当すると思われる。

図86-139から151は1393ピットより出土した瓦器碗である（図版67）。完形品を多く含むものの残存状態は良好ではなく、磨滅が著しく調整が不明瞭な個体も半数近い。口径は最大で20.0cm、最小で14.2cmを測り、平均は15.2cmである。器高は最大で4.85cm、最小で4.2cmを測り、平均は4.5cmである。外面は指押えとナデで成形し、高台は粘土紐を貼りつけ、ナデで仕上げている。全体的に高台の退化がすすみ、139・143・144は粘土紐が途中で途切れて全周しない。145も高台が剥離して欠損してはいるものの、痕跡を観察する限りでは全周していないようである。また、146は粘土紐の接合部分が不完全であり、なでつけられてつぶれている。148・151は高台の下面に強いナデが施され、断面がW字形を呈する。この2つの瓦器碗は、底部が比較的平らで、内側に盛り上がっているという点でも共通している。外面は炭素吸着の不十分な箇所が多くみられ、142から149と151には重ね焼きの痕跡が観察できる。149は内面に高台が付着した跡があり、これも重ね焼きの痕跡であると考えられる。141は外面にヘラ書き文のような線刻が施される。口縁部はヨコナデで仕上げ、内面は粗い圈線状のヘラミガキ、見込みには平行ミガキが施される。いずれも内湾する体部で口縁部は外反し、端部は丸く納められることから和泉型、また、外面にミガキ調整がみられないことからIII-3期に属し、13世紀後半に相当すると考えられる。

図86-152は1393ピットより出土した瓦器皿である。口径8.95cm、器高1.6cmである。外面底部付近に指押えが残り、口縁は横ナデで仕上げている。内面は磨滅が著しく調整は不明瞭ながら、粗い圈線状のヘラミガキが若干残り、見込み部には平行ミガキが施される。

図86-153は121ピットより出土した瓦質土器の鉢である。復元口径は23.6cm、残存高7.5cmである。残存率も低く、全体に磨滅しているため、調整は不明瞭である。口縁部周辺にススが付着する。擂鉢ではないため、時期は鎌倉時代に属すると考えられる。

6 トレンチ (付図4)

1から3層を除去した後、トレンチ全域において包含層を確認した。層の上面は水平を呈しており、南北方向の鋤溝痕を全面に検出した（図版33）。このような状況は上部からの耕作が包含層の上面に達したためと思われ、場所によっては複数の鋤溝が重複して落ち込み状となっており、度重なる耕作が行なわれたものと考えられる。また、同層の上面では遺構等は確認されなかった。

前述の通り、本調査区の一部では包含層の分層が可能であり、トレンチ全域にみられる上層の4a層を除去すると、Y=-41,760以西のトレンチ北側を中心に下層の4b層を検出した。この層の上面においても遺構等はみられず、包含層の残存しないトレンチ東側においては地山の露頭する状況を確認した。検出した地山はクサリ礫を多く含んでおり、攪乱やわずかな遺構を検出したのみである（図88・図版33）。検出した遺構はいずれも深度が浅く、周辺にみられるような粘土質の地山が検出されずに下部の段丘礫層が表れていることから、地山遺構面は削平を受けた可能性が高い。しかし、この地山と3層耕作土の



図88 6 トレンチ 平面

間には包含層が確認されていることから、このような削平は近世の耕作が開始される以前に実施された整地などによるものと推測される。

トレンチ西側において地山遺構面を確認するため、さらに4 b層を除去すると、トレンチ東側と異なり、遺構が密に存在する状態を検出した（図88・図版33）。これは地山遺構面が北西に向かってわずかに傾斜するため、標高の低い西側に遺構が多く残存したものと考えられる。包含層の層厚は東側のやや高所では10cm程度であるのに対し、地山遺構面がもっとも低い北西隅では30cmを測り、本来は一様に堆積していたものと思われる。

図89-154から167は包含層より出土した遺物である（図版68）。

154は土師質の台付皿である。底部と高台のみ残存し、高台径約7.4cmを測る。すべてナデによる成形を行なう。鳥羽離宮跡出土例に類似した資料があり、11世紀後半に比定されている。155は灰釉陶器の壺である。口縁部のみ残存し、口径約11cmを測る。口縁部はやや垂下しながら開き、上端部をわずかにつまみ出している。外面と内面の一部に緑色の灰釉がみられる。156は青磁四耳壺であり、口径約10cmを測る。口縁部は外反しつつ、端部を垂下させる。頸部と肩部の屈曲点につまみの剥離痕がみられ、残存する間隔から4ヵ所に付加されていたと思われる。全体に緑灰色の釉を施す。157は産地不明の陶器である。口径約10.6cmを測り、肩部に把手またはつまみの剥離痕が残る。中国製の水注や四耳壺に類品があり、時期は11から12世紀頃と思われる。158は青白磁、159は白磁の皿である。ともに口径約10cm、器高約1.5cmを測り、口縁端部は釉を搔き落とした口禿状を呈する。時期は13世紀後半と思われる。160は1078年初鋸の北宋銭「元豊通寶」である。直径約2.4cmを測り、粗悪な銅製であるものの、腐食はあまり進んでいない。161は脚部の鋸型であり、残存長約7.4cm、幅約5.3cmを測る。鋸型内部は径約3.3cmの半円柱状を呈し、上方に2条の凹線を施す。内面全体が溶解金属による還元のため青灰色に変色しており、実際に使用されたものである。162は金属製品であり、直径約5.0cm、厚さ約3.5cmを測る。全体は笠状を呈し、頂部中央に直径約4cmの穿孔を行なう。飾り金具の一種と考えられる。163は土製品であり、長さ約10.3cm、幅約7.8cm、厚さ約2.7cmを測る。全体は将棋の駒に似た五角形を呈し、上方に円形の窪みを設ける。宮本佐知子氏によると、外形の類似する資料があり、秤の錘の一種である権と考えられる。ただし、本例は穿孔されていないために吊り下げることができない点や、土製品である点は、例外的な要素である。重量は233gを量り、1匁を3.75gとすると、約62匁の錘となる。164は蓮華文軒丸瓦であり、瓦当直径は約13.4cmを測る。器面の磨滅が著しく、中房が欠損しているため詳細は不明である。平安前期、9世紀代のものと思われる。165は巴文軒丸瓦であり、瓦当直径は約16.2cmを測る。日置荘遺跡では12世紀末から13世紀初頭に比定される。166は須恵質甕である。口縁端部に面取りを行ない、上部をわずかにつまみ出す。体部外面に平行叩き、頸部外面にハケ調整を行ない、口縁内面から外面にかけて自然釉がかかる。時期は13世紀前半である。167は須恵器器台の脚部であり、底径約30cmを測る。外面に2条の波状文を施す。5世紀初頭と考えられる。

Y=-41,770以東のトレンチ東側では地山上面が削平されているため、西側に比べて遺構は散漫な状況である。とくにX=-162,280以南では近代以降の建物が数棟、X=-162,274、Y=-41,747には現代の廃棄土坑がみられるなど、遺構面の大部分が攪乱を受けている。検出した遺構のうち、わずかな土坑およびピットから遺物が出土しているのみである。

188土坑はX=-162,290、Y=-41,768付近に位置し、東西約1.1m、南北約1.0m、深さ約0.3mを測

る（図92、図版36）。遺構内より土師器・瓦器の完形品と、拳大の自然石が一括して出土した。他に須恵器・スラグ等もみられる。瓦器椀など完形品の多くは遺構底面に正置された状態であり、自然石はその上部に堆積している。遺物の出土状況から、祭祀的な性格をもつ遺構と考えられる。

192土坑はX=-162,286、Y=-41,753に位置する不定形な土坑である。遺構内より土師器・瓦器・青磁・瓦等が出土している。

197土坑はX=-162,284、Y=-41,750付近に位置し、東西約0.6m、南北約0.7m、深さ0.15mを測る。遺物は瓦器・須恵器などが出でている（図92、図版36）。

560ピットはX=-162,275、Y=-41,754付近に位置し、直径約50cm、深さ約25cmを測る（図95・図版39）。遺物は土師器・瓦器・須恵器・スラグ等が出土している。

X=-162,270以北、Y=-41,748から-41,765において、南北および東西方向の溝を複数検出した。南北方向の溝は地軸にはほぼ平行しており、溝に囲まれた範囲の東西間隔は約16mを測る。南北の範囲については、これを示す明確な溝を検出できないため、不明である。このような溝に囲まれた内側は、遺構の残存状態があまり良好ではないものの、南側を中心に土坑・ピットがみられ、また南西部では遺物を含む井戸・土坑がみられることから、建物に伴う区画溝の可能性を考えられる。

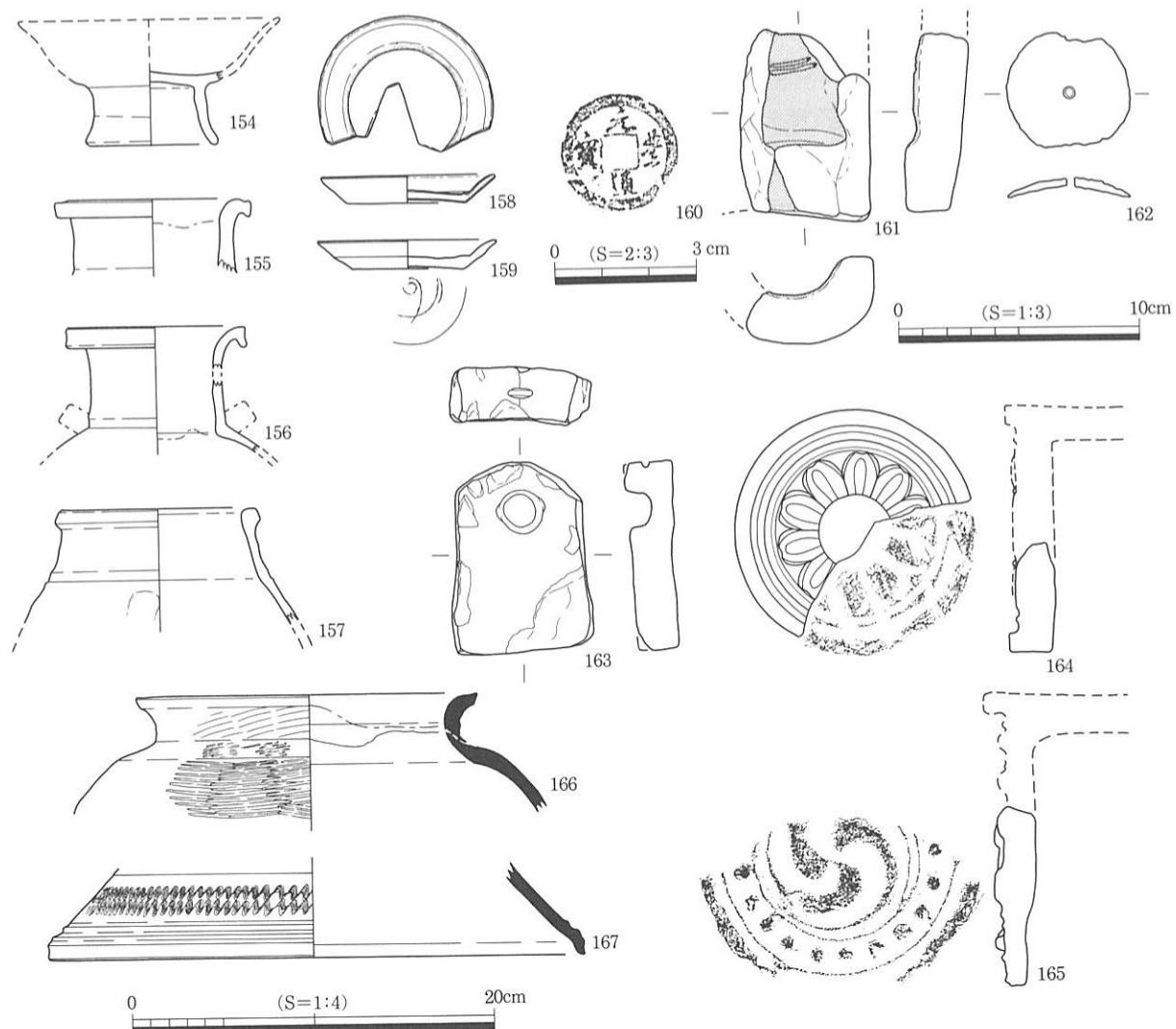


図89 6トレンチ 包含層出土遺物

137井戸はX=-162,267、Y=-41,764付近に位置し、直径約1.2mの円形を呈し、深さは4m以上を測る（図90、図版37）。遺構上部に拳大の河原石を乱積みした2段の石組みの井戸枠を検出した。遺構内には井戸枠に相当する構造物は残存しなかったものの、遺構壁面の内側全体に粘質土の張り付く状況を観察することができ、木製の井戸枠等が腐食した可能性が考えられる。遺物は瓦器・土師器・須恵器等が遺構内より大量に出土しており、とくに埋土の中・下層に集中している。時期としては13世紀中頃から14世紀初頭に比定され、井戸の存続時期もこれに一致する。

520土坑はX=-162,272、Y=-41,766付近に位置し、直径約1.2m、深さ約0.2mを測る（図92、図版35）。遺構は浅い摺鉢状を呈し、遺構内より瓦器碗・皿、土師皿の完形品を含む瓦器・土師器・白磁・瓦などが一括して出土した。完形品の多くは正置の状態にあり、中には2個体を合子状に置いたと思われるものもみられる。地鎮などの祭祀が行なわれたものと思われる。

図91-168から191と195・196は137井戸より出土した遺物である（図版69）。168・171・172は瓦器皿である。168・171はいずれも口径約8.3cm、器高約1.6cmを測り、172のみ口径約9.9cm、器高約1.4cmを測る大型品である。168は内面にナデ調整の際の圧痕、171は外面に切り込み円板技法の痕跡がみられる。171・172は炭素吸着が弱く、やや軟質である。いずれも13世紀前半のものである。169・170は土師器皿であり、ともに口径約8.0cm、器高約1.2cmを測る。成形はすべてナデによる。169の胎土はかなり精致であり、橙褐色に酸化しており、170は胎土に微砂を含み、黄褐色を呈する。いずれも搬入品と思われる。173から181は瓦器碗である。いずれも大きく開く体部に扁平な高台をもち、口縁端部を丸く仕上げる。口縁部は176のみがわずかに内湾する以外、他は全て外反している。調整はいずれも口縁外面に横ナデを一段行ない、体部内面に圈線ミガキと見込みに平行ミガキを施す。ミガキはほとんどが幅3mm前後と太いものの、175・179の見込みは幅1mm未満と細い。177は外面に斜め方向のヘラミガキを施し、古い技法が残る。181は口縁外面に2条の沈線が巡る。高台は全体に退化がすすみ、174から178は粘土紐を軽くなでつけたのみであり、174・176では円形に結合しない。173は断面台形で比較的丁寧な作りであるものの、底部が高台下端より突出し、高台の機能を果たさない。ほとんどの器種は和泉型と思われ、176のみが楠葉型の影響を受けたものと考えられる。いずれもIII期前半に相当し、13世紀後半を中心とする。182は陶器碗であり、口径約14.5cmを測る。内面から体部下半まで淡い青白色の釉を施し、口縁内面に釉垂れがみられる。外面の底部近くには横方向のケズリ痕が残る。183は瓦質鉢であり、口径約23.6cmを測る。内湾しつつ立ち上がる体部に、外反する口縁端部を有する。口縁外面に一段の強い横ナデを行ない、内面はナデの後、粗い圈線状のヘラミガキを施す。13世紀代のものと思われる。184から186・189は土師質羽釜である。184・185・189は口縁端部を「く」字状につまみ出し、球形の体部に発達した鍔が水平に取り付く。184は体部下半にヘラケズリ、内面にヘラ工具によるナデを行なう。器面全体に煤が付着しており、使用されたものである。和泉B型に属し、13世紀代に相当する。185は器面全体が摩滅しており、調整などの詳細は不明である。内面下半に横方向のヘラケズリを行ない、表面には炭化物が付着する。河内B1型に属し、13世紀代に相当する。186は口縁部がわずかに内湾しつつ、端部は丸く収束する。鍔の取付部直上に2ヵ所の穿孔を行なう。胎土が精緻であり、かなり丁寧に作られている。また、外面の鍔下には煤と炭化物が付着する。河内J型に属し、14世紀代のものと考えられる。189は大型品であり、口径約27.8cmを測る。全体をナデにより成形し、鍔下には煤が付着している。河内B1型に属し、時期は13世紀代である。187は瓦質甕の口縁である。口縁部は直線的に外傾し、端部上面をナデにより凹ませる。成形はナデであり、体部外面に縦方向の叩きを施す。東播系須恵

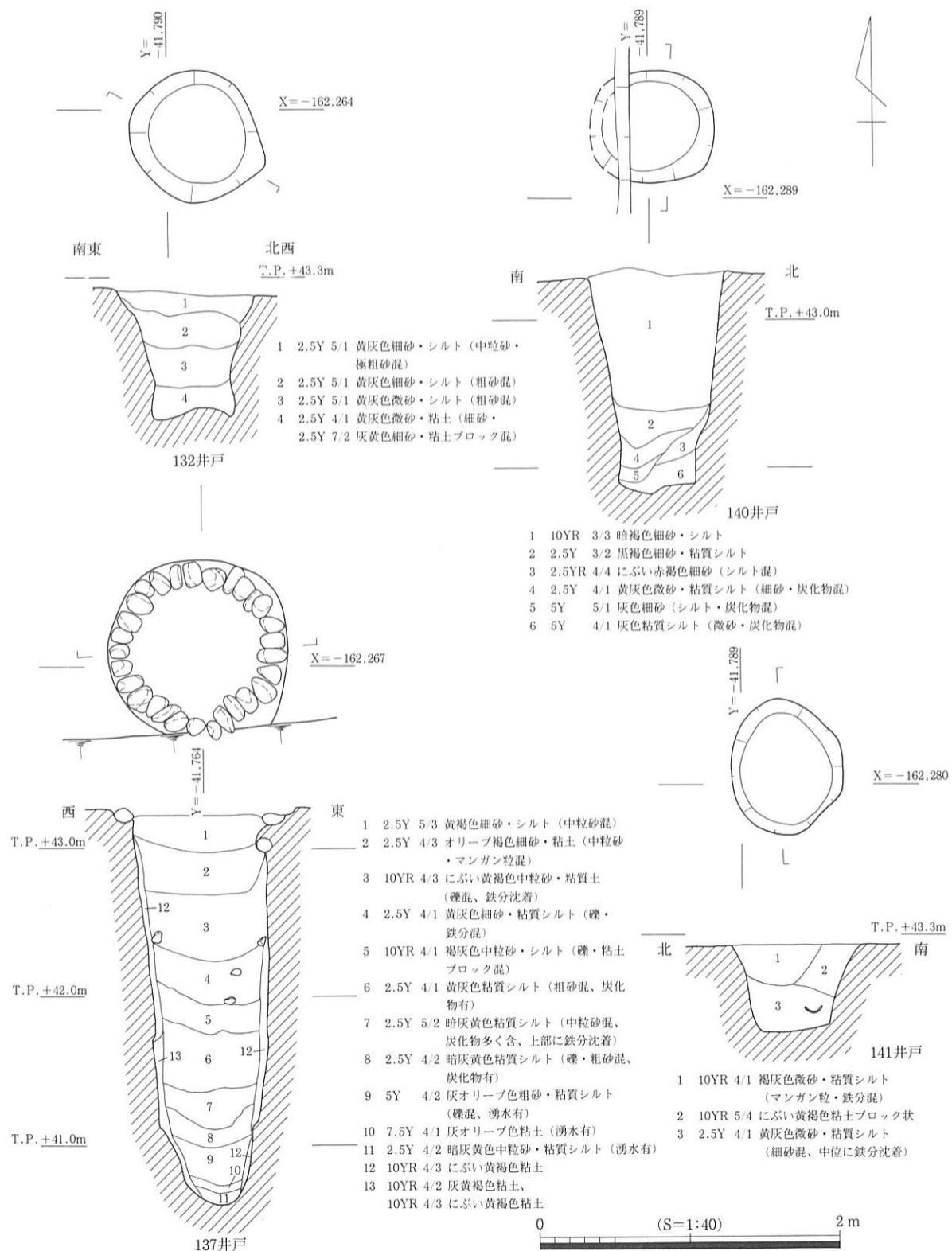


図90 6トレーナー 132・137・140・141井戸平面、断面

器甕の形態を祖形としており、14世紀初頭のものと考えられる。188は須恵質の鉢であり、口径約31.4cmの大型品である。口縁は直線的に外に開き、端部に上下の拡張が認められる。全体をロクロにより成形し、口縁外面に自然釉がかかる。東播系の製品であり、時期は13世紀初頭に相当する。190は口径約42.2cmの土師質甕である。口縁端部に面取りの痕が認められ、外面に横ナデを行なう。191は須恵器の体部である。外面に一段の刺突文と、肩部および体部中位に沈線を施す。時期は7世紀頃と考えられる。195・196は木製品である。195は曲物の底板と思われ、直径約13.5cmを測り、楕円形に変形している。厚さ約2cmを測り、樹種はヒノキである。196は直径約3.8cm、長さ約5.5cmの円柱状を呈し、両側の木口を粗く削って成形する。樹種はヤブツバキである。容器の栓などに使用されたものと思われる。

図93-200は192土坑より出土した青磁碗であり、口径約15.8cmを測る（図版70）。体部外面の全体に片切彫の蓮花文を施し、内外面に灰オリーブ色の釉をかける。龍泉窯系の製品であり、12世紀後半のものと考えられる。

210から212は188土坑より出土した遺物である（図版71）。210は瓦質鉢である。外面に強い横ナデを行ない、口縁部はやや外反する。口径約24.2cmを測る。器壁の磨滅が著しく、調整は不明である。211は大型の土師皿であり、口径約15.0cm、器高2.9cmを測る。口縁外面に横ナデを行ない、体部中位に稜をもつ。橙褐色を呈し、胎土に直径約5mmの石英等を多く含む。212は瓦器碗であり、口径約15.0cm、器高約4.2cmを測る。やや膨らんだ体部と、平らな底部に扁平な高台をもつ。口縁外面に一段の横ナデを行ない、内面に細かい圈線状のミガキと、見込み部に平行ミガキを施す。III期に属し、13世紀後半に相当する。

図94-234から243は520土坑より出土した遺物である（図版73）。234・235は土師皿であり、ともに口径約9.5cm、器高1.8cm前後を測る。いずれも器面の磨滅が著しく、調整は不明である。235の胎土は精緻で淡い橙色を呈しており、234は直径1から4mmの砂粒を含み、粗く褐色を呈する。236・237は土師質大皿である。236は平らな底部から直線的に開く体部を有し、口径約16.2cm、器高約3.0cmを測る。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。胎土は粗く、橙褐色に酸化する。11世紀末から12世紀前半のものと考えられる。237はやや平らな底部から丸みを帯びて立ち上がる体部を有する。口径約18.0cm、器高約3.4cmを測る。底部外面に指頭圧痕がみられるのみで、内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。胎土は粗く、直径1から6cmの石英を多く含む。238・239は瓦質の盃と思われる。ともに口径約7.4cm、器高約3.0cmを測る。ナデによる成形の後、口縁外面に強いナデを一段行ない、明瞭な稜線を残す。238は内面に圈線状のヘラミガキ、見込みに平行ミガキを施す。239は器面の磨滅が著しく、調整は不明である。平城京の出土資料に類似したものがあり、12世紀中頃のものと思われる。240・241は瓦器皿である。240は口径約9.4cm、器高約2.1cm、241は口径約8.9cm、器高約2.0cmを測る。240は口縁外面に一段の横ナデを、241は口縁外面に二段の横ナデを行なう。ともに内面に圈線状のミガキと、見込みに平行ミガキを丁寧に施す。242・243は瓦器碗である。242は口径約14.0cm、器高約5.7cmを測り、半球状で深身の体部に、断面三角形で高さ約8mmのしっかりした高台が取り付く。外面の下半に指頭圧痕が残り、上半は口縁部を横ナデした後、横・斜めのミガキを施す。内面は体部に密な圈線状ミガキと、見込みに格子状ミガキを施す。243は口径約15.6cm、器高約5.5cmを測り、やや外に開く丸い体部に、断面三角形の高台を付ける。外面はナデ調整の後、横方向のヘラミガキを施す。内面は体部に非常に密な圈線状のミガキを、見込みに格子状ミガキを施す。ともに口縁端部を丸く仕上げ、使用するミガキの幅は約1mm前後である。和泉型のやや古いタイプであり、12世紀初頭から前半のものである。

図97-244は147ピットより出土した白磁碗であり、口径約15.6cmを測る（図版73）。直線的に開く体部に、口縁端部を玉縁状に折り曲げる。内面の底部との境に沈線を巡らす。釉は灰白色を呈し、内面から外面下位までを施釉する。また、外面下端には釉を搔き取った痕跡がみられる。12世紀前半のものである。

251・252は597ピットより出土した遺物である（図版73）。251は瓦器碗であり、口径約11.9cm、器高約3.5cmを測る。円弧状のやや浅い体部を呈し、高台はすでに退化してみられない。体部内面に粗い圈線状ミガキと、見込みに平行ミガキの痕跡が残る。時期は13世紀後半から末頃のものと思われる。252は土師質の脚部であり、脚部底径約9.1cm、残存高約7.2cmを測る。ロクロを使用したナデにより成形したものと思われ、下端に面取りを行なう。

遺構残存状況の比較的良好なトレンチ西側では、X=-162,269からX=-162,278の間、Y=-41,788付近にて、276・2017・271溝を検出した。2017溝の南側と271溝の東側は落ち込みにより削られており、溝の全てが四周を巡っているわけではないものの、これらが方形を区画する溝である可能性は高い。検出した範囲は東西約4m、南北約16mを測り、この区画はトレンチ外の西側へのびていると考えられる。また、区画中央部には東西方向の3193溝があり、ちょうどこの方形区画を南北に二分する形となる。区画内にはピット等の遺構が多く、区画東端のX=-162,280、Y=-41,790付近には141井戸、区画外の南東部には140井戸を検出するなど、建物に伴う方形区画である可能性が十分に考えられる。ただし、大部分が西側のトレンチ外に存在していると思われ、全体の性格などについては不明である。

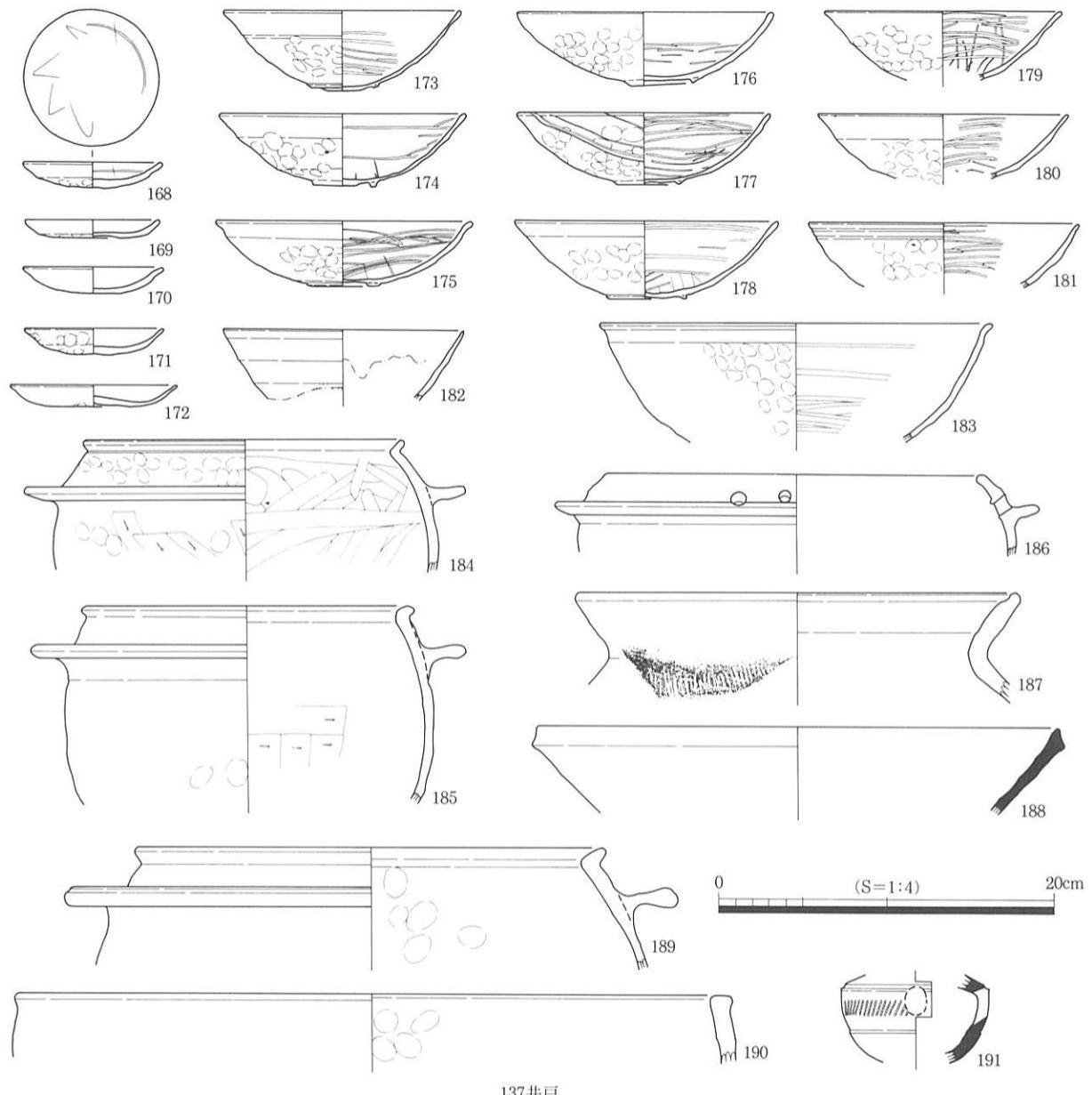
141井戸はこの区画内に位置し、東端のX=-162,280、Y=-41,789付近において検出した（図90）。東西約0.75m、南北約0.9mの楕円形を呈し、深さ約0.6mを測る。埋土は微砂・シルトを基本とする3層に分けられ、中間層は粘土ブロックが堆積していることから、故意に埋められた可能性がある。出土した遺物は小片のみであり、図化には至らなかった。

140井戸は区画の南東、X=-162,289、Y=-41,789に位置し、直径約0.8m、深さ約1.5mを測る（図90）。埋土には砂・シルトが堆積する。遺物は土師器・瓦器・須恵器・陶器・スラグ等が出土しており、とくに遺構底部に集中している。

この区画の北東、X=-162,261、Y=-41,784付近では、東西2間、南北3間の建物Bを復元した（図96、図版38）。建物の規模は梁行約4.3m、桁行約5.75mを測り、288から291、295、307から315ピットに構成される総柱建物である。柱穴以外に施設は確認されず、上屋等の構造は不明である。ピットからの出土遺物は少ないものの、南西の隅柱となる295ピットでは柱根が遺存している（図96、図版38）。

132井戸は建物Bの南西、X=-162,264、Y=-41,790に位置する（図90）。遺構内に井戸枠等の施設は確認されず、素堀りによる井戸と考えられる。直径約0.9m、深さ約0.9mを測る。遺物は土師器・瓦器・スラグ等が出土している。建物Bと南側にある方形区画の中間に位置していることから、これらの建物等の附属施設として利用されたと推測される。

建物Bの東側、X=-162,260、Y=-41,773を中心とするピット集中部がある。これらのピットは東西約9m、南北約8mの方形を呈する範囲に集中しており、その内のいくつかは並んでみられるものもあることから、ここに建物などの存在していた可能性が考えられる。しかし、明確な建物を復元するまでは至らなかった。これは、検出したピットが深いものが多いことから、前述のようにトレンチ東側が整地された際の影響を受けたものと推測される。



137井戸

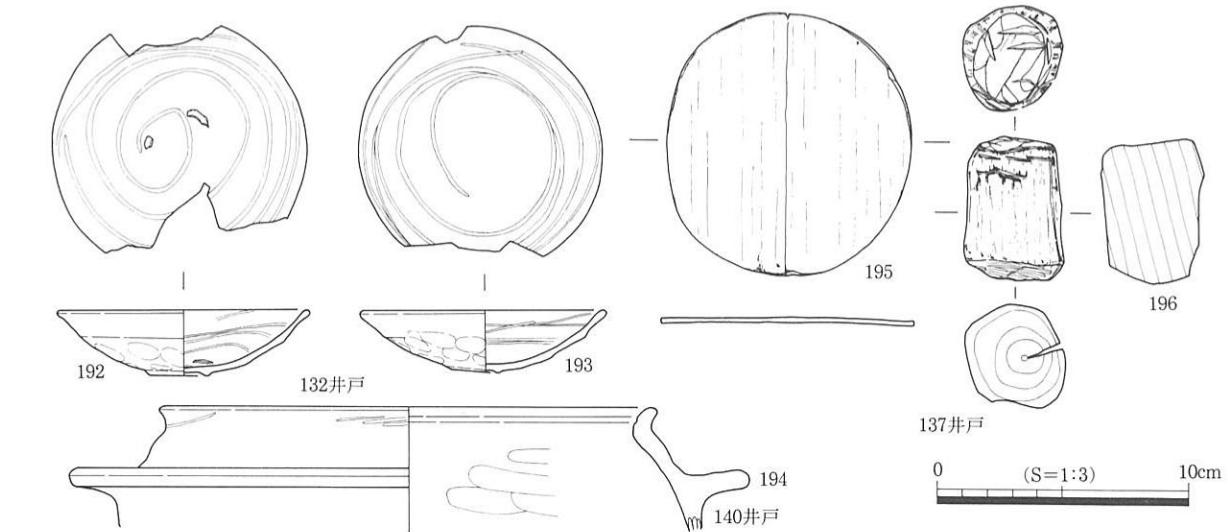


図91 6 ドレンチ 132・137・140井戸出土遺物

344ピットはこのようなピット群の南端、X=-162,262、Y=-41,771に位置しており、12世紀中頃に相当する瓦器などの遺物が出土している（図版38）。

また、このようなピット群の南側、Y=-41,772付近には、南北に約15mほどの範囲に直径50cm前後の土坑やピットが点在する状況を確認した。とくに正確な配列が検出されたわけではないものの、ほぼ同規模の遺構が幅約3mの範囲で南北に長くみられることから、柵列などの構造物に伴う可能性が考えられる。

これらのピット群や建物、方形区画に囲まれるようにして、X=-162,266からX=-162,280、Y=-41,775からY=-41,783の範囲において、南北に長く分布する土坑群を検出した（図版34）。土坑群の規模は、南北約18m、東西約8mを測る。検出した土坑は不定形なものが多く、規模も一定しない。土坑群の北側は大型土坑が複雑に切り合う状況がみられ、これを取り囲むように、土坑群の南側を中心に径1m前後の土坑が存在する。これらの土坑から土師器・瓦器・須恵器・磁器・瓦・スラグなどが出土しており、その内のいくつかは完形の遺物を含んでいる。

同じような様相を呈する土坑の分布は、やや散漫ではあるものの、トレーナーの南西へとのびており、方形区画の南側に小規模な土坑集中部を形成している。土坑は円形・楕円形のものが多く、地山遺構面が低いため、遺構の残りは北側の土坑群に比べ良好である。中でも133・152土坑等では完形品を含む遺物がまとまって出土している（図版34・35）。

このような土坑群は、日置荘遺跡でも検出されており、鋳造作業に伴う粘土採りの痕と考えられている。ただし、遺構の形状や遺物の出土状況から中世土坑墓の可能性も強く、これらの土坑群が周辺地域の中世墓地を示すものとも考えられる。

133土坑はX=-162,293、Y=-41,789に位置し、東西約1.3m、南北約1.5m、深さ約0.45mの楕円形を呈する（図92、図版34）。埋土は砂・シルトを基本とし、底面に粘土ブロックが堆積する。遺物は瓦器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦・スラグ等が出土しており、とくに遺構底部を中心に完形の瓦器碗がまとまって出土している。

131ピットは133土坑の南側、X=-162,295、Y=-41,790付近に位置し、長径約0.6m、短径約0.45m、深さ約0.2mを測る。埋土には砂・シルトが堆積し、遺構内より瓦器・土師器等の遺物が出土している（図95、図版39）。

図91-192・193は132井戸より出土した瓦器碗である（図版68）。いずれも大きく開く扁平な体部に、低平で稚拙な高台をもつ。口縁端部を丸く成形し、外面に横ナデを一段行なう。また、内面には渦巻き状のヘラミガキを、192は2条、193は1条施す。192は見込みに高台の付着痕があり、重ね焼きの痕跡と考えられる。ともにIV期前半に属し、13世紀中頃から後半のものである。

194は140井戸より出土した土師器羽釜である（図版68）。口縁部は「く」の字状に外傾し、肩部にやや上方にのびる鍔が取り付く。口縁部は、端部に弱い面取りを行ない、内側に浅い凹線を施す。また、外面には棒状工具による成形の痕がみられる。器面はかなり摩滅しているものの、内面に強いナデの痕跡がみられる。鍔下には使用に際する煤が付着する。河内B型に相当しており、時期は13世紀後半と思われる。

図93-197・198は133土坑より出土した遺物である（図版70）。197は瓦器碗であり、口径約14.9cm、器高約4.4cmを測る。口縁外面に一段の横ナデと、内面に粗い圈線状のヘラミガキと見込みに平行ミガキを施す。時期は13世紀前半であり、他の多くの瓦器碗も同型式のものである。198は龍泉窯系の青磁

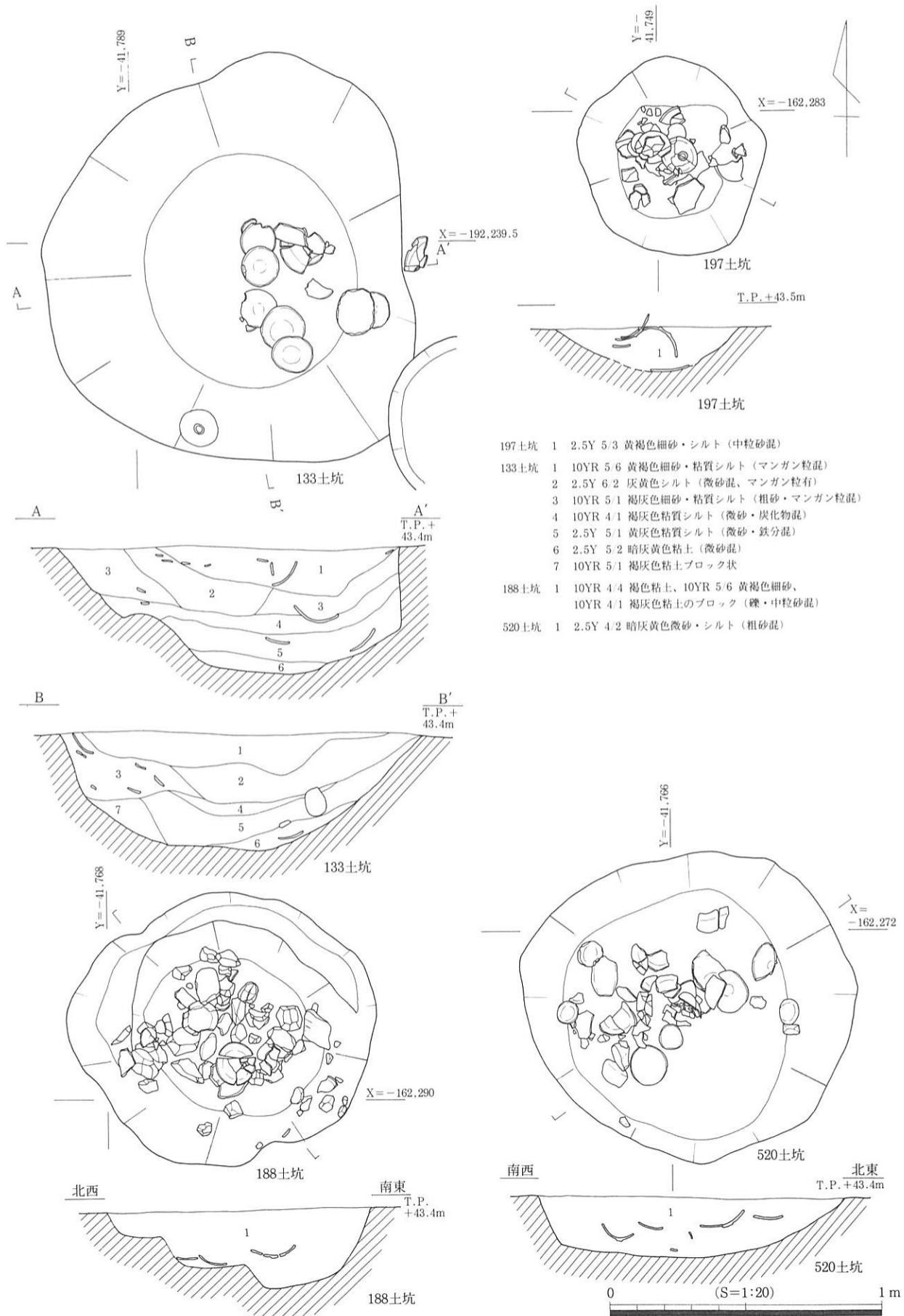


図92 6トレンチ 133・188・197・520土坑平面、断面

椀であり、口径約16cmを測る。内面に片切彫の花弁を施し、全体にオリーブ灰色の釉をかける。時期は12世紀後半と考えられる。

199は173土坑より出土した瓦器椀である（図版70）。口径約14.4cm、器高約5.0cmを測る。やや深めの丸い体部に、断面台形のしっかりした高台をもつ。外面に三段の横ナデを丁寧に行ない、体部内面に緻

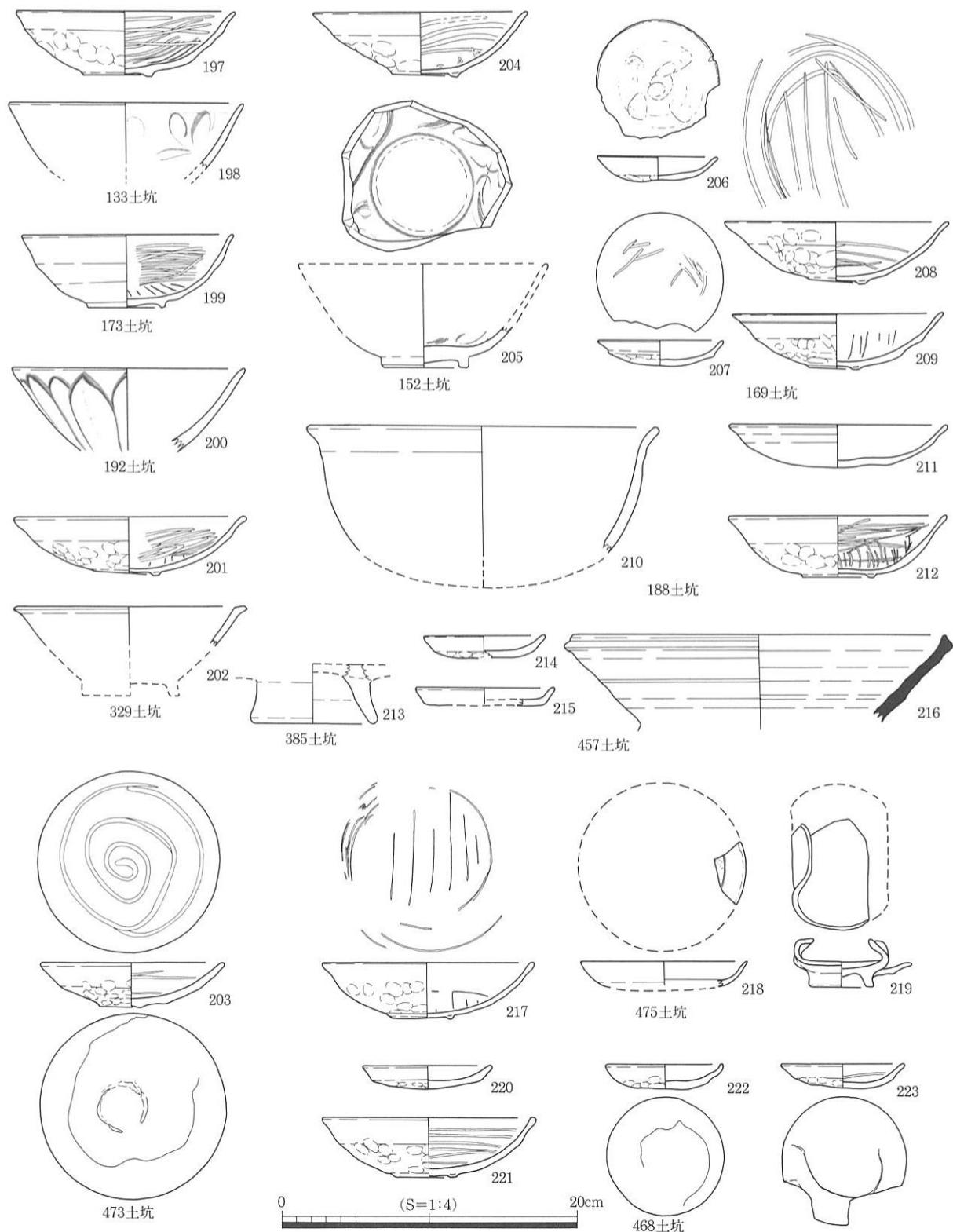


図93 6トレンチ 133・152・169・173・188・192・329・385・457・468・473・475土坑出土遺物

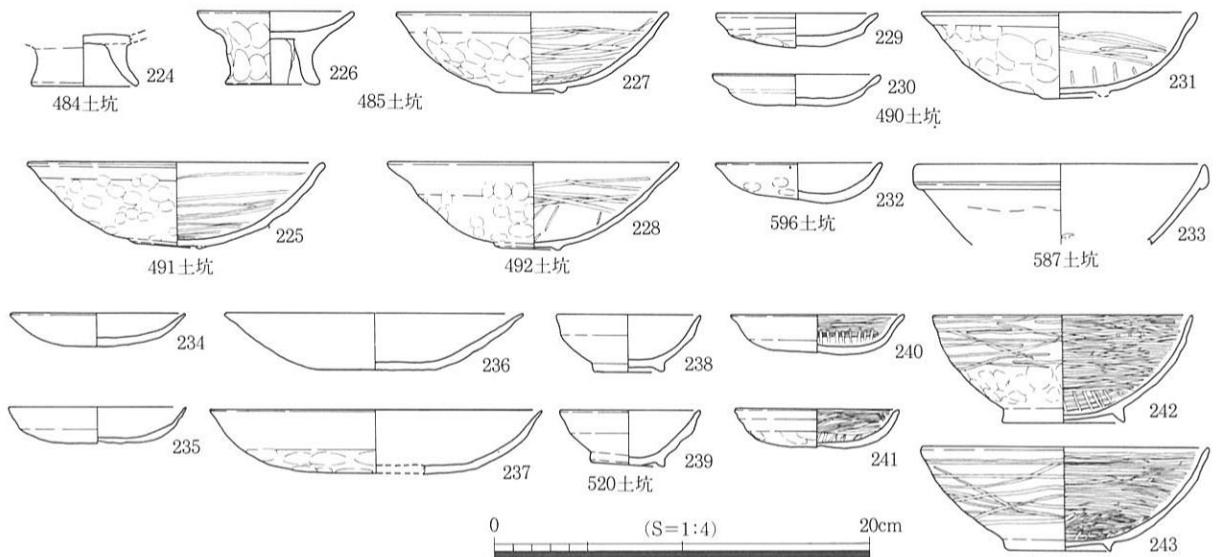


図94 6トレンチ 484・485・490・491・492・520・587・596土坑出土遺物

密な圈線状のヘラミガキと、見込みに平行ミガキを施す。外面にヘラミガキはみられないものの、丁寧な作りであり、12世紀前半のものと考えられる。

201・202は329土坑より出土した遺物である（図版70）。201は瓦器碗であり、大きく開く体部と扁平な高台をもつ。口径約17.6cm、器高約4.4cmを測る。口縁は外反し、外面に横ナデを一段行なう。体部内面に圈線状のヘラミガキと、見込みに平行ミガキを施す。時期は13世紀後半と考えられる。202は口径約16cmの白磁碗である。ほぼ直線的に開く体部に、口縁端部を水平につまみ出す。全体に青白色の釉を薄く施す。12世紀中頃のものと考えられる。

203は473土坑より出土した瓦器碗である（図版71）。皿状の浅い杯部を呈し、退化した高台を貼り付ける。口径約12.4cm、器高約3cmを測る。口縁外面に横ナデを一段行ない、内面に幅約3mmの渦巻き状のヘラミガキを施す。また、外面には粘土紐巻き上げによる結合痕が残る。Ⅳ期中頃のものであり、13世紀後半と思われる。

204・205は152土坑より出土した遺物である（図版70）。204は瓦器碗であり、口径約14.5cm、器高約4.4cmを測る。大きく開く体部に扁平な高台が付く。内面に粗い圈線状のヘラミガキと、見込みにジグザグ状のミガキを施す。時期は13世紀後半に相当する。205は龍泉窯系の青磁碗の底部片である。高台は断面四角形を呈し、内側に癒着した焼き台の痕跡が残る。内面に片切彫の割花文を施し、緑灰色に発色する釉が高台内側を除く全体に施される。時期は12世紀後半に比定される。

206から209は169土坑の出土遺物である（図版70）。206・207は瓦器皿であり、206は口径約8.2cm、器高約1.7cm、207は口径約8.4cm、器高約1.8cmを測る。ともにナデによる成形を行ない、206は内面に分割ナデによる指頭圧痕が顕著にみられる。207は口縁外面を強く横ナデし、体部中位に明瞭な段を残す。208・209は瓦器碗であり、208は口径約15.4cm、器高約4.3cm、209は口径約14.4cm、器高約3.5cmを測る。208は口縁外面に一段、209は口縁外面に二段の横ナデを行なう。ともに内面に粗いヘラミガキと見込みに平行ミガキを施す。皿状に開く体部と扁平な高台をもち、14世紀前半のものと思われる。

213は385土坑より出土した土師器脚部である（図版71）。残存高は4.0cmを測る。胎土は赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。ナデによる成形であり、器壁の磨滅が著しいため詳細は不明である。11世紀中頃の台

付皿の脚部と思われる。

214から216は457土坑の出土遺物である（図版71）。214・215は土師皿であり、214は口径約8.2cm、器高約1.5cm、215は口径約9.4cm、器高約1.2cmを測る。ともに口縁外面に横ナデを一段行ない、器面の摩滅が著しいため、詳細は不明である。214は内面のみ暗茶褐色に変色し、215は底部が平らで、胎土に白色の粘土が混じる。時期は12世紀末頃と考えられる。216は須恵質の捏鉢であり、口径約25.5cmを測る。ロクロにより成形され、体部は直線的に外傾し、口縁端部は上下に拡張がみられる。時期は12世紀初頭である。

217から219は475土坑の出土遺物である（図版71）。217は瓦器碗であり、口径約14.4cm、器高約3.75cmを測る。開いた体部に扁平な高台をもつ。口縁外面に横ナデを一段、内面に圈線状のミガキと平行ミガキを施す。13世紀後半と考えられる。218は白磁皿であり、口径約11.4cmを測る。口縁はわずかに外反し、口縁部と底部の境に弱い段が付く。見込みに線刻文を施し、全体に灰白色の施釉を行なう。12世紀後半と考えられる。219は土師器の耳皿である。長径約9.7cm、短径約3.9cm、器高約3.2cmに復元される。全体的に磨滅が著しく、調整は不明である。

220から223は468土坑より出土した遺物である（図版72）。220は土師皿であり、口径約8.7cm、器高約1.6cmを測る。口縁外面に一段の横ナデを施す。221は瓦器碗であり、開いた体部に扁平な高台をもつ。内面に粗い圈線状のヘラミガキと、見込みに平行ミガキを施す。222・223は瓦器皿である。222は口径約7.9cm、器高約1.7cm、223は口径約8.3cm、器高約1.6cmを測る。ともに口縁外面に一段の横ナデを行ない、底部外面には切り込み円板技法による結合痕が残る。また、223では内面に1条の粗いヘラミガキがみられる。いずれも時期は13世紀後半に相当する。

図94-224は484土坑より出土した土師質台付皿である（図版72）。撥形に開く脚部の底径は約5.5cm、高さ約2.2cmを測る。磨滅が著しく調整は不明であるものの、丁寧な作りと思われる。胎土は精緻で砂粒をほとんど含まず、乳白色を呈する。

225は491土坑より出土した瓦器碗である（図版73）。口径約15.9cm、器高約4.5cmを測る。口縁外面に一段の横ナデ、内面に渦巻き状のヘラミガキを施す。高台は極細の粘土紐をなでつけたのみである。13世紀中頃のものである。

226・227は485土坑の出土遺物である（図版72）。226は土師質の台付皿であり、口径約8.6cm、器高約

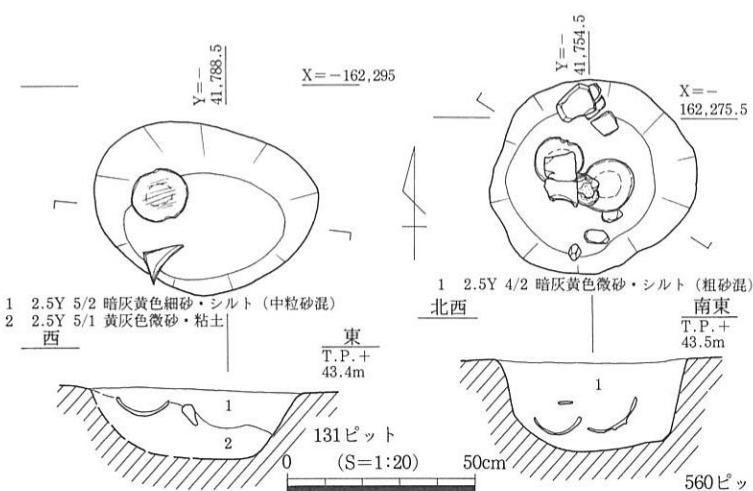


図95 6トレンチ 131・560ピット平面、断面

3.9cmを測る。皿部を成形後、台部は筒状に丸めた粘土板をなでつけたものであり、外面全体に指頭圧痕が顕著にみられる。胎土は粗く、橙褐色に酸化しており、在地産と考えられる。元興寺遺跡より出土した13世紀後半の資料に類似する。227は瓦器碗であり、口径約14.7cm、器高約4.3cmを測る。扁平な体部に退化した高台をもつ。調整は口縁外面に一段の横ナデを行ない、内面に圈線状のヘラミガキ、見込みに平行ミガキ

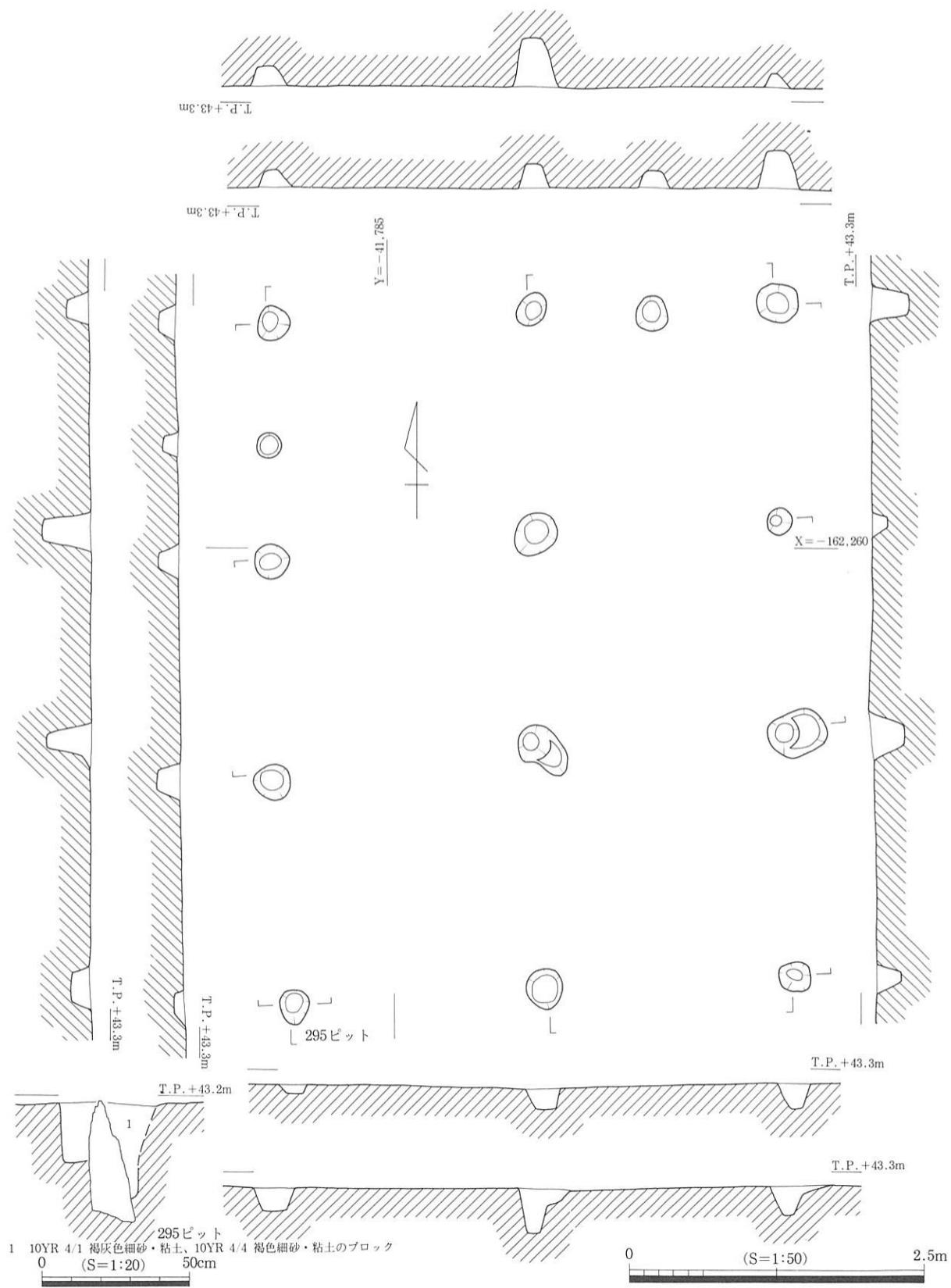


図96 6トレンチ 建物B平面、断面、295ピット断面

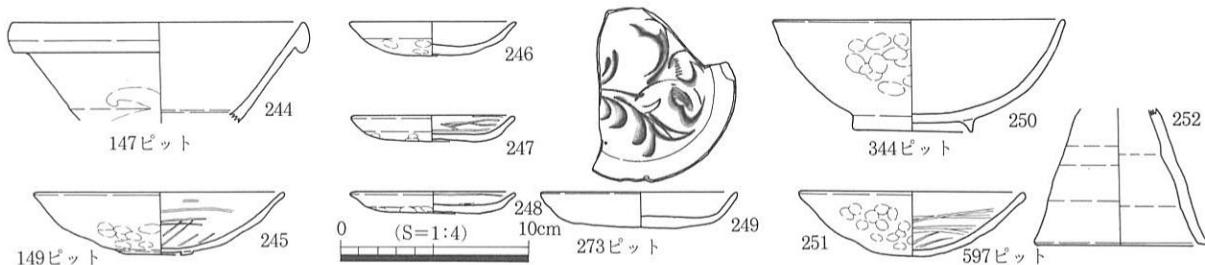


図97 6トレンチ 147・149・273・344・597ピット出土遺物

を施す。13世紀前半のものである。

228は492土坑より出土した瓦器碗である（図版73）。口径約15.5cm、器高約4.6cmを測り、外側に大きく開く体部に退化した高台をもつ。内面に粗い圈線状のヘラミガキと、見込みに疎な平行ミガキを施す。13世紀後半のものである。

229から231は490土坑の出土遺物である（図版72）。229・230は瓦器皿であり、229は口径約8.8cm、器高約1.9cm、230は口径約9.2cm、器高約1.6cmを測る。229の口縁は短く、横ナデによりやや外反する。230の口縁は長く、大きく開いており、体部中位に明瞭な段を有する。とくに後者は丁寧な作りと思われる。231は瓦器碗であり、口径約14.9cm、器高約4.6cmを測る。内湾しつつ立ち上がるやや深身の体部を呈する。高台は扁平で径が小さく、片寄って付く。口縁外面に横ナデを一段、内面に圈線状のミガキと見込みに粗い平行ミガキを施す。時期は13世紀中頃である。

232は596土坑より出土した瓦器皿である（図版73）。口径約8.9cm、器高約2cmを測る。口縁外面に横ナデを一段行なうものの、底部との境は不明瞭である。見込みにジグザグ状のミガキを施す。時期は13世紀後半と思われる。

233は587土坑より出土した白磁碗である（図版73）。口径約15.5cmを測り、口縁端部を玉縁状に折り曲げている。釉は灰白色を呈し、内面から外面中位にかけて施される。時期は11世紀末から12世紀前半に相当する。

図97-245は149ピットより出土した瓦器碗である（図版73）。口径約13.5cm、器高約3.3cmを測る。大きく開く体部と扁平な高台をもつ。内面に粗いヘラミガキと、見込みに平行ミガキを施す。時期は13世紀後半である。

246から249は273ピットより出土した遺物である（図版73）。246から248は瓦器皿であり、いずれも口径8.7cm前後を測るもの、器高が1.2から1.8cmと異なる。246は口縁外面のナデが弱く、円弧状の体部を呈する。247は平底であり、内面に密なミガキを施すものの、器面の剥離が激しい。炭素の吸着が著しく、黒褐色を呈する。248は平底で、内面に圈線状のミガキと平行ミガキを施す。胎土が緻密である。249は白磁皿であり、口径約10cm、器高約1.9cmを測る。ロクロによる成形であり、内面に片切彫の草花文を施す。器面全体に灰白色的釉を施した後、底部の釉を工具などにより掻き取っている。12世紀前半代のものと思われる。

250は344ピットより出土した瓦器碗である（図版73）。口径約15.5cm、器高約6.1cmを測る。やや丸みを帯びた体部に、断面三角形の高台が取り付く。調整は、内外面ともに器壁の磨滅が著しく、詳細は不明である。ただし内面の一部にヘラミガキの痕跡を残す。12世紀中頃のものと考えられる。

7 トレンチ (付図5)

1から3層を除去すると、Y=-41,730以東のトレンチの大部分において包含層が削平されており、地山面が露頭する状況を確認した。これに対し、Y=-41,730以西は包含層の残存状況が良好であった。この4層上面では遺構等は確認されず、同層を掘削し、トレンチ全体において地山遺構面を検出した。

トレンチの南半部、X=-162,270からX=-162,280の間では東西方向の鋤溝がみられる。幅約0.2m、長さ1.5から4.0m、深さ4cm前後を測り、近世以降の耕作痕と考えられる。遺構は溝・土坑・ピットなどがみられる(図98、図版40・41)。遺構は包含層の残存していたトレンチ東端に集中しており、とくに中央部では土坑やピット等わずかな遺構を残すのみである。

1229溝はトレンチ北東部にあり、X=-162,268、Y=-41,691付近より北にのびる遺構である。幅約0.5m、長さ約17m、深さ20cmを測る。北側は調査区外へと続いており、南側は現代の水路により分断されては



図98 7トレンチ 平面

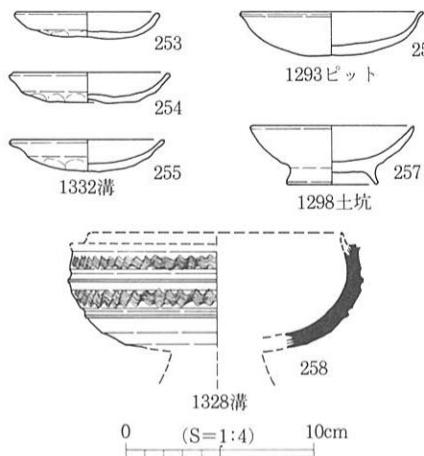


図99 7トレンチ 1328・1332溝、
1293ピット、1298土坑出土

いるものの、8トレンチ2884溝、4トレンチ031溝とつながり94年度東トレンチの698—O Sの西端に達する同一の溝となる。遺物は須恵器・土師器が多く出土しており、8世紀頃を中心とする。

1328溝はX=−162,280、Y=−41,710付近に位置する（図版40）。幅約1.5m、長さ約10.3m、深さ約53cmを測り、周辺の他の遺構に比べて残存状態が良好である。底面はかなりの起伏がみられ、不整形な土坑か、あるいは複数の土坑が重複したものと考えられる。西側に2456・2481溝があり、本溝東端も同規模であることから、鋤溝と土坑が重なった可能性もある。遺物は須恵器片等が少量出土している。

1332溝はX=−162,273、Y=−41,712付近に位置する。幅約20cm、長さ約50cm、深さ約8cmを測り、東西の楕円形を呈する。遺構上部は削平されたものと思われ、わずかに残る遺構底面より瓦器皿が3点出土した。3枚は並んで正置された状態にあり、すべて完形である。

トレンチの北西部、X=−162,260以北、Y=−41,720から−41,730の間で検出した1257・2166・2170・2171・2172溝は幅約20cmと細く、南西から北東へ蛇行しながら調査区外へのびている（図版41）。埋土に均質な砂が堆積しており、この溝は近世の耕作以前に形成されたと考えられる。形状から轍の一種と推測できるものの、二輪の場合のような平行関係はあまりみられず、一輪やソリ等の可能性が考えられる。

1333土坑はX=−162,284、Y=−41,713付近で検出した。直径約1.3m、深さ約8cmを測る。時期を特定できるような遺物は出土しなかったものの、遺構内から川原石が数点出土している（図版40）。

1295土坑はX=−162,273、Y=−41,741付近に位置する。6トレンチの572土坑と同一であり、南北2.5m、東西3.0m、深さ約14cmの浅い長方形の土坑となる。遺構より瓦器・土師器が出土している（図版41）。

1298土坑は1295土坑の南東にあり、直径約60cm、深さ16cmを測る円形の土坑である。遺構内より完形の土師器が出土している（図版41）。

1293ピットは1295土坑の北西、X=−162,270、Y=−41,739付近に位置する。直径約30cm、深さ約8cmを測り、遺構内より瓦器が出土している（図版41）。

X=−162,269、Y=−41,710付近では東西1間、南北2間の建物Cを復元した。南北の柱間距離は約2.0mであり、全体では東西約3.8m、南北約4.4mの規模を測る。1241・1242・1243・2245・2252・2406ピットから成る。ピットの規模は径約40cm、深さ約31cmを測る。柱根等は遺存していなかった。遺物は瓦器の小片が出土しており、中世に相当するものの、詳細な時期は不明である。

図99−253から255は1332溝、256は1293ピット、257は1298土坑、258は1328溝より出土した遺物である（図版74）。253はやや小形の瓦器皿であり、口径7.9cm、器高1.4cmを測る。254・255はほぼ同寸の瓦器皿で口径約8.7cm、器高約1.7cmを測る。調整はいずれも口縁外面に一段の横ナデ、内面にナデ、外面に指頭圧痕がみられる。内面の磨耗が著しく、ミガキ調整は不明である。口径や器高の縮小化から、時期は12世紀後半から13世紀前半に相当すると思われる。256はやや大形の瓦器皿である。焼成が不良で残存状態は悪い。257は土師質の小型碗である。盃状を呈し、口径約8.9cm、器高約3.1cmを測る。すべて回転ナデによる成形である。258は須恵器高杯であり、口縁端部と脚部を欠損する。最大径は16cm、残存高5.1cmを測る。時期は5世紀前半と考えられる。また、トレンチ北壁断面から銅銭が出土している（図版41）。遺構には伴わず、地山直上より出土している。遺存状態が悪く、種類等は不明である。

8 トレンチ（付図6）

1から3層掘削後、4層である包含層がトレンチの全域において確認された。包含層はトレンチの東側ほど残存状態が良好であり、層厚は西側で約5.0cm、東側で約20.0cmある。また、トレンチの北東部では、包含層を2層検出したものの、層界に複数の遺構面は確認されなかった。これらの包含層からは大量の遺物が出土しており、土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類・金属製品・石製品などがみられる。

図101-259から269は包含層より出土した遺物である（図版74）。259は青磁皿である。胎土はやや陶質で、釉の発色は粉青色っぽく、宋代のものと思われる。260は土師質椀である。器壁の厚さが約9mmと分厚く、内面には炭化物の付着がみられる。外面には被熱の痕跡があり、器形からは、一見すると真

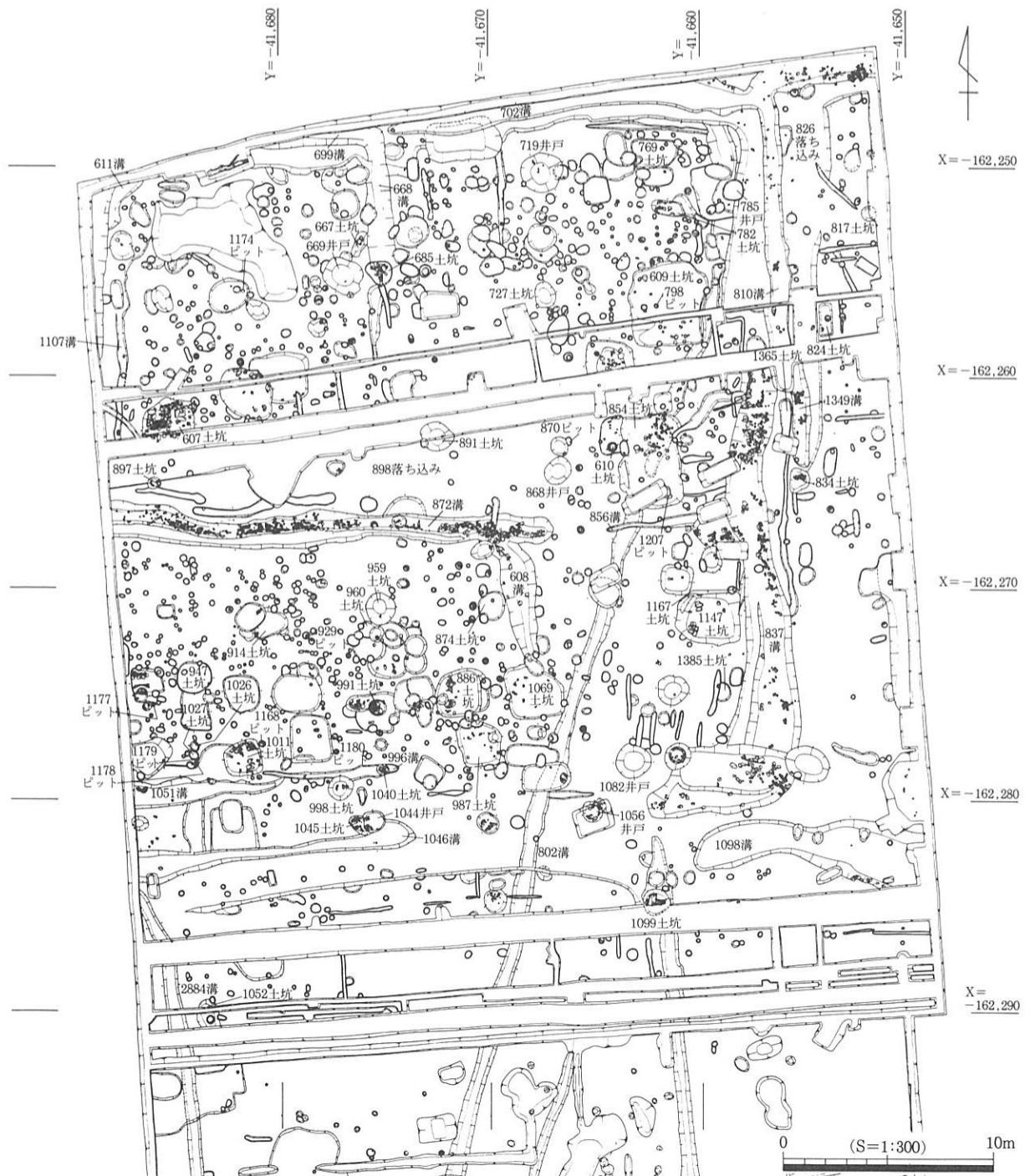


図100 8 トレンチ 平面

福寺遺跡出土の坩堝（とりべ）に類似する。しかし、金属等の付着がみられないことから、別の用途に用いられたものと思われる。261は瓦器皿であり、見込み部に1条の回転ミガキの後、ジグザグ状のミガキを施す。土師皿の形態からは13世紀後半のものと思われる。262は陶器鉢である。14世紀前半の常滑産のものと思われる。口縁端部を軽くつまみ出し、外面の高さ2/3程に強いナデによる段を施す。263は棒状の金属製品である。銅製であり、上部が欠損している。先端が尖っていることから、釘あるいは簪のようなものと思われる。264は鉄製品である。上端が平たく、下端は丸い膨らみをもつ。鋳造の盆や平鉢などの獸脚と推測される。265は輸入磁器である。小型合子の身であり、上半に青白色の釉がかかる。266は北宋錢である。表面にわずかに「皇宋通寶」の文字がみられる。267は那智黒石製の碁石と思われる。268と269は砥石であり、ともに良質の京都産粘板岩を使用した仕上げ砥石であり、表面には使用による擦痕がみられる。

他のトレンチと同様、包含層中の遺構面確認は不可能であったため、地山直上における遺構検出を行なった。その結果、地山直上において検出した遺構には落ち込み・溝・土坑・井戸・墓・石組・ピット等があり、その総数は992を数える（図100、図版42）。これは全調査区における遺構の1/2弱を占める。

包含層の掘削後、最初に検出した遺構は南北と東西方向の落ち込みであり、これらは一辺約33mの方形区画を形成している。それぞれトレンチ北東部、Y=-41,656を中心とする南北の826落ち込み、トレンチ北辺部、X=-162,247を中心とする東西の700落ち込み、トレンチ中央の西側、X=-162,264を中心とする東西の898落ち込み、トレンチ南西部、X=-162,281を中心とする落ち込みを検出した。いずれも遺構の埋土には遺物が大量に含まれており、時期は13世紀後半から14世紀を中心とする。

図101-270から272が、落ち込みより出土した遺物である（図版74）。898落ち込みより出土した遺物は270と271であり、270は輸入磁器である。平底の合子身であり、復元口径は約6.6cmである。上半に青白色の釉がかかる。271は軒平瓦の破片である。唐草文の浮彫りがみられ、7世紀後半頃のものと思われる。272は826落ち込みより出土した鉄製釘である。断面が方形の古い形態をしている。

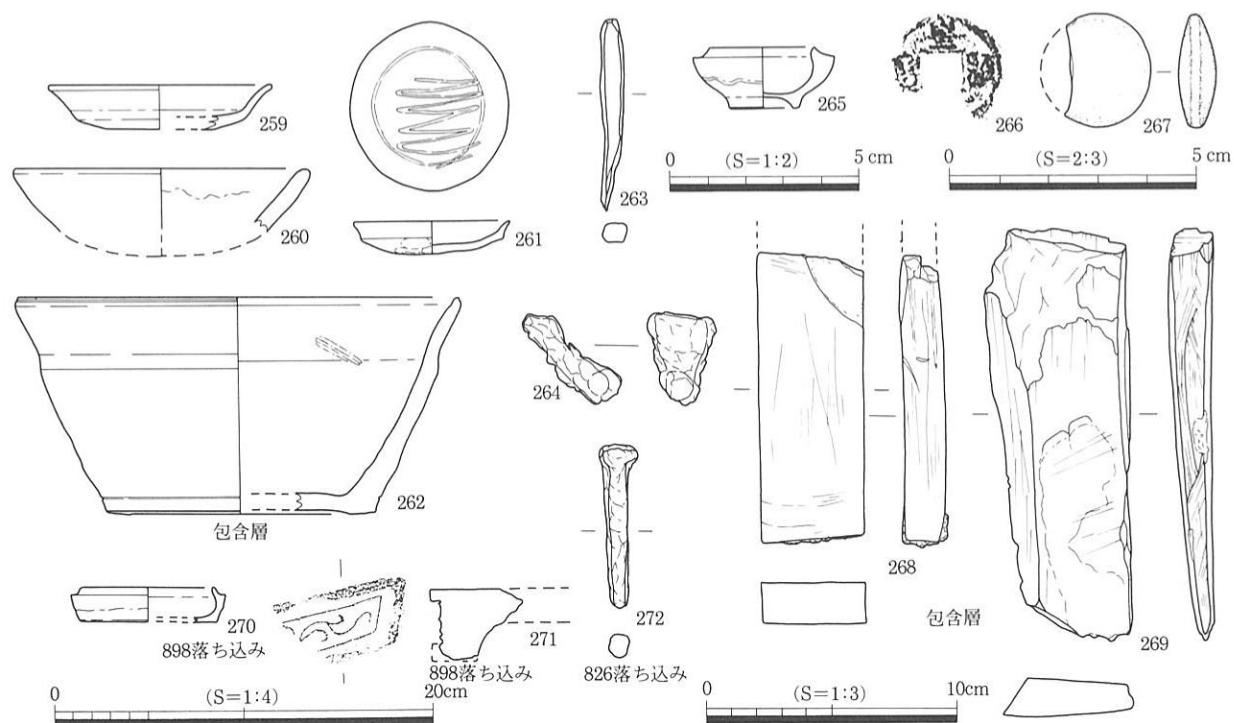


図101 8トレンチ 包含層、826・898落ち込み出土遺物

898落ち込みは前述の方形区画をほぼ南北2つに分割しており、後述する南北方向の溝を含めると、全体としては4つの区画に分割することが可能である。これらの区画内に土坑やピットが集中しており、それぞれ異なった遺構の様相を呈していることから、以下では各遺構をこれら4つの区画毎に分けて説明することにする。

トレンチ北西部は南側を898落ち込み、西側を南北方向にのびる611溝、北側を699溝、東側を699溝か

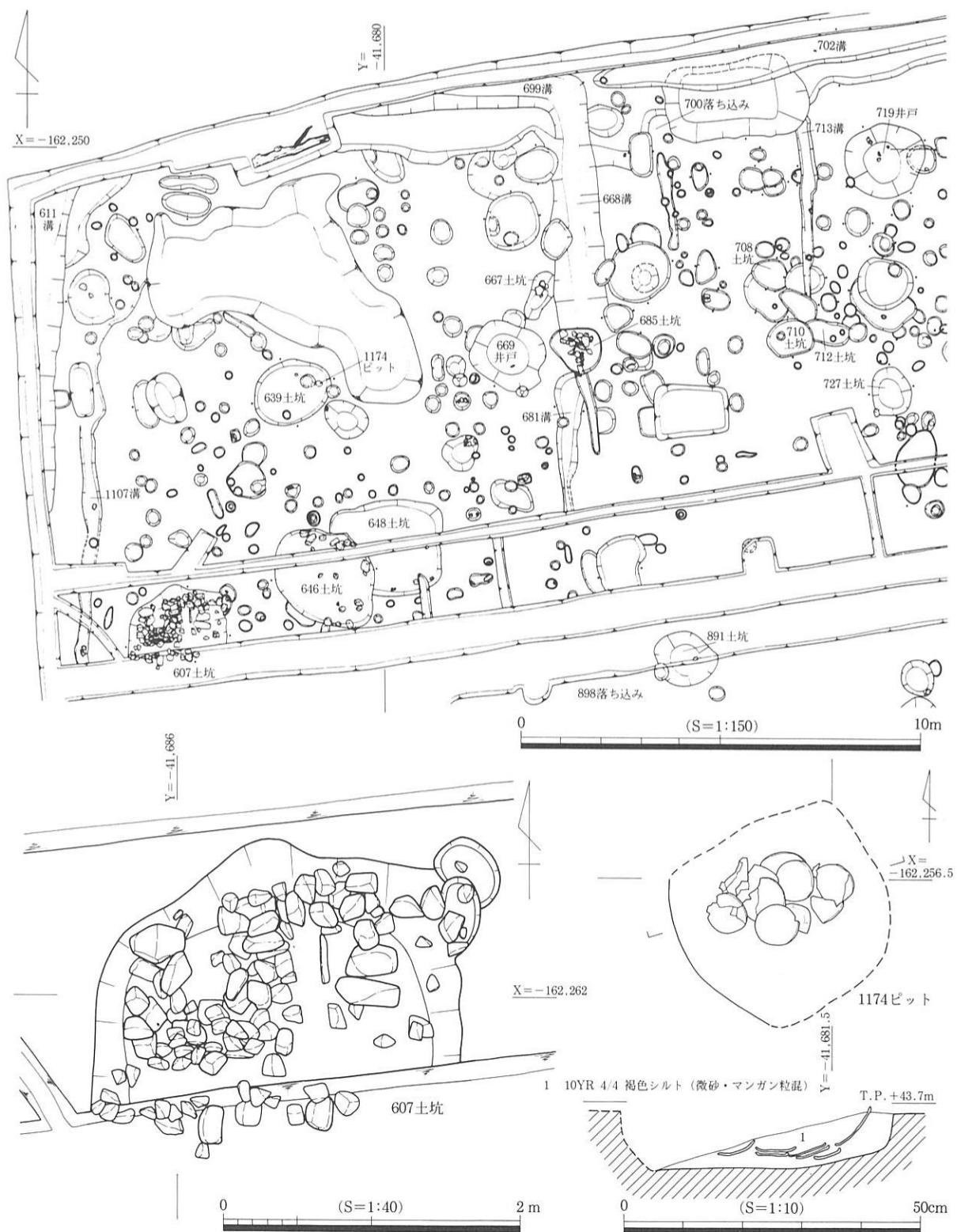


図102 8トレンチ 北西地区平面、607土坑平面、1174ピット平面、断面

ら屈曲し南下する668溝により区画する（図102）。南側は現代の道路、北側はゴミ捨て場と電柱により攪乱されている。

611溝は南北にのびる溝であり、西側を水路により削られているものの、北半の西肩は隣接する7トレンチの1252溝と思われる。残存する幅は約1.5m、深さ約45cmを測り、復元した溝の幅は約5.0mとなる。出土した遺物は中世の土師器・瓦器・須恵器がみられる。これより東約1mに、南北にのびる1107溝がある。北側は段落ちの状態で611溝につながっているものの、南側は幅約33cmのまま南にのびている。同じような状況は東側の668溝にもみられる。

699溝は東西にのびる溝であり、Y=-41,676付近にて屈曲し、南へのびる668溝となる（図版44）。溝は幅約1.25m、深さ約55cmを測り、延長約10mにわたり検出した。出土した遺物には中世の土師器・瓦器・須恵器・瓦・スラグ・砥石等がある。前述と同様に、668溝と軸は異なるものの、やや西寄りに681溝が南にのびている。これらの溝により区画される範囲は東西約12.5m、南北約15mを測る。

668溝のさらに東には、南北方向の713溝がある。幅約40cmと小規模なもの、この溝の延長が、南側の南北の区画溝と考えられる608溝と一致することから、区画溝の名残である可能性もある。また、これを区画溝と考えるならば、区画の東西幅は約18mとなり、東西と南北がそれぞれ6間×5間の規模となる。699溝と668溝は700落ち込みの下面より検出した遺構であり、溝による区画は初期の段階であり、最終的に落ち込み等による区画の規模になったと考えられる。1107溝や713溝は後者の時期に近いと思われ、この区画に関しては時期が下るにつれ、規模が拡大したと推測される。

区画内において検出した遺構は、土坑・井戸・ピットである。

土坑にはその検出状況や構造、遺物の出土状況からいくつかの特徴があると考えられる。これらの土坑の各区画における構成は、それぞれ異なった様相を示しており、この特徴が区画全体の性格を考える上で有効であると思われる。しかし、井戸やピット等、他の遺構との関連も含めて検討する必要があることは言うまでもない。

区画北側に多くみられる土坑は、667・685土坑などのように単独で遺物を含むものが多い。667土坑は長径約1.3m、短径0.6mを測り、遺物に13世紀後半の土師器・瓦器・須恵器・備前が出土している（図版50）。685土坑は668溝の南端に位置し、直径約1.3m、深さ約10cmを測る。遺構内より人頭大までの自然石や13世紀前半の土師器・瓦器・須恵器・陶器・瓦・砥石がまとまって出土していることから、祭祀的な意味をもつ遺構と思われる。

区画東端にみられる708・710・712土坑などのように、1ヶ所に複数の土坑が集中しており、大体において遺構どうしが切り合い関係にあることが多い。また、遺構内より完形品含む数点の遺物が出土する。同様のものは北東区画にもみられ、遺構の検出状況から墓壙群の可能性が考えられる。本区画内では各遺構とも削平によるためか深度が浅く、遺物の出土のみられないものが多い。

別に区画南側の646・648土坑のようなやや大きめの土坑がある。646土坑は長径約3.0m、短径約2.2m、648土坑は一辺約2.5mを測り、いずれも深度が浅く、遺構底面が平滑であり、遺物の出土も少ないことから、土間など、建物に付随する施設ではないかと思われる。

上記以外には、区画北東に位置する701土坑のような大型で深い遺構もある。701土坑は東西約3.5m、南北約2.0m、深さ約83cmを測る（図版54）。遺構内より13世紀前半の土師器・瓦器・須恵器・陶磁器・瓦等が大量に出土している。このような土坑は他の区画にはみられず、大型の廃棄土坑と思われる。607土坑は東西約2.5m、南北約1.6mの方形を呈し、深さ約49cmを測る（図102、図版48）。南半を現代

の道路により削平されている。土坑内より人頭大の自然石が大量にみつかり、一部人為的に積まれたような痕跡が認められる。また、これらの石の中には被熱の痕が残るものもある。遺構が浅いため、井戸とは考えにくいものの、性格については不明である。埋土から土師器・瓦器などの遺物がわずかに出土している。

井戸と確認されるものは、X=−162,255.5、Y=−41,677にある669井戸の1基のみである。長径約1.7m、短径約1.5mを測り、深さ約2mまで調査を行なった。円筒状に掘削され、内部施設のない素掘りの井戸である。埋土から中世の土師器・瓦器・須恵器・陶磁器・瓦、古代の須恵器などが出土している。13世紀末から14世紀初頭には埋没したと思われる。これ以外には、区画南東の891土坑が可能性は高い。遺構規模は直径1.5m、深さ約75cmを測る。遺構北側を大きく攪乱されているため、井戸とは断定できない。遺物は13世紀前半の土師器・瓦器・砥石等が少量出土している。

ピットは区画南側に多く、北側の攪乱を除けば、669井戸の西側に建物の存在を考えることが可能である。しかし、遺構からの出土遺物が少ないため時期が特定できず、残念ながら明確な建物の位置等は確認されなかった。区画の中央部、X=−162,257、Y=−41,682付近において1174ピットを検出した(図102、図版61)。ピットは北東側の大半を削られており、復元すると直径約70cmを測る。内部より土師皿約10個体分が出土しており、土器埋納ピットと思われる。

図103−273から278は668溝より出土した遺物である(図版75)。273から275は瓦器碗であり、高台が

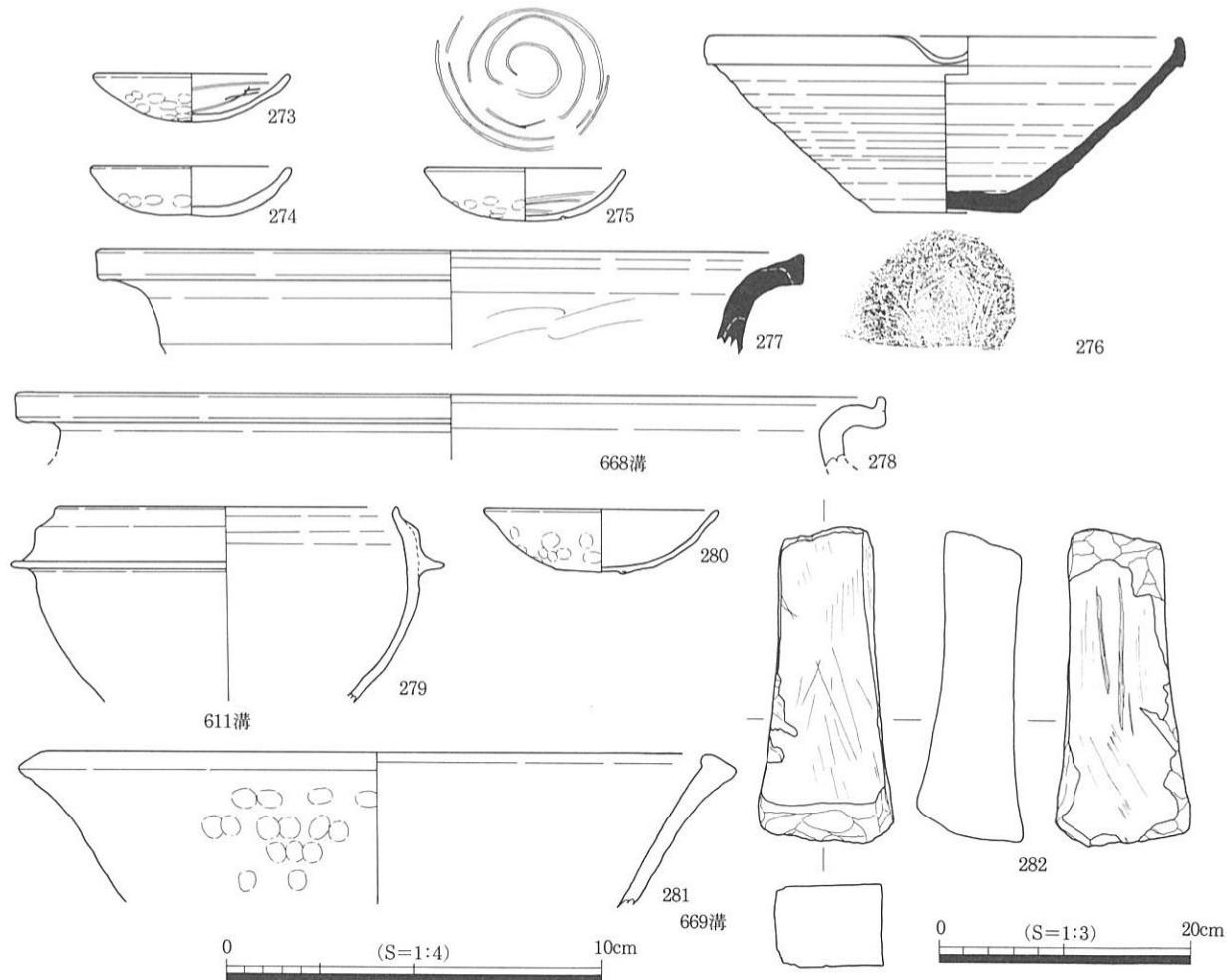


図103 8トレンチ 611・668・669溝出土遺物

退化し、丸底状を呈する。内面に螺旋状のヘラミガキを施しており、13世紀末から14世紀初頭のものである。276は須恵質の片口鉢である。口縁端部の上下拡張が明瞭であり、外底面に回転糸切痕がみられる。277は須恵質甕の口縁部である。いずれも東播窯系のもので、13世紀前半から後半のものと考えられる。278は陶器甕の口縁部であり、端部をつまみ上げており、全体に灰釉がかかる。常滑産であり、13世紀代のものと思われる。

279は611溝より出土した瓦質羽釜である（図版75）。口縁端部がわずかに外反し、鍔の突出は少ない。14世紀代のものと考えられる。

280から282は699溝より出土した遺物である（図版75）。280は瓦器椀であり、内面は摩滅により詳細は不明であるものの、扁平な高台をもっていることから、14世紀初頭のものと思われる。281は瓦質の捏鉢であり、口縁端部が内側に肥厚している。東播系あるいは常滑の模倣と考えられ、13世紀末頃のものと思われる。282は砥石である。良質の凝灰岩を使用しており、表面に使用による擦痕がみられる。

図104-283から288は607土坑より出土した遺物である（図版76）。283は土師皿、284は内面に螺旋状

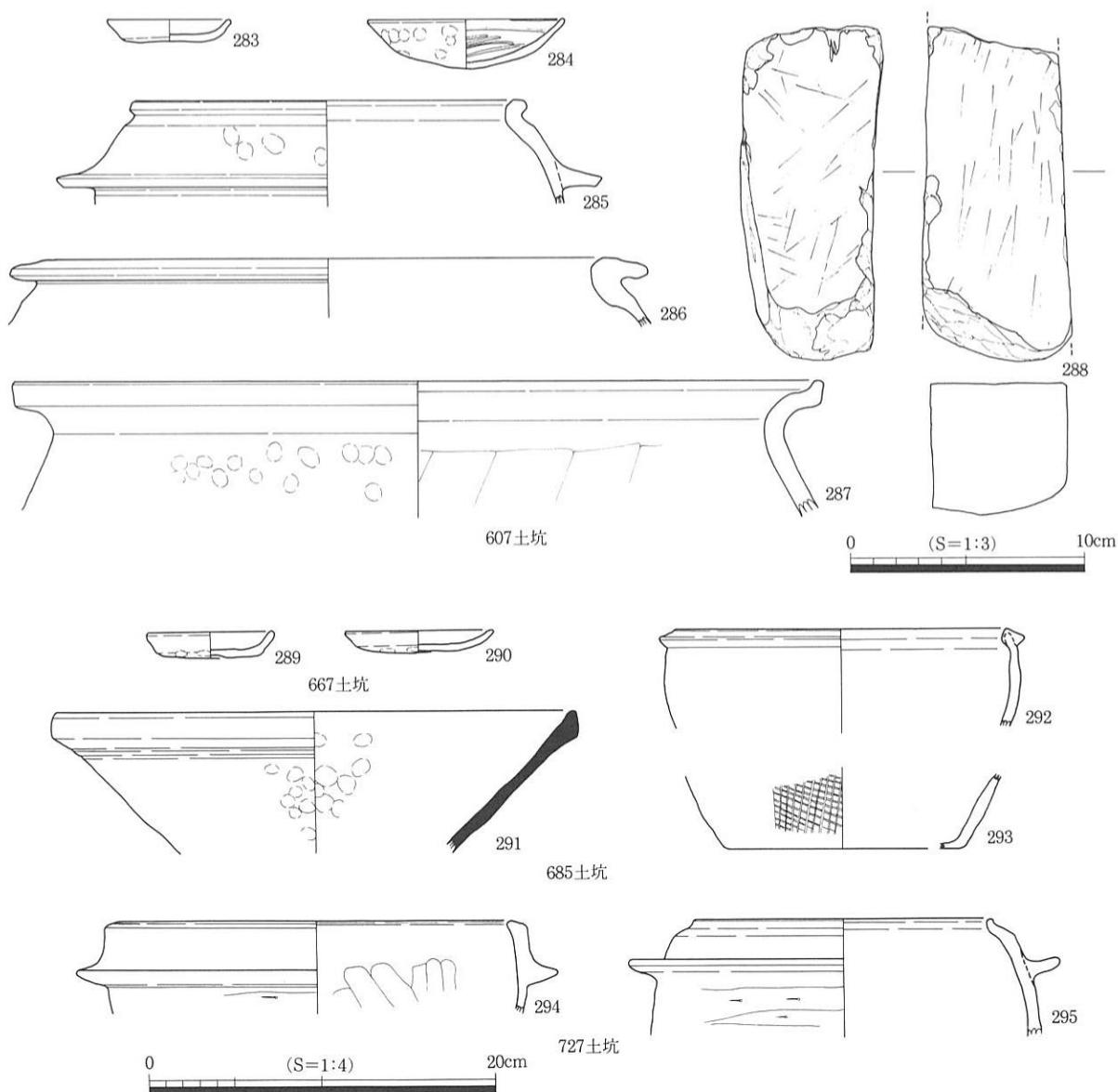


図104 8 トレンチ 607・667・685・727土坑出土遺物

と平行のミガキを施す、無高台の瓦器碗である。285は口縁がわずかに外側に折り曲げられた瓦器羽釜であり、286は口縁が大きく外側に屈曲する土師質甕である。287は大甕の破片であり、常滑産と思われる。口縁端部をナデにより上方につまみ上げており、内面にヘラ状工具によるナデがみられる。土器はいずれも13世紀後半から末頃のものである。288は大型の砥石であり、石材に凝灰岩を使用する。

289と290は667土坑より出土した遺物である（図版76）。289は土師質小皿、290は瓦器小皿であり、ともに13世紀末のものである。

291から293は685土坑の出土遺物である（図版76）。291は須恵質の捏鉢であり、口縁は直線的に開き、端部が上下にやや拡張される。292は陶器鉢口縁の破片であり、口縁端部に粘土を付け足し、外側に突出させる。293は瓦質甕の底部であり、胴部外面に格子状の叩きを施す。13世紀前半のものである。

294と295は727土坑より出土した遺物であり、いずれも瓦質羽釜である（図版76）。294は直線的に立ち上がる口縁に断面三角形の鍔がつく。295は口縁端部をわずかに上方に折り曲げている。14世紀初頭のものと思われる。

図105は8トレンチの井戸より出土した遺物である。296と297は669井戸の出土遺物である（図版76）。296は土師皿であり、外底部に切込み円板技法による粘土接ぎの痕がみられる。297は瓦器碗であり、内面に3条の螺旋状ミガキがみられる。13世紀末から14世紀初頭のものである。

298は785井戸より出土した瓦器碗である（図版76）。やや丸い体部に扁平な高台がつき、体部内面に圈線ミガキと見込み部に平行ミガキを施す。13世紀後半のものである。

299から305は719井戸より出土した遺物である（図版77）。299から301は土師皿であり、301は外底面に粘土接ぎの痕が残る。302から305は瓦器碗であり、いずれも高台はみられない。内面のミガキは螺旋状であり、13世紀末から14世紀初頭のものである。

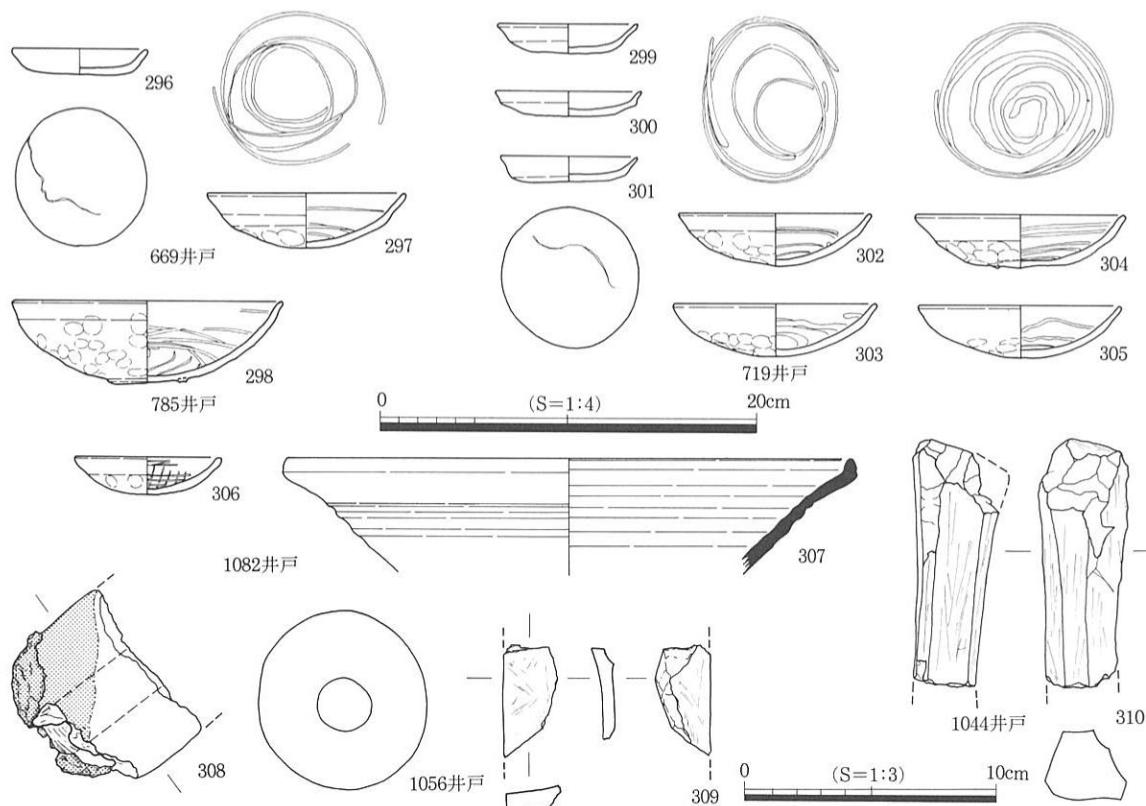


図105 8トレンチ 669・719・785・1044・1056・1082井戸出土遺物

306・307は1082井戸の出土遺物である（図版76）。306は瓦器皿であり、体部内面に圈線ミガキ、見込み部に格子状ミガキを施す。307は口径29cmの須恵質擂鉢である。口縁がやや外反しながら外に開き、端部は上方にのびる。内外面に成形の際の水挽き痕が顕著にみられる。12世紀後半のものと思われる。

308・309は1056井戸の出土遺物である（図版77）。308は轍の羽口であり、先端部に溶解したガラス質が付着する。309は砥石の破片であり、石材は粘板岩である。

310は1044井戸より出土した砥石である（図版77）。かなり摩滅しており、表面に擦痕が顕著にみられる。

8 トレンチ北東部は調査区北端を東西にのびる702溝と、X=-162,245、Y=-41,657付近にて合流する南北の810溝、1349溝により区画される（図106）。区画の西端については、北西区画との境界が関わってくるため、668溝あるいは713溝のどちらかが対応するものと考えられる。両溝によって北西区画の規模が異なるのと同様、本区画も668溝を西端とする場合は東西6間、713溝の場合は東西4間となる。1349溝以西はすでに記述しているため、ここでは1349溝より東側を中心説明することにする。なお、区画南側はトレンチ中央を東西にのびる872溝と、これの延長上にある856溝により区画される。

702溝は北西部の668溝と699溝の屈曲部付近より東にのびる溝であり、東端は810溝の屈曲部に至る（図106、図版44）。溝の北側が調査区外であるため詳細は不明であるものの、幅約1.5m、深さ約25cm、長さ約17.5mにわたり検出した。遺物としては中世の土師器・瓦器・須恵器・陶磁器・瓦や古代の須恵器が出土しているものの、図化するまでには至らない。

区画東側はX=-162,264.5、Y=-41,655より北にのびる1349溝と、Y=-41,657付近にて西に屈曲する810溝により形成される。810溝の南端と1349溝の北端は現代の道路による攪乱のため欠陥しており、詳細は不明であるものの、おそらく同一の溝と思われる（図106）。これによる溝の規模は、南北部分が幅約80cm、深さ約22cm、長さ約18mを測り、東西部分は北半が調査区外のため幅は不明であるものの、深さ約21cm、長さ約6mを測る。遺物には中世の土師器・瓦器・須恵器・陶磁器・瓦が出土しており、他に古代の遺物も混じる。

702溝と810溝は、検出段階では切り合い関係は確認されなかったものの、形状から2本の溝に分かれるものと考えた。ただし北西部と同様に、702溝と810溝が同一である可能性も考えられる。また810溝が東に屈曲し、さらに調査区外へのびていることから、810溝と837溝の東側に新たな区画が存在するものと推測される。

837溝は1349溝の西側、X=-162,258、Y=-41,657付近より南にのびる溝であり、おもに南東区画の東辺を形成している（図106・115、図版42・43）。X=-162,261付近では遺構底面より多量の自然石が出土しており、その一部が南北方向の列を成しているものがあることから、これらの石が人為的に持ち込まれたと推測される。

856溝は幅約20cm、長さ約4mの東西にのびる細長い溝である。東側は攪乱により失われているものの、837溝につながると思われる。西側は次第に浅くなり、872溝との間隔は約2.5mを測る。遺物は中世の土師器・瓦器・須恵器・瓦などが出土している。

図107-311から319は810溝より出土した遺物である（図版75・77）。311は瓦器皿であり、内面に鉤状の暗文を放射状に施す。312から313は土師皿である。314と315は瓦器碗であり、314は見込み部にジグザグ状ミガキを施した後、体部内面に圈線ミガキを施す。13世紀後半から末にかけてのものである。

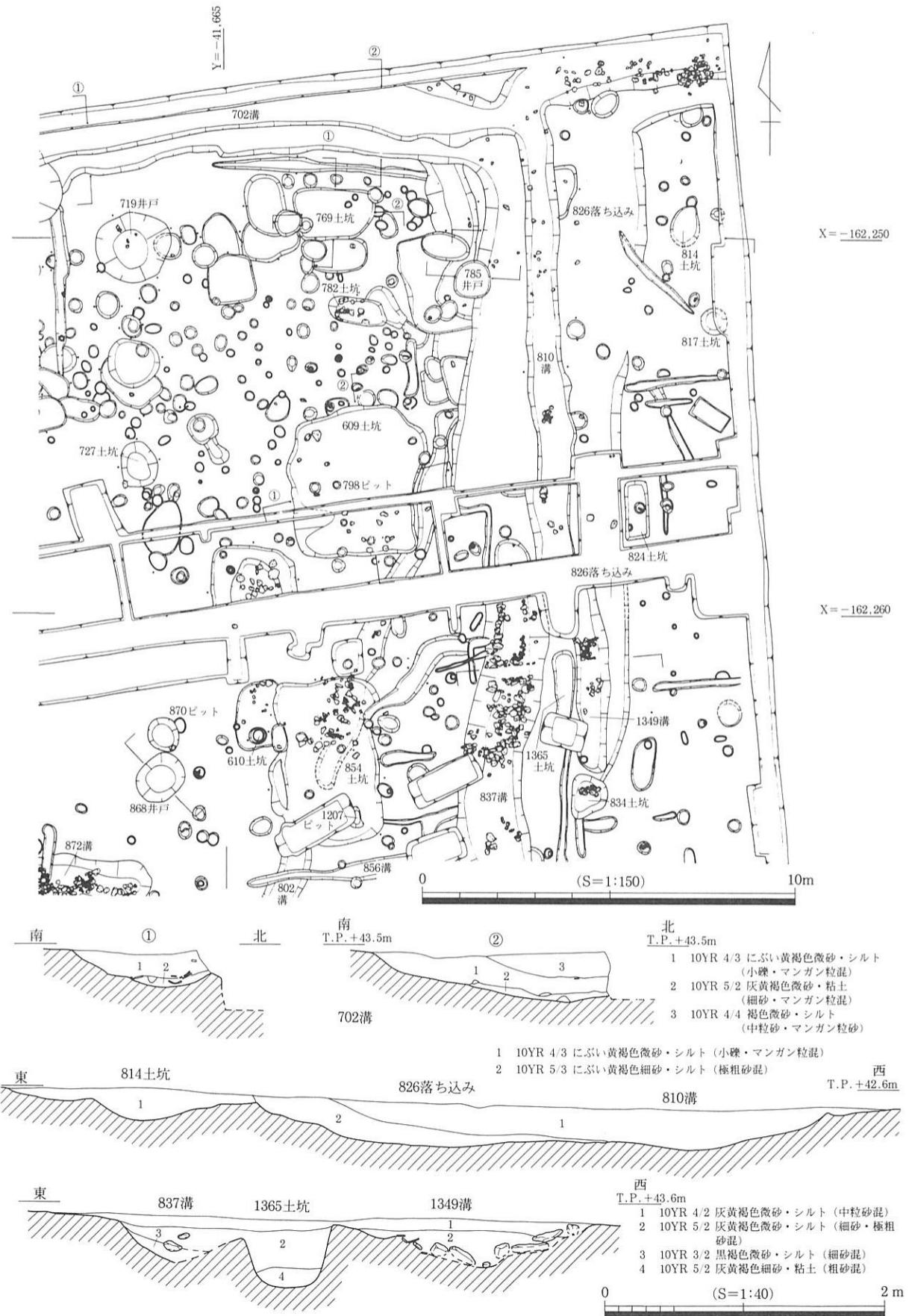


図106 8トレーナー 北東地区平面、702・810・837・1349溝、814・1365土坑、826落ち込み断面

316は輸入磁器の口縁部である。青磁輪花碗であり内面に線彫りを施す。南方窯系の製品と思われる、13世紀代と考えられる。317は瓦質羽釜であり、口縁部外面に2条の凹線を施す。14世紀代のものと思われる。318は須恵質甕、319は常滑甕である。

320は1349溝より出土した遺物であり、青磁碗の底部である（図版75）。14世紀頃のものと思われる。

区画溝以外に検出された遺構は、溝・井戸・土坑・ピットなどがある。区画内は北側に密集する長方形の土坑群と、これよりやや中央寄りに検出されるピット集中部、中央より南側の大型土坑を中心とする遺構群に分けられる。井戸は区画内の北西、北東、南西のそれぞれの隅に位置しており、区画内が明確に使い分けされていたことを推測させる。

一方、810溝の東側は東西方向の小溝とわずかな土坑やピットがみられるのみであり、全体としての性格などは不明である。ただし、東西の小溝により5.5~6.0m間隔で南北にほぼ均等に分割されており、3間を基準とする建物などの区画を意識した可能性も考えられる。

区画内にある溝では、X=-162,255、Y=-41,659付近より南南西にのびる802溝がある。この溝は南東区画を通り、8トレンチ南端のほぼ中央付近において4トレンチの038溝に接続する。ほぼすべての遺構より下層から検出されることや、この周辺から7~8世紀の須恵器や土師器が多く出土することから、他とは時期の異なる遺構である可能性が考えられる。なお、遺物などの詳細については、後述の南東区画において説明することにする。

井戸は前述のように区画の各隅に位置し、このうち、719・785井戸の2基がピット集中部の北側に接している。719井戸は直径約2.0m、深さ約62cmを測る擂鉢状の遺構である。内部施設は確認されず、素掘りの井戸であった可能性が高い。遺構内より中世の土師器・瓦器・須恵器・陶磁器・瓦などがまとまって出土している。785井戸は826落ち込みより後出する遺構であり、直径約1.0m、深さ約1.9mを測る（図108）。遺構壁面がほぼ円筒状に垂下しており、調査では内部施設等の確認はされなかったものの、構造的にはなんらかの施設があったものと思われる。遺構内から中世の土師器・瓦器・須恵器・磁器・瓦・スラグ等が出土している。

北側にみられる土坑群はX=-162,250、Y=-41,663を中心とする東西約5m、南北約4mの範囲にある。計6基の土坑が検出されており、ほぼ全ての土坑の形態が長さ1.5~2.0mの隅丸長方形を呈し、長軸は東西あるいは南北方向に一致する。また、前述の北西区画にある708・710・712土坑と同様、遺

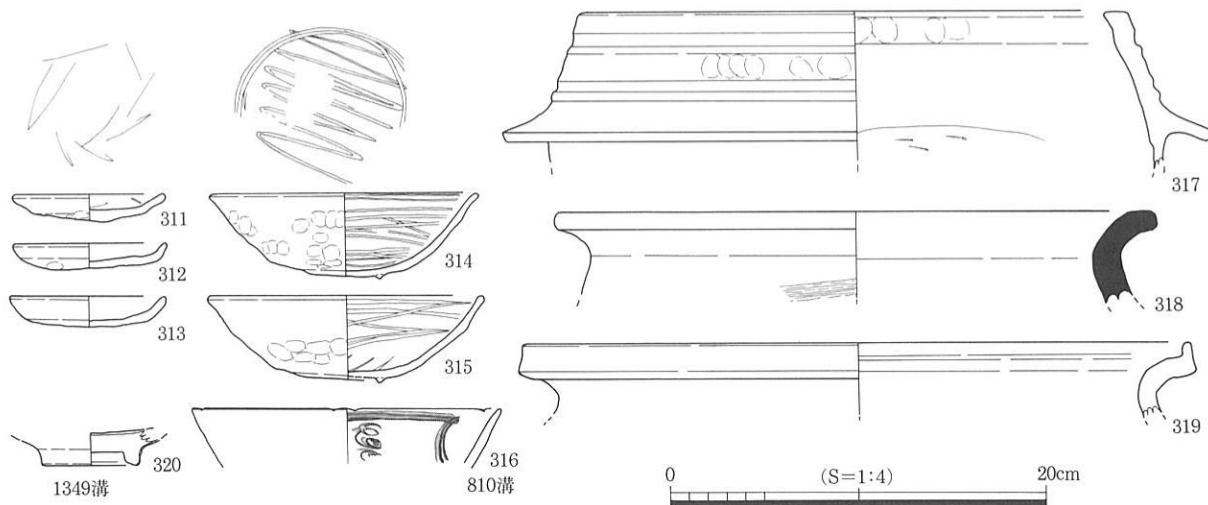


図107 8トレンチ 810・1349溝出土遺物

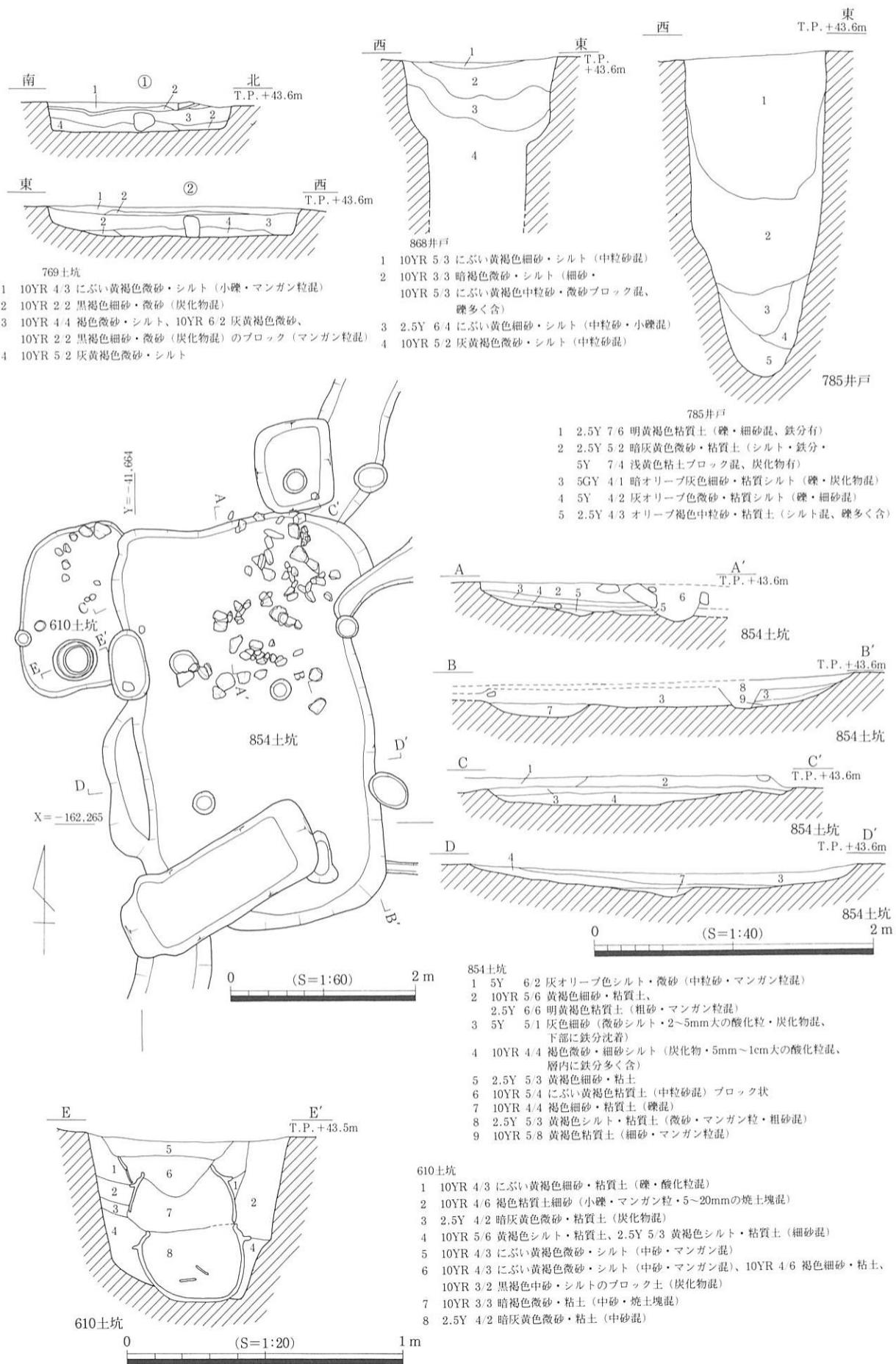


図108 8 トレンチ 769土坑、785、868井戸断面、610・854土坑平面、断面

構どうしが切り合っており、これは特定の場所に何度もつくられたためと思われる。これらのうち、769土坑は土坑群中の北東に位置し、規模は南北約1.3m、東西約2.1m、深さ約36cmを測る（図108、図版54）。形状は隅丸長方形を呈し、遺構内部より完形の瓦器碗などが出土した。782土坑は、769土坑の南側に位置し、長さ約1.5m、幅約70cm、深さ約27cmを測る（図版55）。隅丸方形を呈し、遺構内部より大量の土師皿や瓦器碗が一括して出土した。このような遺構の形態や検出状況から、周辺は埋葬施設を含む墓域ではないかと推測される。

これらの土坑群より南に約6.0mの範囲には、大小のピットが多数検出された。とくに区

画の中心部付近では他の遺構がみられず、建物の存在した可能性が高い。ただし、残念なことに建物位置や規模などを特定するまでには至らなかった。

これらのピット群に取り込まれるような形で隅丸方形の609土坑がある（図109）。区画のほぼ中央、ピット集中部の南東に位置し、一辺約3.5m、深さ約26cmを測る。埋土は底面近くに炭化物を多く含む砂層が薄く堆積している。この埋土を水洗した結果、若干の微小スラグや焼土塊、酸化鉄片が大量に含まれていた。埋土除去後、遺構底面は被熱の痕跡等は認められなかったものの、鋳造に関連する何らかの作業が行なわれていたと推測される。土坑内から直径20cm前後のピットを数基検出し、周囲の地山上にもいくつかのピットがみられることから、覆屋のような簡易施設が存在した可能性も考えられる。遺物としては土師器・瓦器・磁器以外に、鋳型や鉄製工具のようなものが出土している。

道路の攪乱より南側は、北側に比べ遺構密度がやや低くなっている。とくにピットの数が大幅に減少していることから、生活空間としての建物等が存在したとは考えにくい。しかし、中央に854土坑とその周辺に溝や井戸、ピットが検出され、ここに工房などの施設が存在していた可能性は高い。

854土坑はX=-162,264、Y=-41,662付近に位置し、南北約4.5m、東西約2.8mの規模を測る（図108、図版56）。遺構の南半部が攪乱されており、形状や遺物があまりみられないものの、全体的には隅丸方形を呈する。深さは最深部で約35cmを測り、埋土は上半に包含層、下半に酸化粒や焼土塊、炭化物を多く含む砂層が堆積している。遺物は遺構の南半には少ないものの、北半からは大量の鋳型や炉壁、スラグなどが出土しており、これらの遺物の総重量は45kgに達する。埋土除去後の遺構底面に被熱等の痕跡

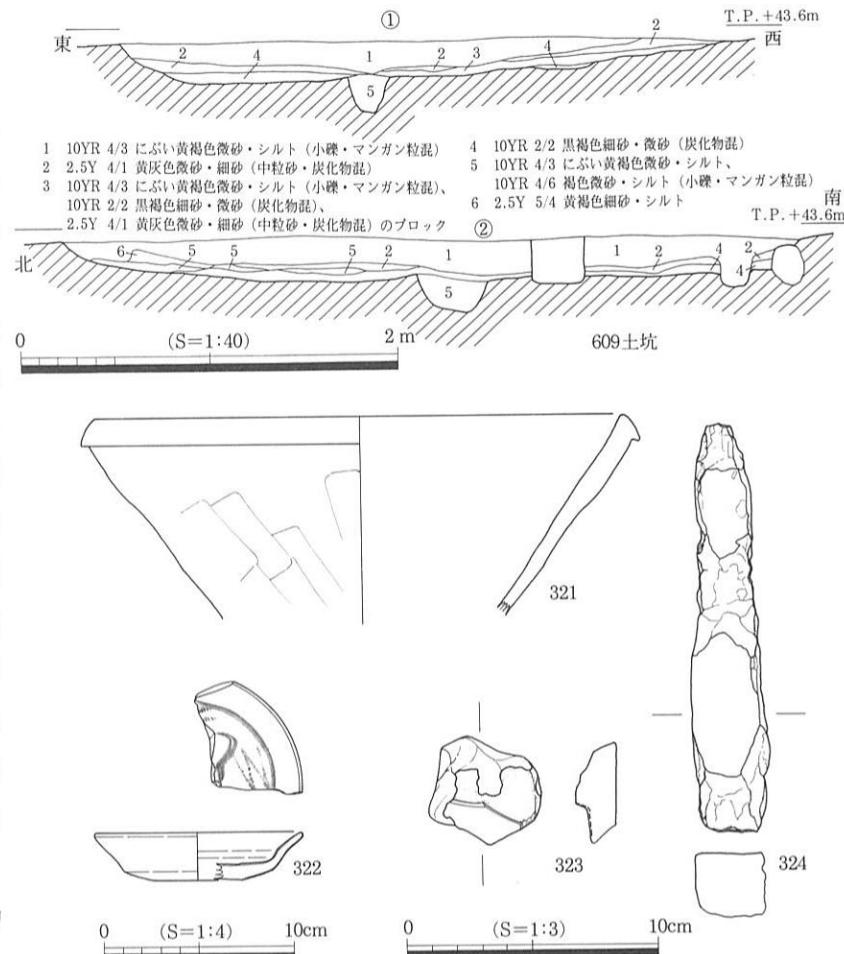


図109 8トレンチ 609土坑断面、出土遺物

はみられないものの、遺物の出土状況から鋳造関連の作業が行なわれた可能性は高い。また、遺構底面からは数基のピットを検出した。遺構周辺のピットと合わせ、外部施設が存在した可能性も考えられる。

610土坑は854土坑の北西に隣接し、直径約50cm、深さ約63cmを測る（図108、図版57）。内部より土器羽釜が2段重ねた状態で出土した。下部の羽釜は瓦質であり、底部を残した状態で正置されていた。上部の羽釜は土師質であり、底部を打ち欠いた状態で重ねられていた。これらの羽釜のさらに上部には、小型の瓦質羽釜の破片が倒立した状態で出土しており、計3段の羽釜が重ねられていた可能性も考えられる。埋土は土器外部が粘質土であるのに対し、内部は粘性の非常に高いシルトが上段まで堆積していた。遺物は枠である羽釜の破片が内部に転落したもの以外には出土していない。井戸としての機能を果たすためには深度が浅く、また最下段の羽釜底部が残っていることから、水溜め等に用いられたのではないかと推測される。また、その特異な形態から便所遺構である可能性も考えられる。

868井戸は区画の南西部に位置し、長径約1.4m、短径約1.1mの楕円形を呈する（図108）。深さ約60cmで段があり、以下は直径約70cmの円筒状に掘り込まれている。約1.5mの深さまで調査を行なったものの、底部は検出されなかった。埋土は砂を含む粘性のあるシルトであり、下部より中世の土師器・瓦器・陶磁器・木製品がまとまって出土した。

図109は609土坑より出土した遺物である（図版78）。321は瓦質捏鉢である。口縁端部は外傾し、わずかに垂下する。外面にヘラ状工具によるナデの痕がみられる。322は青磁皿である。底部は糸切り技法を用い、体部に稜を一段施し、口縁は外反する。見込みに線と点を組合せた陰刻による櫛描文を施す。釉は外底部を除き全体にかけられ、その発色は翡翠のような淡い青緑色であり、全体的に細かな貫入がある。胎土は緻密であり、灰白色を呈する。13世紀頃の南方系窯のものと思われる。323は鋳型の破片である。全体は酸化により赤変しており、凹部の表面から約1mmまでが強く還元され青灰色に変色している。胎土は全て緻密な真土により構成される。大部分を欠損しており、全体の形は不明であるものの、角をもつ縁辺から磬などの小型品の鋳型と思われる。324は鉄製品である。上部が次第に細くなっており、断面は長方形を呈する。現在の鑿に似ており、同じような工具の一種と考えられる。

図110は868井戸より出土した遺物である（図版78・79）。326は土師皿であり、これ以外の325、327から329は瓦器皿である。いずれも口縁外面に横ナデを一段施し、外底部に指頭圧痕が残る。330から343は瓦器椀であり、いずれも底部に扁平な高台を貼り付け、やや外傾する体部に丸く仕上げた口縁をもつ。全体的には口径が大きく、口縁が外に広がった浅い形態である。調整は外面に指頭圧痕を残し、内面に幅2mmほどのヘラミガキによる暗文を施す。体部内面はいずれも圈線ミガキを施しており、見込み部は平行ミガキや、330と334のように花弁状や螺旋状ミガキを施すものがみられる。器形から、13世紀末頃のものと思われる。344は青磁椀の破片である。体部はほぼ直線的に外に開き、口縁外面に1条の強い横ナデを施す。内面には線彫りによる劃花文を表わす。12世紀後半頃の龍泉窯系の製品である。345から350は木製品である。345はヤブツバキの表皮を除去し、両端を加工した杭である。また、片方の尖った先端部は被熱により炭化している。346は板状の木製品である。幅約10.5cm、厚さ約5mmのスギ材の正目板を使用し、一辺を弓状に丸く加工する。上部は欠損しているものの、わずかに横方向の切込み線がみられる。また、上部2ヵ所の凹みは内側の断面が平滑になっており、ここに孔あるいは凹みを作ったものと思われ、用途などは不明である。347は長さ約12.6cm、幅約8.8cm、厚さ約1.9cmのヒノキ材を使用している。上部を突状に削り残し、下部は両側面から削り込み、矢先状に加工する。突部上面には打撃による潰れたような痕跡がみられ、楔のように使用されたと考えられる。348と349は木錘である。

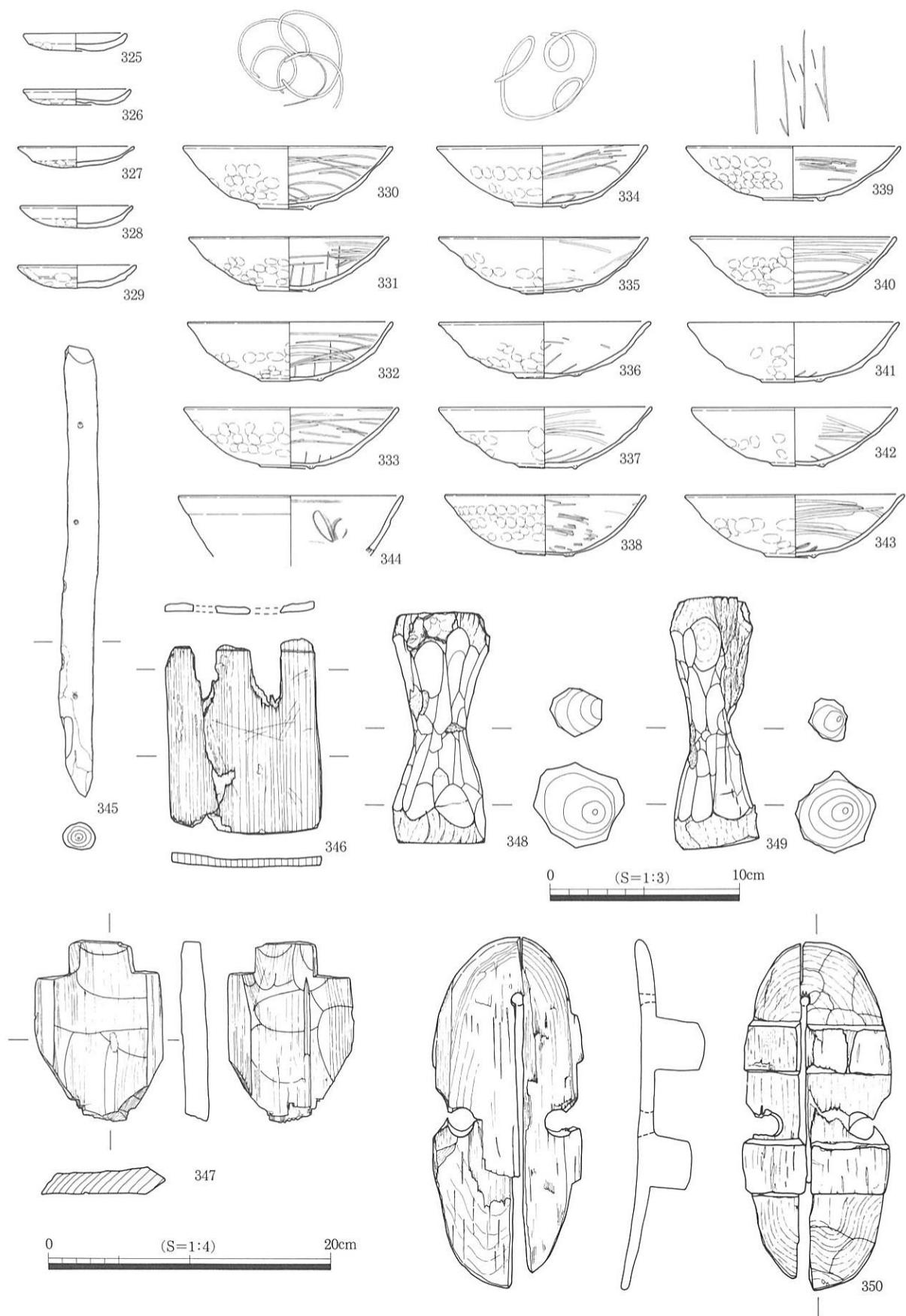


図110 8トレンチ 868井戸出土遺物

いずれもヤブツバキの樹皮が付いた丸木材の中央を細く削り、鼓状に加工している。「槌の子」とも呼ばれ、蓆編みなどに使用されたものである。350は一木造りの連歯下駄であり、中世前半頃のC II c型式である。長さ約25cm、幅約10cmを測り、ヒノキ材を用いる。歯は削り出しによる2枚歯であり、高さ約2.7cmを測る。3ヶ所に鼻尾の円孔を穿ち、前方の1ヶ所のみ直径約9mmと小さい。いわゆる鼻尾孔は摩滅しており、使用後に廃棄したものと思われる。

図111は610土坑より出土した遺物であり、これらの羽釜が重なった状態で出土した（図版81）。351は瓦質羽釜の破片であり、他の2点と異なり口縁を下に向けて出土した。また、口径も小さく、前述のように最上段として重ねていたとしても、故意に打ち欠いた状態で置かれたものと思われる。器形は逆台形を呈し、長方形で短い鍔がほぼ水平につく。口縁端部は面取りが行なわれており、その際に付いたと思われる強いナデが外側にみられる。また、口縁内面には左上がりの細かなケズリ調整を施す。352は中段に据えられたもので、口径34cmを測る。口縁内面に炭化物の付着がみられることから、使用後に底部を打ち欠いたと思われる。鍔は断面が三角形を呈し、やや上向きに取り付く。口縁端部は丸く、わずかに外側へ折り曲げている。調整は外面の鍔下がヘラケズリによる以外、すべてナデによるものである。353は最下段に据えられていたもので、口径32cm、高さ28.5cmの大型の瓦質羽釜である。鍔は肩部よりやや下に、ほぼ水平に取り付く。口縁は外傾し、端部は丸く仕上げられる。調整は鍔下から胴部中位まで丁寧なヘラケズリが施され、その他はナデによる。底部から胴部中位まで煤が厚く付着しており、使用後に埋設されたものと考えられる。それぞれ若干の時期差はあるものの、13世紀末から14世紀初頭にかけての

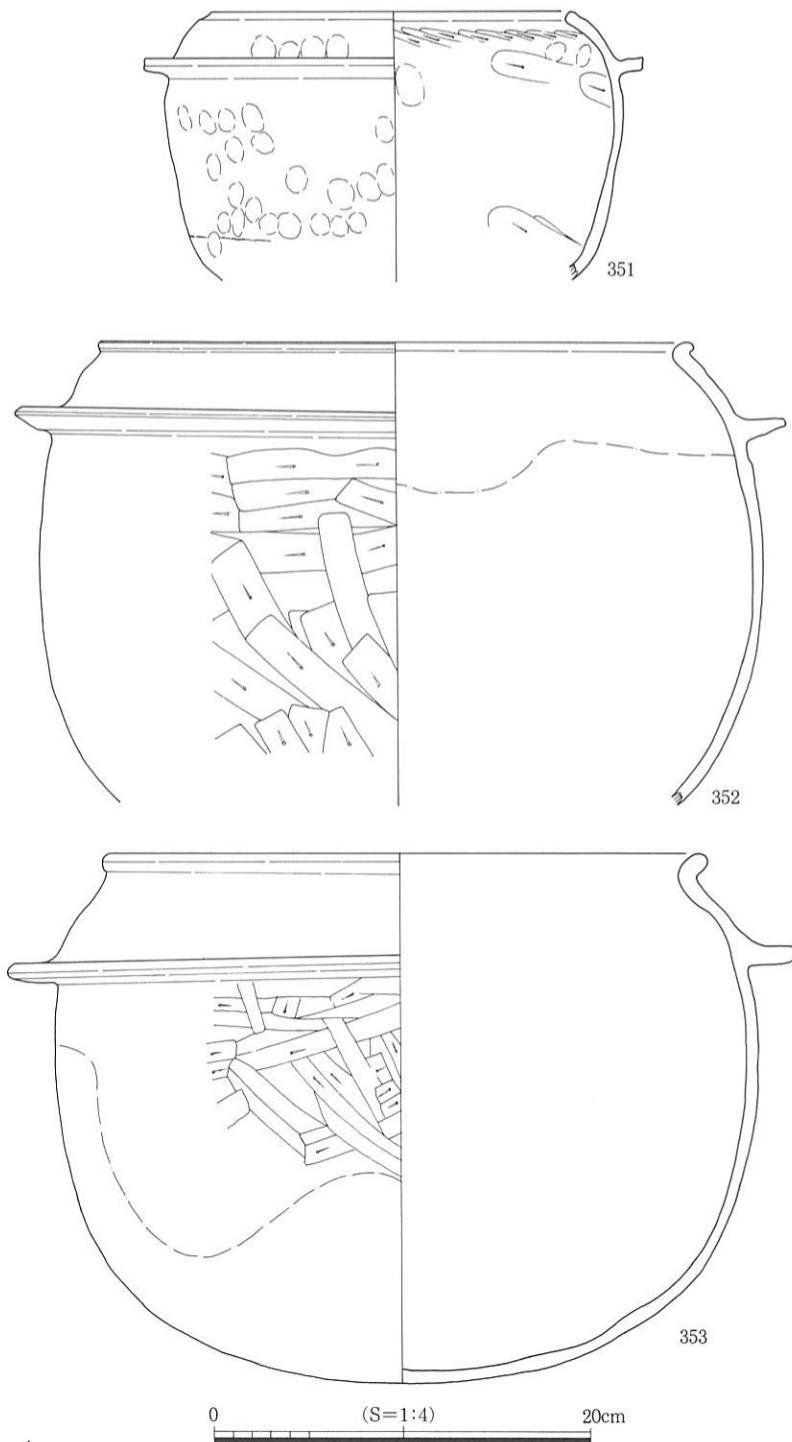


図111 8トレンチ 610土坑出土遺物

ものである。

図112は主に854土坑より出土した遺物である（図版80）。特に鋳型などは隣接する837溝やその他の周辺の遺構などから出土したものと接合する資料が数多くあり、これらの遺構の時期が並行することを示唆している。

354・357は瓦器椀である。354は高台のない扁平なタイプであり、口縁外面に一段の横ナデを施す。内面には3条のヘラミガキにより円形の暗文を施す。357は平たく潰れた高台を貼り付け、口縁が外反する。調整は口縁外面に横ナデを一段と、内面に粗い平行ミガキを施す。13世紀後半から14世紀前半のものと思われる。355と356は土師皿である。355は非常に薄手のつくりであり、口縁が外反する。胎土は緻密で乳灰色を呈し、おそらく京都系の遺物の搬入品と思われる。356は典型的な在地の土師皿であり、口縁外面に一条の横ナデを施す。358は白磁皿である。底部がやや凹んでおり、口縁はわずかに内湾しながら外に開き、端部は外に突出する。359は砥石の破片であり、石材はおそらく京都産の良質の粘板岩である。表面には使用時につけたと思われる軽微な擦痕が残る。360から367は鋳型の破片である。すべて羽釜の製作に使用されたものであり、法量から少なくとも3個体分の鋳型があると思われる。最大のものは直径1mを越す大型の湯釜を製作したものもみられる。いずれも外側の荒型は粘土で作り、混入材として糊殻を使用している。内側には真土を貼りつけており、部位により厚さ3mmから1cmを測る。いずれの資料も内側表面が強く還元されており、多くは著しく剝離している。このことから実際に鋳込みが行なわれた後に廃棄されたものであり、製品を取り出す際に破壊されたと考えられる。360は鐸下から胴部にかけての鋳型であり、鐸と胴部の取り付き角は約90度を測る。361から365は口縁から鐸にかけての鋳型であり、口縁の形状は直立するものと、やや外傾するものがある。肩部には2～3本の突帯を巡らせる。366と367は幅木の破片であり、すべて表面が酸化していることから、直接金属が触れていないことが分かる。これらの鋳型片のうち、最も残存している部分を用いて復元したものが368である。口径約28cm、鐸径約51cm、器高約34cmの鉄釜を製作できる。前述のように、854土坑のみから出土したものではなく、周辺の遺構からも接合資料がみつかっていることから、廃棄が1ヵ所に行われたものではないことを示している。

854土坑の東側、837溝と1349溝に挟まれたX=-162,262、Y=-41,656付近において、1365土坑を検出した（図114、図版58・59）。土坑は長さ約1.75m、幅約1.05m、深さ約37cmの隅丸長方形を呈し、内部より木棺が出土した。土坑および木棺の主軸はN-3°-Wであり、ほぼ真北を向く。木棺は土坑のやや西側に偏って埋納されており、東側の裏込め部分には拳大の自然石がまとまって出土した。裏込めは基本的に地山の土を用いており、棺の内部には灰オリーブ色の粘土が堆積していた。木棺はヒノキ材を使用しており、蓋板は板材で、北東隅と西側側面に臍穴のようなものがあり、転用品である可能性が高い。身部は残存状態があまり良好ではないものの、小口部分が底部と連続していることから、刳抜式の可能性がある。また、人骨等は残念ながら検出されなかった。

遺物は棺内より瓦器椀1点、瓦器皿3点、砥石1点、鋳型小片1点が出土した。4点の土器はすべて木棺北側に正置された状態で出土した。ほぼ中央に瓦器椀、西側に瓦器皿2点を上下に重ね、東側に瓦器皿1点を配する。砥石は東側側板に沿うような形で置かれており、鋳型は瓦器椀の南側から出土したもので、小片のため図化は不可能である。

図113-369から388は782土坑より出土した遺物である（図版81・82）。375のみが土師皿であり、口縁外面に1段の弱い横ナデを施し、わずかに外反する口縁をもつ。369から374および376から380は瓦器皿

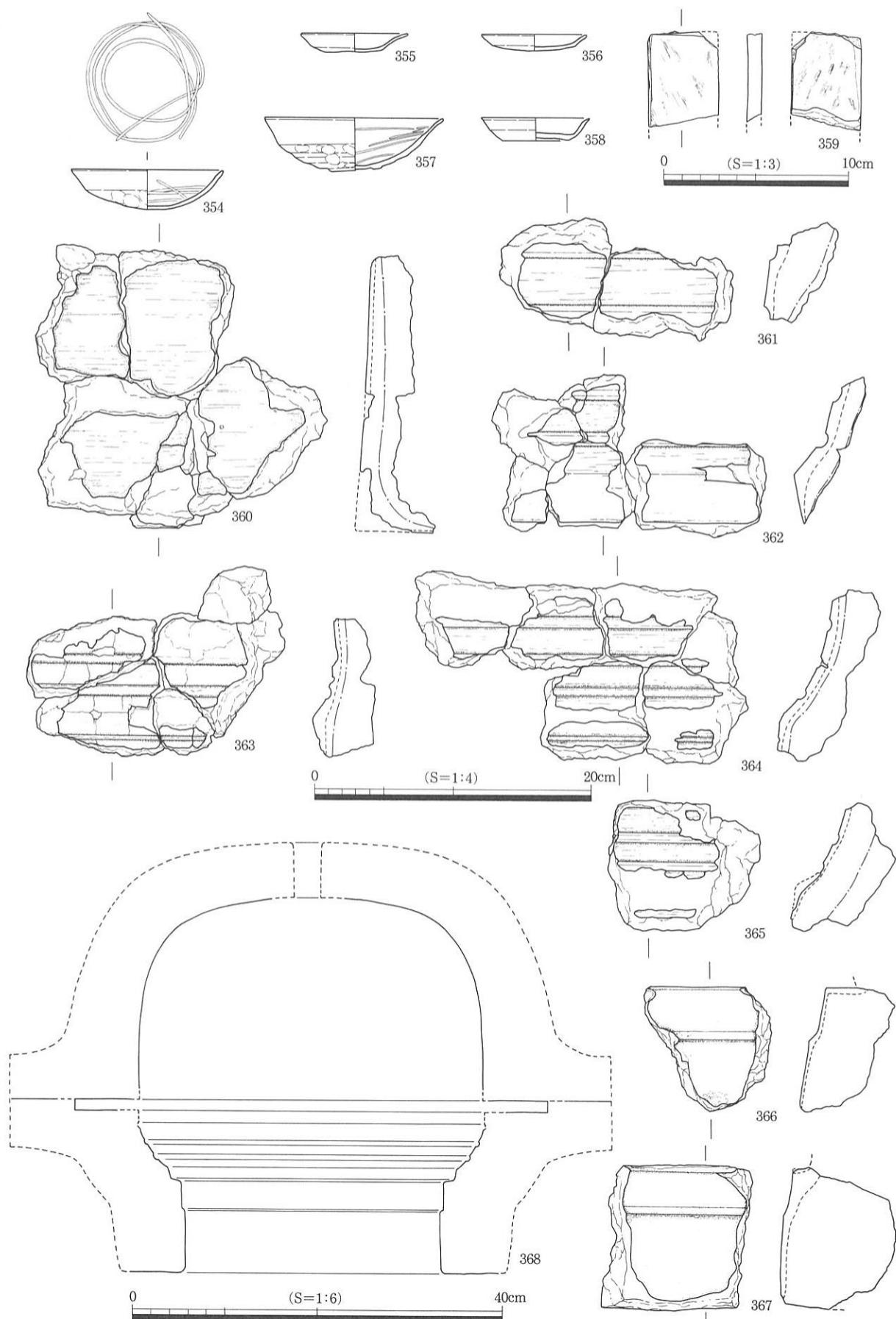


図112 8トレンチ 854土坑出土遺物

である。成形は土師皿とまったく同じであり、369・376・380のように、内面にヘラミガキを施すものもある。381から388は瓦器碗であり、いずれも開いた体部に扁平な断面台形の高台を貼り付けている。口縁外面に弱いナデを施し、口縁はわずかに外反する。調整は381のように圈線ミガキの後、見込みにジグザグ状の連続ミガキを施すものや、382のように見込み部に螺旋状のヘラミガキを施すものがみられる。しかし、ほとんどのものは384や386のように見込み部に平行ミガキを施した後、体部内面に圈線ミガキを施すものが多い。これらの瓦器碗は13世紀末頃のものと思われる。

389から392は817土坑より出土した遺物である（図版82）。389は瓦器皿であり、口縁外面に強い横ナデを一段行ない、内面下間にヘラミガキを丁寧に施す。390は瓦器碗であり、断面三角形の高台を貼り付ける。調整は口縁外面に強い横ナデを1段、内面に左上がりのヘラケズリを行ない、見込みに平行ミガキの後、横ミガキを施す。391は白磁碗の破片である。口縁は玉縁状を呈し、釉は青味を帯びた白色である。392は須恵質の捏鉢である。口縁端部はナデによる弱い面取りを行ない、わずかに内面が肥厚する。13世紀後半のものである。

393から395は824土坑の出土遺物である（図版82）。393と394は土師皿である。393は断面三角形の高

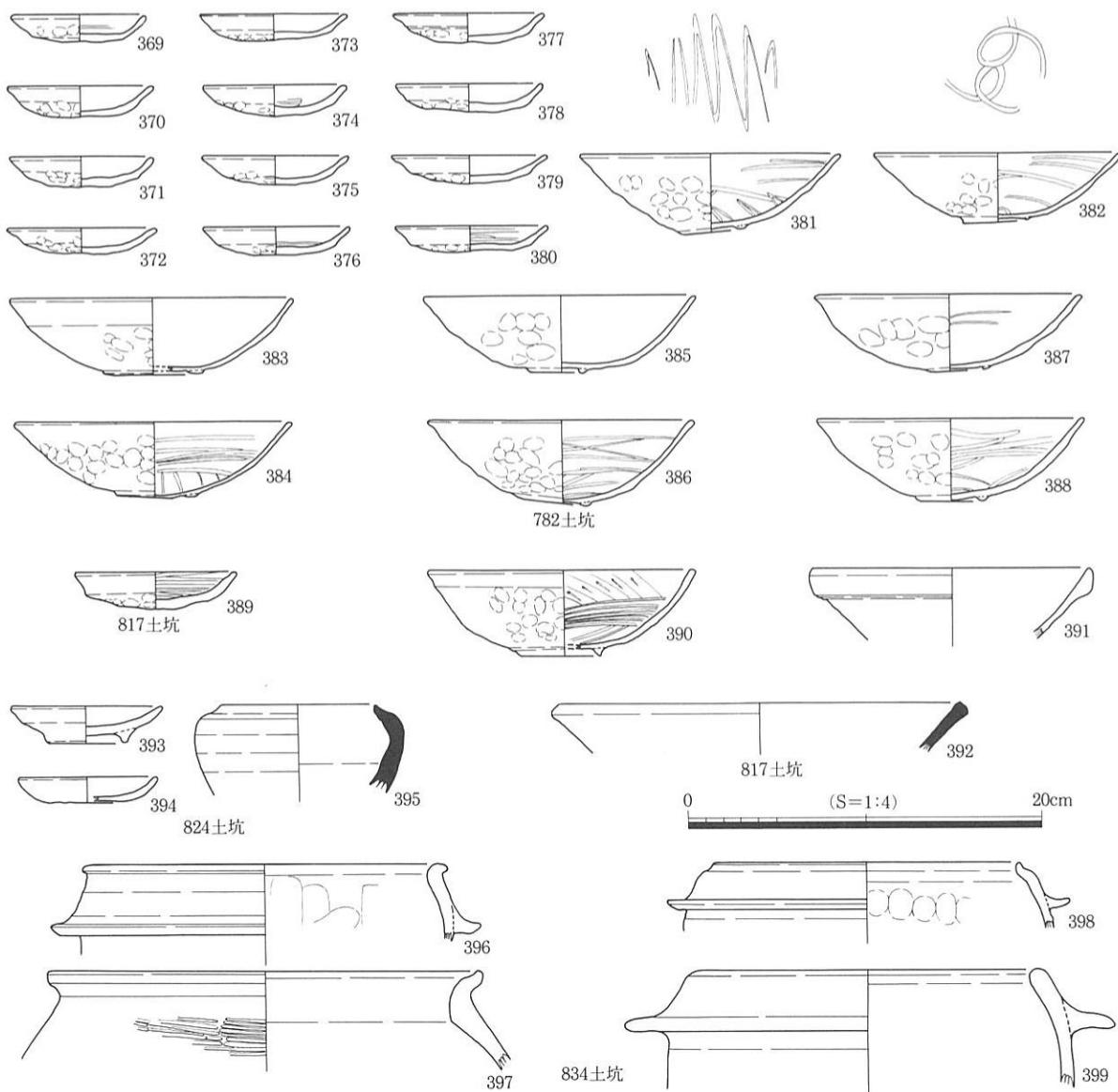


図113 8トレンチ 782・817・824・834土坑出土遺物

台を貼り付けた台付き皿である。13世紀末から14世紀初頭のものである。395は古代の須恵器短頸壺である。口縁は内傾しつつ、端部がわずかに上方に引き出され、蓋受けを形作っている。外面には水挽きによる横ナデの痕が明瞭に残る。8世紀頃のものである。

396から399は834土坑より出土した遺物である（図版83）。396は瓦質羽釜である。口縁端部がわずかに外側に折り曲げられ、肩部に短い鐸が付く。397は瓦質甕であり、口縁は短く、わずかに内湾しつつ

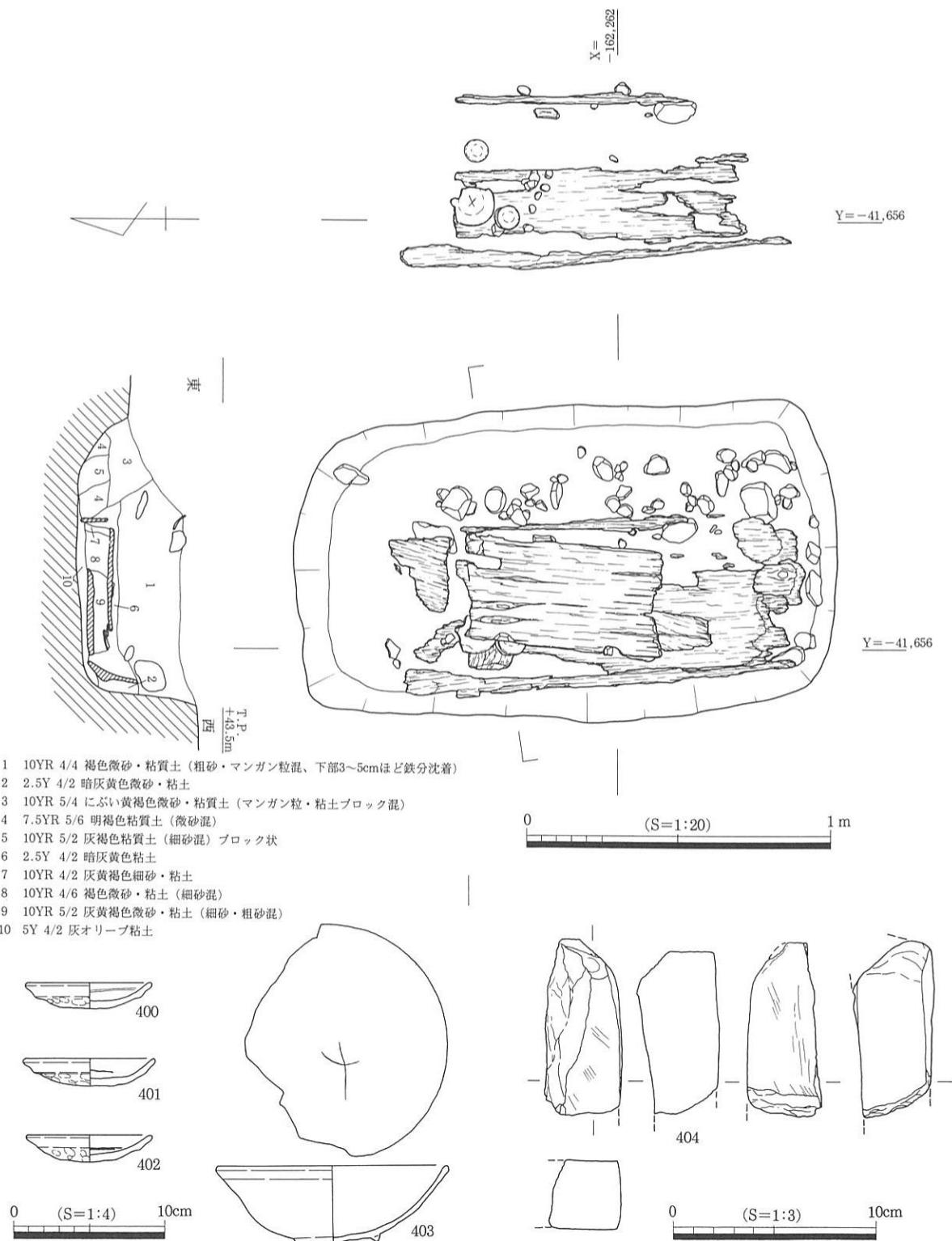


図114 8トレンチ 1365土坑平面、断面、出土遺物

上方につまみ上げられている。調整は胴部外面に平行タタキを施し、他は全てナデによる成形を行なう。398・399は土師質羽釜である。398は口縁端部をわずかに上方につまみ上げ、小さくて短い鍔がやや上向きに付く。399は口縁を内傾しつつ丸く仕上げ、直下に大型の鍔をほぼ水平に取付けている。いずれも13世紀末から14世紀初頭にかけてのものと思われる。

図114は1365土坑の木棺内より出土した遺物である（図版81）。400から402は瓦器小皿であり、内面に粗いヘラミガキがみられる。いずれも口縁外面に横ナデを一段施し、底部との境に明確な稜線をもつ。403は瓦器椀であり、焼成が不良のためか、全体が白っぽい灰色である。口縁は直線的に外に開くものの、底部にかけて丸く深身のある形状を呈する。底部に断面三角形の高台を貼り付けており、調整は摩滅のためかミガキ等はみられない。しかし、見込みには『×』状のヘラ記号を施す。404は砥石である。材質は凝灰岩であり、表面に軽微な擦痕がみられる。

トレンチ南東部は南北の837溝、608溝、東西の856溝に区画された地区である（図115、図版42）。本区画の規模は他の区画に比べて狭く、東西約10m、南北約15mを測る。区画内において検出した遺構は溝・土坑・井戸・ピットがあるものの、他の区画と比較すると遺構密度は低い。しかし、出土遺物については種類・量とも豊富であり、周辺の遺構との関連を考慮しなければならない。

837溝は北東部より南にのびる溝であり、X=-162,279.5、Y=-41,656.5付近において西に屈曲する（図106・115、図版42・43）。溝の規模は幅1.4～3.5m、深さ約25～63cmを測り、屈曲部を含めた長さは約26mである。出土遺物は区画の北側と南側屈曲部の2ヶ所に集中してみられ、このうちの北側では北東区画より続く自然石が石列状に検出された。一方、南側の屈曲部では特に遺構底部から東側肩部にかけて遺物が大量に出土しており、土器などは完形に近いものも多い。これらの遺物の堆積状況から、遺物は東側より投棄されたことが推測される。遺物の内容としては、種々の生活用具以外に854土坑出土の鋳型と接合するものや、スラグ・羽口などの鋳造関連遺物も多い。

608溝は872溝の東端より南下する溝であり、区画西辺の中程までのびている（図121、図版46）。この溝は南西区画の東辺を兼ねており、詳細については後述することにする。

区画南側に位置する1098溝はX=-162,283、Y=-41,660付近より東にのび、調査区外に達していることから、北東区画と同様、本区画の東側にも別の区画が存在する可能性が高い（図115）。しかし、調査区内ではほとんど遺構が検出されず、わずかに土坑や溝がみられるだけである。1098溝は幅1.5～3.0m、深さ約35cmを測り、検出した長さは約11mである。遺物は中世の土師器・瓦器・須恵器・陶磁器などが出土している。また、この溝の西側は地山が落ち込み状を呈し、その南側地山が一段高くなっている。この地山上面より遺構が検出されており、土坑・ピットなどがみられる。

802溝は、北東区画において前述したように、南側の東トレンチから続く溝であり、北端は8トレンチの826落ち込みにより削平される。本区画における802溝の規模は幅約1.0m、深さ約27cmを測り、本調査区全体において検出した溝の総延長は約90mに達する。北東区画において記したとおり、802溝は周辺のあらゆる遺構より下位にあり、出土遺物も古代の須恵器や土師器が多いことから、他の遺構と異なり、若干時期の遡る遺構と考えられる。

図116および図117～433から441は、北東と南東区画の837溝より出土した遺物である（図版83・84）。405と406は須恵器杯身である。405の口縁は直立気味に立ち上がり、端部に浅い凹みをもつ。蓋受部は丸みをもって短く外へ張り出し、身部は底部にかけて直線的に傾斜する。406の口縁は直線的に内傾し、

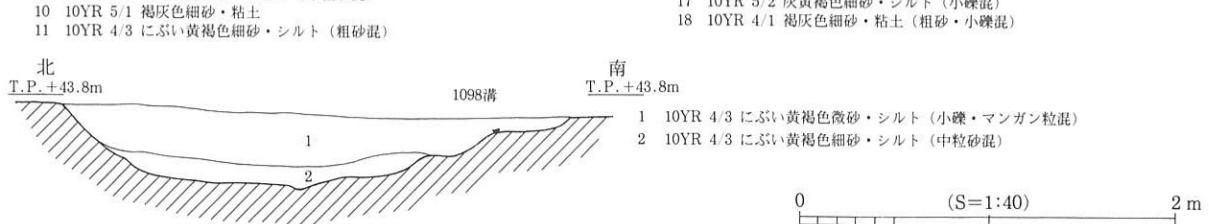


図115 8トレンチ 南東地区平面、837・1098溝断面

端部は丸く整えられる。外反する蓋受部をもち、身部は丸く深めのタイプである。いずれの2点ともほぼ中村編年I-5型式頃に比定できる。407は滑石製の石鍋である。837溝以外に204溝、609土坑からも接合資料が出土した。断面三角形の鍔をもち、口縁は方形で内傾する。口縁外面には製作時の工具痕がみられる。外面には鍔下から底部まで煤が付着しており、使用後に廃棄されたものである。また、破片の断面が鋭利な切り口をしており、廃棄の際には故意に破壊したか、あるいは一部を転用したものと思われる。形態から12世紀前半のものと考えられる。408から410は土師皿である。408と409は胎土が緻密で乳白色を呈し、薄手の作りであり、12世紀前半から中頃の京都系土師皿である。410は褐色の在地土師皿であり、底部に切り込み円板技法の痕がみられる。411と412は瓦器小皿である。口縁外面に横ナデを一段巡らし、内面にはわずかにミガキの痕がみられる。また、2点とも口縁の一部が小さく欠損しており、祭祀的な色合いをもつ。13世紀代のものである。413は瓦器椀であり、高台は扁平な断面三角形を呈し、身部は直線的に外傾する。口縁外面に一段の強い横ナデを施し、端部は丸い。体部外面に横方向のミガキ、内面は見込み部に格子状ミガキと体部に圈線ミガキ、口縁に細かい横ミガキを施しており、丁寧な作りである。13世紀前半のものと思われる。414から416は輸入磁器である。414は白磁稜皿、415は白磁椀の底部である。416は青磁椀の口縁であり、外面に片切彫りの蓮弁文様を施す。龍泉窯系のもので、山本編年I-5類に相当する。417と418は瓦質製品である。417は注口付鍋の破片と思われ、口縁の形状から別途に蓋が存在したと考えられる。418は一輪差しであり、外面に成形時のケズリ痕がみられる。419は瓦質の片口鉢である。420から421は瓦質甕である。420は口縁端部を面取りし、外面に右上がりの叩き目がみられる。421は大きく外反する口縁をもち、外面の肩部に叩き、頸部に右上がりの沈線を刻む。422は須恵質甕である。口縁はやや外傾し、端部は外側に張り出し、水平に面取りされる。調整は口縁にナデ、肩部に叩き目がみられる。423は瓦管であり、口径約15cm、底径約10cmの裾細りの形態を呈し、高さ約18cmを測る。内面には布目痕が顕著にみられる。単体で出土しており、用途は不明である。424から431は各種の羽釜であり、424・425・427が瓦質、その他はすべて土師質である。426・428・429は口縁が外側に大きく屈曲し、鍔の張り出しあり、13世紀後半のものと考えられる。425・430・431は口縁端部をわずかに外側に折り曲げてあり、13世紀末のものである。424・427は口縁端部が突出せず、内湾しており、14世紀前半のものと思われる。いずれの羽釜も鍔下に煤が付着しており、使用後に廃棄されたものである。432は須恵質の捏鉢である。直線的に開く体部から、直立気味に口縁があり、端部は外側にやや肥厚する。内外面には水挽きの痕が顕著にみられ、13世紀前半のものである。433から435は瓦器椀である。433はやや丸い身部に断面三角形の高台を貼り付ける。口縁は外面に二段の横ナデを施し、調整は見込み部にジグザグ状ミガキと体部に圈線ミガキを行なう。434は口縁外面に三段の横ナデの後、ミガキを施し、見込み部に格子状ミガキと体部内面に圈線ミガキを行なう。435は無高台の小型椀であり、内面に渦巻状のヘラミガキを施す。前の2点は12世紀後半から13世紀初頭、後者は13世紀末から14世紀初頭のものである。436は瓦質羽釜であり、口縁が内湾し、端部は面取りされている。鍔は肩部より下に取り付き、内面にヘラ状工具によるナデの痕がみられる。14世紀代のものである。437は鋳型の破片である。粘土による荒型の内側に真土を張り付けており、真土の厚さは約1.0cmである。内側表面は強く還元されており、形状から鍋の鋳型の口縁と思われる。438から440は砥石である。438と440の石材は凝灰岩質の津島石であり、いずれも表面に微細な擦痕がみられる。439は火成岩の一種であり、ややきめが粗い。441は砂岩系の自然石を利用した砥石、もしくは擦石と思われる。

図117-442から446は802溝より出土した遺物である（図版85）。442は瓦器小皿であり、口縁外面にナ

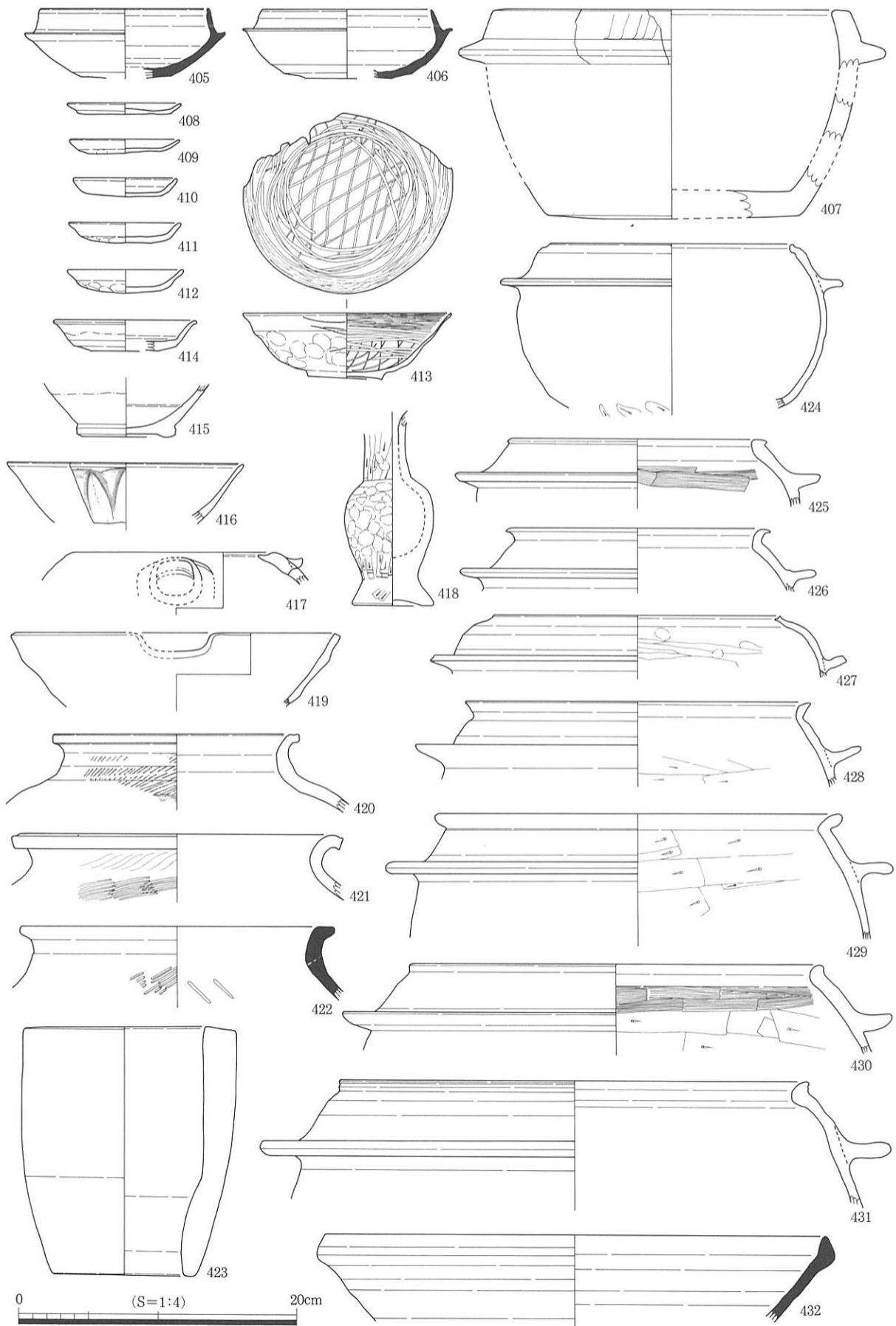


図116 8トレンチ 837溝出土遺物

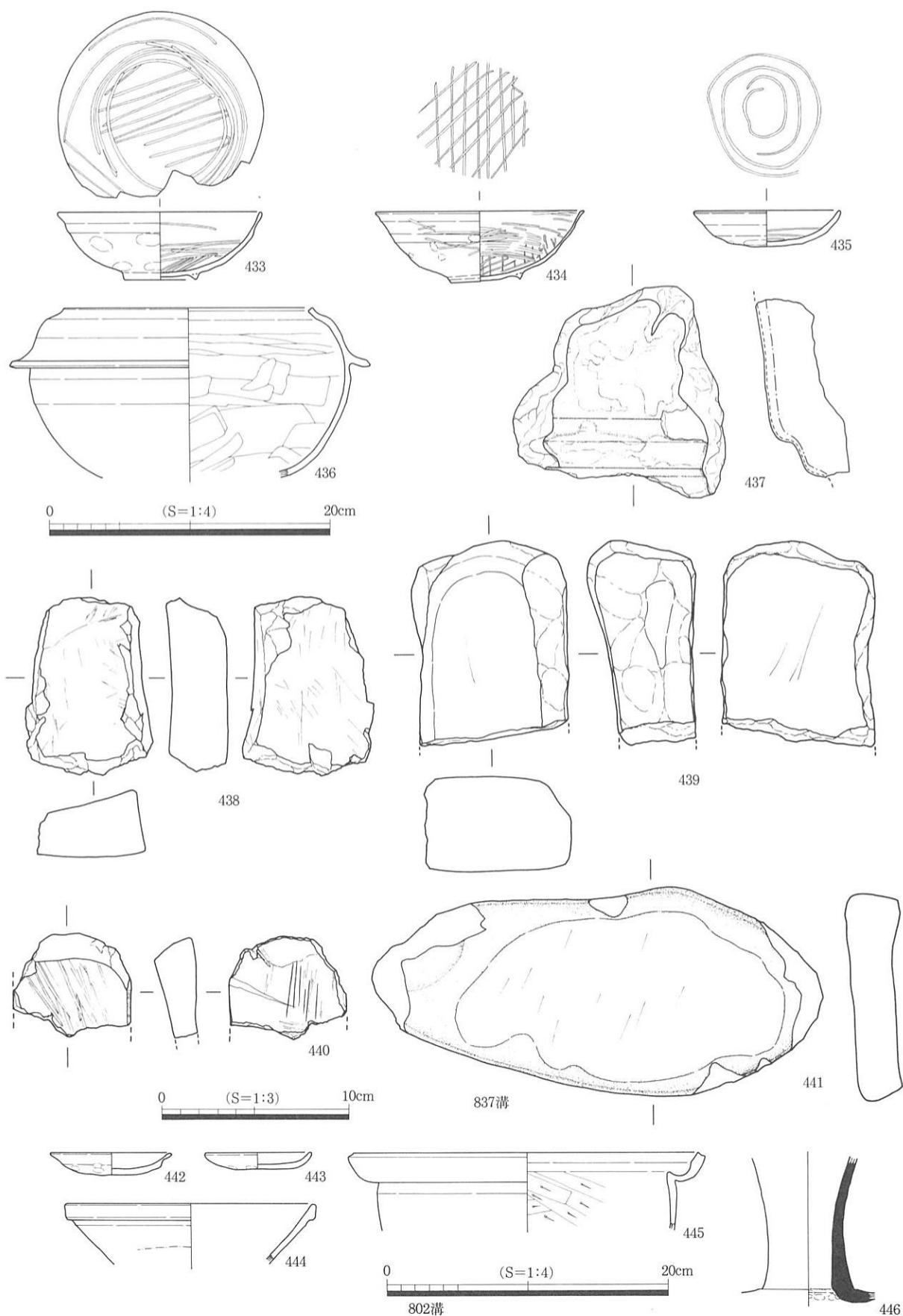


図117 8トレンチ 802・837溝出土遺物

デによる段がみられる。443は土師皿である。口縁の横ナデが弱く、全体的に丸い。胎土が緻密で淡い褐色を呈する。444は白磁碗である。口縁端部は折り曲げられ、玉縁を呈する。釉は青味がかった白色であり、非常に薄く、体部上半にかけられる。445は土師質鍋である。口縁は受口状に内湾しつつ、端部は面取りが施されて外傾する。胴部は直線的に立ち上がっており、内面に左上がりのヘラケズリが行なわれている。446は須恵器の長頸壺である。口縁および体部はなく、頸部のみの破片である。

図118-447から453は1098溝より出土した遺物である（図版87）。447と448は土師皿である。447は口縁外面に一段ナデを行なういわゆるコースター型である。胎土は粗く、浅黄橙色を呈する。448は深身の丸底皿である。器壁が厚く、内面に一段のナデを施す。胎土はやや緻密であり、褐色を呈する。いずれも13世紀前半頃のものである。449は白磁碗である。口縁が外反し、身部はやや立ち上がり気味で、底部との境に稜をもつ。口縁端部の内面に釉の搔き取りがみられる。450は瓦質羽釜であり、口縁端部を強いナデにより外側につまみ出す。鍔はやや上向きに取り付き、突出は小さい。451は土師質羽釜である。口縁端部が丸く、内側に肥厚している。452は轆の羽口であり、先端に溶解したガラス質が付着する。直径約5cm、内孔は2.1cmを測る。453は鋳型である。磬の中央下部に相当すると思われ、胎土は均質で細砂混じりの粘土である。全体は橙褐色に酸化しており、内面より約2cmの範囲が青灰色に還元している。縁に凹凸の飾りをつけ、さらにその内側に1条の沈線を巡らせており、手の込んだ丁寧な作品である。内側にわずかな凹みがみられ、本来は文様などを施していた可能性がある。過去の調査でも磬の鋳型が出土しており、当地の鋳造生産を考える上で貴重な資料といえる。

454と455は側溝掘削中に出土した遺物である（図版87）。454は砥石であり、上半を欠損する。石材は凝灰岩であり、表面に擦痕がみられ、かなり使用されたものである。455は石製硯である。約2/3が残存し、復元長は約14cm、幅約9cmとなる。池部と陸部が分離する形態であり、石材は蛇紋岩である。縁や裏面に擦痕が著しく、破碎後に砥石として転用されていたものと思われる。

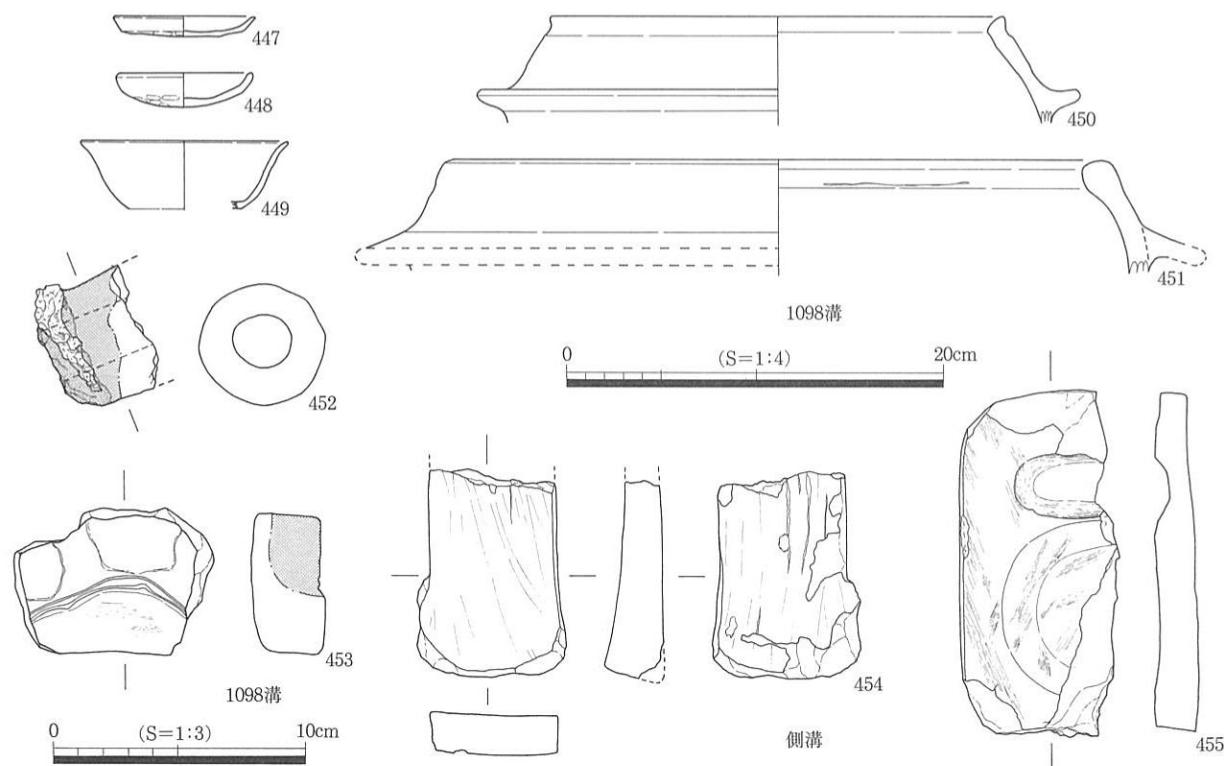


図118 8トレンチ 1098溝・側溝出土遺物

土坑はX=-162,269、Y=-41,659付近の区画北東部と、X=-162,277、Y=-41,668付近の区画南西部にまとまって検出された。大小の差はあるものの、いずれも方形の浅い土坑であり、中世の土器・陶磁器や鋳造関連の遺物が出土している。一方、井戸は南側の837溝が跡切れる付近から区画外に4基ほど集中している。建物に関連すると思われるピットは区画西半に多く、本区画内では単独で建物が想定し得ないことから、西側の区画から拡張してきたものと考えられる。このように、本区画は遺構が極端に少ないとや井戸が多く作られていること、後述するように南辺の溝が途切れて開口部分を形成するなど、大区画の中では出入口といった共有の空間として使用された可能性が考えられる。

1147土坑は区画内の北東部、837溝のほぼ中央西側に位置する（図119、図版52）。遺構規模は東西約3.0m、南北約2.5m、深さ約40cmを測る。出土した遺物は中世の土師器・瓦器・磁器以外に砥石がある。

1385土坑は区画のほぼ中央、1082井戸の北側に位置する（図版48）。西側を後世の溝に攪乱されており、復元すると、直径約50cm、深さ約28cmの円形土坑である。規模は小さいものの、遺構内部より土師器・瓦器・磁器などが一括して出土している。

1069土坑は区画南西部、608溝の南端に接している。一辺約2.5m、深さ約20cmを測る。やはり浅い方形の土坑であり、出土遺物は少なく、中世の土師器と羽口が一点みられる。

1082井戸は837溝南端の西側に位置する（図119）。直径約1.3mを測り、深さ約1.8mにて底面を確認した。埋土は粘土とシルトが互層になっており、自然石と遺物が出土している。東側に隣接する1083井戸は、遺構底面にて石組を検出した。石組は自然石の乱積みによるもので、直径約75cmを測る。1099土坑は現代の道路により南半を削平されており、直径は推定で約1.3mと考えられ、深さは約42cmを測る（図版50）。底面より円形に切断された板材が出土しており、蓋板として使用されていたものが転落したと考えられる。他に遺物として磁器や陶器が出土している。

図120-456から460は1069土坑より出土した遺物である（図版85）。456は瓦器碗である。高台は低平で、内面に渦巻き状のミガキを施す。14世紀初頭に比定される。457は白磁碗である。外面に横ナデを一段施し、明瞭な圈線が残る。口縁端部は面取りを行ない、わずかに外傾する。釉は青白磁に近く、口縁端部のみ搔き取られている。458は瓦質鉢の破片である。底部は欠損するものの、口縁は直立気味に立ち上がり、体部が丸く深い形態と考えられる。調整は口縁外面に1段のナデを行ない、内面に横方向のハケ調整を施す。459は瓦質甕の口縁である。口縁は外反し、端部に面取りが行なわれる。ナデによる成形であり、頸部中ほどに1条の凹線を巡らせる。460は鞴の羽口であり、先端から約4cmの範囲が

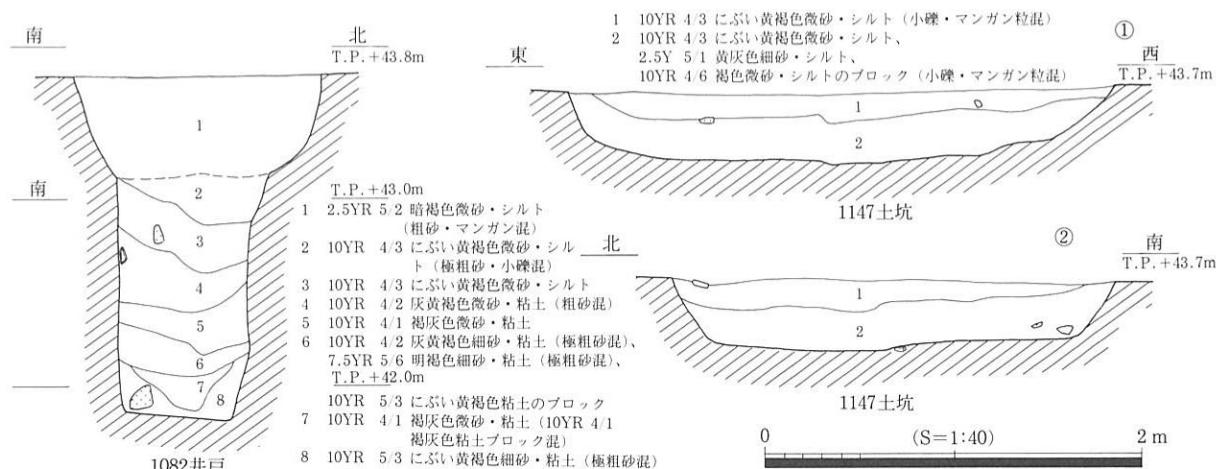


図119 8トレンチ 1082井戸、1147土坑断面

還元しており、先端にガラス質が溶着している。孔の直径が約3cmと小さく、鍛造用と考えられる。

461から464は1385土坑より出土した遺物である（図版85）。461は瓦器皿であり、内面に格子状ミガキと圈線ミガキを施す。462と463は瓦器碗である。462は口縁外面に二段の横ナデの後、粗いミガキを施す。内面は見込み部に口縁近くまでのびる平行ミガキを行なった後、体部内面に圈線ミガキを密に施す。463の口縁は外面に二段の横ナデを行ない、やや外反する。内面は摩滅のため調整は不明である。いずれも12世紀前半代のものである。464は土師質羽釜である。口縁が屈曲し、肩部やや上方に大きく水平に張り出した鍔をもつ。調整は外面に胴部下半に右上がりのヘラケズリ、鍔下に横方向のヘラナデがみられ、内面は底部にケズリ、肩部付近に強いナデがみられる。

465と466は1099土坑より出土した遺物である（図版85）。465は古伊万里焼の染付け碗である。口径のやや小さい深めの碗であり、外面に草花文が描かれる。466は唐津焼の高台付き皿である。高台は削り出しによるもので、断面が台形である。胎土は緻密で白っぽく、釉は高台より上方にかけられる。また、見込には鉄絵による草花文が描かれており、胎土目が認められる。いずれも17世紀初頭頃のものと思われる。

467は1147土坑より出土した砥石である（図版85）。石材は凝灰岩を使用しており、一部欠損する。表面に軽微な擦痕がみられる。

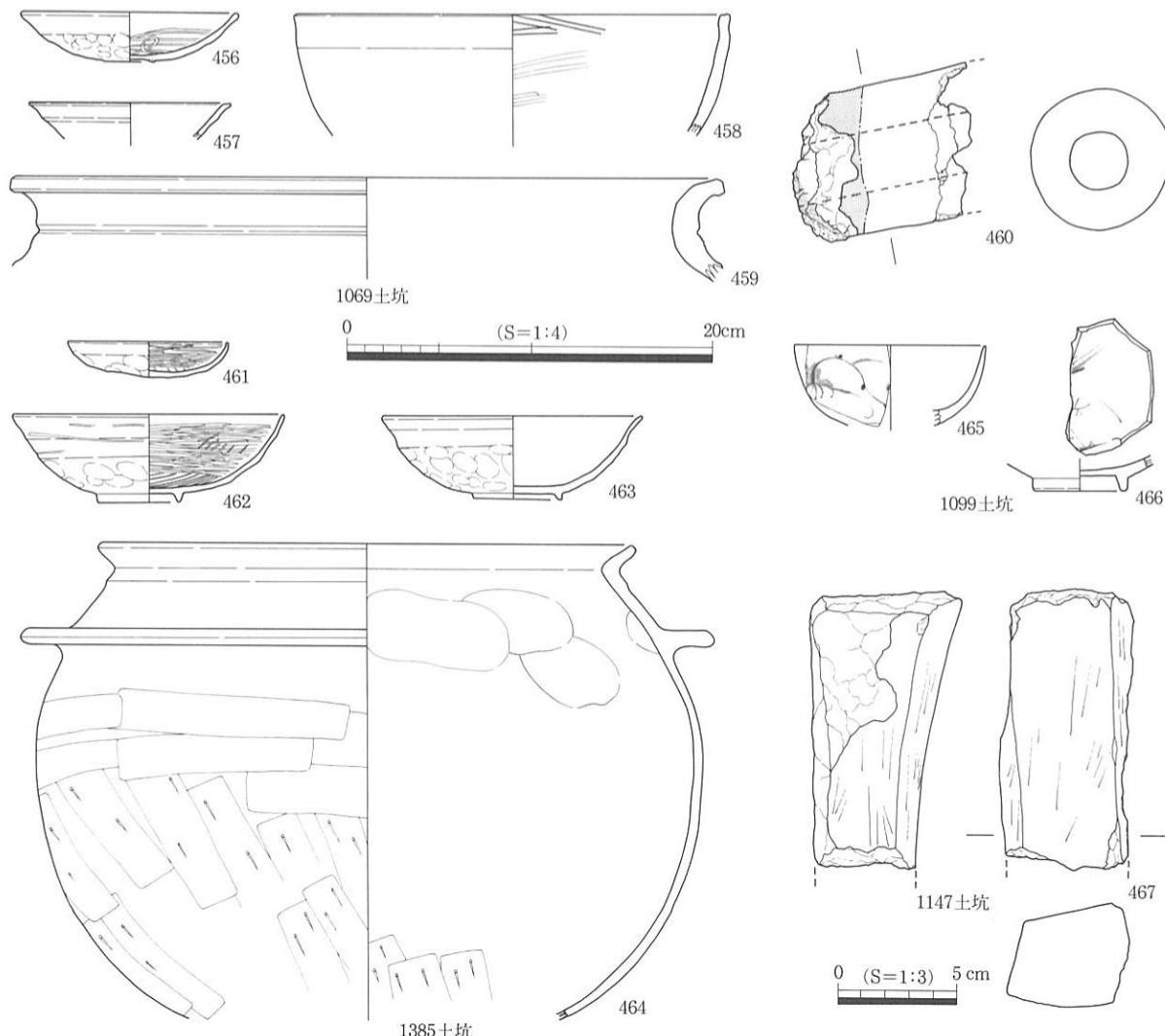


図120 8トレンチ 1069・1099・1147・1385土坑出土遺物

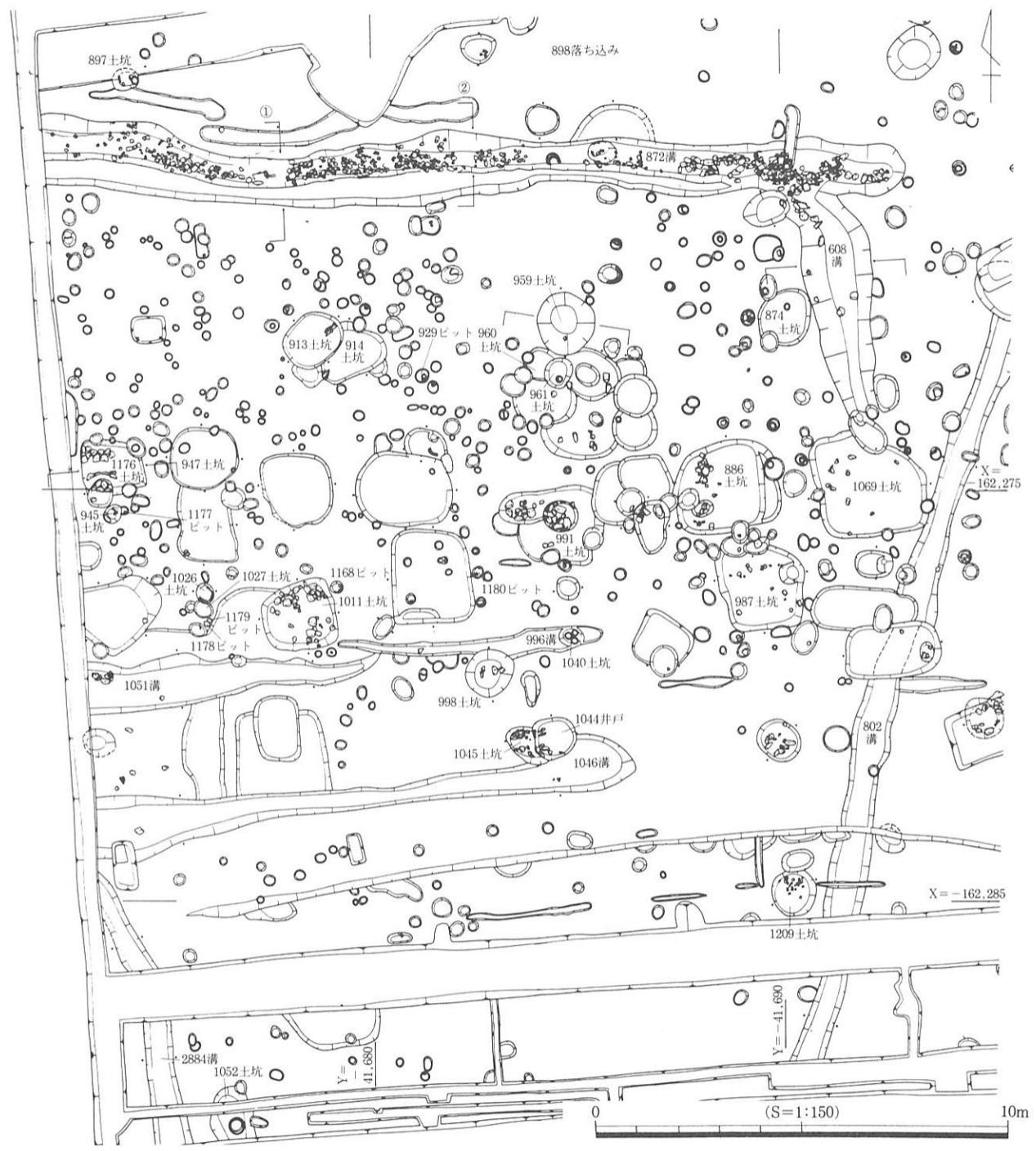
トレンチ南西部は872・608・1046溝により区画された地区である（図121、図版45）。北側との境は872溝により明確に区別されており、東側は前述の608溝が区画南北の中程まで、南側は1046溝が東西の中程までのびており、区画としては南東部が開口した形を呈している。南側は、X=−162,285付近から北に向かって地山が削られて段を形成しており、北側の872溝とは形態が異なるものの、南北を区別していたと考えられる。一方、西側には現代の水路があり、区画溝などは確認されておらず、攪乱されていると思われる。この水路から東側に広がる区画の規模は、現存で東西約18m、南北約14mを測る。

872溝はX=−162,263、Y=−41,667付近よりほぼ真西にのびる溝である（図121、図版46・47）。幅約1.0m、深さ約39cmを測り、長さ約21mにわたり検出した。上層には幅約3.3mの東西にのびる898落ち込みがあり、これを掘削した後に検出した遺構である。溝のほぼ全域において拳大の自然石が大量に出土し、遺物はこれらの自然石と混在している。出土状況から、これらの自然石と遺物が一括して廃棄されたものと考えられる。遺物としては中世の土師器・瓦器・陶器・磁器・石製品など、多種多様なものがみられる。

608溝は872溝の東端、Y=−41,669付近からほぼ南にのびる溝であり、幅約1.7m、深さ約52cm、長さ約5.5mを測る（図121、図版46）。南に向かって次第に浅くなり、南端は土坑により詳細が不明である。

区画の南側は東西方向の落ち込みを掘削した後、1046溝と1051・996溝という2つの東西溝を検出した。1046溝はX=−162,282、Y=−41,674付近より西にのびており、幅0.5~1.6m、深さ約29cmを測り、長さ約13.3mにわたり検出した（図版45）。1051・996溝は1046溝の北側をほぼ平行してのびる溝であり、2つの溝を合わせるとほぼ1046溝と同じ長さとなる（図版45）。これら南北の溝の間隔は2.0~2.5mを測り、道路状遺構に伴う側溝であった可能性も考えられる。遺物は上層の落ち込みからはまとまって出土しているものの、これらの溝は浅く、中世の土師器・瓦器・須恵器などが少量みられる。

図122は872溝より出土した遺物である（図版86）。468から470は土師皿である。468は口径の小さい、やや厚手の皿であり、口縁外面に明瞭な横ナデがみられる。胎土は緻密で黄褐色である。469と470はほぼ口径が同じであり、口縁外面のナデが不明瞭となっている。ともに胎土がやや粗く、橙褐色を呈する。とくに470は胎土に白色の粘土がマーブル状に混入しており、外底部に切り込み円板技法の痕が残る。13世紀末頃のものと思われる。471から474は瓦器碗であり、いずれも高台がなく、法量が小さい。口縁外面に横ナデを一段施し、底部にかけて指頭圧痕が残る。471と472は内面に渦巻き状のミガキがみられるものの、473と474は摩滅が著しく不明である。475から477は青磁碗の破片である。475は口縁部片であり、端部外面に1条の沈線と、外面に片切彫りの蓮花文がみられる。476は底部片であり、高台は削り出しにより、外面に蓮花文がみられる。477は底部の破片であり、高台は削り出しによる。見込みに円形の凹線を施し、内側に1.8cm角の印章のようなものがみられる。押印自体が弱く、文字が不鮮明であるため、内容については不明である。478は瓦質鍋の破片である。口縁は受け口状を呈し、外側に張り出し内湾する。口縁端部は面取りされ、内面にはわずかにハケ目が残る。外面に煤が付着しており、使用後に廃棄されたものと思われる。479から481は瓦質羽釜、482と483は土師質羽釜である。479は口縁が直線的で端部を面取りし、鍔の突出が小さい小型品である。器形全体も長胴形を呈し、肩部が不明瞭である。480の口縁も直線的で、端部は押えにより内外面に肥厚している。鍔は口縁直下に水平に取り付く。481と482は種類が異なるものの、口縁が折曲げによりわずかに突出し、肩部やや上方に長台形の鍔が水平に取り付く等、ほぼ同様の形態を示している。483は口縁端部を折り曲げた後に潰しており、丸く仕上げている。調整は外面に横あるいは斜め方向のケズリを行なっている。いずれも13世紀末から



- 1 10YR 4/3 にぶい黄褐色微砂・シルト（小礫・マンガン粒混）
 2 10YR 4/3 にぶい黄褐色微砂・シルト、10YR 4/6 褐色微砂・シルト（小礫・マンガン粒混）
 3 5Y 5/1 黄灰色細砂・シルト

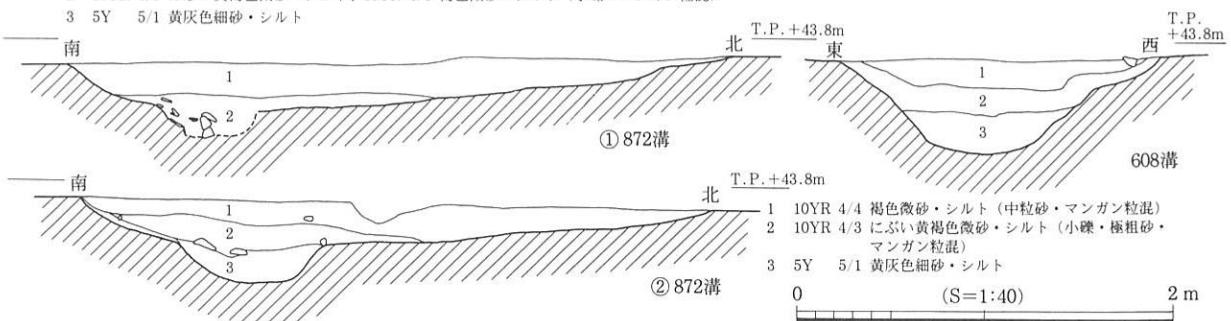


図121 8トレチ 南西地区平面、608・872溝断面

14世紀前半にかけてのものである。484は瓦質甕であり、口径約42.5cmを測る。口縁は短く外反し、胴部外面に綾杉状の叩き目がみられる。485は砥石である。石材は凝灰岩で上下端を欠損し、表面にわずかに擦痕がみられる。486は硯である。石材は粘板岩であり、池部および縁を欠損しており、現存部から木葉形を呈していたと推測される。また陸部表面に軽微な擦痕がみられ、実際に使用されていたものと考えられる。

図123-487から493は608溝より出土した遺物である（図版87）。487は土師皿である。口縁外面に一段ナデを施し、端部をわずかにつまみ上げる。胎土は粗く、褐色を呈する。488は瓦器椀であり、内外面

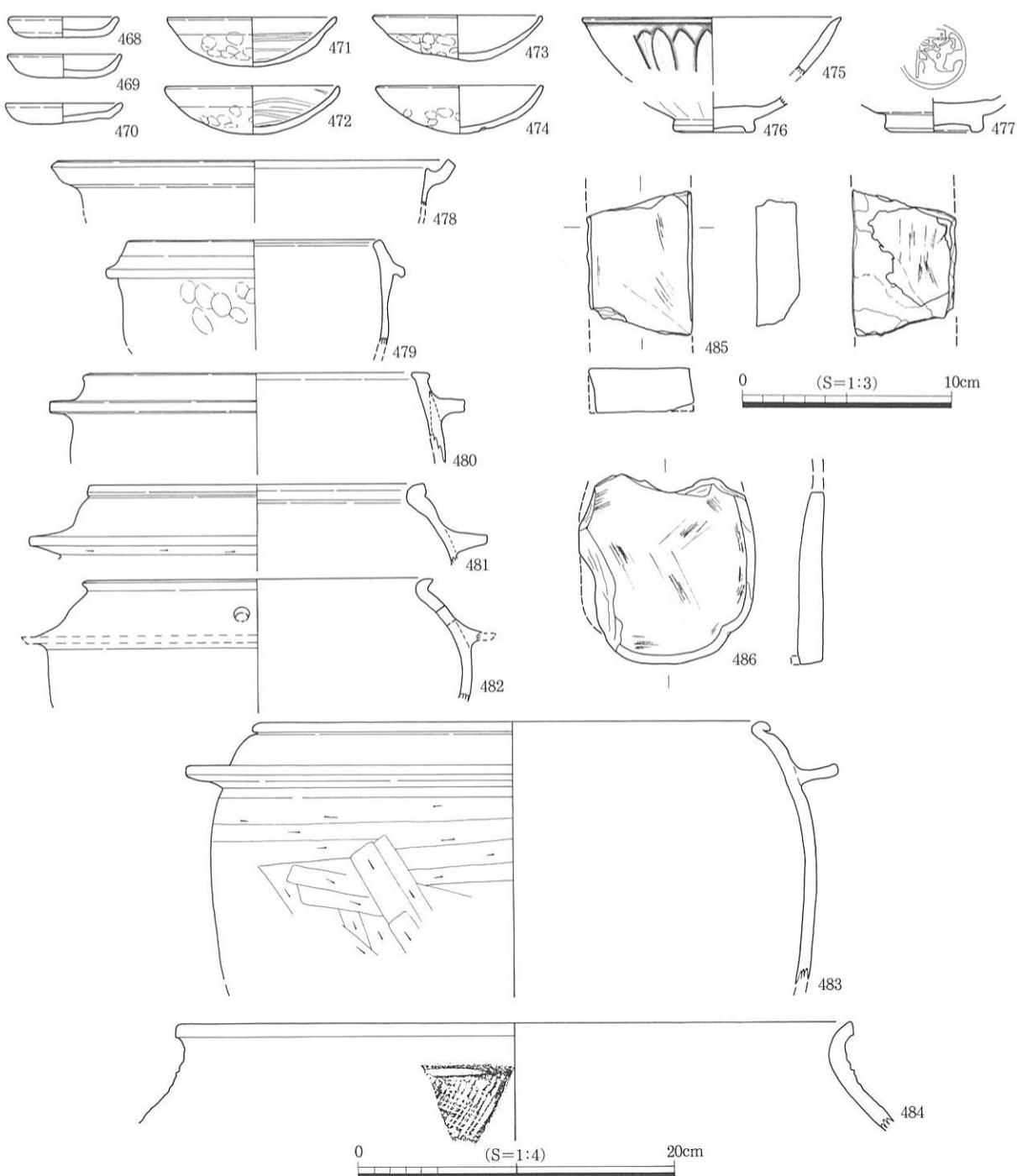


図122 8トレンチ 872溝出土遺物

ともに摩滅が著しく、調整は不明である。高台は退化し、丸底を呈する。489は口径約13.6cmの土師器大皿である。口縁外面に強い一段ナデを施し、口縁が外に開く。胎土はやや緻密であり、橙褐色を呈する。これらの遺物はほぼ13世紀中頃から14世紀初頭のものと思われる。490は瓦質鉢である。口径約18.6cmを測り、口縁端部に面取りを行なう。口縁外面に被熱の痕があり、内面に数条のミガキがみられる。491は瓦質捏鉢である。体部は直線的に開いており、口縁はわずかに内湾しながら上方へつまみ上げ、端部に面取りを行なう。492と493は土師質の羽釜である。492は内傾する口縁の端部が内側に肥厚しており、直下に鍔がやや上向きに取り付く。493は口縁端部がわずかに外側に折り曲げられ、鍔はほぼ水平に取り付く。いずれも14世紀初頭のものと思われる。

494から498は1046溝より出土した遺物である（図版87）。494は北宋錢であり、表に『政和通寶』と銘がある。初鑄は1111年である。495は青磁輪花碗である。釉の発色から13世紀頃の南方系窯産のものと思われる。496は瓦質鉢であり、口縁外面に1段の強いナデを施し、端部に丁寧な面取りを行なう。内面には横方向のミガキがみられ、全体的に厚手ではあるものの、丁寧な作りである。497は小型の瓦質羽釜である。口縁端部を小さく折り曲げており、鍔は肩部に短く取り付く。498は須恵質擂鉢である。体部はほぼ直線的に開き、口縁端部がわずかに拡張される。13世紀初頭のものである。

499から501は1051溝の出土遺物である（図版87）。499は瓦器碗であり、無高台で丸底を呈する。口縁

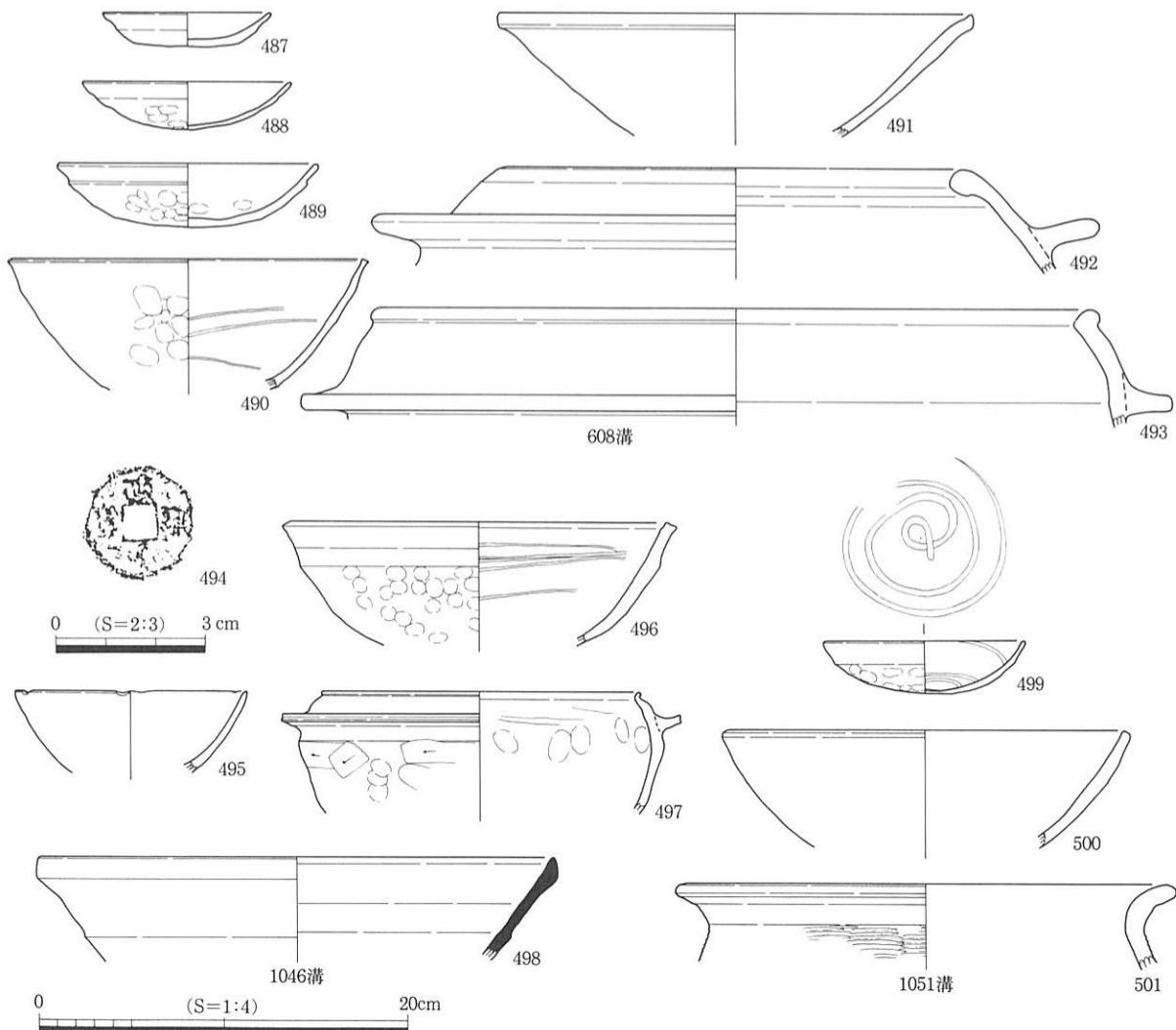


図123 8トレンチ 608・1046・1051溝出土遺物

499から501は1051溝の出土遺物である（図版87）。499は瓦器碗であり、無高台で丸底を呈する。口縁外面に横ナデを一段施し、内面に渦巻き状のミガキを施す。500は瓦質鉢である。内湾しながら立ち上がる体部に、口縁外面に一段ナデを施し、端部は面取りを行なう。被熱のため、褐色を呈する。501は土師質の甕である。口縁が外反し、端部は丸く成形する。調整は胴部外面に横方向の平行叩きを行なう。胎土はやや粗く、外面のみ還元により暗灰色を呈する。

1046溝を含む落ち込みの南側は、地山が一段高くなっている。南側の4トレンチに向かって平坦面を形成している。この地山上面において若干の遺構を検出しており、溝・土坑・ピットなどがみられる。遺構は平坦面北の落ち込み肩部周辺に、東西方向にのびて分布している。しかし、遺構の大半が落ち込みにより削平されていることや、平坦部中央に東西方向の攪乱があることから、遺構全体の様相などは不明である。また、遺構面の高さは区画内の地山より上昇するものの、遺構の深度は逆に浅くなっている。本来の地山は検出面よりさらに上部にあり、遺構面自体も何らかの削平を受けた可能性が考えられる。

2884溝はトレンチ南西隅に位置し、南側の4トレンチにおける031溝に連続している。X=-162,285付近より調査区外にのびており、この西側は現代の水路により攪乱されているため詳細は不明であるものの、おそらく7トレンチ北側の1229溝につながるものと思われる。溝の規模は幅約70cm、深さ約30cmを測り、長さ約6.5mにわたって検出した。031溝および1229溝を含めた総延長は約75mに達する。遺物の出土はとくにみられなかったものの、東側にのびる802溝と同様、他の遺構より若干時期が遡るものと考えられる。

1052土坑は2884溝の東側に隣接する。遺構中央や南側が攪乱されているため、形態など詳細は不明であるものの、現存で南北約1.3m、東西約1.0m、深さ約50cmを測る。遺構内より下半を欠いた土師器羽釜が正置された状態で出土した。

1209土坑は802溝の西側に隣接しており、直径約1.1m、深さ約6cmを測る（図版52）。浅い平坦な土坑であり、遺構内より拳大の自然礫や土器片などがまとまって出土した。

区画内の遺構は他の区画と比較してもかなり密度が高く、本区画に何らかの施設が存在したことが明らかである。遺構としては井戸・土坑・ピットがあり、それぞれの遺構はある一定の場所にまとまって検出された。井戸は明確なものが2基確認されており、井戸の可能性が高い土坑を含めると約4基の井戸状遺構が存在していたと思われる。このうちの3基が区画南東部にある区画溝の途切れた開口部分に位置しており、このような特定の場所に井戸が存在することは興味深い。

1044井戸は1046溝のほぼ東端において、1045土坑に隣接して検出された（図124、図版48）。直径約1.0m、深さ約1.5mを測る。遺構内より自然石が出土しているものの、ほとんどが1045土坑より転落したものである。しかし、1045土坑は浅く、井戸としての機能は果たさないと考えられ、井戸に付随する施設などが存在した可能性がある。遺物は中世の土師器・瓦器・磁器・スラグ・砥石が出土する。

一方、土坑やピットは区画内部に集中しており、また、ほとんどの土坑が区画南半に分布するといった特徴もみられる。区画北半にはピットが多くみられるものの、残念ながら建物の配置や規模などは明らかとなっていない。区画南側にみられる土坑群は、深度が浅く平坦な隅丸方形の土坑が多く、1051溝や996溝の通る、いわゆる落ち込みの北肩から約6mの範囲に分布している。これらとは別に、やや外れたX=-162,273、Y=-41,675付近に土坑の集中する地点がある。複数の土坑が著しく切り合っており、前述の北東区画における墓壙群に類似しているものの、円形土坑のみであることや遺構が浅いことから、やや様相が異なる。

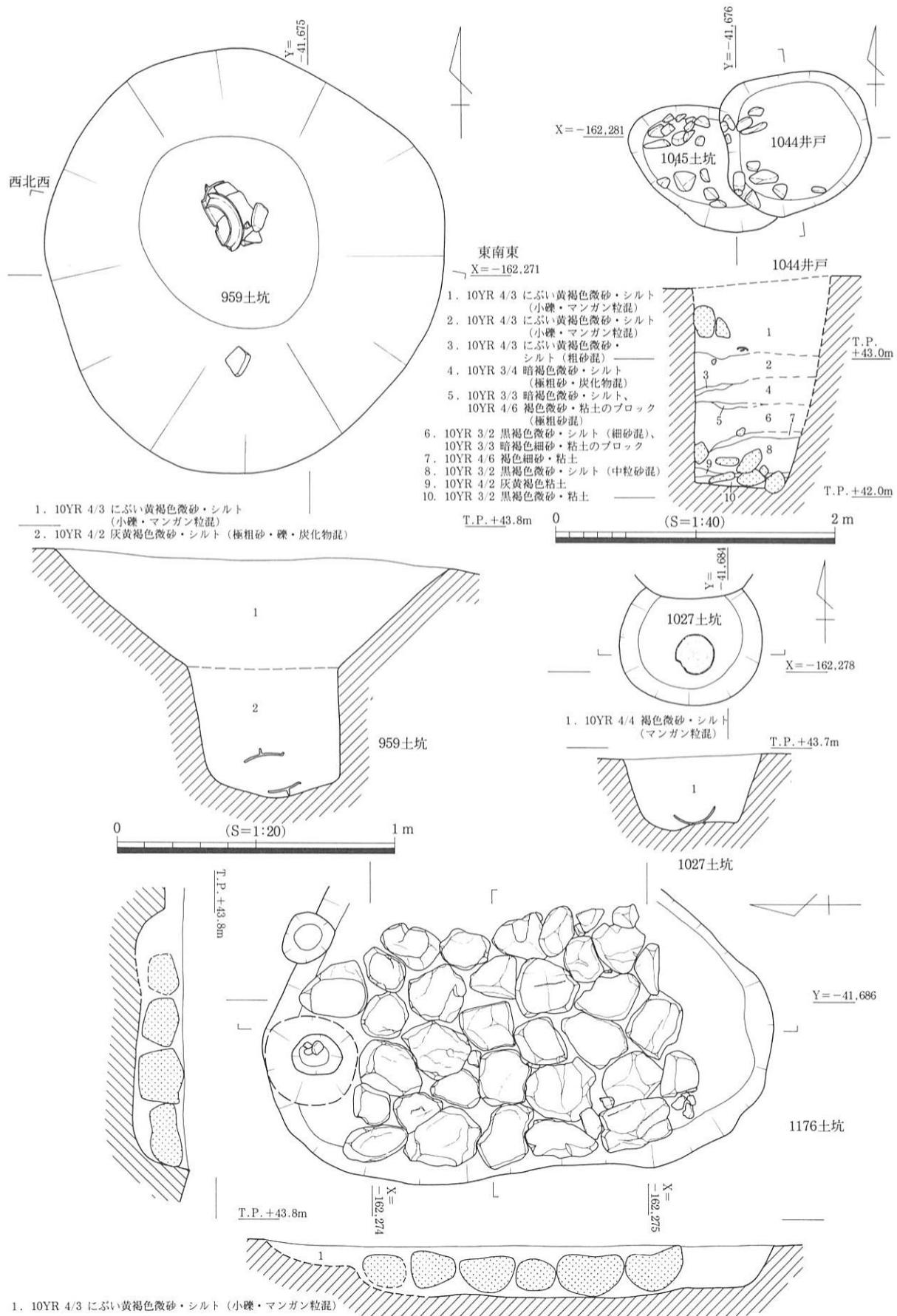


図124 8トレーナー 959・1027・1176土坑、1044井戸平面、断面

959土坑は土坑群の北側、X=−162,271、Y=−41,675付近に位置する（図124、図版51）。南北約1.5m、東西約1.4m、深さ約85cmを測り、断面形は上半が擂鉢状、下半が円筒状を呈する。埋土は砂混じりシルトであり、中世の土師器・瓦器・須恵器・瓦などが出土している。また、遺構底面より1個体分の瓦質羽釜が押し潰された状態で出土した。その南側に位置する960土坑は、961土坑やピットに削られており、全体形は不明であるものの、直径約80cmの円形と推測される。内部より瓦器皿が完形で出土している。これらの土坑群の南側もやや遺構の密な状況が認められ、前述のような区画南側の土坑とは様子が異なっている。991土坑はX=−162,275、Y=−41,675付近に位置し、南北約80cm、東西約1.3mの楕円形を呈する。遺構内より中世の土師器・瓦器・須恵器などが出土している。

これらの土坑群の周辺はピットがやや希薄であり、これらを中心とする東西において北半にピットと南半に土坑という組み合わせが成立する。このような点から、少なくとも区画内の東西2ヵ所に建物が配されたと推測する。西側の規模は、東西長が区画南側にある溝の長さにほぼ一致しており、約11m四方の範囲となる。北側にみられるピットは直径約20cm前後のものが多く、大型建物に付随するものとは考えにくい。これらのピットの中央に位置する913・914土坑は、いずれも長径約1.4m、短径約1.0mの楕円形を呈する（図版50）。このうち914土坑からは土師器・瓦器・磁器・瓦などがまとまって出土しており、とくに羽釜片が多く含まれている。南側にある土坑のうち、北西部に位置する1176土坑では石敷施設を検出した（図124、図版53）。敷石は南北約1.3m、東西約0.9mの長方形を呈し、地山直上に一段積みしている。北側の一部がピットにより攪乱されているものの、ほぼ完全に近い状態を残す。使用された石材は多種多様ではあるものの、20cm前後の大きさに揃えており、平坦面が上方を向くように設置している。同様の遺構は過去の日置莊遺跡の調査でもみつかっているが、遺構の性格については不明な点が多い。建物に附属する施設である可能性がもっとも高いと思われる。

1176土坑以外の土坑は、基本的に隅丸方形を呈する浅いものである。947土坑は1176土坑の東側に位置し、直径約1.5mの円形に近い土坑である。遺構内部より中世の土師器・瓦器・須恵器・磁器などが出土しており、とくに皿類が多くみられる。

1011土坑は南側の1051溝に隣接した地点において検出した（図版50）。東西約1.8m、南北約1.5mを測る隅丸方形を呈する。遺構内部より人頭大の自然石が出土しているものの、1176土坑のような規則性はみられない。遺物としては中世の土師器・瓦器・須恵器などがみられる。

1026・1027土坑および1078・1079ピットは1011土坑の西側より検出した。土坑はいずれも直径50cm前後であり、またピットはともに直径約20cmを測る。1026土坑は須恵器甕の口縁、1027土坑は瓦器椀の完形品が出土した（図124、図版51・55）。

東側の地区では東西約9mの範囲に遺構が検出され、西側の範囲が正方形であるのに対し、東側は縦長の長方形を呈する。しかし、北半にピット、南半に土坑が多くみられることは西側と同様である。残念ながら、ピットの検出による建物位置や規模などの想定は不可能であった。土坑の位置は大きく2ヵ所に分かれ、北東隅と南半部にある。北東隅は874土坑をはじめとする直径1m前後の土坑があり、南側では一辺2m以上の隅丸方形の土坑がみられる。

874土坑は区画の北東部、608溝に隣接した地点において検出され、東西約1.2m、南北約1.4mを測る楕円形の土坑である。出土遺物は中世の土師器・瓦器・須恵器の他に、青白磁の合子がみられる。

886土坑はX=−162,275、Y=−41,671付近に位置し、東西約2.5m、南北約2.1mを測る（図版53）。遺構深度は浅いもの、遺物は中世の土師器・瓦器・須恵器・陶器・磁器・瓦・スラグ・鉄製品などがま

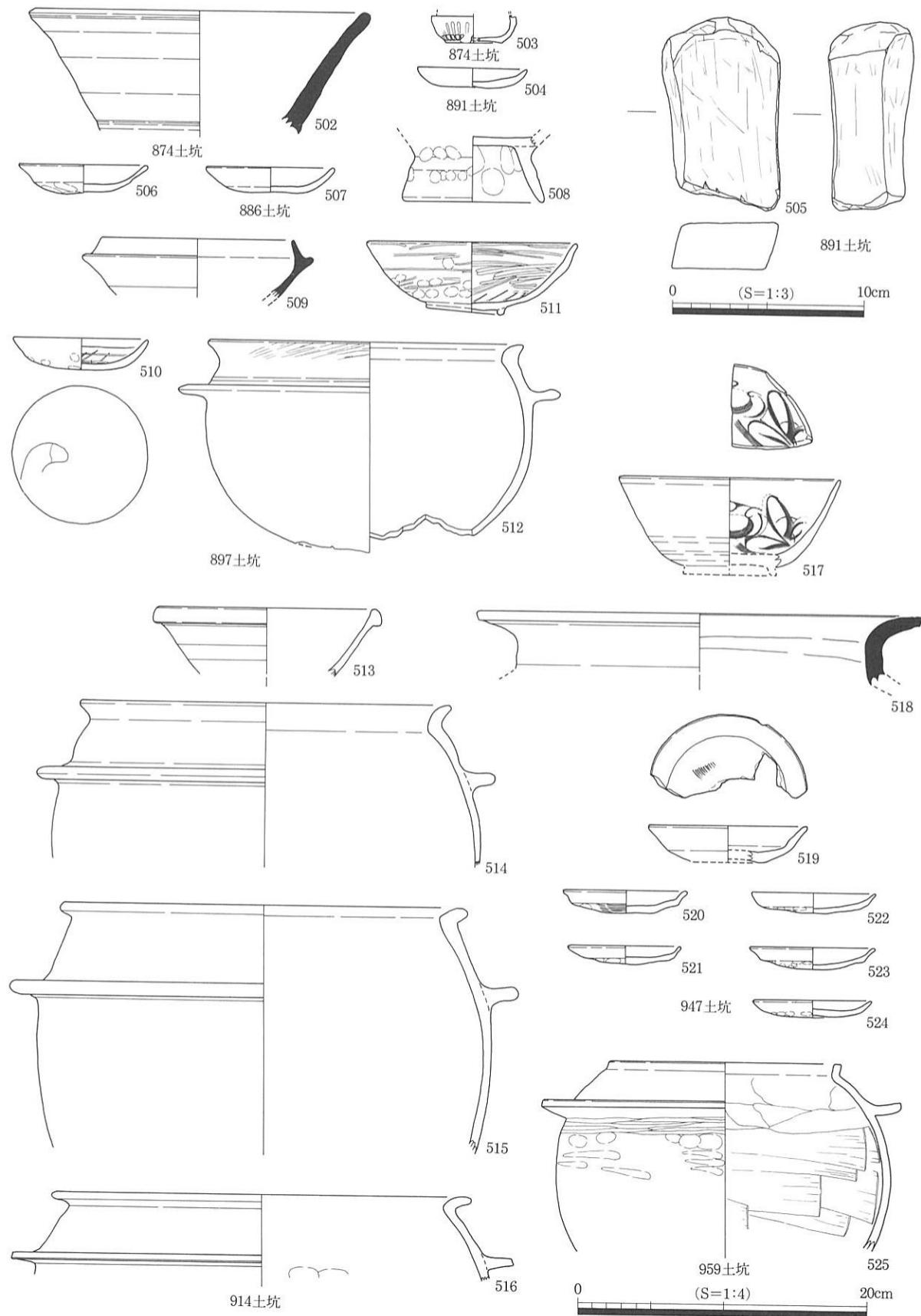


図125 8トレンチ 874・886・891・897・914・947・959土坑出土遺物

とまって出土している。また、遺構中央のやや西寄りに南北方向と思われる石列を検出した。直径10~20cmの自然石を使用しており、ピット等によりかなり攪乱されているため全体の形は不明である。

987土坑は886土坑の南側に位置し、東西約2.0m、南北約2.1mの隅丸方形を呈する。886土坑と同様、遺構深度は浅いものの、遺物がまとまって出土している（図版49）。遺物としては中世の土師器・瓦器・須恵器・陶器・瓦・金属関連の遺物などがみられる。このうち、とくに金属関連の遺物として鍛造スラグ・轍の羽口・砥石などが多く出土している。

1069土坑は886土坑の東側に位置し、東西約2.7m、南北約2.5mを測る土坑である。やはり前述の2つの土坑と同様、遺物がまとまって出土している。遺物としては中世の土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦・金属関連のものがあり、鍛造スラグや轍の羽口など、987土坑と同様の遺物構成がみられる。明確な製作址などは検出されていないものの、上記の土坑を含め、周辺から多くの鍛造関連の遺物が出土していることから、少なくともこれに関わる作業が近くで行なわれていたものと推測される。

図125-502と503は874土坑の遺物である（図版88）。502は須恵質の鉢であり、体部はほぼ直線的に開く。口縁は端部が丸く、外面に1条の弱い沈線を施す。底部付近の外面が膨らみをもちながら垂下しており、本来は高台が存在したと思われる。503は青白磁の合子であり、口縁がわずかに欠けている。外面に鎬文を施す小型の精巧品である。釉は外面と内底面にあり、淡い青色に発色し、微細な貫入がみられる。

504と505は891土坑より出土した遺物である（図版88）。504は土師皿である。摩滅が激しいため、調整などは不明である。胎土はやや緻密であり、浅黄橙色を呈する。505は砥石である。石材は津島石と呼ばれる凝灰岩を使用しており、表裏および側面に擦痕が顕著にみられる。

506から508は886土坑の出土遺物である（図版88）。506と507は土師皿である。506は口縁外面に強い一段ナデを施し、口縁が外反する。底部との境に明瞭な圈線をもち、胎土はやや粗く、赤橙色を呈する。507は口縁外面に弱い一段ナデを施し、浅黄橙色を呈する。14世紀代のものである。508は土師質台付皿の高台である。皿部が欠損しており、法量は不明である。台部の内外面に成形時の指頭圧痕が顕著に残る。胎土はやや粗く、橙褐色を呈する。

509から512は897土坑より出土した遺物である（図版88）。509は須恵器杯身である。口縁が内傾気味に立ち上がり、蓋受部の断面は丸い。全体的に浅く、二次焼成のためか、外面に煤が付着し全体的に酸化している。中村編年のII-3型式に相当する。510は瓦器皿である。底部に切り込み円板技法による成形痕がみられる。また調整は見込みに格子ミガキ、体部内面に圈線ミガキを行なう。511は瓦器椀である。内面は見込みに平行ミガキ、体部上半に細かい圈線ミガキを行なった後、下半に幅広のミガキを施す。外面は口縁に一段ナデを行ない、粗い横ミガキを施す。512は土師質羽釜である。口縁端部は外傾し、外面にヘラ状工具によるナデを行なう。内底面にコゲ、鍔下に煤が付着しており、底部を使用後に穿孔している。13世紀後半のものである。

513から516は914土坑の出土遺物である（図版88）。513は白磁椀である。口縁と内面に施釉しており、外面にヘラケズリがみられる。514から516は土師質羽釜である。いずれも口縁端部が外側に屈曲しており、鍔は肩部やや上部に水平に取り付く。13世紀前半のものである。

517から524は947土坑より出土した遺物である（図版89）。517は青磁椀である。内面に片切彫りによる花文を施す。胎土は緻密で、釉はオリーブ色である。13世紀後半の南方系窯の製品である。518は須恵質甕の口縁である。大きく開く口縁をもち、端部は面取りを行なう。東播系の甕と思われる。519は

青磁稜皿である。外底部に回転糸切り痕があり、内底面に櫛描文がみられる。釉は青緑色で、気泡が多い。520と523は瓦器皿である。口縁外面に一段ナデを行ない、口縁が外反する。底部との圈線が明瞭である。521と522、524は土師皿である。浅身で、口縁外面に弱い一段ナデがみられる。522は胎土が粗く、他の2点はやや緻密である。13世紀後半頃のものと思われる。525は959土坑より出土した瓦質羽釜である（図版88）。口縁部が直立氣味に屈曲し、鍔は肩部上方に上向きに取り付く。いずれも端部を面取り

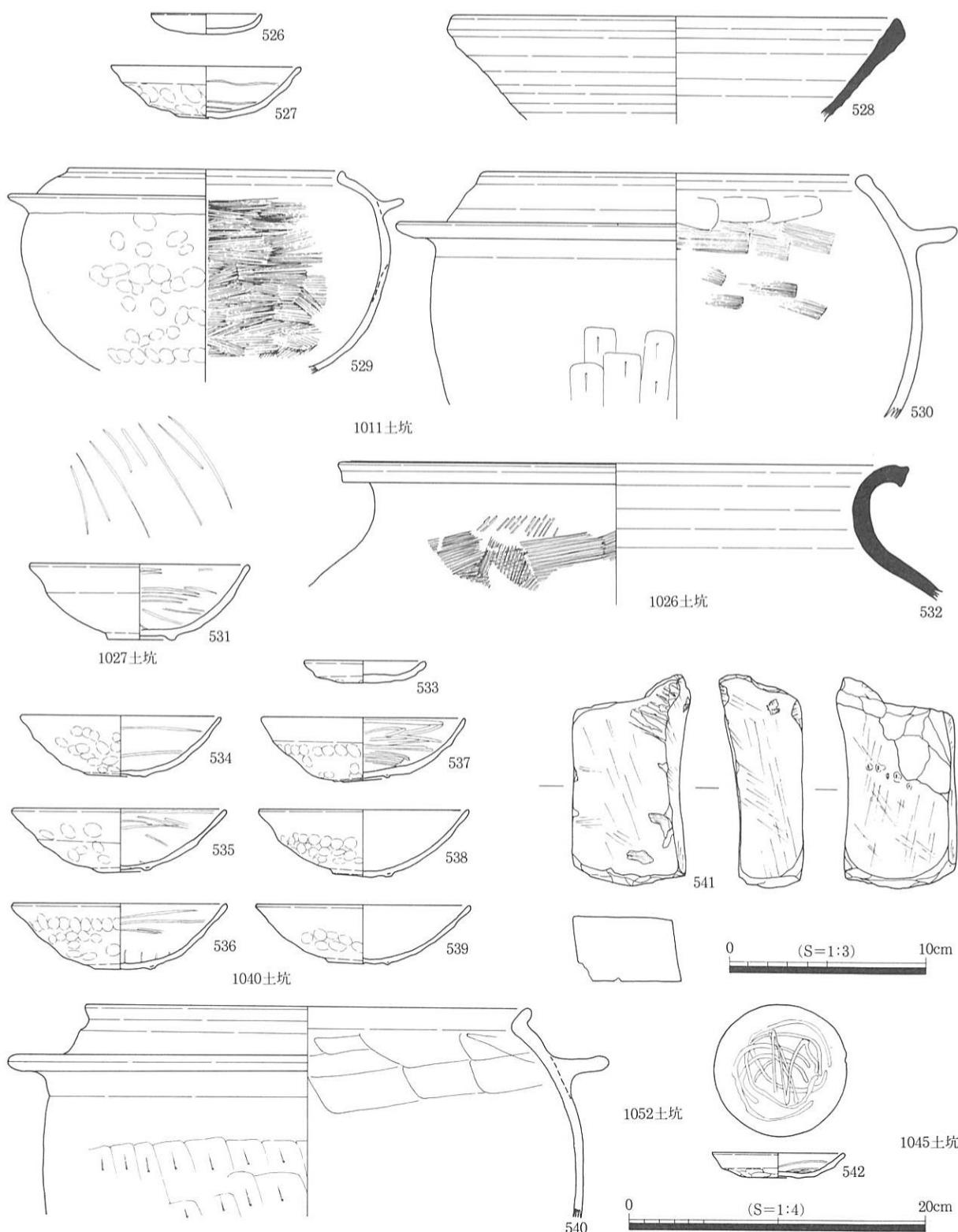


図126 8トレンチ 1011・1026・1027・1040・1045・1052土坑出土遺物

する。調整は外面鍔下に細かなナデ、内面に板状工具によるナデと口縁付近に強いナデを施す。14世紀初頭頃のものである。

図126—526から530は1011土坑より出土した遺物である（図版89）。526は土師皿であり、口縁外面のナデが不明瞭で圈線はみられない。胎土はやや緻密で浅黄橙色を呈する。527は瓦器碗である。口径が小さく、高台は極端に扁平なものになる。口縁外面に一段ナデを行ない、内面に渦巻き状のミガキを施す。528は須恵質捏鉢である。直線的に大きく開く体部に、口縁は外側にやや拡張する。また口縁端部外面には重ね焼きの痕と思われる自然釉が認められる。529は瓦質羽釜であり、やや押し潰れた形態を呈する。口縁部は強く内傾しつつ、端部を上方に折り曲げている。体部内面に細かなハケ調整を施す。530は土師質羽釜であり、丸い体部と口縁が特徴である。調整は外面底部に下方向のケズリ、内面に横方向のハケと強いナデを行なう。また、鍔下外面にはコゲが著しく付着する。これらの遺物は13世紀末葉から14世紀初頭のものである。

531は1027土坑より出土した瓦器碗である（図版90）。断面台形の扁平な高台が付き、調整は摩滅のために不鮮明であるものの、見込み部に平行ミガキの痕が認められる。

532は1026土坑より出土した須恵質の甕である（図版89）。外反する口縁部に、端部にはナデによる上下の拡張がみられる。調整は体部に細かな叩き目が残っており、それ以外はナデによる成形である。13世紀前半のものと思われる。

533から539は1040土坑より出土した遺物である（図版90）。533は土師皿であり、口縁外面に一段ナデを行ない、底部との境に圈線が認められる。胎土は粗く、橙褐色を呈する。534から539はいずれも瓦器碗であり、高台は極めて扁平で断面が三角形や台形を呈する。ほとんどのものの摩滅が著しく、調整などは不明である。しかし、535や537では口縁外面に一段ナデを行ない、536の見込み部には平行ミガキの痕が残る。このような点から、いずれも13世紀後半代のものと推測される。

540は1052土坑より出土した土師質羽釜で、口径約50cmの大型品である（図版90）。口縁端部は折り曲げにより外傾する。鍔は肩部やや上方に、ほぼ水平に取り付く。また調整は外面下半に下向きのヘラケズリを行ない、口縁内面に右上がりの強いナデを施す。13世紀後半のものと思われる。

541と542は1045土坑より出土した遺物である（図版90）。541は砥石である。石材は津島石と呼ばれる凝灰岩を使用し、表裏および側面に顕著な擦痕が残る。542は瓦器皿であり、口縁外面に一段ナデを施し、底部との圈線が明瞭に残る。見込み部に楔状ミガキを2条と、円または弧状のミガキを5条施す。

図127—543から547は960土坑より出土した遺物である（図版91）。543は瓦器皿であり、不鮮明ではあるものの、内面に同心円状のミガキとヘラ記号状のものがみられる。544から546は瓦器碗である。いずれも断面三角形の扁平な高台をもち、口縁は外面に一段ナデを行ない、やや外反する。調整は見込み部に平行ミガキ、体部内面に圈線ミガキを施す。547は土師質羽釜であり、口縁端部が大きく屈曲し、やや外反する。これらの遺物はいずれも13世紀後半のものである。

548と549は987土坑より出土した輪の羽口である（図版91）。2点ともほぼ同じ大きさであり、直径約8cm、内孔径約3cmを測る。胎土は砂混じりの粘土であり、全体は赤褐色に酸化する。先端部はガラス質や金属が付着し、青灰色に還元している。酸化部分と還元部分の境は明瞭であり、羽口の取付け角度は約14度と推測される。

550から552は991土坑より出土した瓦器碗である（図版91）。550は断面三角形の高台をもち、見込み部に格子ミガキを施す。胎土は緻密で焼成も良好である。551と552は断面台形の高台をもち、ミガキが

やや散漫である。胎土はやや粗く、生焼けで軟質な感じを受ける。このうち551の見込み部は平行ミガキを、552はジグザグ状のミガキを施しており、それぞれ製作法の異なる瓦器碗が同一遺構より出土している点は興味深い。時期的には13世紀代のものと考える。

553は998土坑より出土した灰釉陶器の鉢である（図版91）。口径約19cmを測り、身部はほぼ直線的に開き、口縁端部はやや丸みを帯びた弱い面取りを行なう。内面および外面上半に釉が認められる。13世紀代のものと推測される。

4トレンチにおいて既に述べたように、当調査区に特徴的にみられる遺構として土器埋納ピットが挙げられる。8トレンチにおいても、同様の土器埋納ピットが多数検出された。前述の区画には関係なく、ほぼトレンチの全域において検出され、その中でも南東部に特に集中している。これは他の遺構の密度の高さにも一致しており、他の調査区の検出状況と合せて、これらの土器埋納ピットが建物と密接に関わることは間違いない。

1174ピットは北西区画のほぼ中央に位置する（図102、図版61）。上部を639土坑に削平され、遺構底面の埋納された土器が出土した。出土した範囲は直径約25.5cmであり、おそらくピットそのものの規模もこれに近いものと思われる。図129—560から569が出土した土師皿である（図版92）。伊野氏Eタイプに属し、口径は7cm前後である。

北東区画における土器埋納ピットはいずれも810溝の西側、すなわち区画内にあり、870ピットは868

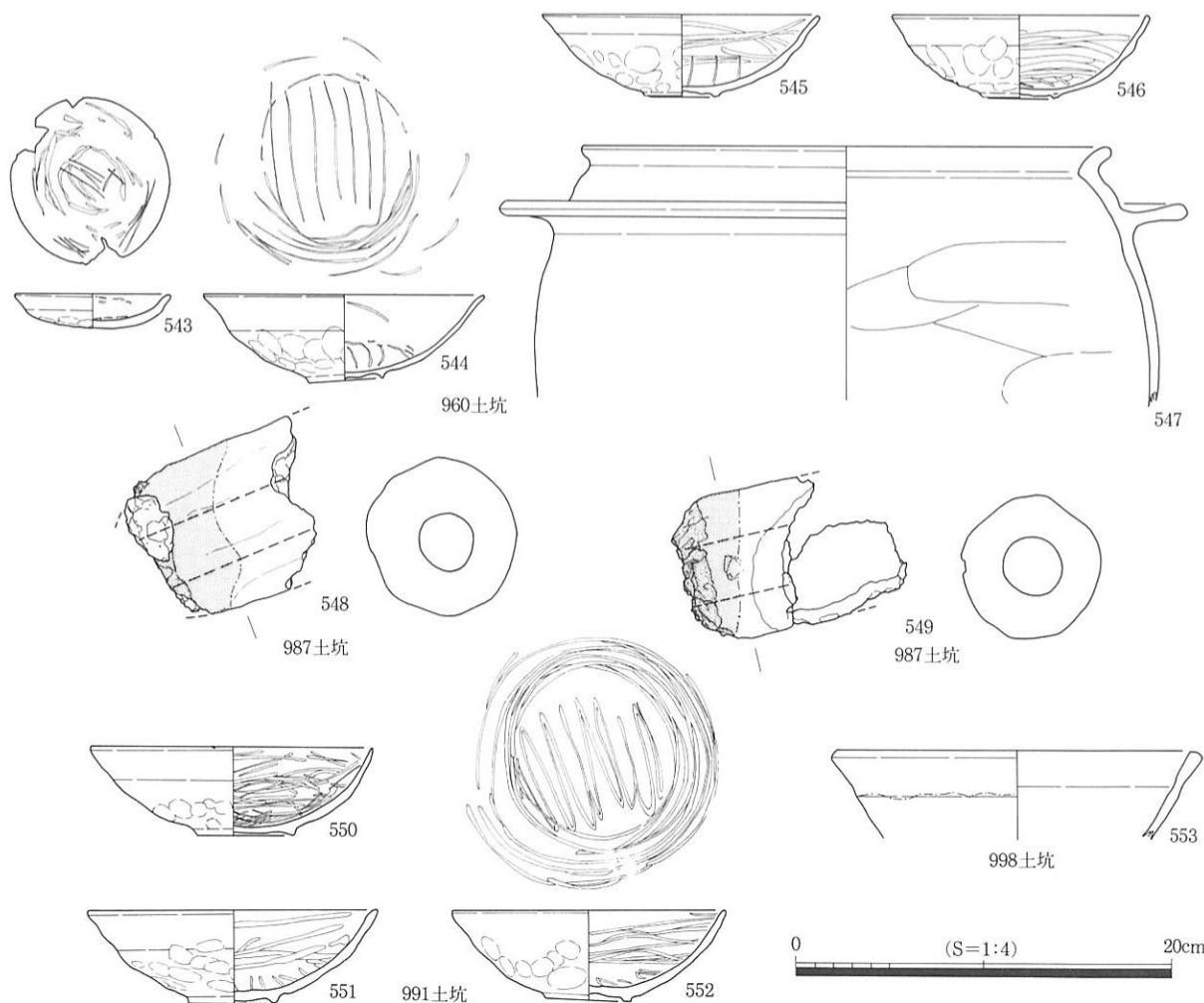


図127 8トレンチ 960・987・991・998土坑出土遺物

井戸の北側、1207ピットは854土坑の南に位置する。図129-555から557が870ピット（図版91）、600が1207ピットより出土した土師皿である（図版92）。870ピットでは556と557のJタイプとへそ皿を意識したと思われる555の2種類がみられる。1207ピットの600は典型的なへそ皿であり、胎土から京都系のものと思われる。同じ区画内に他ではみられないへそ皿を埋納するピットが複数存在することは注目される。

また、これらとは別に特殊な例として、798ピットがある。798ピットは609土坑底面において検出された遺構であり、遺構内より図129-554の備前焼片が出土した（図版92）。破片のため詳細は不明である。

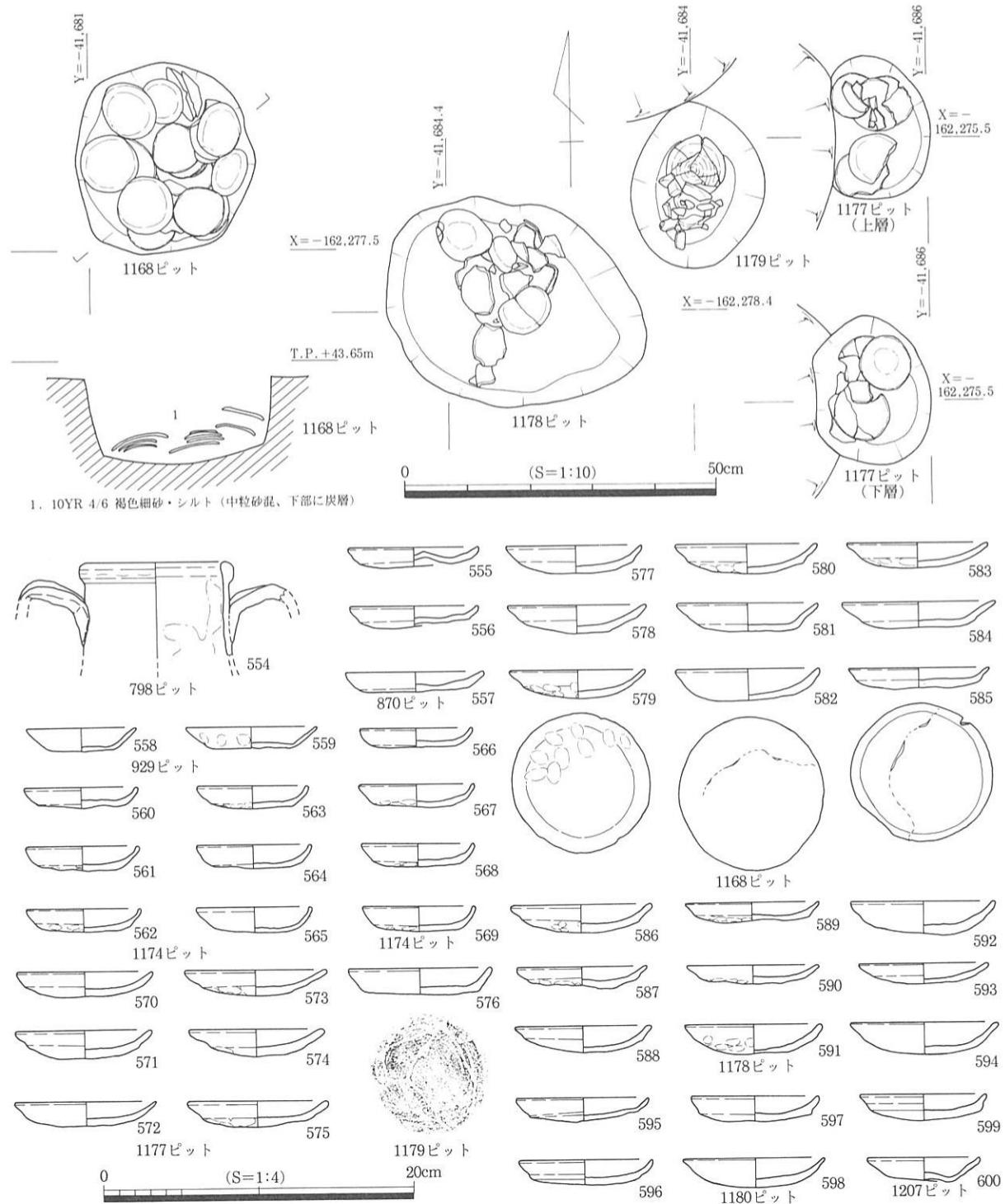


図129 8トレンチ 798・870・929・1168・1174・1177・1178・1180・1207ピット出土遺物

るが、器種は水差しと考えられ、中国製磁器の写しと思われる。形態から12世紀代のものと推測される。609土坑底面より検出されたピットは複数あるものの、建物などの確認には至っていない。

南西部は最も多くの土器埋納ピットが検出され、20基以上を数える。

929ピットは区画の中央やや北寄りに位置する。図129-558と559が遺構より出土した土師皿である（図版92）。平底から屈曲し直線的に開く口縁をもつ。胎土は緻密で灰白色を呈し、他の土器埋納ピットより出土した土師皿とは明らかに異なる種類である。1177ピットは区画の西側、石敷のある1176土坑の南東に位置する（図128、図版60）。遺構は西側を945土坑に削られており、規模は直径約25cm、深さ約7.5cmを測る。遺構内より出土した土師皿は15個体分であり、図化したものは570から575である（図版92）。底部から口縁にかけて緩やかに立ち上がり、口縁外面に一段ナデはみられるものの、圈線はあまり明瞭ではない。1178と1179ピットは区画南西部、1051溝の北側において、隣接して検出された（図128、図版61）。1178ピットは長径約44cm、短径33cm、深さ約6.2cmを測る。遺構内より出土した土師皿は586から594である。口縁が外反し浅いタイプと、体部が丸く深身の2タイプがみられる。1179ピットからは土師皿が計3個体分出土し、その代表が576である（図版92）。平底で直線的に開く口縁をもち、厚手である。底部に回転糸切り痕が認められ、13世紀代のものと思われる。1168ピットは1179ピットの東側、1011土坑の北東に位置する（図128、図版60）。遺存状態の最も良好なピットであり、直径約30cm、深さ約14cmを測る。遺構の底部付近より、土師皿がほぼ完形で23個体分出土し、その一部が577から585である（図版91）。1178ピットと同様、2種類のタイプがみられる。582や585の土師皿では切り込み円板技法による成形の痕が認められる。1180ピットは1168ピットの東側に位置し、595から599の土師皿が出土している。これらの土師皿も1178ピットと同様、2種類のタイプに分けられる（図版92）。これらの1178・1179・1168・1180ピットは1051・996溝に並列して東西に並んでいることがわかる。これらのピットが区画内でも南端に位置することや、その北側に土器埋納ピットがほとんどない割に通常のピットが多いことから、北側に建物が存在し、これに関わる祭祀を行なったものと推測される。

3. 95年度A地区

A地区における調査では、調査方法の制約もあり、あまり成果はみられなかった。調査区の大部分において遺構は検出されず、前述したような層序を確認するにとどまった。なお、包含層はほぼ全域においてみられ、地山面も地表より1m以内に確認された。包含層より出土した遺物は古代から中世にかけてのものであり、ほとんどは細片で図化するまでに至らない。図131-601はNo.10～No.11トレンチより出土した土師器皿である。口縁部が強い一段ナデにより外反し、底部との境に明瞭な圈線がみられる。13世紀中頃のものである。

遺構が検出された地点は全調査区のうちの西側に偏っており、遺跡の中心が西に存在することを示唆していると考えられる。

最も北側に位置する遺構は、No.5～6トレンチの中央付近において検出された（図130、図版94）。検出された範囲はX=-162,731付近からX=-162,752付近の約21mである。近世の耕作土を除去後、厚さ約10cmほどの包含層を検出し、これを掘削したT.P.-47.25m付近において遺構を確認した。遺構としては溝・土坑・ピットがあり、いずれの遺構からも遺物はほとんど出土していない。トレンチ幅が狭いため、遺構の詳細な構成や性格については不明である。

やや大型の溝が2本、X=-162,732付近とX=-162,745付近を東西にのびており、北側の溝は幅約1.1m、深さ約24cm、南側は幅約1.7m、深さ約30cmを測る。これ以外に幅50cm前後の小規模な溝が4本確認されており、X=-162,737.5からX=-162,743.5の範囲にみられ、いずれも東西方向にのびている。これに関連するように、同じ範囲においてピットの集中部がある。ピットの直径は約40cm、深さは約10～20cmを測る。土坑は検出範囲の南端、X=-162,750付近に集中してみられる。いずれもトレンチ外にのびており、全体は不明である。このような状況のため、建物などの想定も不可能であった。

No.8トレンチでは、耕作土と床土を除去後、全域において厚さ約6cmの包含層の堆積を確認した。包含層の調査では明確な遺構は検出されず、遺物の出土もみられなかった。包含層を除去し、地山を検出した状態でわずかな遺構がみつかった（図131）。遺構としてはピット、土坑があり、遺構から遺物の出土がないため、正確な時期については不明である。遺構密度も低く、かなり散漫な状況であり、古環境の復元には至らない。しかし、周辺にこれらの遺構の中核となる地点が存在する可能性があり、今後の調査に期待される。

No.10～11トレンチにおいて、南北にのびる溝を検出した（図131）。この004溝はY=-41,718付近に位置し、幅約80cm、深さ約25cmを測る。遺構内より土師器甕、小型壺、高杯が一括して出土した。図131-602から607が出土遺物である（図版95）。602は小型壺の口縁であり、やや外反しながら外に開き、端部は尖り気味である。603と604は甕の口縁であり、いわゆる布留甕に相当する。口縁部は頸部から直線的に外に開き、端部がわずかに内側に肥厚する。布留2式に相当すると思われる。605から607は高杯である。605は杯底部が直線的に外にのび、外反する口縁部との取り付きに稜をもつ。やや外反する口縁から、さらに端部はやや水平に外に開く。脚部は直線的にやや開きながら垂下し、ほぼ中位より外へのびる。脚部と杯部の接合は充填技法により、脚部先端は杯部内面に到達していない。また、杯部外底面には放射状のミガキが施される。606は杯部が内湾しながら上方に開き、外面に稜はみられない。口縁端部はほぼ水平にのびる。607は605に類似した形態である。杯部外面の稜は段状を呈し、口縁端部も水平となる。杯部と脚部の接合は充填法によるものであり、脚部は杯底部内面に達する。脚部はやや

開きながら下1/3程度の高さより屈曲し、ハ字状に大きく広がる。屈曲する高さで3方向に円形の透かしを施す。

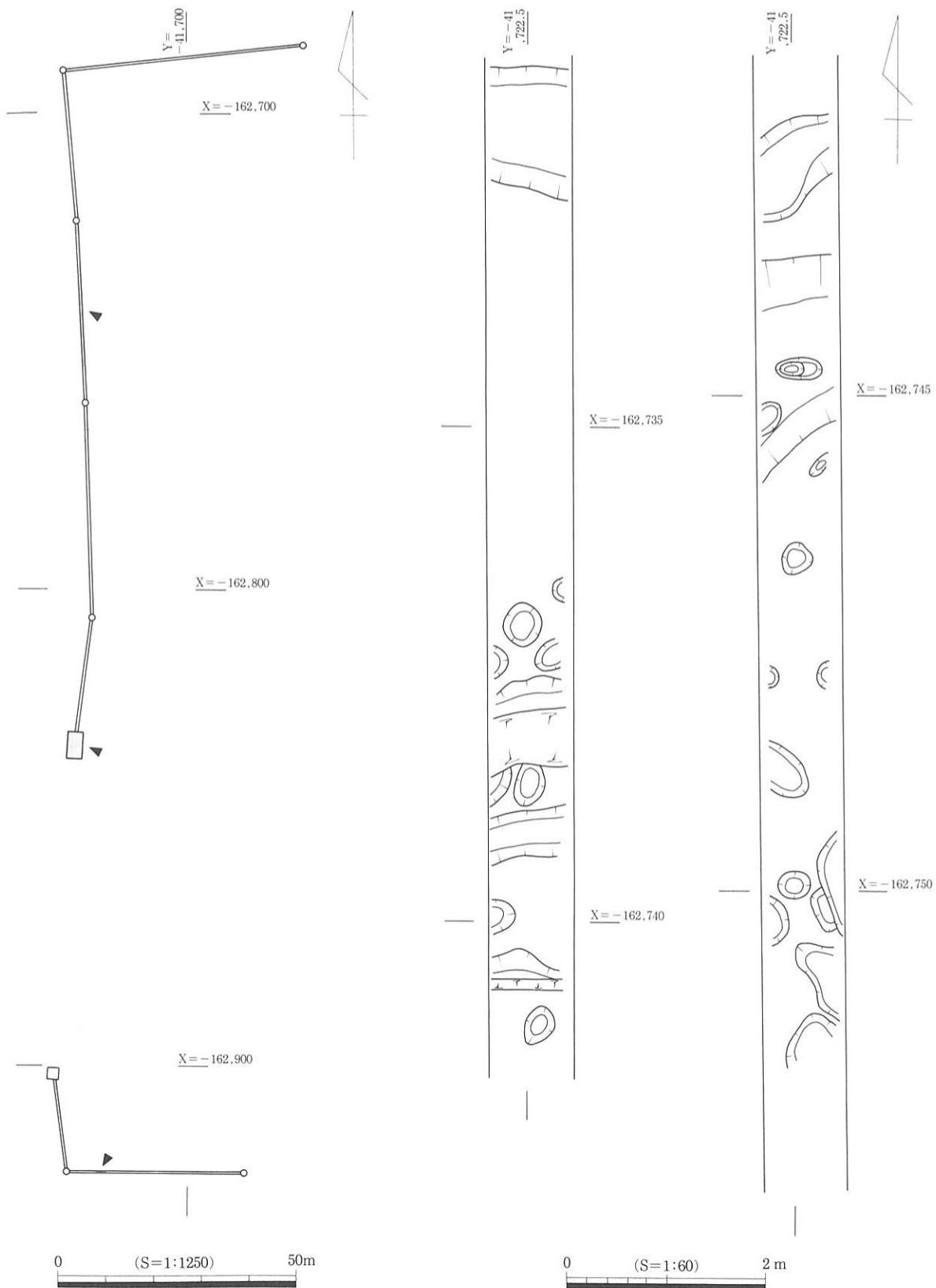


図130 No.5～6 トレンチ 平面

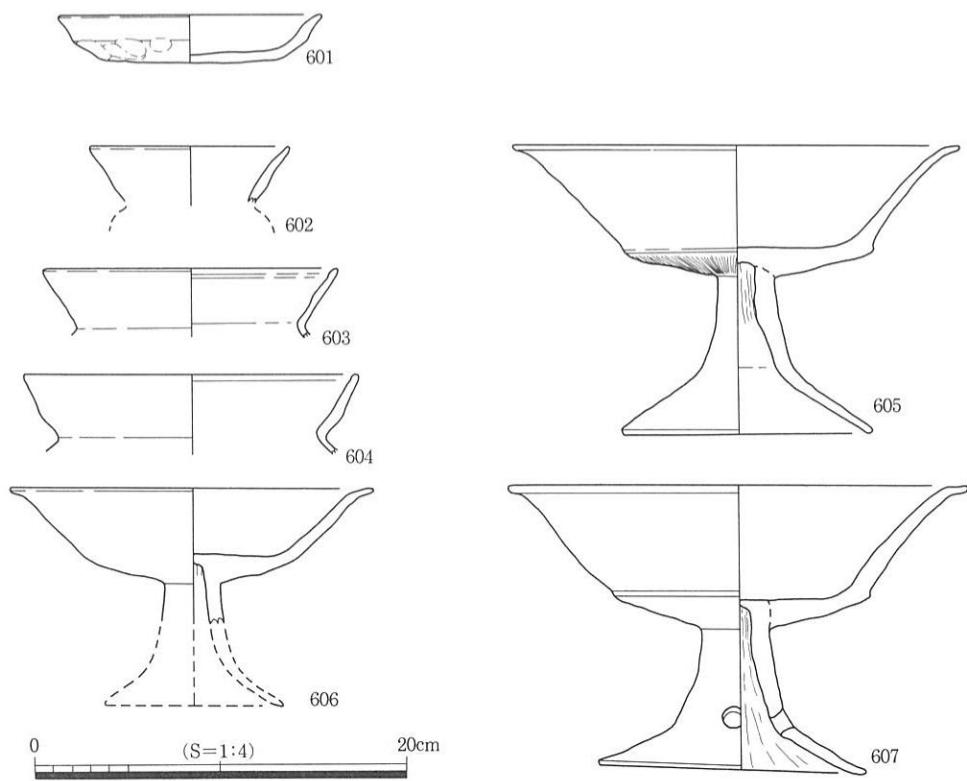
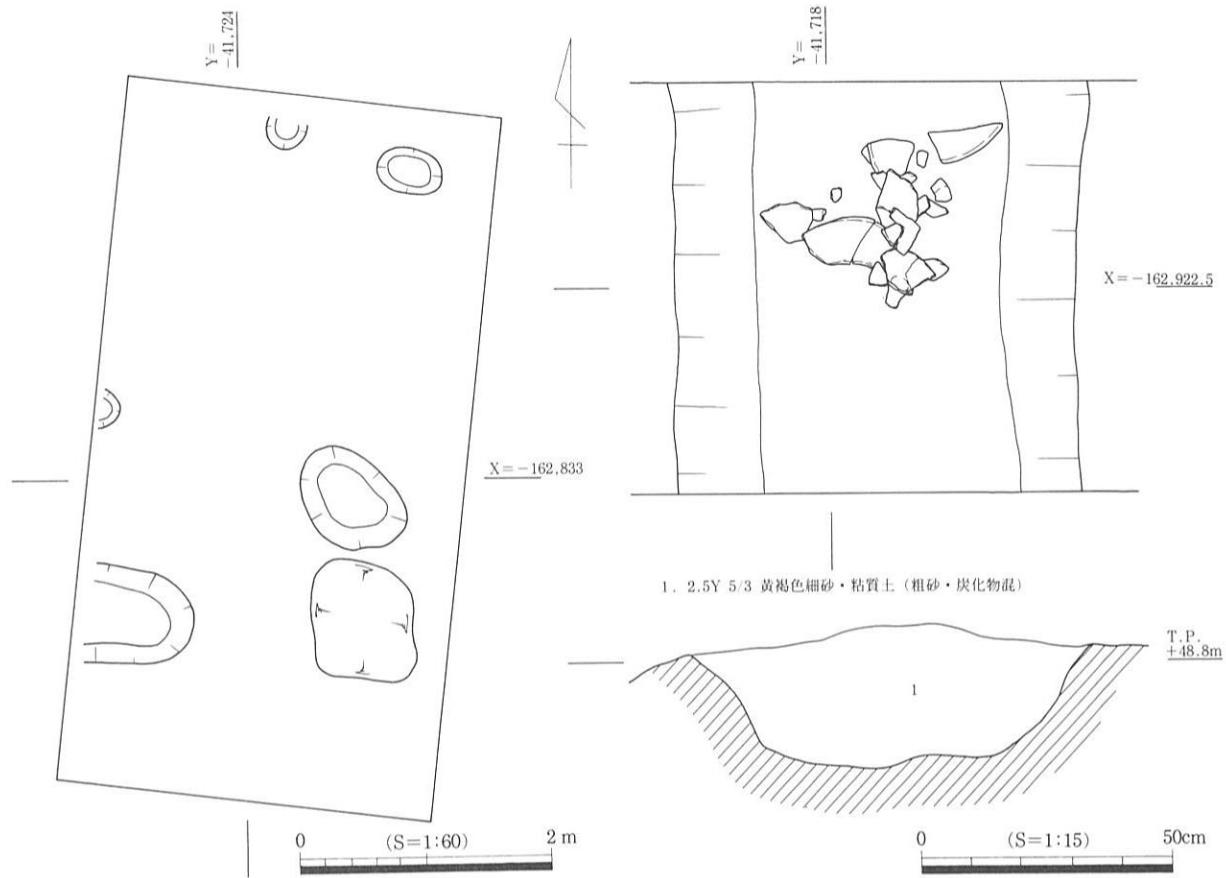


図131 No. 8 トレンチ平面 No.10~11 トレンチ 004溝平面 断面出土遺物

第V章 自然科学分野からの成果

第1節 余部B遺跡における寄生虫卵分析

1. はじめに

寄生虫卵分析は、糞便堆積物やその汚染域を調べる際に有効であり、トイレ遺構や施肥、汚染状況等を推定することができる。また、寄生虫特有の生活史から食生活の推定も可能である。なお、寄生虫卵は自然界の動植物遺体のなかでは保存性の良い方であるが、花粉ほどは保存性が高く無く、特に乾燥した風化や土壤生成作用の強い環境では分解される場合もある。

余部B遺跡では、羽釜を外枠とする土坑の裏込の堆積物を対象として寄生虫卵分析を行い、土坑の性格の検討を試みることになった。

2. 試料

分析試料は、8トレンチ610土坑の羽釜裏込の堆積物と地山（遺構面）の堆積物より採取されたもので、羽釜上段裏込（サンプルNo.074）、羽釜下段裏込（No.075）、羽釜下段底裏込（No.076）、地山（No.077）の計4点である。

3. 方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) サンプルを採量（1cm³単位）する。
- 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置。（2・3度混和）
- 5) 水洗後サンプルを二分する。
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 8) 検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨ててという操作を3回繰り返して行った。

4. 結果と考察

分析の結果、羽釜裏込（074、075、076）、地山（077）の各試料とも寄生虫卵は検出されなかった。花粉が微量含まれていたので付加して表に示す。各試料とも写真に示されるように有機質が少なく、炭化物が微量含まれていた。このことからみて、試料となった堆積物は風化や土壤生成作用などの分解を著しく受けたとみなされる。

以上から、610土坑の羽釜裏込の堆積物（試料）の分析では寄生虫卵が含まれておらず、堆積物（試料）に糞便が含まれていないか検出されないほど極めて低密度であるとみなされる。なお、寄生虫卵は検出

されなかったが、試料（堆積物）が羽釜内の堆積物でないため、610土坑が便所遺構かどうかの判断はできない。

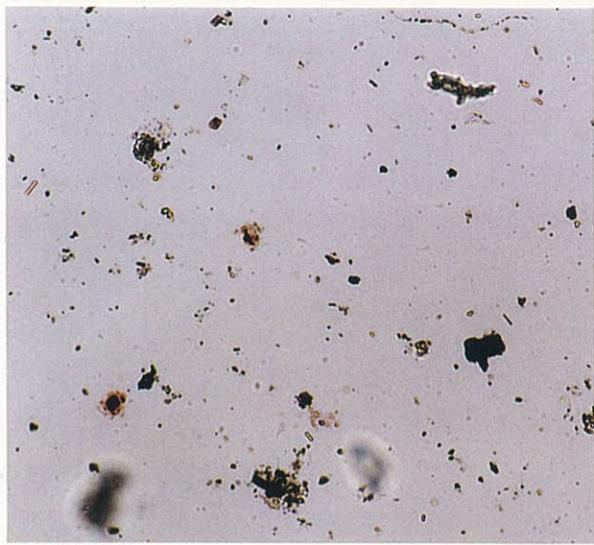
（株式会社 古環境研究所 金原 正子）

参考文献

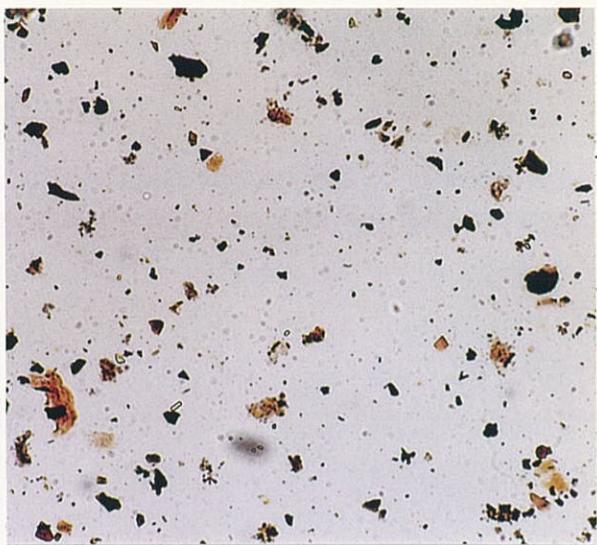
- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231–245.
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊—, 奈良国立文化財研究所, p.14–15.
- 金原正明 (1994) 便所堆積物からさぐる古代人の食生活. 助成研究の報告4, 味の素食の文化センター, p.35–48.

表2 寄生虫卵分析結果表（付化粉分析結果）

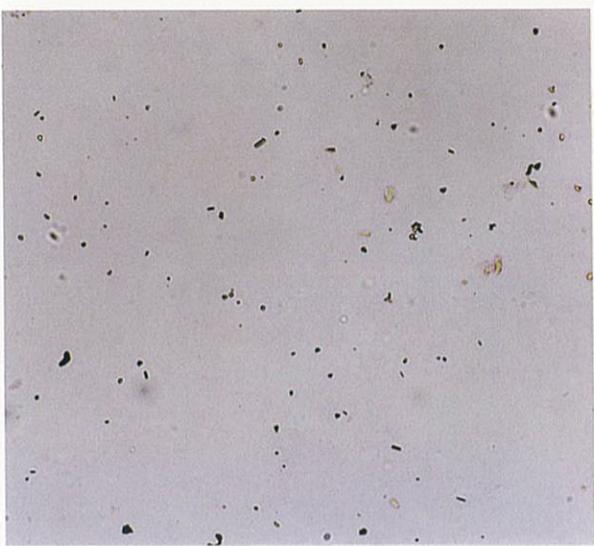
学名	分類群	和名	610 土坑			地山
			074	075	076	
Helminth eggs	寄生虫卵		—	—	—	—
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属			1		1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1			
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属			1		2
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		1			
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科			1		1
Cruciferae	アブラナ科		1			
Fern spore	シダ植物胞子					
Monocolpate type spore	単条溝胞子		1			
Arboreal pollen	樹木花粉		2	2	0	3
Nonarboreal pollen	草本花粉		1	1	0	1
Total pollen	花粉総数		3	3	0	4
Fern spore	シダ植物胞子		1	0	0	0



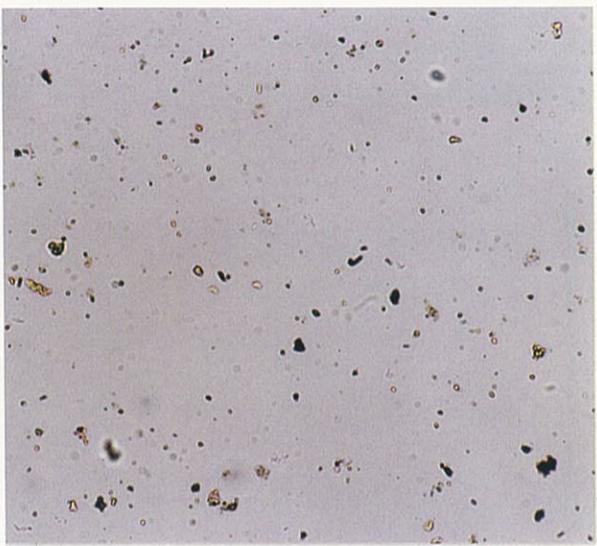
1 試料074



2 試料075



3 試料076



4 試料077

— 180 μ m



5 スギ花粉



6 イネ科花粉

— 45 μ m

写真 1 頸微鏡観察

第2節 余部遺跡発掘品の金属分析と調査

1. 目的

『余部遺跡』から発掘された遺物について分析・調査することを目的とする。

2. 分析試料および分析箇所

(1) 分析試料

発掘品のうち分析を行った試料名を表3に示す。分析は40個の発掘品から重複を避けるため、形状及び種類毎に24個の発掘品を選び分析を行った。発掘品からの分析試料のサンプリングは、調査の目的が金属製錬に関するものであるため、金属成分の付着している箇所を水冷しながら高速遮断機で切断し分析試料とした。また、EPMAによる分析では研磨面にカーボンの真空蒸着を施した。

(2) 分析箇所

分析箇所の選定は、光学顕微鏡により試料面を観察して金属組織の見える代表的な箇所とし、マーキング後同じ箇所をEPMAにより分析した。

3. 分析条件

(1) 金属顕微鏡による組織の観察

装置：金属顕微鏡 METAPHOT-VMS（ニコン）

実体顕微鏡 WILD-M8（ライカ）

(2) 電子線マイクロアナライザ（EPMA）による分析

装置：電子線マイクロアナライザ・EPMA-2300（島津製作所）

加速電圧 15 kV

試料電流 100 nA

電子線径 定性分析 約 $20 \mu\text{m}\phi$

定量分析 約1または $20 \mu\text{m}\phi$

測定部分が微小なものについては電子線径を

最小（ $1 \mu\text{m}\phi$ ）にして測定した。

面分析領域 206 × 206 $\mu\text{m}\phi$

4. 分析結果

(1) 金属顕微鏡による観察結果

金属顕微鏡による金属組織の写真を写真2に示す。また、観察結果をまとめ表4に示す。

(2) 定量分析結果

各部分（組織）のEPMAによる定量分析結果（表5）から、鉄（Fe）を主成分としているものが大部分であるが、それらは一部を除いて鉄の酸化物（Fe-O）の形態をしている。表中で、鉄濃度が90%以上のものは金属鉄である。

以上の結果からすれば、本遺跡では鉄の製錬が行われていたことになるが、試料No.22および試料No.31では金属銅（Cu）が観察され、しかも高品位であることから銅の製錬（鋳造）が行われていたことも

伺える。

(3) 定性分析結果

表5において定量分析値の合計が80%に満たないもの（試料No.1, 3, 4, 14）については定性分析を行い、その半定量値を表6に示す。

結果から、いずれもチタニウム（Ti）が多く検出された。

(4) 面分析結果

面分析は金属顕微鏡観察のにより特徴のある金属組織を選定してマーキングし、面分析を行った。面分析結果を写真3, 4に示す。さらに、各試料毎の面分析結果をまとめ表7に示す。

5. 結論および考察

以上、総合して次のようにまとめられる。

(1) 分析結果から、本遺跡に含まれる物質は次の4つの組成に大別される。

- a. 鉄（Fe）および鉄酸化物（FeO, Fe₂O₃, Fe₃O₄）… b, c, d, e以外のもの
- b. 銅（Cu）および銅酸化物（CuO, Cu₂O）…………… No.22, 31
- c. 鉄（Fe）およびチタン（Ti）…………… No.1, 3, 4, 14
- d. ガラス質…………… a, b, c以外のスラグ化した鉄
- e. 粘度鉱物…………… 炉壁、羽口の構造物

(2) 表6に示すように、チタン（Ti）含有量の高い（Fe）-チタン（Ti）合金系粒が確認されたことにより、鉄製錬の原料として砂鉄が使われた可能性が極めて高い。その理由は、一般に砂鉄には磁鐵鉱（Fe₃O₄）とチタン化合物（Fe₂TiO₄）との固溶体で存在しているものが多いためである。（参考資料）

(3) 表5の試料はNo.22, 31には銅（Cu）が検出されている。一連の出土品（製錬炉、鋳造炉および鋳型？）から、鉄と共に純度の高い銅が認められた。従って、これらの焼きもの（炉および鋳型）を使って鉄および銅を製錬すると共にこれらの製品づくりが行われていたことが考えられる。

仮に製錬の原料として、砂鉄以外にも黄銅鉱（Chalcopyrite: CuFeS₂）が使われたとすれば、必然的に銅が残っていることも考えられる。（参考資料）

その裏付けとしては、No.31に示されている大きな銅塊の中には硫黄（S）濃度の高い部分が認められている。

これらのことから、鉄製錬を行っている中で、銅製錬あるいは鋳造が行われていたのではないかという推測がなされる。

（株式会社 西日本環境技術センター 今井貞美）

表6 定性(半定量) 分析結果

試料No	測定箇所	C	O	Mg	Al	Si	Ti	Mn	Fe
1	灰白色	4.4	29	0.9	0.6	<0.1	21	<0.1	45
3	Fe ₃ O ₄	3.9	25	0.9	1.2	0.4	44	<0.1	25
4	FeO	5.8	24	<0.1	0.6	1.0	36	2.1	31
14	?	5.0	23	0.7	0.4	<0.1	41	3.2	27

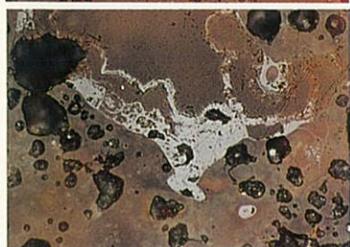
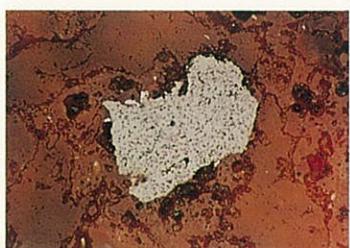
注1) 半定量分析結果はスタンダードレス法にて求めた値であり、その有効桁数は2桁以下である。

注2) 炭素はカーボン真空蒸着のため、高めに検出されている。

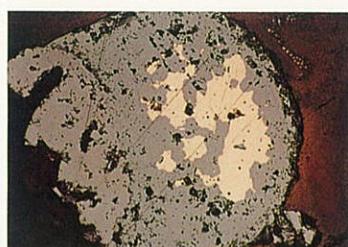
単位: wt%

表7 面分析結果

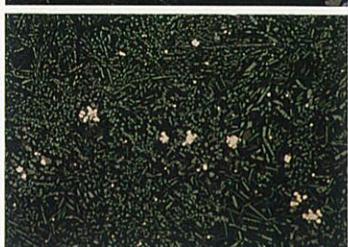
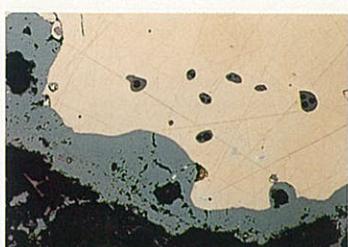
試料No	分析結果
4	中央の塊状物はTi, Fe, Oから成っている。その周辺部はFeを含むガラス質化した粘土鉱物組成である。
6	全体が褐色系を呈している。その成分はFeとOが完全一致して存在し、そのすき間にC濃度の高い相(Fe, Oを含む)が存在している。全体が縞模様になっている。粘土鉱物組成は殆ど無い。
14	中央の塊状物の組成と成分分布は、No.4のものと酷似していることから、同質のものである。
22	球状物の組成は、若干のOを含むCuである。球の中にはC-richの微小相が点在している。球状Cuの周辺は、ガラス質化した粘土鉱物組成である。
23	球状物の組成は、Cを含むFeであり、酸化は殆どしていない。これはFe × Cyの金属形態をしている(図9-2(C)および図9-4(Fe)による)。球の外周には、CとCuの濃度の高い相が分布している。
29	Fe-O相とFe-C相とが入り組んでいる。それらの微小隙間には粘土鉱物組成の成分が幾つかの組み合わせを形成して分布している。
31	大きな塊は金属Cuで、その外周はCu-Oで成っている。金属Cu中の局所には、若干Sの濃度の高い部分が点在している。
34	粒状晶(樹脂状晶と粒状晶との中間の形をしている)はFe-Oで、その隙間に組成の異なる粘土鉱物成分が存在している。
38	粒状晶の部分は上記No.34と類似した組成である。粒状晶ではない部分は、Fe-Oおよび粘土鉱物成分から成っている。



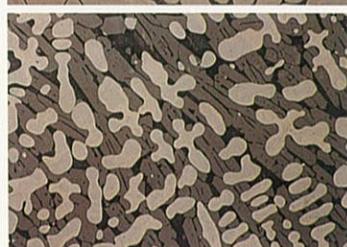
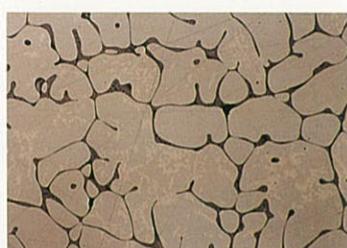
No. 4



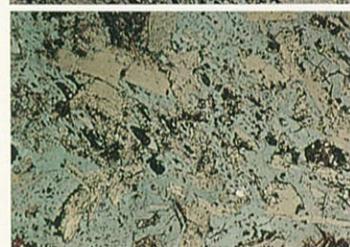
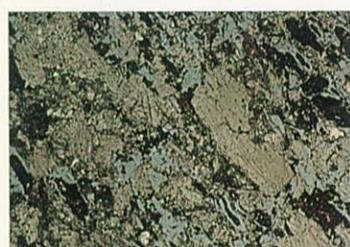
No. 22



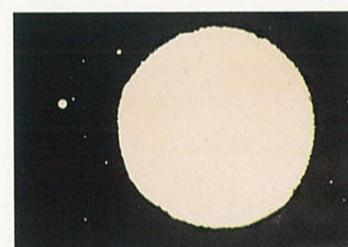
No. 31



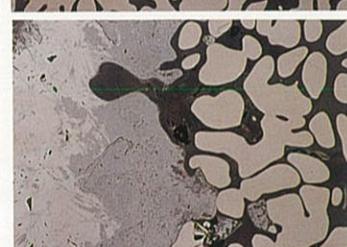
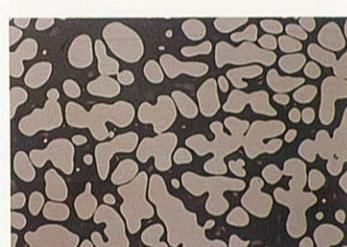
No. 34



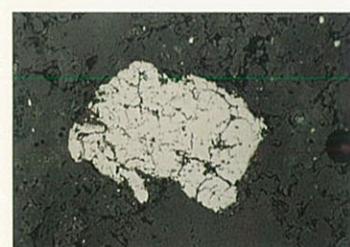
No. 6



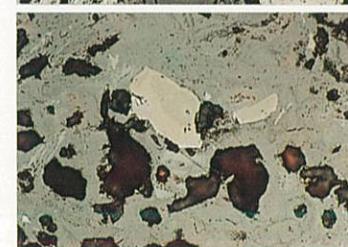
No. 23



No. 38

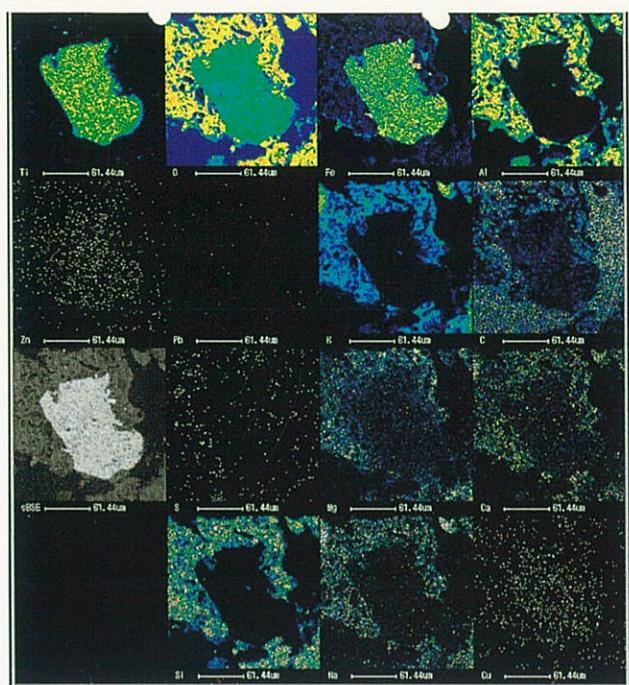


No. 14

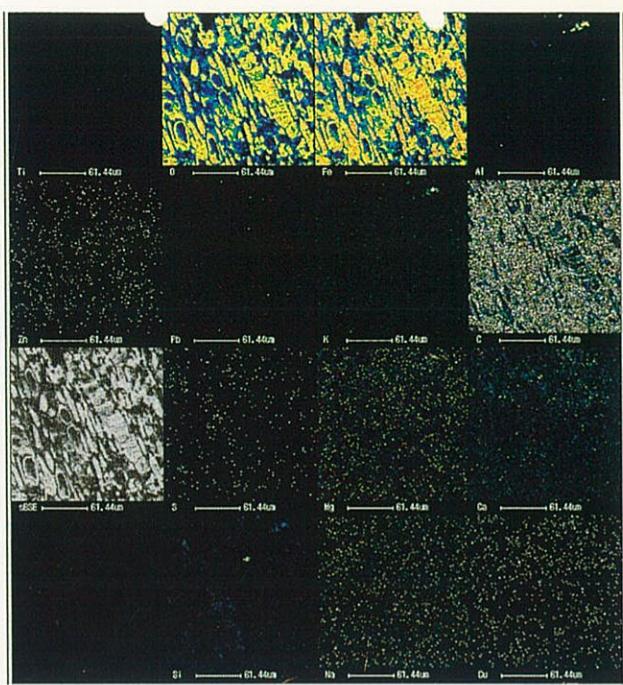


No. 29

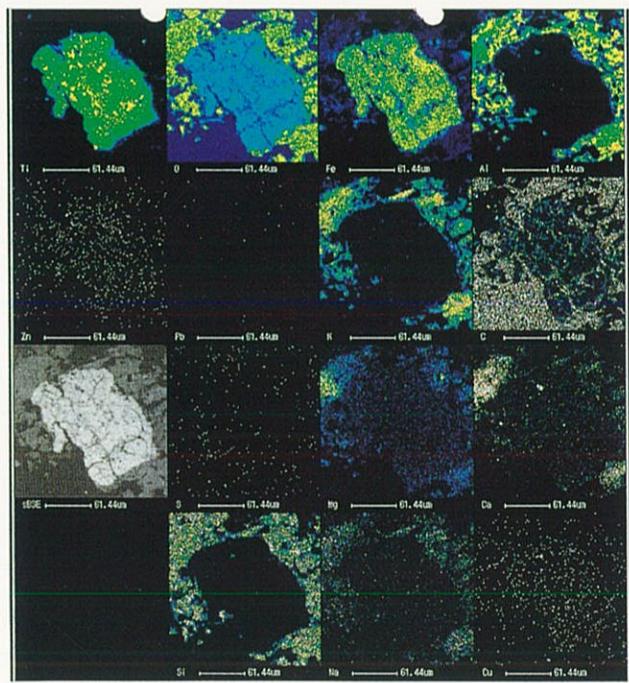
写真 2 金属顕微鏡による組織観察



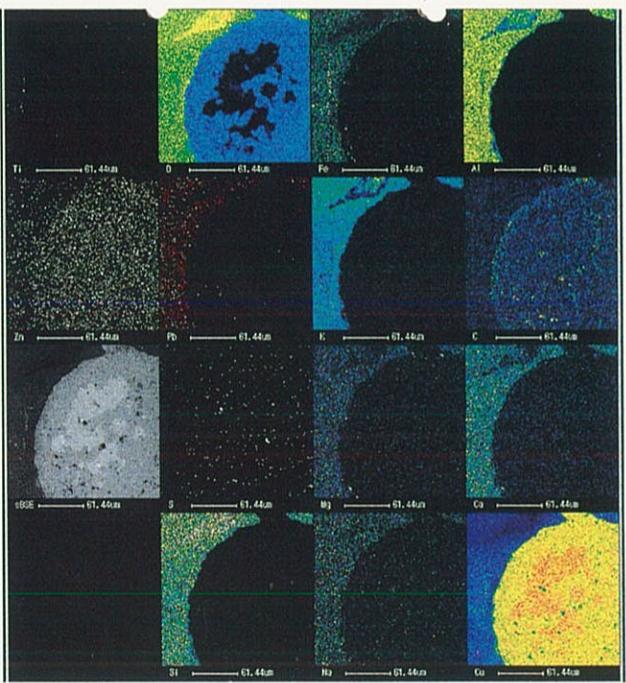
No.4



No.6

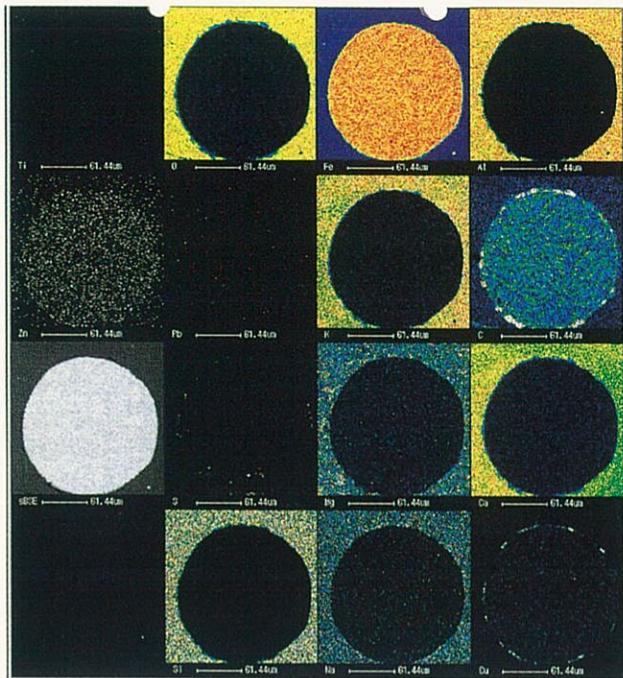


No.14

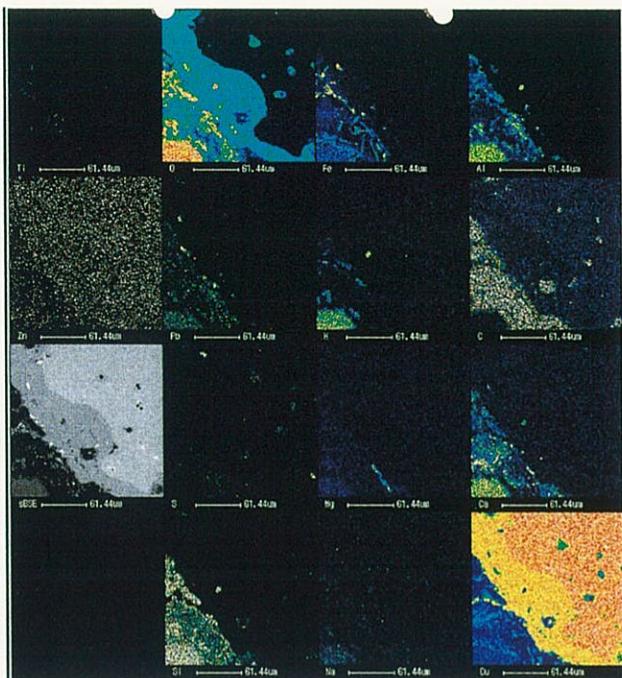


No.22

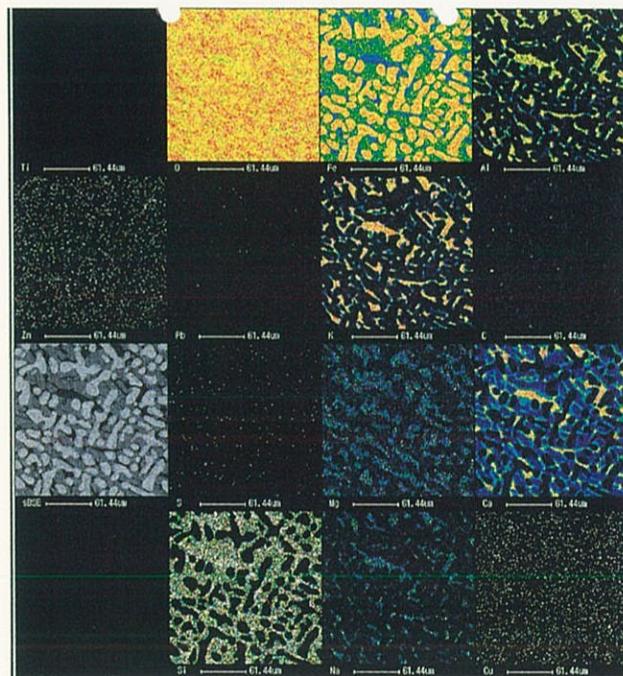
写真3 面分析による全元素の結果（1）



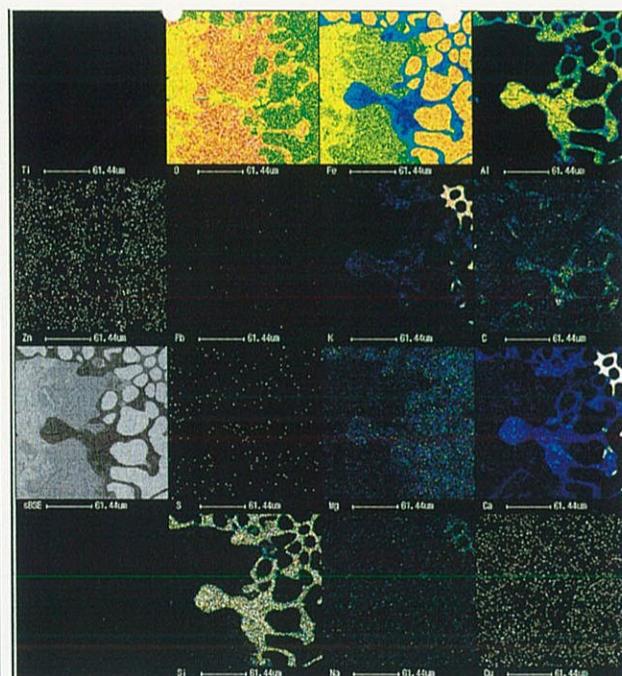
No.23



No.31



No.34



No.38

写真4 面分析による全元素の結果（2）

第3節 余部遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子⁽¹⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子⁽²⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。⁽³⁾⁽⁴⁾

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに伸びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて、余部B遺跡から出土した土坑の性格を解明しようとした。

1. 土壤試料

大阪府南河内郡美原町に所在する余部B遺跡から出土した14世紀頃の土坑と13世紀末頃の土器埋納ピット内の土壤試料を分析した。

調査区内での各遺構の配置
は本文を参考にしていただきたい。試料No. 1～No. 7は
1365土坑の木棺内部の埋土
であり、採取地点は図132
に示す。No. 8～No. 14はピット
内に埋めてある土師皿1
～数10枚の間や下の部分の
土壤である。072ピットの
2枚重ねの土師皿の間から
試料No. 8、096ピットの上
層部からNo. 9、下層部から

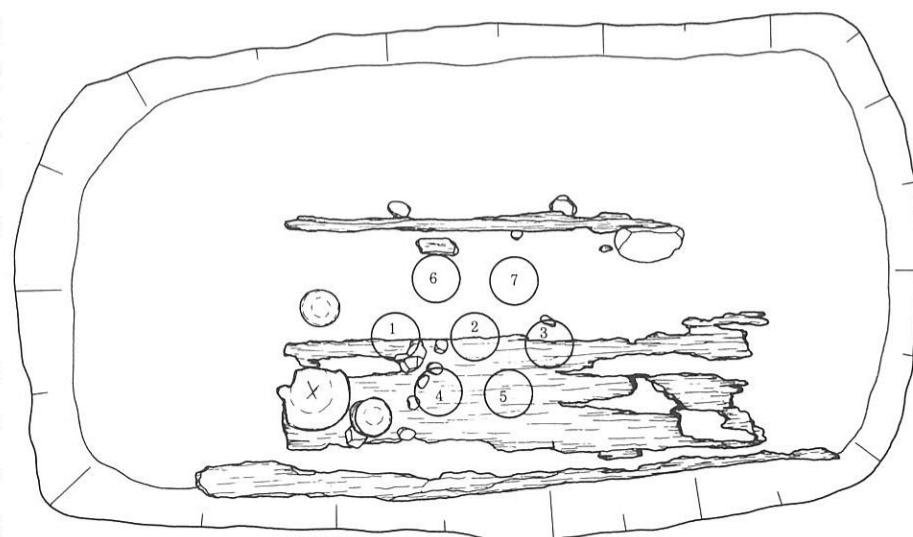


図132 1365土坑の土壤試料採取地点 (S=1/15)

No.10、197ピットの中層で裏向きになった小型の土師皿と下部の破片皿との間からNo.11、1168ピットの上層土師皿の内側からNo.12、中層土師皿の内側からNo.13、ピット遺溝底面からNo.14を、それぞれ採取した。

2. 残存脂肪の抽出

土壤試料14~367gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

表8 土壤試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	1365土坑 095	242.1	9.7	0.0040
2	" 096	275.2	10.8	0.0039
3	" 097	366.8	6.1	0.0017
4	" 098	342.4	6.2	0.0018
5	" 099	228.6	12.9	0.0056
6	" 100	261.5	7.6	0.0029
7	" 101	222.2	7.2	0.0032
8	072ピット 019	155.6	5.5	0.0035
9	096ピット 064	19.3	2.5	0.0130
10	" 068	13.9	1.1	0.0079
11	197ピット 073	60.9	2.4	0.0039
12	1168ピット 080	80.0	6.5	0.0081
13	" 083	51.9	3.4	0.0066
14	" 084	217.2	3.3	0.0015

残存脂肪の抽出量を表8に示す。抽出率は0.0015~0.0130%、平均0.0048%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壤、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010~0.0100%の範囲内のものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルギルセロールに5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中に2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサン-エーテル(85:15)⁽⁵⁾を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。

残存脂肪の脂肪酸組成を図133に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキシン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)の9種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

試料中の炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合を見ると、すべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸で、次いでステアリン酸かオレイン酸の順に多いものであった。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪の一部が分解

し、パルミチン酸を生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計含有率が試料No.3、No.5、No.7、No.8で約21~36%、No.1、No.2、No.6、No.9、No.11で約12~16%、No.4、No.10、No.12~No.14

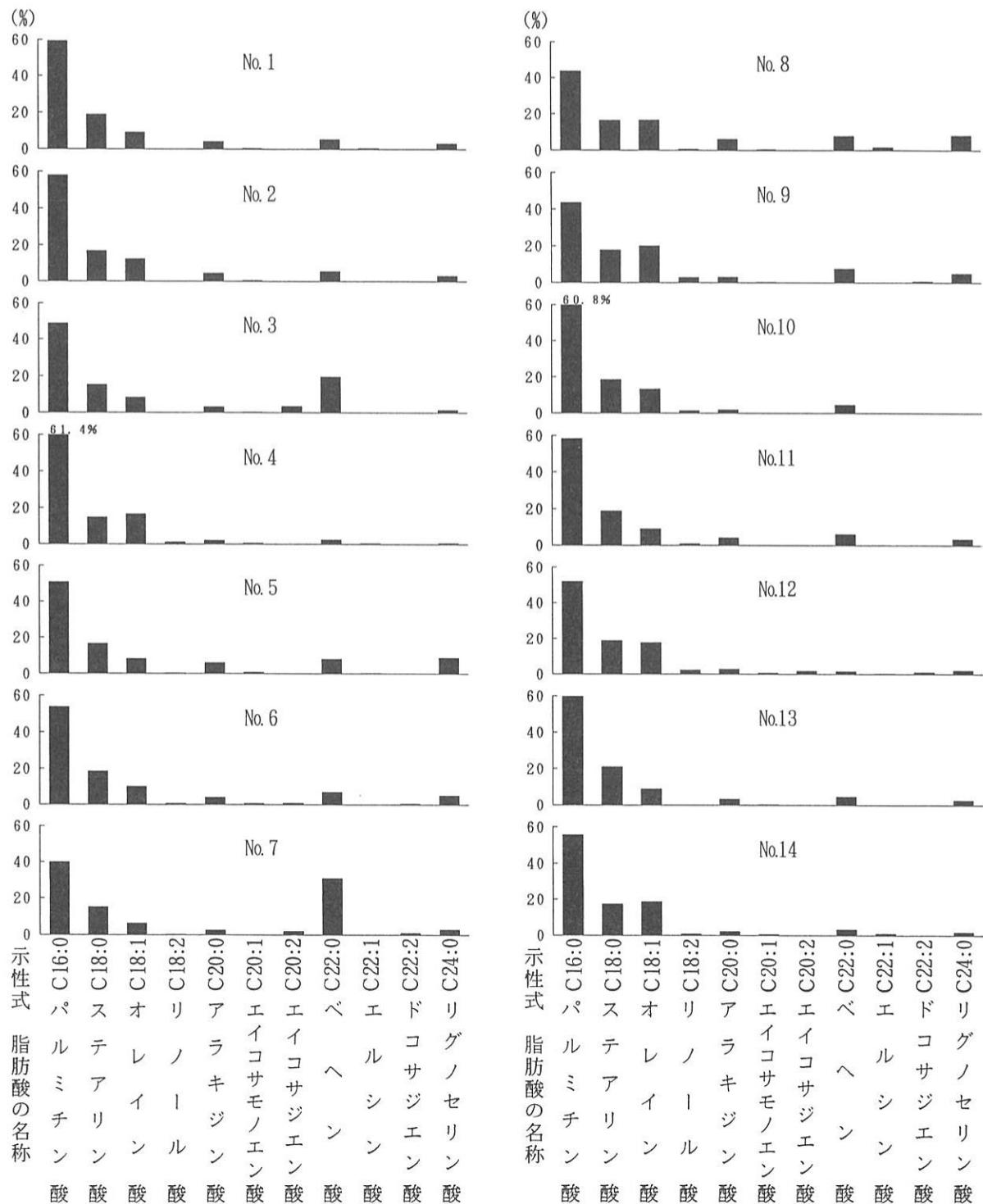


図133 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

で約5～10%であった。通常の遺跡出土土壤中の高級脂肪酸含有率は約4～10%であるので、試料中の高級脂肪酸含有量は試料No.3、No.5、No.7、No.8でかなり多め、試料No.1、No.2、No.6、No.9、No.11でやや多め、試料No.4、No.10、No.12～No.14で通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであった。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成分が含まれている場合がある。高級脂肪酸が動物、植物のどちらかに由来するかは、コレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合は、コレステロール含有量が少ない。特に、試料No.3とNo.7のベヘン含有率は各々約19%、31%と非常に高かった。ベヘン酸は哺乳動物の脳の他に、肝臓、腎臓、脾臓等の臓器に多く見られるもので、動物遺体の存在を知る重要な指標脂肪酸である。従って、試料No.3とNo.7採取地点付近には動物遺体の臓器部分が位置していた可能性がある。

以上、余部B遺跡の試料中では主要な脂肪酸がパルミチン酸で、次いでステアリン酸かオレイン酸の順に多く、高級脂肪酸は1365土坑試料No.3、No.5、No.7と072ピット試料No.8にかなり多く含まれていることがわかった、また、1365土坑試料No.3とNo.7には高級脂肪酸のうち、ベヘン酸が非常に多いこともわかった。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサンーエチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶液で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図134に示す。残存脂肪から12～26種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィーの質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No.4とNo.11に約8～9%、No.12とNo.14に約14～18%、他のすべての試料中に約3～6%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2～6%分布している。従って、コレステロール含有量は試料No.12とNo.14でかなり多め、No.4とNo.11やや多め、他のすべての試料中で通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであった。

植物由来のシトステロールは試料No.9とNo.10に約41～42%、他のすべての試料中に約16～28%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはシトステロールは30～40%もしくはそれ以上に分布している。従って、シトステロール含有量は試料No.9とNo.10で通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みで、他のすべての試料中ではそれよりも少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、カンペステロールが約3～10%、スチグマステロールが約1～7%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはカンペステロール、スチグマステロールは1～10%分布している。従って、試料中のカンペステロールとスチグマステロールの含有量は通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールは痕跡程度しか検出されないものもあったが、検出されるものでも1%以下しか分布していなかった。この程度の量は土壤微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは試料No. 1～No. 7 のうちNo. 3とNo. 7に約31%、他の試料中に約17～22%、No. 8～No. 14に約1～4%分布していた。コプロスタノールは一般的な遺跡出土土壤中では分布していても約1%くらいで、通常は殆ど検出されない。また、コプロスタノールの分布により試料中の哺乳動物の存在を確認することができる他に、通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、コプロスタノールとコレステロールの分布比から試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある。⁽⁶⁾ヒトの場合コプロスタノールとコ

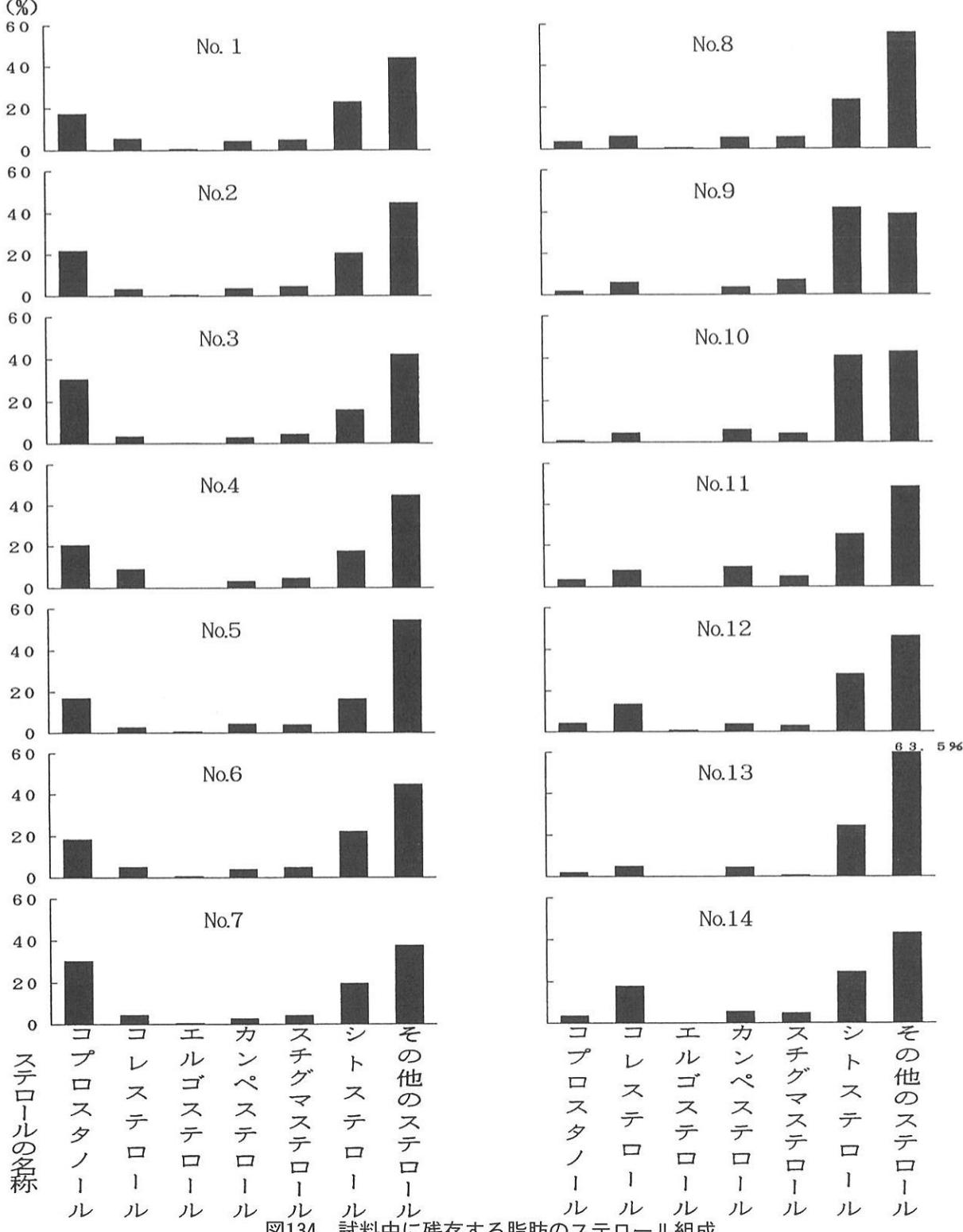


図134 試料中に残存する脂肪のステロール組成

レステロールの分布比は成人男性が
4.25、成人女性が2.75である。コプロ

スタノールガ10%以上含まれている試
料No. 1～No. 7について、コプロスタノー
ルとコレステロールの分布比を表9に
示す。その結果成人の男女の値に近い
ものはなかった。しかし試料No. 2、No.
3、No. 5、No. 7はコプロスタノールと
コレステロールの分布比が6.24～8.75
と高い。たとえヒト遺体の体脂肪に由
来するコレステロールが多く混入して
きても、分布比が高いことや、若年者
ほどコプロスタノール量が多い傾向に

表9 試料中に分布するコレステロールとシトステロー
ルの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	5.56	22.96	0.24
2	3.46	20.75	0.17
3	3.50	16.06	0.22
4	9.11	17.58	0.52
5	2.72	16.45	0.17
6	5.04	22.18	0.23
7	4.48	19.69	0.23
8	6.08	23.39	0.26
9	6.03	41.91	0.14
10	4.53	41.13	0.11
11	8.02	25.26	0.32
12	13.57	28.00	0.48
13	4.92	24.46	0.20
14	18.03	24.91	0.72

あることを考え合わせると、成人男性の値よりは高いが若年男性の可能性は推測される。全般的に試料No. 1～No. 7のコプロスタノール含有量はすべて非常に多く、これらすべての試料中に哺乳動物の腸もしくは糞便由来の脂肪が多量に残存していたといえる。特に試料No. 3、No. 7を中心として試料No. 2、No. 5採取地点付近に動物遺体の腹部が位置していた可能性が推測される。この成績は脂肪酸のベヘン酸が肝臓、腎臓、脾臓等の臓器に多く分布すること、このベヘン酸が試料No. 3とNo. 7に多いこととよく一致している。試料No. 1～No. 7以外の試料中では試料No. 8、No. 11、No. 12にコプロスタノールが若干多かった。従って、試料No. 8、No. 11、No. 12にも哺乳動物の腸もしくは糞便由来の脂肪が若干残存していた可能性がある。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上⁽⁷⁾、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる。^(8,9)また、コプロスタノールとコレステロールの分布比からは動物種が判定できる。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比とコプロスタノールとコレステロールの分布比を表9に示す。表からわかるように、コレステロールとシトステロールの分布比は試料No. 14が0.6以上で、試料No. 4とNo. 12が0.6以下ではあるが、比較的0.6に近い値であった。従って、試料No. 4、No. 12、No. 14は動物遺体または動物由来の脂肪が残存していることを示唆している。

以上、余部B遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールが1168ピット試料No. 12とNo. 14にかなり多く、1365土坑試料No. 4と197ピット試料No. 11にやや多く、哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノールが1365土坑のすべての試料に非常に多く、072ピット試料No. 8、197ピット試料No. 11、1168ピット試料No. 12とNo. 14に若干多い他は、すべて通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みか少なめにしか含まれていないことがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比は1168ピット試料No. 14が0.6以上、1365土坑ピット試料No. 4と1168ピット試料No. 12が比較的0.6に近い値を示し、これらの試料中には動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性があることがわかった。またコプロスタノールとコレステロールの分布比は成人の男女の値に近いものはなかったが、値が高いことから若年男性の可能性が高いと推定された。

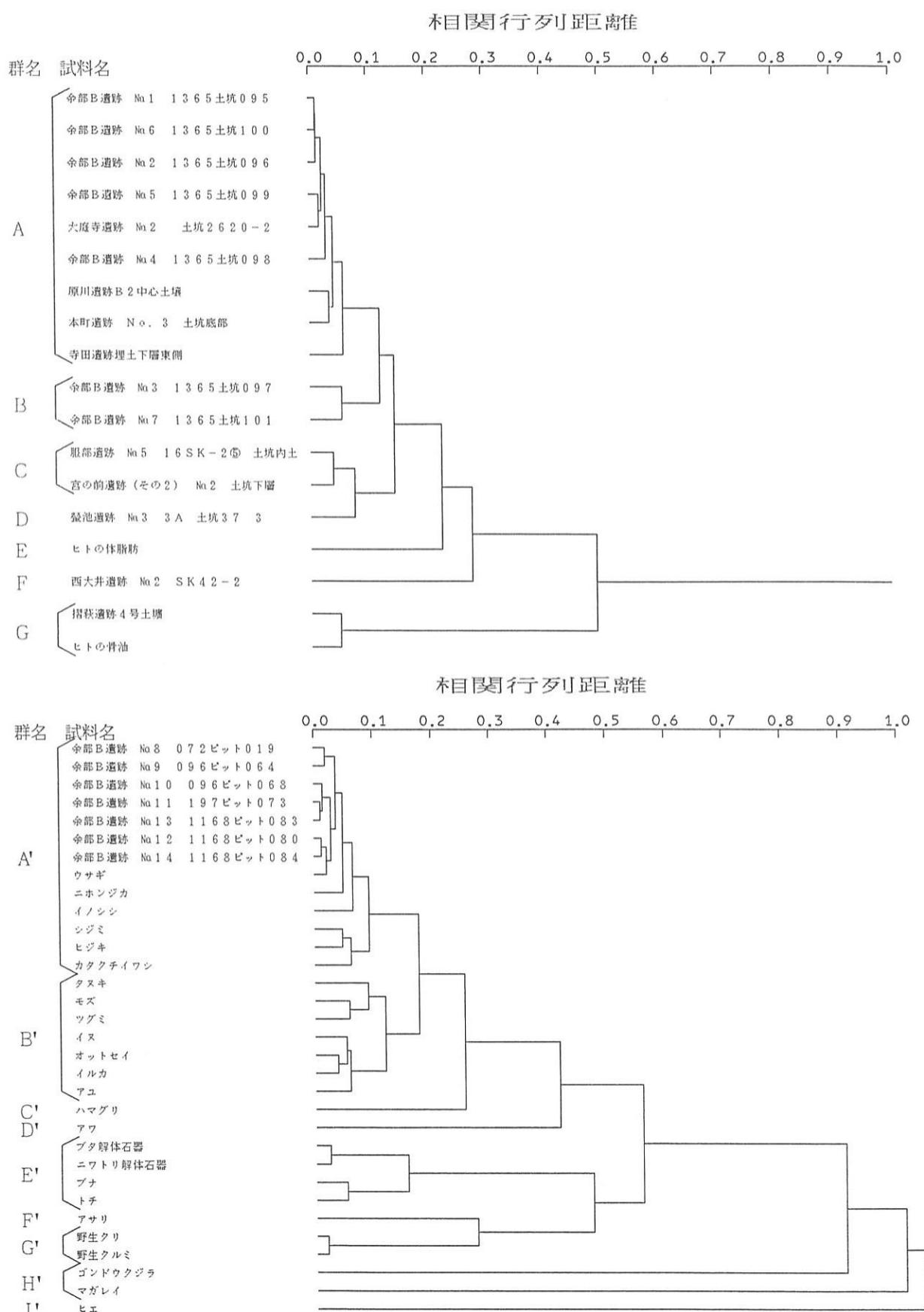


図135 資料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪酸の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に試料中に残存する脂肪の持主を特定するために、1365土坑試料については同じ大阪府内の遺跡で出土土壙にはヒト遺体を直接埋葬した場合と類似の脂肪が残存していると判定した大庭寺遺跡⁽¹⁰⁾、西大井遺跡⁽¹¹⁾、本町遺跡⁽¹²⁾、螢池遺跡⁽¹³⁾、宮の前遺跡（その2）⁽¹⁴⁾、服部遺跡⁽¹⁵⁾、兵庫県寺田遺跡⁽¹⁶⁾、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡⁽¹⁷⁾、ヒトの体脂肪、出土土壙を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡、ヒトの骨油試料など、各種遺跡試料や現生試料の脂肪酸と、他の土器埋納ピットについては現生の動植物試料、魚介類や海草類試料の脂肪酸との類似度を比較した。予めデータベースの脂肪酸組成とクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したものが図135である。

図135を見ると、余部B遺跡の試料No. 1、No. 2、No. 4～No. 6は大庭寺遺跡、原川遺跡、本町遺跡、寺田遺跡の試料と共に相関行列距離0.05以内でA群を形成し、非常によく類似していた。余部B遺跡の試料No. 3とNo. 7は相関行列距離0.05以内でそれらのみでB群を形成し、非常によく類似していた。他の対照試料はC～G群を形成した。これらの群のうちA群とB群は相関行列距離0.15以内の所にあり、類似していた。また、A、B群は対照試料のうちヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料が形成するC～F群とも相関行列距離で0.3以内の所にあり、樹状図全体からすれば類似しているといえる。ヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料が形成するG群はA～F群とは異なる系統樹に属しており、類似しているとはいえない。

余部B遺跡の土器埋納ピットのすべての試料No. 8～No.14はウサギ、ニホンジカ、イノシシ、カタクチイワシ、シジミ、ヒジキ試料と共に相関行列距離0.1以内でA群を形成した。他の対照試料はB～I群を形成した。これらの群のうちA群とB群は相関行列距離0.2以内の所にあり、類似しているといえる。

以上、余部B遺跡の1365土坑試料に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪試料と類似していることがわかった。他の土器埋納ピット試料に残存する脂肪はウサギ、ニホンジカ、イノシシのような動物、イワシ、シジミ、ヒジキのような魚介類、海草類試料、また、タヌキ、イヌのような動物、オットセイ、イルカのような海産動物、モズ、ツグミのような野鳥、アユのような魚類試料とも類似していることがわかった。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキシン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

試料の残存脂肪から求めた相関図を図136に示す。1365土坑試料No. 1、No. 2、No. 4～No. 6は第2象限内に分布し、A群を形成した。試料No. 3とNo. 7はほぼ第1象限内に分布し、B群を形成した。A群の分

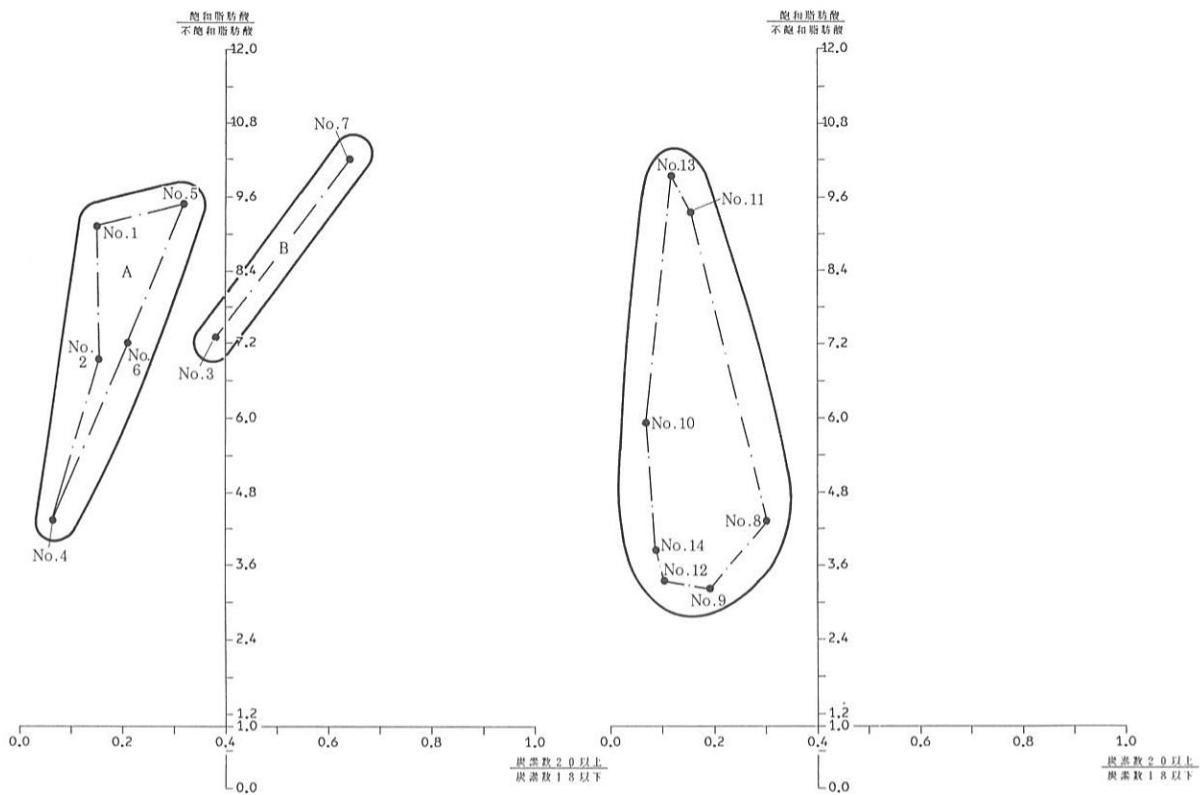


図136 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に、B群のそれは高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来することを示唆している。土器埋納ピット試料No. 8～No.14は第2象限内に分布した。この分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に由来することを示唆している。

以上、余部B遺跡の1365土坑試料のうち試料No. 1、No. 2、No. 4～No. 6に残存する脂肪は高等動物の体脂肪や骨油に、No. 3とNo. 7のそれは高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に、土器埋納ピット試料のそれは高等動物の体脂肪や骨油に、それぞれ由来することがわかった。

7. 総括

余部B遺跡から出土した土坑の性格を判定するために、土坑内土壤試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、試料中の主要な脂肪酸はパルチミン酸で次いでステアリン酸かオレイン酸のいずれかが多く、高級脂肪酸は1365土坑と072ピット試料の一部にかなり多いことがわかった。1365土坑試料No. 3とNo. 7には高級脂肪酸のうちベヘン酸が非常に多いこともわかった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果クラスター分析からは、1365土坑試料に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪試料と、土器埋納ピット試料のそれはウサギ、ニホンジカ、イノシシのような動物、イワシ、シジミ、ヒジキのような魚介類、海草類試料、また、タヌキ、イヌのような動物、オットセイ、イルカのような海産動物、モズ、ツグミのような野鳥、アユのような魚類試料とも類似していることがわかった。種特異性相関からは1365土坑試料に残存する脂肪は一部が高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に、他の試料が高等動物の体脂肪や骨油に由来することがわかった。土器埋納ピット試料に残存する脂肪は高等動物の体脂肪や骨油に由来することがわかった。

残存するステロール分析の結果、試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールが1168ピット試料にかなり多く、1365土坑試料にやや多く、哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノールが1365土坑試料に非常に多く、197ピットと1168ピット試料に若干多い他は、すべて通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みか少なめにしか含まれていないことがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比は1168ピット試料が0.6以上、1365土坑試料が比較的0.6に近い値を示し、これらの試料中には動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性があることがわかった。また、1365土坑試料はコプロスタノールとコレステロールの分布比が6.24～8.75を示し、成人の男女の値に近いものはなかったが、分布比が高いことから若年男性の可能性が高いと推測された。

以上の成績から、余部B遺跡の1365土坑の木棺内に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料やヒトの体脂肪試料の脂肪と類似していることがわかり、この脂肪は若年男性のものである可能性が高いことが推測された。また試料No.3、No.7を中心として試料No.2、No.5採取地点付近に動物遺体の腹部が位置していた可能性も推測された。土器埋納ピットに残存する脂肪はウサギ、ニホンジカ、イノシシ、タヌキ、イヌのような動物、イワシ、アユ、シジミ、ヒジキのような魚介類、海草類、オットセイ、イルカのような海産動物、モズ、ツグミのような野鳥試料の脂肪と類似していることがわかった。

今回の土器埋納ピット試料は土師皿そのものではなく、土師皿の間の下の土壤のため、土師皿そのものを分析すればさらに詳しい結果が得られたかもしれない。

(帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男)

(株)ズコーチャ総合科学研究所 中野寛子・長田正宏)

- (1) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle : 「Food identification of samples from archaeological sites」, 『Archaeo Physika』, 10卷, 1979, pp260.
- (2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold : 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292卷, 1981, pp146.
- (3) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle : 「Analyse fruhgeschichtlicher GefaB-inhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70卷, 1983, pp33.
- (4) 中野益男 : 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻 (6), 1984, pp124
- (5) M.Nakano and W.Fischer : 「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」, 『Hoppe-Seyler Z.Physiol.Chem.』, 358卷, 1977, pp1439.
- (6) 中野益男 : 「残留脂肪酸による古代復元」, 『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, 田中 琢, 佐原 真編, クバプロ, 1995, pp148.
- (7) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教傳, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 真, 田中 琢 : 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- (8) 中野益男 : 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真脇遺跡－農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.
- (9) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子 : 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『ヘロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書, 第3集, 1987, pp191.
- (10) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男 : 「大庭寺遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」, 『大阪文化財研究－第6号－』, 附 大阪文化財センター, 1994, pp47.
- (11) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男 : 「西大井遺跡から出土した土壤に残存する脂肪の分析」, 『西大井遺跡発掘調査概要・1992年度-92-1区の調査-』, 大阪府教育委員会, 1994, pp37.
- (12) 中野益男, 中野寛子, 菅原利佳, 長田正宏 : 「本町遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 大阪府豊中市教育委員会
- (13) 中野益男, 中野寛子, 菅原利佳, 長田正宏 : 「宮の前・螢池遺跡採取土壤の残存脂肪分析」, 『宮の前・螢池東遺跡・螢池遺跡・螢池西遺跡－大阪モノレール螢池東線・西線建設に伴う発掘調査』, 1992・1993年度発掘調査報告書, 附大阪文化財センター, 1994, pp167.
- (14) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏 : 「宮の前遺跡(その2)から出土した土坑に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 附大阪府文化財調査研究センター
- (15) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏 : 「服部遺跡から出土した遺溝・遺物に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 大阪府豊中市教育委員会
- (16) 中野益男, 中野寛子, 福島道広, 長田正宏 : 「寺田遺跡土壤墓状遺溝に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会
- (17) 中野益男, 幅口 剛, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏 : 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, 『原川遺跡 I -昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』, 第17集, 附静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.
- (18) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏 : 「摺萩遺跡の遺溝に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 宮城県教育委員会

第VI章 まとめ

1. 94年度調査から（付図1）

（1）7世紀の溝について

東トレンチにて検出した001・002・698-O S（溝）は、南が日置荘遺跡（その1）の5～7Cトレンチの溝4に、北は95年度調査区の045・067溝につながる7世紀の大規模な溝である。

日置荘遺跡（その1）の溝4は幅およそ0.2m、深さ0.2～0.3mの細い溝である。これは001-O Sと002-O Sが南に延び、南部地区で合流した後、また枝分かれするという複雑な様相を呈している。合流している部分では溝幅が1mと広くなっている。

この他に、7世紀の遺構には、日置荘遺跡（その1）B地区検出の溝11がある。001-O Sから東に約140mの地点に位置する。001・002-O Sが北北西に流れるのに対して、北北東に方向を向けながら長さ約60m、幅0.6～0.8mにわたって流れる溝で、深さ0.2～0.4mのU字形断面を呈する。溝内から陶邑III型式第1～2段階に相当する須恵器が出土しており、東トレンチの溝とほぼ同時期とみられる。

これらの溝の複雑な形状については、東トレンチ内の001・002-O Sが正確に平行している点、また002-O Sから枝分かれした698-O Sに切り合い関係がない点から、当初より意図された同時期の溝であることがわかる。

以上のように、これらの7世紀の溝は本調査区における最古の遺構と位置付けられ、おおむね北方向に流れる、主として灌漑用の溝であった可能性が高い。

（2）区画溝について

西トレンチ南部分には、主軸を東西と南北に沿わせて直角に屈曲する901-O S（溝）が存在する。西は95年度調査区の落ち込みに、南は日置荘遺跡8Cトレンチ東端の溝につながる。901-O Sと同様に東西・南北に屈曲する区画溝は、西トレンチに近い地点では日置荘遺跡（その2）のDトレンチの区画I、Eトレンチの区画II・IIIを構成する溝にみられる。日置荘遺跡では溝の方位は正確に主軸にのるもの、溝の形状、区画内の掘立柱建物をはじめとする遺構の構成には多様性がみとめられる。

901-O Sの場合は、溝の深さは浅いながらも、幅が広いという点に特徴がある。区画された西南部分は限られた調査面積であったためか、掘立柱建物や、特記すべき遺構がないが、溝の様相から区画溝以外には考えられず、未調査区には掘立柱建物が存在していたとみられる。溝埋土からは12世紀後葉に属する和泉型瓦器碗の他、多量の遺物や炉壁片、鋳型片、スラグなどの鋳造遺物が出土しており、付近で盛んに鋳造作業がなされていたと考えられる。

（3）掘立柱建物について

東トレンチには2×6間からなる大形の318-O Bと小形の652・580-O Bの3棟の掘立柱建物がある。これらの建物は主軸方向が方位と合致し、また柱穴出土の遺物からも13世紀初頭の同時期に存在していたとみられ、ひとつの集落を構成していたと考えられる。一方、549-O Bは318-O Bと重複しており、2時期の変遷が認められるが、前後関係は明確でない。この一帯の北・東および南側から、多数の柱穴を検出しており、柱穴の並びは確認できたが、明確な建物を復元するには至らなかった。特に、試掘トレンチをいたれた東側からは、柱穴が多数検出されたので、549-O Bと並ぶ建物群が存在した可

能性がある。また、530・600—OWは一時期古い12世紀後葉の井戸であり、井戸廃絶後は鋳造関連の廃棄土坑となったとみられ、12世紀段階にさかのぼる集落の存在も推定できる。

一方、西トレンチでは2×7間の三面庇をもつ大形の1138—OBと四面庇を備えた1211—OBの2棟が、東トレンチと同様に主軸を方位に合致させて存在する。1138—OBは東トレンチの集落より和泉型瓦器椀の編年観では2時期新しい13世紀中葉の時期である。東には1268・1310—OWの2基の井戸があり、この建物に伴うものと考えられる。1211—OBについては時期は不明ながら、井戸を覆う形でつくられた作業小屋の可能性がある。あるいは、1310—OWの掘方と、1211—OBを構成する1309—OP（柱穴）の掘方が接しすぎる感があるため、時期を前後する遺構かも知れない。

三つの集落のまとまりには、南に位置する日置荘遺跡4C、7Cトレンチ内の掘立柱建物群がある。4Cトレンチから13世紀初頭の4棟、7Cトレンチからは13世紀前半の1棟の建物が報告されている。この集落と東トレンチの間、つまり5・6Cトレンチ、8Bトレンチおよび4Cトレンチの北側の大部分にあたるおよそ東西70m、南北40mの範囲には集落が存在しないことになる。

以上のように、この一帯では12世紀後葉に東トレンチ北部で530・600—OWを伴う集落と、西トレンチの901—OSに区画される集落、13世紀初頭の318—OBを中心とする集落と、4C・7Cトレンチの集落、さらに13世紀中葉の1138—OBを中心とする集落というように、その変遷をたどることができる。

（4）不定形土坑について

東西の集落にはさまれた位置、東トレンチ西半部から西トレンチ東半部にかけて不定形土坑が密集する。土坑は長さ0.5~2.5m程度の大きさで、1m未満のものが多いものの、規模・形状は一定せず、規則性や関連性は認められない。埋土は地山粘土ブロック土を含むもので、土坑を掘削した後、人為的に埋められたとみられる。遺物については、埋め土に混入した土器片が出土するのみで、特に副葬したとみられる遺物はなく、土坑の形状と合わせても、土坑墓の可能性は低いといえる。

この一帯の地山は良好な粘土であることから、鋳造に伴う鋳型等の粘土の採掘坑であったと考えるのが自然であろう。加えて、建物地区と鋳造地区の明確な地区分けがなされていたことが窺われる。

また、004・005—OOの大形土坑は、埋土下層の粘土層の堆積状況から水溜めとして活用していたとみられる。このように東トレンチ地区では、13世紀初頭における鋳造関連作業の状況と、それに携わるとみられる人々の集落が明らかになった。

（5）鋳造関連遺構について

西トレンチ南部の978・979・980・985・987—OOの5基の土坑は、南辺を一列に並べた状態に一定の規則性をもって掘削されている。また、埋土はその他の粘土採掘坑や、貯水用土坑と異なり、焼土、炉壁片、鋳型片、スラグなどの鋳造関連遺物を多量に含んでいる。構造は明確でないが、位置関係や埋土から類推して、鋳造関連土坑と考えるのが自然であろう。

日置荘遺跡8Cトレンチで検出された土坑5・6・7の一連の土坑群は、上記の土坑から南に約35m平行移動した位置に、同様に南辺を並べて存在する。同じく鋳造関連土坑と考えることができる。

次に、956・974・971・977—OOは鋳型をえた鋳造土坑である可能性が高い。石組や炉壁はすでにくずれ、鋳型や輔の羽口と共に捨てられた状態で検出した。出土した石や炉壁は火を受けている。

これらの鋳造関連遺構はすべて西トレンチ南部において検出したもので、北部の集落と明確な地区分

けがなされていたことが伺われる。また、東トレンチ地区が13世紀初頭であるのに対し、978—〇〇などの鋳造関連土坑はやや下った13世紀前葉に埋め戻され、鋳造土坑は13世紀中葉の1138—〇Bと同時期に廃絶されている。本調査区で最も盛んに鋳造作業がなされて、安定した生産が想定できるのは13世紀中葉であるといえる。

13世紀以降の土地利用については遺構・遺物からの痕跡を見出すことはできない。この地区だけをみると、中世前半に栄えた河内鉄物師集団も、それ以後は中心地を移動させたとみられる。

近世以降では、鋤溝や003・900—〇Sの東西南北に走る溝が残されているだけである。府営住宅が建てられるまで、長く農地として活用されていたことが推定される。

2. 95年度調査区から（付図1）

ここでは、調査区内の遺構の総括と遺物の変遷から、調査区周辺の様相を考察することにする。

まず各時代毎の遺物分布の変遷から、調査区における遺構分布の変遷をみることにする。出土した遺物の大多数は中世のものであり、それ以外の遺物は少量であることや、遺構の変遷との関係を注目するため、中世を中心とする各世紀毎に遺物を分類し、その有無を図化した（図137・138）。計測した区画単位は5mである。また計測は重量によるものであり、本稿では時間的な制約により、出土遺物の量比については検討できなかった。

古代以前の遺物はかなり希少であり、明確な遺構も伴わないので、図化していない。本調査における最も古い遺物は縄文時代に遡る石器類であり、土器などの生活道具などがほとんど出土していないことから、遺跡周辺が狩猟採集の生業域として利用されていたと考えられる。これ以降、古墳時代中期まではほとんど遺物の出土はみられない。しかし、古墳時代でも遺構は確認されておらず、遺物の出土も散漫であり、定住域ではなかったか、あるいは後世の削平により不明になったと思われる。

古代になると、わずかではあるものの、遺物がまとまってみられるようになる。飛鳥奈良時代にあたる段階では、調査区の北東部を中心に遺物の分布がみられる。とくに北東部より南にのびる遺物の分布は、東西の2地区に分れており、それぞれ南北方向の溝に一致している。これより南側に顕著な遺物の分布がみられること、西側の調査区北端に遺物の分布がみられることから、遺構の中心は調査区北側に存在すると推測される。

次に遺物がみられるのは、やや時期の下る11世紀の段階である。しかし、極端に出土量が少なく、範囲も調査区中央北側に限定されており、様相としては前段階に引き続くものと思われる。

このような状況も、中世に入ると一転し、遺物の出土量が激増する。12世紀の段階では、遺物の出土地域は調査区の北側を中心に、やや散在しているものの、まとまった状況がみられる。このうち西側は土坑より出土したものが多く、東側は土器埋納ピットより出土したものがほとんどである。とくに東側の北部は区画内、南はピット集中部と、それぞれ建物や集落の想定される地域に一致している。このような地域分けを踏襲し、爆発的に人口密度が増加したと考えられるのが13世紀の段階である。調査区北側の中央を境に、東西に遺物の分布が分かれしており、また新たに調査区南部においても遺物がみられるようになる。東側は前段階と同様に南北に遺物の集中が分れており、明らかに2つ以上の人為的区画が存在したと考えられる。西側も東西に分化する傾向がみられ、当期に複数の区画、あるいは地域分化が存在したと推測される。このような様相を遺構との関連からみると、土坑群の多い東側は墓域、溝やピットの多い西側が居住域であった可能性が高い。また、鋳造関連遺物を多く出土した調査区南西部の2ト

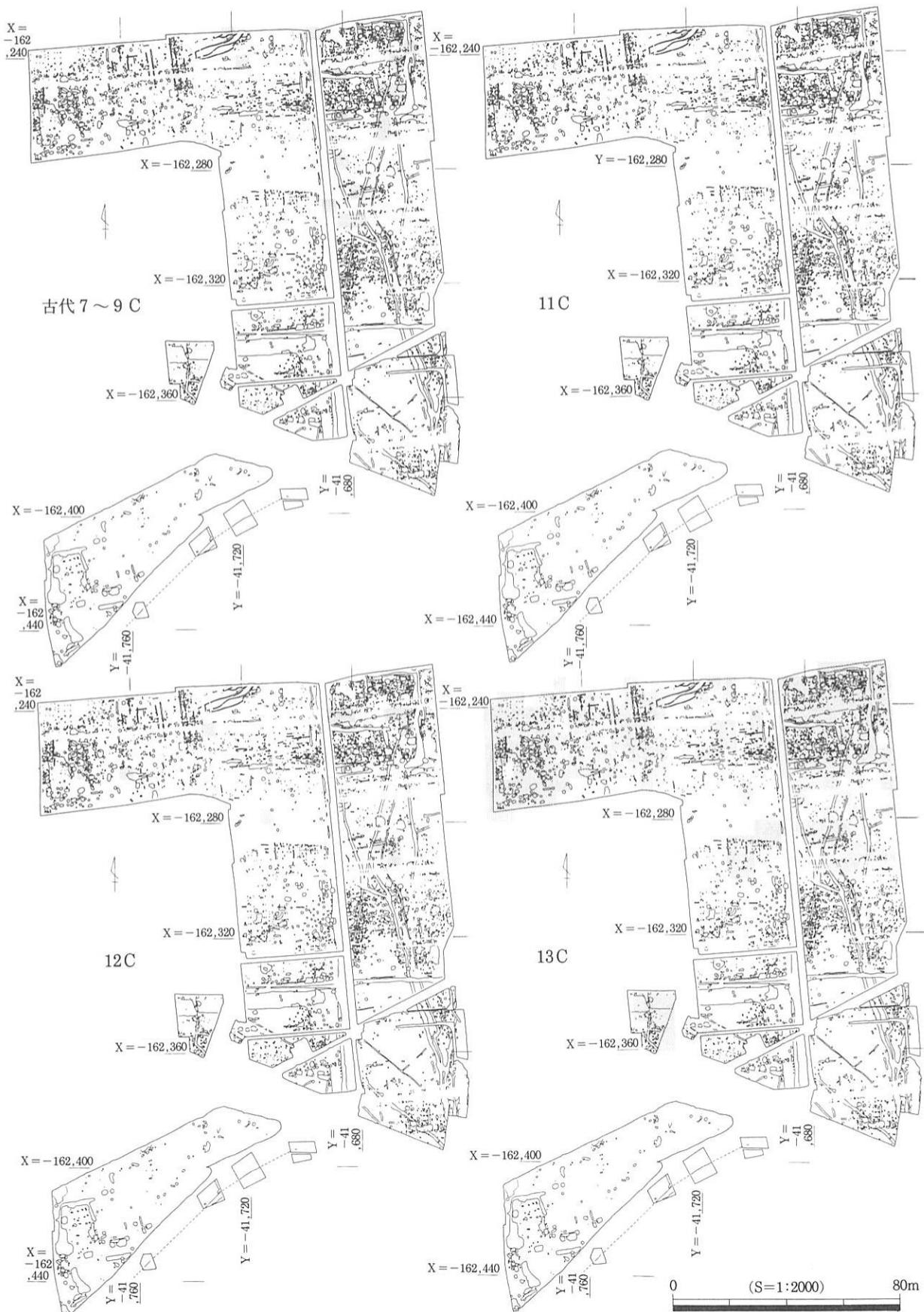


図137 遺物分布の変遷（1）

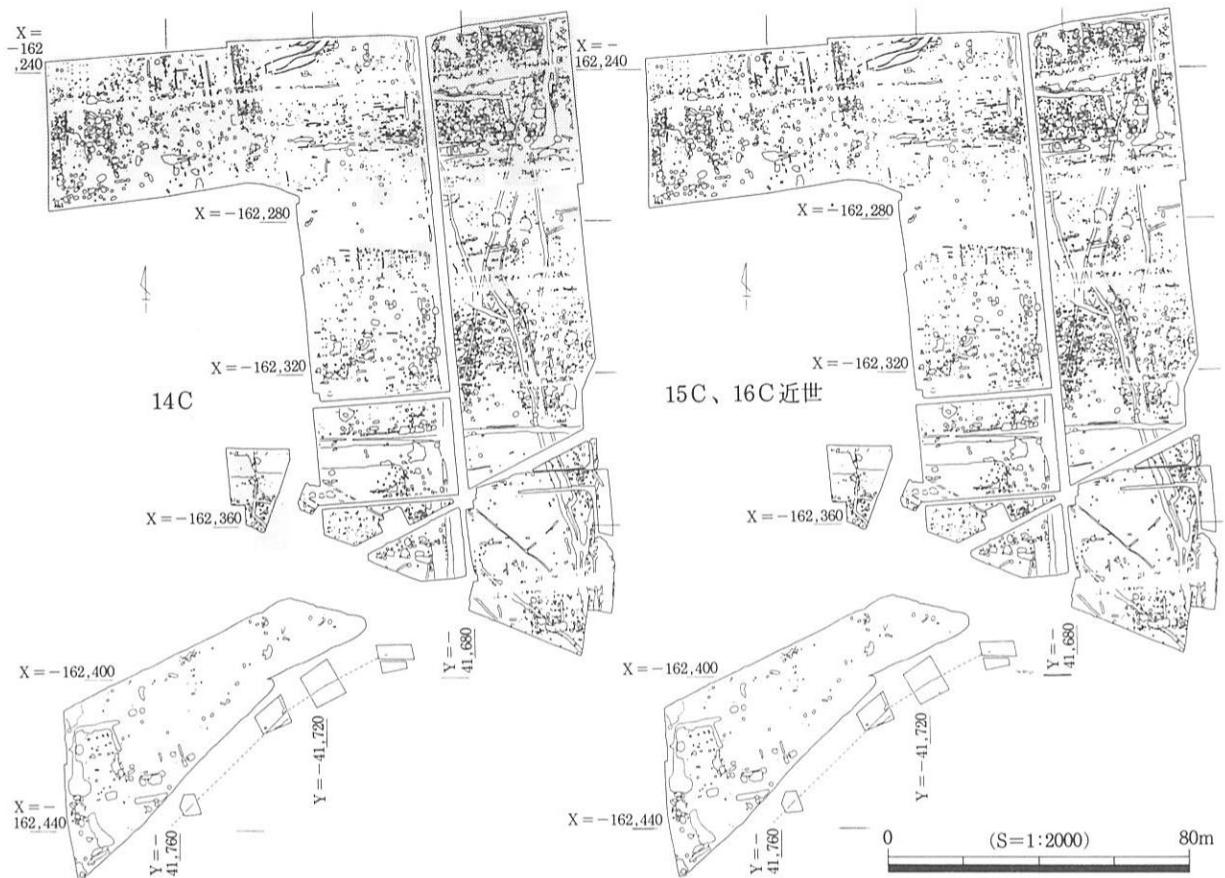


図138 遺物分布の変遷（2）

レンチに遺物がみられるようになるのもこの段階からであり、当地域における鋳物師の活動は中世前期以降と考えることができる。

14世紀の段階に入ると、調査区中央の遺物分布が散漫になり、北側のみに偏ってみられるようになる。おそらく、集落の中心が北に移動することと連動していると考えられる。このことは南側に位置する94年度の調査区において、14世紀代の遺物がほとんどみられないことと一致する。北西部ではほぼ全面的に遺物が出土しており、本調査区における地域分化が東西の2ヵ所に集約する傾向がみられる。このような様相は、明治20年に作成された地籍図が中央水路より西を墓域、東を居住域としていることに合致しており、近代における当地周辺の地籍が13から14世紀にかけての中世前半に成立したと考えられる。しかし、このような状況も15世紀以降の中世後半になると一変し、周辺からの遺物出土はほとんどみられなくなる。これは昭和初頭頃までみられたように周辺一帯が水田地帯として開墾されたためであり、それまでの遺構は地中に埋没、あるいは耕作により削平されたのである。

このように遺物の大半が中世に属することから、検出した遺構のほとんども中世における様相を示していると考えられる。遺物の分布から想定した本調査区の様相について、さらに検討を加えるため、検出した遺構のうち、建物・墓・鋳造関係の3点に注目し、調査区内の空間的な性格を考えることにする。

建物を構成する要素として、井戸と柱穴が挙げられる。図139は調査区内における井戸の分布を示したものである。赤丸は井戸として確認されたもの、白抜き丸は遺構の深さが1m以上あり、井戸の可能性が高い土坑である。図に示したとおり、いくつかの集中地点の存在することが明らかである。調査区北側では6トレンチの西辺、北、南東、8トレンチの方形区画内の計4ヵ所がみられる。調査ではピッ

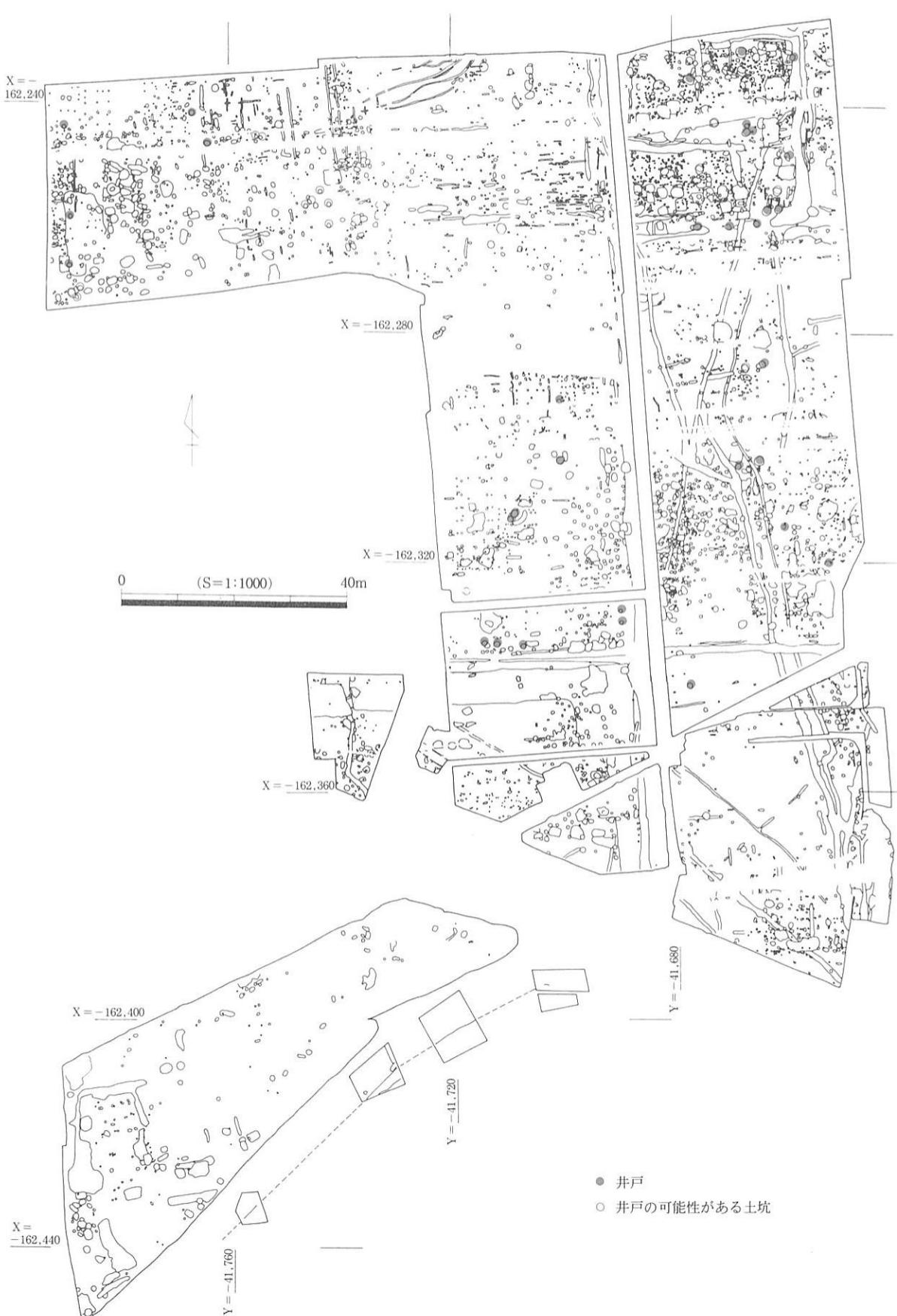


図139 井戸の分布



図140 墓、礎石、土器埋納ピットの分布



図141 鋳造、鍛造関連遺物の分布

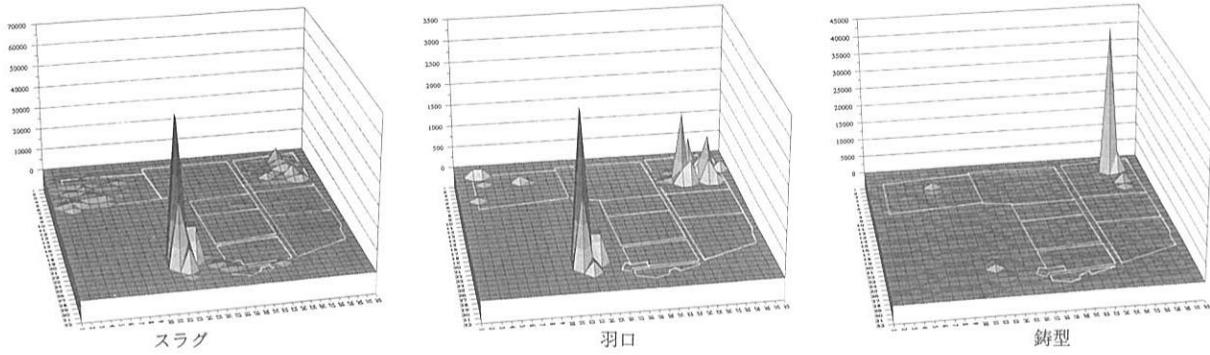


図142 調査区における鋳造関連遺物の分布と出土量

トの集中は確認されたものの、建物の想定が困難であった地域であり、これにより生活域として使用された可能性の高いことが明らかとなった。とくに調査区北東部に位置する8トレンチの方形区画では、井戸が大量に作られており、人口密度の高さ、あるいは定住期間の長さを示していると考えられる。また、区画内においても南北3ヵ所に集中地点が存在すると思われ、区画内における明確なすみわけが行なわれた可能性が高い。これに対し、調査区の南側はやや散漫な状況を呈しており、それでも小規模な集中地点がいくつかみられる。X=-162,320より北側の東西2ヵ所、南西部の東西2ヵ所の計4ヵ所が認められる。北側の2ヵ所は94年度調査において建物が検出された周辺であり、生活域として利用されていたことは明らかである。おそらく井戸もこれを意識して作られたものと考えられる。南側の2ヵ所は、鋳造関連構とされた地点の東西に位置しており、生活空間としてよりも、むしろ作業空間のための井戸であった可能性も考えられる。

このような状況を踏まえ、次にピットの分布を検討する。上記の井戸の分布が、基本的にはピット集中部、あるいは建物の検出地点に一致していることは遺構平面図から明らかである。そこで、ピットの中でも特に礎石の出土したものの分布を示したものが、図140である。礎石をもつピットは94年度調査区の建物群と、95年度調査区の5・8トレンチにみられ、上記の井戸の分布とほぼ一致していることから、これらの地点が居住域であったことはほぼ間違いない。一方、井戸の分布はみられるものの、礎石ピットのみられない6トレンチは、小規模な建物群か、あるいは調査区外の北や西に本体が存在するものと考えられる。

95年度の調査において、とくに多くみられた遺構として土器埋納ピットがある。土器埋納ピットは地鎮などの祭祀跡と考えられる遺構であり、宗教施設ではあるものの生活空間と密接に関わっている。図140には、土器埋納ピットの分布を示しており、土師皿を一括埋納したピットと、完形土器を埋納した遺構の2種類がみられる。やはり井戸の分布状況と同様にいくつかのまとまりがみられ、それぞれのまとまりは井戸に近接した場所に存在することが明らかである。調査区北西の6トレンチでは、完形土器を埋納した遺構が点在する状況がみられるものの、これらの遺構はほとんどが土坑であり、東側の様相とは若干異なっている。検出した状況からは墓壙である可能性が高い。また、X=-162,300以南では土器埋納遺構は全くみられないが、これは遺構面上部が削平された可能性もあり、一概に存在しないとは断定できない。

以上のことから、本遺跡の居住域は調査区中央の南北水路より東側に顕著にみられ、これ以外にも調

査区の北西部に存在した可能性の高いことがわかった。図143の遺跡周辺の地籍によると、前述の調査区中央の南北水路が字界に一致しており、これより東が「墓ノ東」、西の北側が「溝ノ側」、南側が「漆原」となっている。調査区東側に居館の存在を示すような字はみられないものの、「墓ノ東」となっており、必然的にこの西側に墓の存在が考えられるようである。墓として確認できる遺構は数少ないものの、上述の6トレンチにおける完形土器の出土した遺構が墓壙であるならば、ほぼ地籍の状況と一致する。調査区の南側、あるいは北西部にみられる墓は、素掘りの土坑内に1から数点のほぼ完形な土器を埋納した中世にみられる一般的な墓である。一方、調査区北東の8トレンチにみられる墓は周辺では珍しい木棺墓であり、内部に砥石や鋳型片を埋納するなど特殊な例である。



図143 調査区周辺の地籍 [服部1975 参考]

本遺跡周辺において、必ず考慮しなければいけないものに河内鉄物師の存在が挙げられる。今回の調査においても、多数の鋳造・鍛造関連の遺物（以下、鋳造関連遺物）が出土しており、当地域が鉄物師の本拠地の一部であることが明らかとなった。そこで鋳造関連遺物の出土地点および遺物の分布から、本調査区における鋳造製作址としての性格について考えることにする。

図141は鋳造関連遺物の出土した遺構の分布である。図から調査区南西の2・3トレンチおよび西トレンチ、北西の6トレンチ、北東の8トレンチに出土遺構が多くみられることがわかる。とくに8トレンチでは、検出された遺構のほとんどから鋳造関連遺物が出土しており、遺物の密度の濃さを示している。しかし、このように多量の遺物を出土した遺構も、本文で前述したように生活関連の遺構がほとんどであり、わずかに廃棄土坑と思われるものがみられるのみである。このような状況から、8トレンチ周辺の製作址は調査区よりさらに北、あるいは東に位置するものと思われる。出土した鉄釜用の鋳型が土器型式より半世紀遅れることから、廃絶した生活空間を利用し、鋳造作業により産出された不用品を廃棄したものとも考えられる。

同様の状況を示しているのが調査区南西の2トレンチである。東西にのびる落ち込み状の溝からスラグ等がまとまって出土している。また、遺構上部の包含層上面では、さらに大量のスラグが層状に堆積しており、その堆積は北側の調査区外にのびている。94年度調査区の西トレンチ南部の鋳造土坑と、これらの製錬による産出物との関係は不明であり、調査区外に関連施設の存在した可能性が高い。

このように、両地点ではともに大量の鋳造関連遺物が出土しているものの、いずれも鋳造作業に直接結びつく遺構などは確認されていない。遺物の出土量がまとまっていることから、周辺に製作址が存在すると考えることは容易であり、今後の調査に期待されるところである。

しかし、さらに詳しく検討すると、それぞれの地点における出土遺物の内容には若干の差異が存在することが分かった。図142は本調査区におけるスラグ・羽口・鋳型の分布と出土量である。南西部の2トレンチ周辺では、出土した遺物のほとんどが鋳造スラグであり、他に炉壁・鋳型・大型羽口が出土し

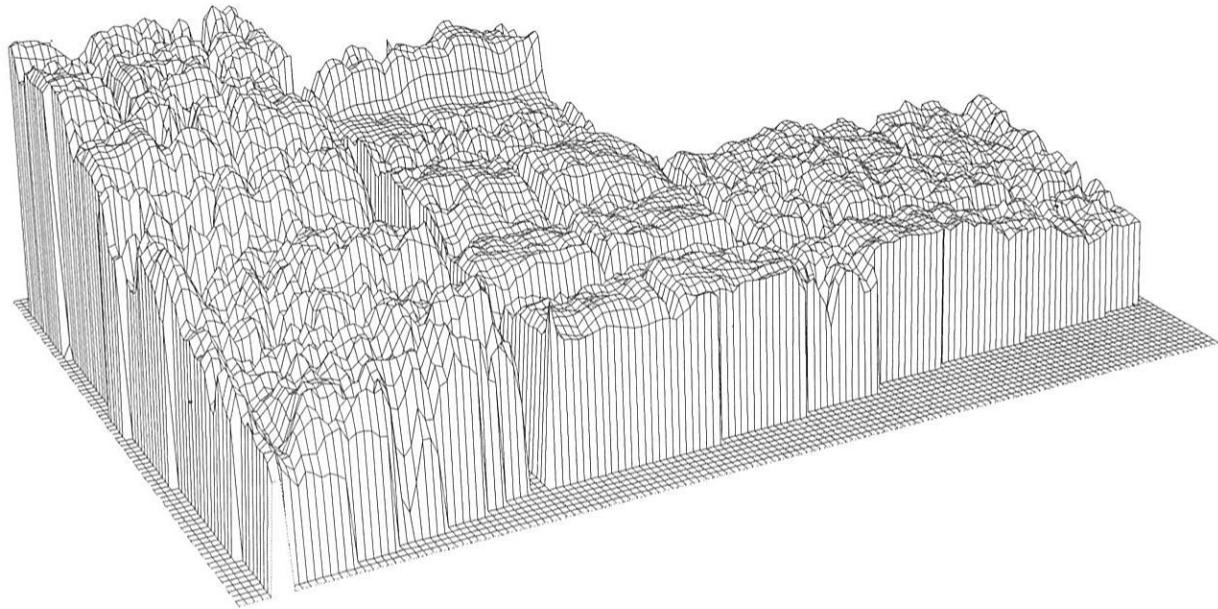


図144 調査区の地形復元

ている。これに対し、北東部の8トレンチでは、大型の鉄釜や鍋の鋳型が多く、他に小型羽口・鍛造スラグ・鋳造スラグ等が出土している。また、各種の砥石が多く出土したのも同地点である。このように、両地点の出土遺物には明らかに異なった特徴がみられ、それぞれの遺物から調査区の南西部では製錬、北東部では鋳造および鍛造作業が行なわれていたと推測できる。このような状況を裏付ける資料として、金属分析がある（第V章第2節参照）。これによると、調査区の南西部では砂鉄を利用した製錬作業や鉄を主とする鋳造が行なわれた可能性があり、北東部では鉄を中心とする製錬、鋳造・鍛造作業以外に、銅製錬や鋳造が行なわれていた可能性が指摘されている。

これらとは異なる状況を呈しているのが、調査区の北西部や中央部である。とくに北西部の6トレンチでは、鋳造関連遺物の出土した遺構が点在しており、遺物も土坑やピットから数点ずつ出土するのみである。遺物の内容をみる限り、とくに意識的に廃棄したとは考えにくいことから、堆積時の混入の可能性が考えられる。しかし、8トレンチの1365土坑では木棺内より鋳型の小片や砥石が1点出土しており、遺構によっては墓やピットなどに祭祀的な意味を込めて埋納したものもあると思われる。残念ながら、このような遺構の性格を特定することは困難であり、ここでは少なくとも近隣における鋳造作業を想定できるほどの遺物量がなく、上述した地域とは様相が異なることは確かである。

図144は95年度調査区のうち、4・5トレンチ以北の復元地形を北東からみたものである。遺構面は手前に向かって次第に下がっており、とくに谷状に表わされる現代の水路より西側（向かって右手）は、人工的な平坦面が形成されている。残存する遺構は、これらの影響を受けなかった低位地形に多いことが、よく分かる。

このように今回の余部遺跡における調査では、鎌倉から室町時代にかけての中世前半を中心とする周辺の様相が明らかとなった。とくにこの時代は当地周辺を本拠とする河内鋳物師が最も活躍した時期であり、本調査区もそのような時代背景の一端を示していると思われる。今回の調査では明確な製作址などは確認されなかったものの、これに伴うと考えられる多くの遺構や遺物が明らかとなり、河内鋳物師の活動を知る上で貴重な成果を得ることができた。また、鋳物師の製作址が周辺に広がる可能性のあることも推測され、今後の調査が期待される。

参考文献

- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 『日置荘遺跡(その1)』調査の概要 1988.3.31
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 『日置荘遺跡(その2)』調査の概要 1988.3.31
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 『日置荘遺跡(その3)』調査の概要 1988.3.31
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 『日置荘遺跡(その4)』調査の概要 1988.3.31
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 『日置荘遺跡(その5)』調査の概要 1989.3.31
(財)大阪文化財センター 『陶邑』I 1976.3.30
(財)大阪文化財センター 『発掘速報展 河内鉄物師の周辺』 1987.2.21
(財)大阪文化財センター 『太井遺跡(その2)』調査の概要 1987.3.31
(財)大阪文化財センター 『第2回 発掘速報展 一堺市日置荘・福田・小阪遺跡』 1989.11.21
(財)大阪文化財センター 『太井遺跡(その4ほか) 日置荘遺跡(その1-2)』調査の概要 1990.3.31
尾上実 「南河内の瓦器碗」『古文化論叢』 1983
尾上実・森島康雄・近江俊秀 「瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』 1995
河内鉄物師顕彰会 『梵鐘の音は時を越えて』
京都大学埋蔵文化財研究センター 『京都大学校内遺跡調査研究年報』1987年度 1990.3.30
堺市教育委員会 『堺市文化財調査報告』第52集 1991.3.30
堺市教育委員会 『堺市文化財調査概要報告』第21冊 1991.9.30
堺市教育委員会 『堺市文化財調査概要報告』第32冊 1992.10.31
堺市教育委員会 『堺市文化財調査概要報告』第43冊 1994.9.28
堺市教育委員会 『日置荘遺跡発掘調査概要報告』-HKS-8地点・堺市日置荘西町(石池・下水) - 1992.10
堺市教育委員会 『日置荘遺跡発掘調査概要報告』-HKS-9地点: 堺市日置荘原寺町215-1- 1991.9
菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』 1983
鋤柄俊夫 「中世丹南における職能民の集落遺跡-鉄造工人を中心にして-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集 1993.3
鋤柄俊夫、亀井聰 「日置荘遺跡その2 調査区の景観復原」『大阪文化財研究』第7号 1995.1
鋤柄俊夫 「日置荘遺跡の空間構造」『大阪文化財研究』第8号 1995.3.31
鋤柄俊夫 「平安時代以降の遺物について」『日置荘遺跡』分析・考察編 1995.3.31
鋤柄俊夫 「日置荘遺跡の遺構変遷」『日置荘遺跡』分析・考察編 1995.3.31
坪井良平 『日本の梵鐘』 角川書店 1970
坪井良平 『梵鐘と考古学』 ビジネス教育出版社 1989
坪井良平 『梵鐘の研究』 ビジネス教育出版社 1991
中世土器研究会 『概説 中世の土器・陶磁器』 1995.12.9
鉄造遺跡研究会 『鉄造遺跡研究会資料』 1991.9.14
鉄造遺跡研究会 『第2回 鉄造遺跡研究会資料』 1992.9.12
中村浩編 『須恵器集成図録』第1巻 近畿編(特) 1995.5.20
奈良国立文化財研究所 『木器集成図録 近畿古代篇』 1991
服部昌之「美原町周辺の地形的環境」『美原町の歴史』第1号 1975.10
服部昌之「美原町の字図」『美原町の歴史』第1号 1975.10
美原町教育委員会 『美原町の歴史』第1号 1975.10
美原町教育委員会 『美原町の歴史』第2号 1976.10
美原町教育委員会 『美原町の歴史』第3号 1978.3
美原町教育委員会 『美原町の歴史』第4号 1980.3
美原町教育委員会 『梵鐘の音は時を越えて みはら』
宮本佐知子 「国内出土の權衡資料」『大阪市文化財論集』 1994
森島康雄 「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器』II 1992

